

俺の幼馴染が壊れた

狸舌

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある出来事がきっかけで緑谷出久の意識は英雄の座へと接続される。果たして原因は出久の個性かそれとも他の何かか。そこから流れ込むのはエドモン霊基。7日間の対話の末に戻ってきた緑谷はようやく会えた友達に挨拶をエドモン語で行った。

ふと思いついた一話のみの一発ネタ、でしたがなんとか皆さまの暖かい応援のお陰で続いております。かつちゃんTSしており、出久は他人から見ると壊れています。設定もガバガバです。それでもよろしければ、読んで頂ければ幸いです。

## 目次

アイツはデク	1
表ときどき裏そしてまた表	8
禁則事項	23
雑味	29
英霊憑依	37
圧倒的な存在感	47
天使降臨	58
見えているモノは	69
伝えたいこと	79
パパと呼んで	95
紅い拳	113
カテキン	133
凶弾の先	146
受け継がれる拳	161
俺が来た	176
運命の歯車	193
赤い背中	208
交戦 混戦	217
スグリ	230
混成接続	257
待て、しかして・・・	271
別世界線 俺の幼なじみは死んだ 前編	297
別世界線 俺の幼なじみは死んだ 後編	314
呉越春秋	337

目を逸らさず	364
更にその	382
混沌接続	394
ニトクリスの鏡	412
繋がりと暗がり	430

## アイツはデク

俺、爆豪勝紀には幼なじみが居る。

そばかすのついた弱弱い覇氣のない顔が特徴の、何もできないデク。

あのクソみてえな面の『男』は『女』である俺に手も足も出ない。俺はスゲー、駆けっこも計算も遊びも喧嘩も・・・そして個性も何一つ負けていなかった。

あの日までは。

何人かの取り巻きにデクを加え山へ登ったあの日、俺は川の上に橋の様に架けられた丸太を渡ろうとして足を滑らせた。

それ自体は問題ない。浅い川だったし、なにより俺にとっては泳ぎなんて難しい事でも何でもなし。

なのにあのデク、とても腹立たしい事に俺を助けるつもりだったのかは知らねえが川へ跳び降りて来て——着地を失敗し、川から飛び出していた石へ勢いよく頭を打ち付けた。

それからは大騒ぎだったが俺はあまり気にしていなかった。

デクがまた鈍くさい姿を見せただけ。

後から聞けば、7日間アイツは目を覚まさなかったらしい。

だから俺があつたのはアイツが目を覚ましてから8日後、目が覚めた翌日に仕方なく名前を呼びながら病室に入ると——

「クッハハハハハハハハッ!!俺を呼んだな!!長い時を刻みすでに合わぬ定めとも思っていたがどうやら俺が間違っていたようだ!!」

アイツ、緑谷出久は壊れていた。

まず1つ。テンションが高いことにはすでに慣れたが、イカレてるのはあの服装。

黒い帽子・・・アイツが言うにはポークパイハット。それに暑苦し

いスーツみてえな黒服。変なマント。

それを一年中着てやがる。

頭がおかしいと、狂ってるんじゃないかと言ったこともあったが昔なら泣いていたアイツもあの時から反論してきやがるようになった。

「我が行くは果ての見えぬ恩讐の彼方。霊基を託された身であっても見通すことは叶わない。故に俺から言えることはただ一つだけだメルセデス—— 待て、しかして希望せよ」

誰がメルセデスだ

2つ目。アイツに妙な個性が発現した。

無駄にけたたましい高笑いをしながら手から黒い炎を出した日には、俺と個性が被った事について全力の爆破をお見舞いしてやった。だが、今となつてはそれはいい。問題は今、目の前で行われている体育の体力測定だ。

ざわざわと周りが騒ぎ始める中、100m走のスタート地点に他の3人と共に立つのはアイツ、デクだ。

周りが全員体操着の中で黒いあの格好はかなり目立つ。

心なしか教師も緊張しながら手を上げ、次いでパンツとスタートの合図が鳴り響く。

全員が一緒に一步を踏み出し、

「クハハハハハハハハッ!! 我が怨嗟の前に立ちほだかるものは誰だ!!」

片足を上げ、残った足のつま先で地面の僅かに上で滑らせるように『走る』? アイツ。

正直、気持ち悪い。

すぐさま、個性を使用したことで教師から説教を受けるアイツ。

「馬鹿な……。いや、すまないファリア神父。俺は……。いや、貴様はファリア神父ではないな!!?」

だから誰だよ

3つ目。特にこれがムカつく。

俺としては全く興味が無いが、アイツが最近女子にモテている。

「なんだか影がある感じがかつこいいよねー。個性も凄いいし、話すとなんだか紳士って感じだし」

「あ!!ねえ、爆豪さんは昔から出久君と友達なんだよね!!なんだか話してる時の距離も近いしもしかして・・・」

大きく舌打ちをして席を立つ。

これで勝紀ちゃんとでも呼んでいたら1週間は学校へ来られないようにしていた自信がある。

教室を出て数歩歩けば、聞きたくもない聞きなれた声が背後から響く。

「メルセデスではないか。お前は俺と同じ道を歩く者だろう、今行くその道を進めば戻れなくなるぞ」

まるで意味が分からない。

先ほどの怒りも込めて顔を爆破してやろうと振り返れば、見えるのは奴の帽子と後頭部、そして何やら妙な模様が描かれた黒いマン  
ト。

しかも距離が近い。

「だが、面白い。その道を行くと言うのなら気を付けろ、止まる途中で動く事は出来ないのだから」

背中を向けて喋るな、殺すぞ

あのクソデクの話にはもう耳を傾けない事になっていた。

勝手に近づいてくるのであれば爆破。近づかなければ無視。

今日の進路希望の話もそうだ、アイツが雄英を目指そうが知った事

か。

俺は俺のやりたいようにやってアイツを――。

そう、余計なことを考えていたからだ。足元から伸びた不定形の触手が足首、胴体へ絡んだ時にはすでに爆破は間に合わず全身が水のような何かに包み込まれるまで大した時間はかからなかった。

何度目か分からない爆音が鳴り響く。

トップヒーローであるオールマイトはその音源を見ながら強く拳を握りしめる。

以前負った負傷により既に全盛期の力には自分には無く、あのヴィランもその力不足が原因で取り逃がし、今一人の少女を人質にしている。

(情けないッ・・・情けない!!)

ズグツ、と内臓を抉る様な痛みが絶えず襲う。この状態で何秒間あの姿を保てる。

自分の弱体化した姿が世間へ知れ渡れば抑止力は消え、世界中でヴィランが活動を活性化させるだろう。

そのような理由を考え、こうして柱に隠れていることしかできない自分が『情けない』。

せめて、出来ることは無いか。左胸を押さえ、一歩踏み出し――

「――貴様は地獄を見たことがあるか」

良く通る声が辺りに響いた。今まで騒めいていた野次馬は静まり返り、ヒーローたちは動きを止める。ヴィランまでもがその体を固め、声の方向を見ている。

オールマイトの横を、風が流れるように自然な動きで黒い影が通り過ぎ



ゾワリ、と全身に鳥肌が立つような、そして氷のような炎に全身を炙られた様な感覚を感じた。

（あれは・・・あの少年はなんだ。全身から吹き上がる様な黒い何かの原因か、とてもじゃないが姿を直視できない）

自分と言う人間と正反対。だがヴィランとは違う何かを感じる。

「っ、待つんだ少年!!あのヴィランに立ち向かうのはヒーローで――

――」

それでも、まだ子供だ。危険へ進む姿を止めるために声をかけるオールマイト。

その手が肩まで伸びた瞬間、その姿が消える。

信じられないと目を見開いたと同時に、視界の先でおどましく光る黒炎が立ち昇った。

マズイ、意識が薄れて来やがった。

強制的に個性が連発されたせいか、それとも塞がれた口からは酸素がほとんど入っていないせいなのかは分からねえ。

ただ、それでも意識を保ち、隙があればヴィランの体の一部を吹き飛ばしてこの状況から勝つてやるという思いは消えていない。

こんなところでは止まらない。

あの背中。ムカつくだけの、こちらを見ようとしてもしないあの背中を振り向かせて顔面に爆破を叩き込むまでは絶対に他の奴には負けねえ。

それにしても、急に手足の拘束が緩んだ気がする。まさかどこかのヒーローが余計な助けをしに来たのか。

コイツには俺が勝つんだ、どこの誰だか知らないが手を出したら――

「ニコクツ、ハハハハハッ!!我が行くは恩讐の彼方、『虎よ、煌々と燃え盛れ』!!ニコクツ

おい、なぜ数が増えた

あのあと、ヴィランは増えたアイツに見えない速さで体を削り取られ、最後には黒い炎で体積のほとんどを消し飛ばされたあと御用となった。

当然、俺にも事情聴取はあったがそれより先にアイツ・・・コイツが俺を連れ出した。

体力は限界に達していたし、腕は爆破の反動で上がらない。

そんな俺はいまデクに背負われている。もちろん死ぬほど抵抗はした。最終的に帽子を噛んでまで抵抗したがまるで頭に張り付いているかのようにはなれないソレについて体力が尽きてしまった。

夕日を背に、恐らく俺の家まで送ろうとする横顔は久しぶりに見るともう弱弱しくは感じない。

見ようと思わなかった間にもコイツの中で時は確かに流れていたのだろう。

思い出すのは、ヴィランから自分を助け出し両手に抱え上げたコイツの顔を見上げた時の記憶。

高笑いしながらヴィランから助けられて思い出したのだ。あの日より前、コイツが言っていた言葉。

『かつちゃん、超カッコイイんだよオールマイト。どんなに困ってる人も笑って助けちゃうんだ——』

こちらを見下ろす顔は今よりもっと近く、自分を抱きかかえる腕は想像よりも逞しくなっていて。

それでも、笑い方はやはり変で気持ち悪いがコイツは昔とこんなに変わったが、それほど変わってもいないのかもしれない。

ボンっ、ボンっ と手から小さな爆発と共に煙が漏れる。何故か熱くなる顔は、自分でもどんな顔をしているのか分からない。

それでも、なんとなく・・・本当になんとなく、たまには久しぶりに口をきいてやろうと思った。

あと、家までは10m足らず。何故か口から出るのはすこし早口で「っ、おいデク、お前・・・どうして俺を助けに来て——」  
「今日は厄日だったようだなメルセデス。だが足掻き、耐えた先にお前の希望は確かにあったようだ。——ではな、俺もエデの待つ家へと帰らせてもらう」

ゆっくりと玄関先に下ろされ、そんなことを口にしてアイツは帰っていった。

帰るのはいい。もともと俺もそんなに話したかったわけじゃねえ。だが、おい待て

エデって誰だよ

## 表ときどき裏そしてまた表

『ぼくは、しんじやったの?』

『さて、どうだろうな。オレがおまえに言えることはただ一つしかない。……このままでは、いずれおまえの魂は消え去るだろう』

『……?それは死ぬのと同じじゃないの?』

『何もかもが違う。肉体の生命活動の停止、つまり死は生を受けた以上避けられないものだ、それが聖女であろうと、また王であろうとも必ずそれは訪れる。……だが、魂は違う。それを失うときこそが前という存在の終わりとなる』

『……よくわからないよ。ぼくはたましいなんて見たことないし、あなたが誰かもわからないんだもの』

『ならば——』

『でも……ぼくは帰るよ。まだなりたいものにだってなっていないし、友達だって助けてないんだ』

『……おまえの目指すモノとは一体何だ?』

『ヒーロー〈英雄〉!オールマイトはチョー強くて、いつも笑顔でみんなをたすけてくれるんだ』

『英雄とはそれほど単純な道では無いだろう。死は隣人であり、敵からは常に怨嗟の念を受け続ける。光だけで人は人を救えない』

『やっぱり、おじさんの言う事はむずかしいよ。でも……おじさんが言うやなことだってぼくはきつと気にしないよ。だって、どんなにつらくても、なりたいから僕はヒーローになるんだ』

『——クッ……ハハハハハッ!!……ならば、お前には七つの試練に向き合ってもらおうとしよう。掛け金は貴様の死。商品は貴様の夢の成就。……なに、難しく考える必要はない。これから始まる悪夢の夜は誰にでもありふれた——お前の未来を取り戻すための物語なのだから』

「入試」

『どうしたあ!!? 実戦じゃカウントなんぎねえんだよ!! 走れ走れ!!』

そう強く焚きつけながらプレゼント・マイクは困惑していた。

『賽は投げられてんぞ!!』

こうして声をかければ毎年のことだが、蜘蛛の子を散らすように受験生たちは駆け出していくものだ。

急なスタートはそれこそ瞬発力のテストの様にも見えるがそうではない。プロヒーローであろうとも急なアクシデントに不意を突かれペースを乱すことがある。

故に、問題はそこからどう立ち直るか、そこを判断するための不意打ち。

だが、プレゼント・マイクが発破をかけようとも駆け出す者はどこにもいない。

今年の受験生たちはまるで幽鬼の群れの如くふらふらと歩を進めながら、ただ自らの先を歩く者の背中を見つめている。

メガネをかけた少年は頬に一筋の汗を垂らしながら。

麗日な顔つきの少女は似合わない、悲壮な決意に満ちた表情を浮かべながら。

その視線の先で、少年が一人、ゆつくりと試験会場へ歩みを進めていた。何故か風もないのに荒れ狂う様にバサバサとマントをはためかせ、口元には三日月のような笑みを浮かべている。

「——クハハッ！俺を試すか!?!...だが、それでいい。死というものは気心の知れた隣人であり、いつ俺たちの部屋のドアをノックするか分からない。そう、これから俺という存在は鋼の玩具に殺されるのかもしれない。斬殺か、刺殺か圧殺か、隣人はひどく気まぐれで今日訪ねてこないと言い切れぬ」

「ああ・・・それは残酷なことだ」

バサリ、とマントを払い少年。

その後ろを受験生全員が顔をうつむかせ、死地におもむく様な顔つきで付いて行く。

会場入りして15分。

7会場で1会場のみ、復讐者の空気に当てられ今日死ぬ覚悟を決めた一団が葬式のような雰囲気です試験を開始した。

あれはたちの悪い洗脳かなにかだったんじゃないかなと、麗日お茶子は考えていた。

結局、落ちるところまで落ちたテンションはマントの少年が急に姿を消したあと徐々に回復。

いまではそこかしこで爆音や衝突音、そして

『クハハハハハッ!!慈悲などいらぬ!!』

『お前は、地獄を見たことはあるか?』

『馬鹿なッ!!?貴様は・・・まさか・・・』

『なるほど・・・。だが情けはかけぬ、存分に朽ち果てよ!!』

無駄にけたたましい笑い声が響いている。

1Pの機械へ黒炎と高速移動を利用した攻撃を仕掛けるたびに、同じ言葉を繰り返している姿はもうただの壊れたラジカセのようだ。

しかし、実力は確かなようで、彼の近くではポイントは得られそうにない。

お茶子はループする台詞から自分の脳を守るためにも少しばかり距離を離れた場所で戦いを再開する。

その後もゆつくりとだが確実に機械を浮かせ落下させるといった  
攻撃で少しずつポイントを確保していた。

おおよそ、70機の機械が彼から地獄について聞かれたところで  
停滞していた空気が動き出す。

背後から聞こえた轟音にお茶子が振り向いた時にはすでに遅く、僅かに視界に入つたのは巨大な——事前に説明されていた0点ギミック。

そして、彼女の体には崩れたビルのコンクリート片が襲い掛かった。

体を僅かにでも捻り、避けようとした。

だが無情にも欠片は体をかすめ、倒れた彼女の足を埋めるように積み重なる。

徐々に増える重みと共に、強い痛みが脳へと上ってくる。

個性を発動させるだけの集中は困難で―――――背後からは駆動音が迫る。

顔を上げて、自分から遠のいていく背中しか見えず……しかし、それも当然かと思ってしまう。

この機械を倒してもOPで、残り時間を考えれば最後の点数稼ぎに向かった方が合格の可能性は上がるのだ。

それでも

「つ、  
・  
・  
だれ、  
か」

借りにもヒーロー志望が助けを求めるなどあつてはならないのは分かつてゐる。だが

(ごめんなっ……父ちゃん、母ちゃんっ)

もしも、自分が死んでしまった時の両親の顔が浮かんでしまい。

ズゴガガガガッ!! と機械の巨大な顔面が銀の光に削り取られる。

「ハ。ハハハ。クハハハハハハハハハツ!!俺

をッ、呼んだな!!？」

横へ、後ろへ、斜めへ、上へ。

銀の光が衝突するたびに跳ねるように体を揺らすギミック。

「ならば俺は虎の如く時空を駆けよう!!」

大きくその巨体を揺らし、全身から煙を立て始めたその頭へ音もなく着地した影は、右手をそつと足元の亀裂へと添える。

その手から放たれたおぞましく、しかしどこか魅了されるような輝きを放つ黒炎が全身に刻まれた亀裂を走る。

「・・・死に行く手向けだ、おぼえて逝くがいい。我が名は緑谷エドモン。復讐者だ」

少年の姿が掻き消えたその刹那、内側から破裂するように機械の体が爆散する。

その光から目を背けたお茶子は、だがいつまでもやってこない衝撃に顔を上げ

自分が抱きかかえられていることに気付く。

「あなたは・・・みどりや、エドモン君」

確か、そう名乗っていた。そして、復讐者だとも。

暗く、冷たいその瞳と復讐者と言う言葉が意味するのはきつと、壮絶な過去が彼にはあるのだという事。

どうして、そんな瞳をしているのか。礼よりも先にそんな言葉が出てかけて

「——少しは大人になったな、メルセデス」

慈しむ様に一瞬だけ浮かべた表情と台詞に、口の動きが止まる。

静かに、壊れモノを扱う様に地面へと下ろしてくれる彼に、ようやく追いついてきた思考がさらなる質問を投げかけようとして

試験終了の合図が鳴り響く。

その音に、視線が一瞬彼から離れ——視線を戻した時にはその姿は消えてしまっていた。

ギョツと胸元を握りしめれば、思い返すのは自分を見つめる彼が浮かべた一瞬の表情。

あんなに成長を喜ぶような顔を浮かべてくれる彼の事が思い出せ



ない事に、悔しさを感じて

(私は・・・記憶も薄れるくらい小さいころにあの人と会ってるの?)

もちろん会ってなどいない。

# 「入学初日」

中学のころと同じように椅子に座りながら机を足置きに使って  
いれば、クソメガネが偉そうに文句を垂れてきやがった。

問題はそのあとだ。

あの暑苦しいスーツ姿が教室のドアから入ってきた姿を見れば、さ  
すがに長年の腐れ縁でこれから起きることはなんとなく予想できて  
いた。

こっちに寄ってきて、また背中を向けながら俺を『メルセデス』と  
か呼んでくるのだろう。

そうなれば、答える義理はない・・・がせめて聞くだけなら聞いて  
やろう。そう思っていれば

「あの、さ・・・ダンテス君って、私のことどれくらい知ってるのかな  
? あっ、言いにくい事とかあったらいいんだ! 私もこれからエドモン

君のこと知っていくから!!」

「お前が俺に気付く前から、俺はお前を知っていた。だが、そうだな・・・流れ行く時は残酷にもお前の中から俺を押し流してしまったのだろう」

寝ぼけたような面の女と楽し気(?)に話しながら入ってきやがった。

まあ、あんな奴でも話したがる変わった女の一人は居るのだろう。『やっぱり、昔私たちは・・・』などと一人で俯いて話していることからも、ネジの外れた女だとすぐに分かる。

入り口付近で立ち止まり話すアイツは、こちらには気付かず談笑を続けているがわざわざ俺が気にしてやる道理もない。近付いて来たらその時は対応して

「・・・その時はいずれ来るだろう。故に今は待つと良い、『メルセデス』よ」

あ?

BOOM!!と、勢いよく両手の平から小さな爆発が起きる。

反動で跳ねるように浮かんだ体は足をかけていた机を足場にし、アイツのもとへと飛んでいく。

ダンツと着地すると同時に睨み上げるようにその顔を見上げ

「オイ、デク。テメエ俺のことは何て呼んでんだ?」

「久しいな『メルセデス』。疑ってはいなかったがこうして姿を確認すると――」

「その女も『メルセデス』つて今呼んでたじゃねえか!呼び方ぐれえ統一しろッ。ぶち殺すぞ」

自分でもよくわからねえ怒りに駆られながら、黒い煙を上げる右手でデクの襟首を掴み上げれば

「ちよつ、エドモン君の首が締まっちゃってる!待って待って、そんなにあだ名が良いなら譲るから!落ち着こうつ、ねっ!」

「良いわけねえだろうが丸顔女!!このクソが名前を間違えたあげく、何人も同じように呼びやがるから矯正してやろうとしてるだけだろ

うが!!」

「・・・お前ら、早く席につけ」

「つ、なにか理由があるかも知れないよ!!・・・たとえば、過去になにかあったとか」

「ねえよ!!コイツの頭がおかしいだけに決まってるだろ!!」

そもそもエドモンって何だ。

「不和はいとも簡単に群れから力と言うものを削ぎ落としていく。『メルセデス』達よ、まずは――」

まだ何か口にしようとするその顔面を押しつけ、丸顔女を見れば腹立たい事に向こうもこちらを見返してくる。

「デクは頭がおかしいんだよ、見りゃわかるだろうが?」

「知らないよ。私は私を助けてくれたエドモン君のことを知りたいだけだ!!」

「緑谷ちゃん、私の事は梅雨ちゃんと呼んで」

「ああ・・・お前が望むのならそうしよう『メルセデス』」

「梅雨ちゃんって呼んで」

――

再度爆音が鳴り響き、荒れる1―Aの前で

担任である相澤消太が出るタイミングを逃していた。

〔USJ〕

USJで行われた救助訓練、それに乗じたヴィランによる襲撃。

死柄木弔の計画は順調に進んでいた。

先ほどまで暴れていたイレイザーヘッドも脳無の力の前では既に虫の息。

あとはオールマイトが来れば全てのミッションは完了となる――

――筈だった。

しかし、急に開いたワープゲートから聞こえたのは生徒を一人逃がしたという黒霧の言葉。

つまり。

腹立たしく、苛立たしいが今回はこれでゲームオーバーとなつてしまった。

不機嫌さを隠そうともせずに強くガリガリと頭部を掻き毟りながら、首ごとぐると横を向けばそこにいたのはカエルのような舌の少女と紫の頭をした小さな男。

（あいつらだけでも殺して帰るか……）

その程度の思考であつさりと殺人を決め、跳ねるように駆け出す。触れたものを粉々に砕く左の毒手が少女の眼前へと迫り――

少女の傍らで、水から頭だけを出す黒い帽子の男に今更気付く。

（っ、読まれていた!!？こいつらは……エサかッ）

あのまま手を伸ばしていれば無事では済まなかったであろうことは、爛々と輝くあの瞳を見れば分かる。

「……氣に入らない。おい脳無、その玩具は捨ててあの帽子を殺れ」その言葉に、飽きた玩具を投げ捨てるようにイレイザーヘッドの体を投げ捨て、砲弾のような速度で三人の生徒へ迫る。

辿り着くまでは一瞬であり、その剛腕を上から叩きつけるように両腕を振り下ろし

（ガキ三人に少しやりすぎたかなあ）

巨大な水飛沫があがる。

3人分の死体が完成したことを確信し、思わず身を乗り出せば

――背後から聞こえた足音に、体が固まる。

思わず振り向けば、そこにいたのは先ほど潰したはずの帽子の男。その遙か向こうに、どこか呆然とした様子で先ほどの二人も座つて

いる。

「いつの間ツ。．．．まあいい、やれ脳無」

高速で動く個性か、それとも瞬間移動系のものかもしれない。

だがいずれにせよ脳無がやられることは無い。

あれはオールマイトの攻撃に耐えられるよう作られているのだから。

再び駆け出した脳無が、男へ迫り腕を振るえば個性の力か、その後にはいつの間にか男は立っている。

男の手から産まれた黒く、静かな炎が無防備な脳無の背中へ押しあてられれば、一瞬で一気にブワリと膨れ上がり――

「――ツ、再生か。なるほど、捻りもなければ遊びもない。奴を相手にするには妥当で平凡な手段だ」

嘲りにも聞こえるが、なぜか焦りにも聞こえる帽子の男の声も当然と言えるだろう。

背面の半分を吹き飛ばされた脳無だが、すでにその体はものの数秒で再生してしまっていたのだ。

再度姿を消し脳無の背後へまわり、鈍い銀を放ちながら拳を当てるが

（無駄だよ。衝撃はすべて吸収される。お前に勝ちはない）

予想通り、なんの効果も無く――足を止めたその体へと脳無の腕が横薙ぎに、今度こそ直撃した。

緑谷出久は焦っていた。

脳無と呼ばれた男から放たれた拳は速く、そして凄まじい圧を感じる。

恐らく一撃もらえば即死か、あるいは意識を失ってしまい殺されるだろう。

（黒炎の火力をさらに上げたら・・・だめだ、制御できてないんだ殺してしまうかも。さっきの炎も想定してたよりずっと火力が出てしまったじゃないか。ならやっぱり、）

直接、急所に近い個所を殴り、意識を奪うしかない。

そう考え、背後へ回り込み脳無の首筋へと拳を放ち

（えっ・・・）

まるで柔らかなスポンジを殴ったかのような感触に戸惑い、動きが一瞬止まり

重い一撃がわき腹から彼の体を宙へ捻り上げるように打ち上げた。

（ま・・・ずい。・・・あたまが）

意識が、途切れかける。

明滅を繰り返すような意識は、徐々に暗く塗りつぶされ、ドチャリと地面に自分の体が倒れ伏した音が響く。

その音に紛れ、

（『吹けば消えるような残滓に過ぎないこの身だが、見ていた夢をふいに消されるというのは存外腹立たしく思えるようだ。そして、このままお前の夢が終わるのも・・・それもまた腹立たしいな、我が共犯者よ』）

暗く、怨嗟にとりつかれた、しかしどこか温かく懐かしい声が聞こえた気がした。

倒れ伏した男へ脳無が拳を振り上げる姿を死柄木は既に興味を失い、ぼんやりとした表情で見つめていた。

後は脳無の拳が男を潰して終わり。

それは当然の結果で

「復讐心とは、自覚した瞬間に憤怒へと変わる。言葉では表せず、誰にも理解はされず、自分ですら自覚しないよう目を必死に逸らす」

自然に体を落とした男が、脳無の腕と入れ替わるように立ち上がる。

拳が着弾した衝撃も、脳無の体を盾にするようにいなしてしまえば、その巨体に背中を向けたまま言葉を続ける。

「心地好いほどの怨嗟の念だ。オレが出てきた要因の一つはこの念に誘き出されたからか……」

背後を振り返った脳無が先ほどと同じように腕を横薙ぎにするが、一步地面を蹴り距離を空けてしまえば虚しく空振りしてしまう。

翻弄される脳無に苛立たしげに舌打ちをしながらも、死柄木は男の言葉に笑みを浮かべ

「これだけのヴィランを用意すれば流石に分かるか。そうだ、これは俺がトップヒーローオールマイトへ復讐するための――」

「貴様ではない」

は？と呆けたように死柄木が動きを止める。

この場には自分とこのマントの男しかないではないか、彼はそう考える。そうとしか考えることができない。

「脳無とは、名付けた者の思考の貧困さがよくわかる名称だ。こいつの動きが単調であるからか、それとも意思の表出が出来ない様子からか……いずれにせよみる目が無い」

マントをひるがえすように振り返り、視線を向けるのはこの場にももう一人である脳無。

そこでようやく死柄木は気付く。

命令を受ければ止まらない脳無が、ピタリとその動きを止めているのだ。

ただじっと、男の瞳のさらに奥底。暗がりのような場所で燃える黒い炎を見つめている。

「お前に何があったかなど興味はない。世に溢れかえるありふれた悲

劇が起こっただけなのだろう。つまりその悲劇はお前で無くとも良かったことだ。故に、その理不尽、怨執、怨嗟を——燃やせ」

静かに、脳無の体が震え始める。

もちろん言葉の意味など理解はしていない。壊れた魂に人の言葉など届かないのだから。

それでも

「燃やせ、燃やせ燃やせ燃やせ燃やせ!!お前の受けた屈辱、痛み、苦しみ全てを薪に怨嗟の炎を燃やせ!目を逸らすな、お前の感情は確かに熱を放ち始めている!」

悪鬼のように嗤う復讐鬼。

その眼前で前触れもなく脳無が——吠えた。

その姿はやはり化け物でしかなく、遠く離れた場所で声を聞いたヴィラン達は怯えたように肩を震わせ

生徒達には・・・その声は何故か哀しげなものに聞こえた。

脳無の声に後ずさった死柄木には当然、その声にも何を感じることは出来ない。

「なんだバグかよ脳無。いいから早くソイツを殺せ」

その、言葉に脳無は逆らうことは出来ない。既に彼の体は彼の魂のモノでは無いのだから。

ピタリと止まる脳無の声。

まるで先ほどまでの光景が無かったかのように、再度振りかぶられた腕が男へ振り下ろされ

「お前の怨嗟の声確かに聞き受けた。——継ぎはぎの心の男」

近づいた拳を僅かな動きでかわし、懐へ潜り込む。

左の手のひらをそつと押し当てるように脳無の肘へ当てれば、放たれた黒炎が肉と骨を焼き切り腕が飛んでいく。

それを確認などせず、残された右の手のひらを脳無の頭部へ押し当てて

同じように放たれた黒炎が、その頭部を包み込んだ。



死柄木は目の前の存在が何者か考える。

だが、対オールマイト用の脳無を簡単にあしらう以上、こいつもチートであることは間違いない。

であれば、脳無が通用しない以上理不尽なバランスのゲームに付き合う必要はない。

「帰るぞ脳無。・・・おい、脳無」

二度、声をかけようやく振り向いた脳無。

その姿に僅かに違和感を感じる。

今までは、人とは見ていなかったがその反応から獣を扱うような感覚はあった。

だが、いまは違う。まるで声に反応する機械を相手にしているような、そんな――

そこまで考えた瞬間、乾いた音と共に手と脇腹に強い熱が生まれる。

視線を上げれば遠く視界に入るのは雄英の教師と、そして

「オール・・・マイトお」

身の内に、憎悪が膨らむ。脳無をけしかけようと口を開いたその体を、しかし黒い霧が包み込む。

思わず舌打ちをして黒霧を睨むが、引き際なのは分かっていた。

最後にオールマイト、そして――帽子の男の姿を脳に焼き付けるかのように強く見据え、彼は姿を消した。

頬を強く叩かれる感触に、緑谷出久の意識は浮上し始める。

「デク！ テメエなに寝てんだ、ぶち殺すぞ！・・・なあ、起きろよ！」

「エドモン君！ ねえ、目を開けて！ 私のことまた忘れちゃってないよ

ね!？」

視界に入るのはどこか目を赤くした幼馴染みと、同じように目を赤くして何故か焦りの表情を浮かべている同級生。

ここはどこかと視界を巡らせれば白で統一されたシーツやカーテン、そしてアルコールの匂いで保健室かと当たりをつける。

「・・・なぜ泣いている、メルセデス達。俺の記憶ではお前達は涙を簡単には見せぬ筈だ」

「あ?この丸顔は泣いてやがったが、この俺が泣くわけねえだろうがクソデクツ!」

「ちよ、ちよつとなんで言うの、勝紀ちゃん!？」

「確かに爆豪ちゃんは泣いてないわよ。10分ぐらい目を擦って俯いてただけね」

「クソ両生類、どこに隠れてやがった!ぶち殺すぞ!」

どこからか出てきたカエル少女を追いかけ爆発音を鳴らしながら爆発少女はかけていく。その横顔は目と同じように、赤く染まっている気がして。

「ちよつと勝紀ちゃん!個性使ったらまた怒られるって!つ、ごめんエドモン君、また来るからね!」

最後に残っていた少女が部屋から出ていけば、シンと静まり返る室内。

ふと、胸に手を当てて思い出すのは意識を失う前に聞こえた懐かしい声。あれは確かに――

## 禁則事項

〔後日〕

オールマイトは苦悩していた。

あの少年は果たして何者なのか、あの脳無と呼ばれた怪物にいったい何をしたのか。

置き去りにされていたその巨体と微動だにしないその不気味さから、脳無の異常性は感じていた。

しかし生徒から詳しく聞いてみれば、砲弾のような速さで動きこぶしは地を割る。

さらに再生能力まで持っているというのだから生徒一人で立ち向かえるものではない。

担任である相澤君が休養中のいま、自分が聞かなければいけない。そんなことを考え、今朝から彼の姿を追い回していたのであった。ホームルーム。どうやら教室の前で飯田少年と話しているようであつた。

入試の時は少しばかり闇が深そうな彼と飯田少年はあまり相性は良くないようであつたが、いまは談笑する程度には仲が良いようだ。

「——つまり、黄昏時に得る幸福とは……なるほど、夕食のことを表しているのか！」

「そうだ。黄昏時に得られる幸福は俺の肉体を現世へとつなぐ。カレーライスなどその最たるものだ!!」

「待ってくれ、カレーライスはそのままなのか!!?となると料理の名称はそのまま——」

「なあ緑谷。おっぱいはなんて言っただお前」

「峰田君、じゃまをしないでもらえるか!ようやく緑谷君のことが分かってきた所なんだ」

「そうだな。言葉にした記憶は無いが、呼ぶとするならばやはり『おつか、は……!』」

「緑谷のやつ舌を噛んだぞ!!?」

ダクダクと血を流すその姿に、柱の陰に隠れていたオールマイトは

口元に手をあてあわあわと狼狽える。

一瞬。彼が言葉を口走ろうとした際、その背後に黒い影が見えた気がしたのだ。まるでこちらを威圧するように揺らめく、闇に赤く弧を描く口を張り付けたそれは、すぐに姿を消してしまい。

「——すまない。修正が入ったようだ」

「誰から!!?」

「今後、この言葉を口にする機会には彼が許さない限り永劫に来ないだろう。彼は意外にも自らのイメージを気にする傾向がある。この帽子も人前で外そうとすれば頭皮が全て? がれそうになるのだ」

「おい、まてよ緑谷。となるとお前、これから女の胸見て——とかもしやべれねえじゃねえか!」

「いや、彼の寛容さは俺が一番理解している。その程度であれば問題ないだろう。例えば『きよ——!!!』」

「ああああああああ!」

「目と口から血を吹き出して倒れたぞ!なんて恐ろしいデメリットのある個性なんだ!」

「んな事言より早く治療しなきゃやべえって!俺、ダッシュでリカバリーガール呼んで来るから待ってろ!」

同じく教室にいた切島がそう走り出す様子をオールマイトは見つめることしかできなかった。

昼休み、弁当を共に食べることで円滑に会話を進めようと彼を探していたオールマイトは中庭から響く小さな爆発音に気付き足を進める。

柱の陰から中庭を覗き込むと想像通りの二人がいた。

ベンチの上に立ち見下ろす爆豪君と、その下の芝生に正座する彼というなんとも間に入りにくい状態ではあったが。

「それで、俺がなんでキレてるか分かるかクソデク」

「・・・いや。近頃お前の心に寄り添えていた記憶は残念ながら俺には無い」

「それだ!! テメエの言い回しは昔から回りくどくてクソウザかったが、最近は馴れ馴れしさが増してんだよ!」

「なるほど。・・・少しばかりお前の心に俺が触れたいと思いつてしまったようだ。許せ、メルセデス」

BOOM! BOOM! と断続的に爆発音が鳴り響き、同時に爆豪の顔に赤みがさしていく。

「て、めえ。俺様にそんな口きいてただで済むと思つてんのか!? 今すぐぶち殺して——」

「そして・・・先ほどから伝えようとは思っていた。俺はこの瞳にはほとんど映してはいないと誓い、あえて伝えさせてもらおう」

「ああ!」

「こうして視点を下げ、その顔を仰ぎ見れば自然とこの目が映してしまふのだ。お前の『パ——』」

彼の口から血が噴き出すのと同時に、その顔面に叩き付けられた手の平から爆発が起きる。

再びあわあわと震えるオールマイトだが、早々に復帰して今度こそ彼を保健室へ運ぼうと今まで姿を隠していた柱の陰から飛び出しかけて

「・・・おい」

倒れた彼へ近づくと、普段とは違う爆豪の姿に慌てて動きを止める。

「テメエのことだからこれぐらいじゃなんともねえんだろ。おい、・・・本当に気絶してるのか?」

その横へヤンキー座りをしながらしばらく彼の耳元で爆破をしたり、頬を突いたり、眉を指先でなぞってみたりしていたが起きないその姿に彼女も動きを止めて。

急にキョロキョロと辺りを見回したと思えば、どんつと男らしくあ

ぐらをかいて座りこみ

「あー・・・ここらへん爆破すりや殺せそうだな・・・ここは、ちよつと厚いか」

片膝の上に彼の頭を乗せれば、夕日のように顔を赤くしながらその頭部をさわさわとなでるように探っていく。

（血を流している姿は気になるが、爆豪君も彼のことが嫌いなわけでは無さそうだな。うん、先生あんしんし――）

「にしてもこの帽子じやま臭えんだよなあ」

「あがががあああああ!!!」

ベリツ、という音がオールマイトには聞こえた気がした。

帽子を押さえ、悲鳴を上げてのたうち回る彼という珍しい物に固まる観客二人に対し

「かふっ・・・慟哭すら許されぬとは」

のたうち回る復讐鬼は許されないと、NGサインが出され再度彼は口から血を吹き出していた。

けつきよく放課後になってしまった。

あの後もなんだかんだと近付いてはみたものの、意外と言っては何だが彼はクラスメイトと居ることが多く話しかけるタイミングを失っていった。

そのため、こうして正面玄関が見える位置に姿を隠し彼の帰りを待つことにしたのだ。

教師という立場である以上、生徒のことを知ることは重要である。ならば、多少強引にでも聞かなければいけないと今さらながらに氣付いたのだ。

思いが通じたのかゆつくりと校舎から出てくる彼・・・緑谷少年の

姿を見つけ、急いでいると悟られぬよう、なるべく自然に近寄って  
「やあ緑谷しようね・・・んんん!」

その姿が掻き消えた。

まるであの時のようなその光景に戸惑いながら、ふと背後から聞こえた音に慌てて振り返り

「っ、えーと・・・少年?」

マントを揺らしながら背中を向けて立つ彼が居た。

その顔は見えず、相変わらず考えは読めないが

「——この時をどれだけ待ち焦がれていたか。お前の方から距離を詰めてくれるとは思わなかったぞ『ファ・オオールマイルト神父』よ」

(・・・ん?)

聞き間違いかと首を捻りながらも、オールマイルトはようやく得たコンタクトだとなるべく笑顔を浮かべて・・・しっかりと頭を下げる。

「あらためて君にお礼を言いたくてね。・・・あのUSJでの一件、生徒たち皆が頑張ってくれたおかげで奴らを追い返す事ができた。その中でも、君が脳無を相手取ってくれなければさらに被害は拡大していただろう」

ありがとう。そう口にして、ゆっくりと頭を上げれば

「ッ、クッ・・・今だけは俺の意思でッ!・・・『オーリアマイルト神父』の前だけは・・・クソッ!ここまで浸食が進んでいるとは・・・おさえ、きれない」

背中を向けたままの彼の方からギリギリと歯を食いしぼる凄いが聞こえる。

大丈夫かと、手を伸ばすオールマイルトを壊れた機械のように時間をかけて振り返る彼。

(予想外に無表情!なんだか怖いよ緑谷少年!)

緩慢な動作で、懐へ手を入れた彼が取り出したのはオールマイルトの写真とサインペン。

「・・・刻印を、この・・・宝具に刻印をッ」

頭を下げ、それらを差し出す右手を反対の左手が引き止めるように

引っ張っている。

その動きの意味は分からないが、何を求めているのかは流石に手に持ったものでわかる。

恐る恐る写真とペンを受け取れば、緑谷君へとサインを書き込む。

「ハハハッ！ なつかしい写真だね。確かこれは6年前に――

――」

少し照れくさいが彼もヒーローに憧れるただの一人の生徒だったのだ。

今まで勝手に色眼鏡で見ていたことを申し訳なく思いながら、つとめて明るく笑い写真とペンを返そうと差し出し、ぽんつとその肩を叩いて

「――気を、失っている」

静かに、白目をむいた彼の体は後方へ倒れていった。



## 雑味

「雄英体育祭前―ホームルーム―」

「雄英体育祭が迫ってる!」

グルグルと全身いたる所に包帯を巻いた担任の言葉に一気に盛り上がる教室内の空気。

それに対し、爆豪勝紀は一人不敵な笑みを浮かべていた。

中学時代であれば出来なかった個性を全力で使用した戦いが、この雄英では出来る。

もちろん、競う相手はただ一人しかない。

自分の後ろの席に座る暑苦しい帽子とマントの彼が爆豪にとっての追いこすべき敵であり、そのほかはただの有象無象でしかない。

強きたぎる様な感覚に強く手を握りしめ、威嚇するように牙をむきつつ後ろを振り向き

「どうしたメルセデス」

ぶつかり合った視線に思わず固まる。

「…なんでもねえ。ただ、手は抜くんじゃねえぞ。テメエは俺がぶつ殺すんだからな」

顔が暗いと、影があると。

小学校のころは大人たちにも悪霊に憑りつかれた少年、などと呼ばれていたがこうして近くで見るとよくわかる。

妙な恰好や話し方になってしまったが、瞳の輝きだけは昔と変わっていない。

ヒーローが絡むだけで腹が立つほど他が見えなくなるところは何も、やはり変わっていないと爆豪は思う。

「クク・・・悪くない。お前が強く望むのであれば身を焦がすような怨嗟によって生み出されたこの力、存分に振るうのも、そう・・・悪くはない」

高らかに笑い始めた彼の姿に、騒いでいた他のクラスメイトの注目も自然と集まる。

その中でも、特に一人妙な視線を向けている奴が居ることに爆豪は

以前から気が付いていた。

体力測定、授業、USJいずれもヤツ・・・轟は緑谷の事を見ていた。

その視線は複雑な憎しみのようなものであり・・・そして別の何か、それこそ自分に近い感情を抱いているような気がしていた。

越えるべき何かを見るようなその視線。

だが、違う。アイツを越すのは俺だと、轟へ強い視線を向けて

「だが・・・それは叶わない願いかも知れない」

（あ？コイツ今更なに―――）

「クハハハハハハハハハハッ!!」―――・・・昨夜から我の個性が上手く発動しない」

一瞬の静寂のあと、教室が大きな怒号と爆発に包まれたのは当然と言えば当然であった。

ホームルーム後、相澤先生による簡単な質問を受け終えた緑谷の周りにはクラスメイト達が自然と集まり始めていた。

一番最初にその胸倉をつかみ上げ、額を擦りつけるようにメンチをきったのは当然彼女で

「おいクソデク!! テメエどういう事だオラァ!!?」

「爆豪ちゃん、落ち着いて。緑谷ちゃんが喋れないわ」

カエル少女がマイペースながらも止めた先でようやく解放された

緑谷は、距離をとるように大きく後ろへ退がるように跳び

「だあ!!?なにしてんだみどり——!!?」

勢いよく背後にあった机と、ついでに切島も巻き込みながら教室後ろの壁へと激突する。

緑谷にダメージがいかないよう何とか背部だけ硬化させ、受け止めた切島が慌てて彼の顔を確認すれば

「すまない……。私の体は鋼鉄の意思により固定された一つ概念であり今の衝撃程度であれば傷つくことはあり得ないのだ。それよりランサー、貴様は無事か？」

「お、おう、大丈夫だけだよ。なんかいつもより回りくどいっつか……。らんさーって何だよ?」

「硬化化し尖らせた腕を振るい武器とする……。まぎれもなくランサーだ」

散らかった机を直し、一部を自分のセロハンテープ状の何かで補強していた瀬呂がそんな会話から興味津々な様子で寄ってきて

「おー、なら俺はどうなんだ緑谷?」

「粘着状の物質を飛ばす以上、間違いなくアーチャーだ!!」

「いや待て緑谷君!アーチャーとは射手のことだろう?どう考えても弓を使う——」

「弓を使うアーチャーはアーチャーではない!!」

明らかに、今の彼はおかしいとここまできてようやくクラス全員が考えはじめていた。

「もともと回りくどい言葉を話されてはいましたが、ここまで理解しにくかったかというと……」

「ちよつと違う気がする。つか、見た目もなんか前と違うんじゃない?」

創造系女子とイヤホン系女子が首を傾げながらその姿を観察するが、なかなか答えは出ない。

となると、普段から彼の姿を見ている彼女にしかわからないだろうと視線は集まる。

勘の良さから皆がどういう意図でこちらを見ているのか察してし

まった彼女は、周囲を威嚇しながらもやや頬を染めあたり前の様に答えようと

「ッ、何見てんだテメェら!!? だいたいコイツの普段と違う点なんてどう見ても——」

「手袋だ。緑谷は今までその黒い手袋を着けていなかった」

氷の様に静かな声が響いた。

今まで遠巻きに見ていた『彼女』が、ゆっくりと歩みを進め彼のそばへ歩いてくる。

肩まで伸びた赤と白の髪に、中性的な顔立ち。轟焦子は緑谷と顔を突き合わせるような距離でその顔を見つめ

「ネクタイもだ。その、たまに光るネクタイは昨日まで着けていなかったし、今朝家を出た際にはもうつけていた事は確認している。それにお前は自分の事を強く俺と呼んでいたが、今日は妙に偉そうな雰囲気で我と呼んでいる。今日までの分はボイスレコーダーに録音してあるから後で確認してもいい。それに、普段のお前であれば爆豪から距離は取らないはず。あいつが距離をとられた際に悲しむ顔を見ないよう最近距離をむしろ詰めている。跳んだあの時の動きも普段お前は身構えるように体を丸めて後ろへ下がるが、今日は体を起こしたまま滑るように後ろへ跳んで——」

クラスメイト全員、啞然としていた。

約一名は気付かなかった幼なじみの気づかい、気恥ずかしさに悶え動きが取れなくなっていたが。

「そして・・・何よりお前の中の炎が今までで一番強く燃えているのを感じる。強く、熱く、憎たらしく、熱く、熱く熱く熱く熱く!!」

正気を失ったように惚けた顔のまま、冷気を放つ右手で緑谷の腕を掴む。

一瞬で凍り付いた彼の腕は、しかし黒い炎を放ちながら逆再生するかのように氷を溶かしていく。

「炎・・・憎い。お前の炎が全て——」

立ち昇り始めた炎が轟へ移る前にその体を麗日、芦戸、耳郎といった面々が羽交い絞めにして引つ張って行き……なぜか残されたのは緑谷と爆豪の二人のみ。

轟に気おされたのか男性陣はいつの間にか姿を消しており。

「……てた、」

ぽつりと、俯きながら何かを口にした少女に緑谷は首を傾げる。

この幼なじみが人に聞こえないような声量で何かを口にするのは珍しい、なにかあったのではないかと近付き顔を寄せて

「俺も気付いて——無え!!死ねデクッ!!!!」

ゴンツ、と顎へ掌底が入ると同時に爆発がその頭をかち上げる。

思ったよりも近くにあった顔に驚いて思わず爆破してしまった少女は赤面しながら、しかし知るものと顔を背けようとして

「……は?」

吹き飛ぶ彼の頭から帽子が離れ、空中で溶けるように青い光の粒子となつて消えていく姿に大きく口を開いたまま固まった。

「お……おいデク?お前、ぼ……帽子」

ふわり、と吹き飛ばされる事に慣れたように空中で体を一回転させて着地すると、彼はいぶかし気に帽子よりも自らの体を見下ろす。

「……妙だな。先ほどよりも体の動きの制御が楽なようだ」

「んな事よりも帽子だ!!い、痛みはねえのかよ……」

この前、激痛に悶えていた姿を見ていただけにおろおろと様子を窺い

「問題ない。この身に痛みは襲い掛かりはしなかったが……これは」

先ほど指摘されるまで気付かなかった手袋を脱ぎ捨ててみれば、先ほどと同じように淡い光となつて消え去る手袋。

次いでマント、ネクタイと外してしまえば素肌となつた手のひらに黒炎を浮かべる。

時折揺れるが、想像通りの形で保たれるその炎に自分の考えが正しかったことに頷き。

「僅かだが、分かった気がする。先日の抗いのせいであの人との接続に何かが起きたのかもしれない」

だが、これならば今まで出来なかった力の制御が

「ガガガガガッ!!？」

装備を外した部位から黒炎が立ち昇り、焼けつくような痛みを与えると同時に捨てたはずの装備を形作る。

「じゃ・・・弱体化するだけでここまで苦悩する必要があるとは」

帽子を再構築するために頭部を巻き込む様に起きた炎により与えられた焦熱感にふらつきながら、彼は大きくため息をついた。

「雄英体育祭前―放課後―」

教室の前でザワザワと騒ぐモブ共と、それに驚いた丸顔が騒いでやる。

ヴィラン襲撃に耐えたクラスを偵察に来たつもりだろうが、話しかけもせず遠巻きに見ているだけの時点で程度がわかる。

どいつもこいつも気にする必要もない、ただのモブだ。

「失せろモブ共!! 帰れねえだろうが!」

今日は一日、ややこしい事が起きすぎて頭が痛い。モブに構う時間はねえ。

「どんなもんかと見に来たがずいぶん偉そうだなあ」

「ああ!!？」

目つきの悪いモブが何やら因縁をつけてきやがった。

普通科がどうの、リザルトがどうのと口にしちやいるが、知るか

「それこそテメエ等の都合だ。俺はただ優勝するだけだ、ほかの残念賞はモブ共にくれてやるよ」

天辺をとる。

強く拳を握り、目つきの悪いそいつの隣を通り過ぎようとした瞬間

「クハ・・・クハハハハハハハハハハッ!! 降りた、来た、そして弾けたぞ雑種共!!」

背後からアイツの声が響いた。

暑苦しい装備を全て着込んだまま、目を黄金色に輝かせ狂気に満ちた笑いを浮かべる姿にモブ共は再び騒ぎ始めるが、1―Aの奴らはもう気にしてねえ。

今日一日、10分に1回はあのテンションで騒ぎやがった以上、当然だ。

周囲を気にせず歩きはじめるアイツに、人だかりは分かれていくがあの嫌な目つきの奴だけは退くつもりはないらしい。

「っ・・・雑種? ヒーロー科がこんな奴らばかりだと思うと嫌になるな。これなら、慢心してるその足元をこつそりすくつて――

――」

「慢心・・・慢心と言ったか!!? そうだ、それでいい、慢心せずして何が復讐鬼か!!」

まるで意味が分からねえ物を見るような目で周囲のモブが見ているが、それも当然だ。

以前にも増して言語機能が狂ってやがる。

堂々と、避けていく人だかりの中心を歩きながら、高らかに奴は叫ぶ。

「——ああ、すまない!! 空気が読めない復讐鬼で本当にすまない!!」

俺の幼馴染が今日も壊れていく



## 英霊憑依

「雄英体育祭―開催直前―」

轟焦子という少女の内に潜むのは、荒れ狂うような憎悪の炎とそれを包みこむ氷である。

憎悪の対象は当然父であるあの男と、そして母の心を傷つけたこの身に宿る炎。

クラスの控室の椅子に座りながら、半燃である自らの左手を見下ろす。

自然と脳裏に浮かぶのは父の姿・・・ではなくあの妙な口調のクラスメイト。

この雄英に入る前から、彼のことは知っていた。

最初に見たのは、あの『ヘドロヴィラン事件』、あの事件をニュースで見て、目を奪われたのだ。

その異常な口調、容姿などどうでもよかった。

あの黒い炎。あれが、自分の心を支配してしまった。

憎悪、怨嗟を固めたような炎は自らの体に秘められた炎よりも熱く、それでいて美しく永遠に見ていられる気がした。

食い入るようにテレビを見ていた自分を押しのけ、画面にほとんど顔を付けるように彼の姿を見始めたクソ親父のせいである時はそれほど長く見ることは叶わなかったが。

そんな父が『あの炎を焦子の媚として血筋に巻き込めば・・・』など口にしていたため不意打ちで凍り付かせたが、微塵も悪いとは思わなかった。

「おいデク、テメエだけなんで体育着じゃねえんだよ?」

「なに、この装備を外すと痛みが伴う事を何者かが校長神父へ伝えたようだな。肉体変質系の個性と同列に扱うようだが・・・下らん。復讐王にそのような配慮など必要ない」

フルセットともいえる、全ての装備を付けた姿であの爆破少女と会話をしているその姿をじっと見つめる。

言いたいことはある。あの炎に感じるのはただの美しさだけではないのだから。

どうも、あの炎はこちらの憎しみを燃え上がらせるようなのだ。

この前も、近付いただけで思考がやや過激な方へと飛んでしまい彼の腕を少しだけ凍らせてしまった。

だが、前回の経験で適切な距離は掴めている。椅子から立ち上げれば、距離をとりながらその横顔へ声をかけ――

「――ああ……緑谷。お前だけは俺が潰す。あの黒い炎を二度と出せない様に凍り付かせて、……そうすれば俺たちは永遠に共にいられるのかもしれない」

……距離を間違えた。

視線は完全に彼の手の平にロックオンされ、頬が熱を持つていくのが自分でもわかる。

（熱い、熱い、熱い。あの手が憎い。でもあの炎はまた見たい。近くで、溶けあうような距離で。ワタシの氷を解かす瞬間もまた見たい。いま、このままここを吹き飛ばすくらいの出力を出せば見れるのか。ああ……でも、凍り付いた緑谷の二度と炎を出せない手も見てみた――）

グツ、と。襟首を掴まれ持ち上げられる感触に思考がようやく戻る。

見下ろせば、そこにいたのは彼とともにいつもいるあの女、爆豪勝紀。

身長差では確実に勝っているこちらを片手で持ち上げるその馬鹿力は、ヒーローに相応しいが

「人が話してんだ、急に入ってくんじゃねえぞ根暗女!!」

その形相はヴィランとしか言いようがない。

とはいえ、こちらも騒ぎ過ぎた。止めてもらってありがたかった面もある。だから、――緑谷に常にへばり付く邪魔さも含めて軽く凍らせてやるだけにしようとその手を掴み

「おいお前ら、そろそろ並べ。入場時間だ」

ガチャリとドアを開け入ってきた相澤先生の姿に、踏み止まる。

代わりに、掴むその手を振り払えば後ろへ後退しながら視線を緑谷へと向ける。

いまのやり取りでも表情を崩さないストイックさはやはり好ましい。むしろ大好きだ。

そんな彼が、ようやく口を開き

「クハハッ。我を巡り争うか!! 良い、良いぞこれが興という奴だろうな。そう、存分にすまない!! 我が原因で争わせてしまいほんとうにすまない!!」

(今日も良い炎をくすぶらせてるなあ)

大きな声を出すたびに火力を変える彼の内にある炎に、彼女は今日も心を奪われていた。

「雄英体育祭―選手宣誓―」

観客、そしてヒーロー達は雄英に今年も粒ぞろいの生徒が多く集まっていることをすでに情報としては集めていた。

特に先日のUSJ襲撃事件を乗り越えた彼ら、1―Aの注目度は高くその情報を手に入れるために高度な情報戦が繰り広げられていた。そのため、そんな彼らが入場してからは観客の興奮は冷めやらず。

(いいじゃない。この視線が今から私へ向くのね！)

これから声を出し、その視線を一身に集めるミッドナイトは全身に走るゾクゾクとした感覚に体を震わせていた。

「選手宣誓―」

ぴしやり、と地面に鞭を打ち付ければ集まる視線にさらに気分は高まる。

何やら騒がしい一部の生徒を、再度鞭で黙らせれば

「選手代表！―1―A緑谷出久!!」

読み上げたのは、なにかと職員室でも話題に上る彼だ。

やや影のある大人びた雰囲気はあるが、どうも全ての言葉が演技がかっていて個人的には燃えるタイプではない。

今も、普段通りの黒いマントをはためかせながら壇上へ登る姿は凄みはあるが、やはりどこか嘘くさい。

申し訳ないが、すぐに興味が薄れてしまい他の生徒へ視線を移して

「――ローマであるッ!!」

ビリビリと響き渡るような、普段の彼からは想像もつかないような威厳にあふれた声が辺りに響いた。

「・・・未熟な俺たちの道のりは確かに茨の道だ。恩讐の果てが無いように俺たちの道に終わりは無いのかもしれない。・・・だが、あえて言おう!! 苦難の末に得る対価がいかに粗末な物だろうが、その道のりの果ては確かにローマである!!」

ゾクリと。額から足の先まで何かが走ったような感覚。

会場中が静まり返り、衣擦れの音さえ聞こえてこない。

ローマとはなんだと、そんな言葉が聞こえてもおかしくは無いと、そう感じてしまう自分よりも先にローマを理解してしまう自分が居

た。

帽子を押さえ、くると背中を向けた彼からマイクは離れすでに声は先ほどよりも小さくなったはずだが

「日本のローマ市民よ!!常にローマとなり、ローマであり続けるがいい!!」

その声は声の響く範囲にいたすべての心に、ローマを刻み込んだ。

### 「雄英体育祭―障害物競走―」

(さっきの宣誓カッコよかったと話しかけるべきだろうか。いや・・・それだと障害物競走が終わった後に話しかける理由も減ってしまう。なら、これから頑張ろうとか・・・潰すとか言った口でそんなこと言えない!!)

首を振りながらなんだか顔を赤くしている絶壁根暗女がいるが、今は無視だ。

もうすぐ始まりの合図が鳴る。あの狭いスタートゲートから考えれば、誰かは必ず周囲の奴らを吹き飛ばすような個性を使うだろう。なら、その先を行けばいい。

ちらりと視界に入れるのはアイツの背中。今日もどこか様子がおかしかったが、気にする必要はない。

宣誓の時とか緊張で指先までピンと伸ばしちまってるところとか、アイツらしくて悪くなかった。

壊れたアイツを追う奴はここにきて何故か増えて来て、あんな狂ったやつのだこがいいのか聞いてやりてえいつも思う。

だから、この体育祭でハッキリさせる。

アイツを超えるのは俺で、前後左右に立つのも俺で、釣り合うのも俺

だ、と。

一つ目のライトが点灯する。

（そもそも、アイツのどこが良いんだよ。顔は少なくともモブだ）  
二つ目のライトが点灯する。

（頭のおかしい恰好してる上に、話す言葉も全部いかれてやがる）  
ギリギリと歯ぎしりしながら見ていたからか、奴が一瞬振り返り。  
変わらない笑顔で、一瞬笑いかけてきやがった気がして――

『――スタート!!』

・・・なぜか！一瞬スタートに遅れちまった。

バカな自分に舌打ちしながら、両手の爆発で加速をつけ

――次の瞬間、地鳴りのような音と共に数多の生徒を巻き  
込みながらスタートゲートが凍り付いたのが見え

「フハハハハハハハハハハッ!! 原初の理を知るがいい!! 我が行くは  
栄光のローマ!!」

氷の塊へ光りながら突撃していく幼馴染<sup>アイツ</sup>。

思わずバカ面で口を開けてる間に聞こえてくるのは、掘削機のような  
ガガガガガッという音。

アイツが、凍り付いた生徒たちを助けてやがる音だと今さら気付  
き、知るかと一気に駆け出す。

アイツが空けた穴からどんどん生徒たちが抜けだしている以上、勝  
つには一刻も早くここを抜ける必要がある。

穴を抜ける瞬間、一瞬だが動くアイツの姿が見えて――

「ああああああああああ!! クソがッ!」

ガシリ、とその首根っこを何とか片手で掴む。

「ッ、メルセデス何をしている!!」

「先公が救助に入ってくるところだ!! テメエがこれ以上やっても邪魔なんだッ、気付け、そして死ねクソデクッ!!」

こんなところで負けられてはこの気持ちはどうすればいい。

前方に見えてくるのは・・・たしか入試のときの仮想敵。

OPの障害物も居やがるが、知るかとばかりに手を振りかぶり――  
――全力でクソデクを前方へ、爆破も使いながら全力で投げ飛ばし――

その黒い姿が、空中で一瞬青い粒子に包まれた。

宙を舞いながら、緑谷出久は思い出す。

ここ二週間、この個性について考察し行ってきた特訓を。

自分の中の彼から渡された情報はいくつかあるが興味深いのは『座』という場所。

そこには彼のような力を持つ存在が星の数ほど居るのだという。

先日まで、自分の個性は『彼（エドモン・ダンテス）の力を借りる』ものだと考えていたが先日の混線事件からもう一つの仮定が生まれていた。

『座に接続する』個性。

それが自分の個性ではないのかと。ならば、複数の人物の口調が流れ込んでいる現在の状況も先日の彼との接続に不具合が起きた際にできた隙間に他の誰かの因子がまぎれ込んだのだと推察できる。

つまり、接続する量にはキャパシティがある。

くるり、と先日のように宙で体を回転させるが全身に彼の装備を纏っている状態では上手く回れずこのままではコマの様に回りそうだが、

（なら、接続を絞ればいい。恐らく絞りすぎると力に負けてこの前みたいに押し広げられて反動が来る。だけど、上手く受け流すように絞れば――）

マント、手袋を消し去る。ネクタイも流す力を制御することで、普段の明滅する状態から血のような深紅へと姿を変える。

青い粒子が体を覆い、背後へと流れていくのを感じながら

ダンッ!!と巨大な機械敵の顔面へと着地する。その頭部へと手を当て、黒炎を放てばいつかの時の様に亀裂で指向性を与えずとも、その炎はその装甲を蛇の様に走り抜ける。

僅かな隙間から入り込んだ炎は生きているかのようにその内部のコードや基盤を焼き切り

静かに、機械敵はその動きを止めた。

一度背後を振り返り、幼馴染の姿を確認すれば

「クハハッ!!悪くない走り出した!...いま、『僕』はやつとスターラインに立った――!!」

跳ねるように、機械敵の体を踏み台にしながら走る。

踏み台にしたものを壊さず、あくまでしなやかに、猫の様に動く様は確かに今までの速さは無いが機動性は格段に上がっている。

これが、二週間の特訓で得たモノ

『緑谷エドモン20%スタイル!!』



第二関門を抜け、最後の直線である地雷原に入り轟焦子は体を震わせていた。

（熱がくる。緑谷が、迫ってきている。スタートで他の邪魔な奴らは全て排除したし、第二関門のロープは全て凍らせてきた。追ってこれるのは、『彼』ぐらいだろう。ついに、一位のワタシにあの炎を向ける時が来た！なら、ワタシは――）

「オラツ!!死ね絶壁根暗オンナア!!」

BOOM!と背後から爆音が響く。その声に、高まっていた熱が急速に冷めていくのを感じながら身を屈め、頭部を狙っていた手のひらを避ける。

なぜ、この爆破女がここに居るのか。彼の熱を自分が間違えるなどありえない。

ならば

「よそ見してる暇はねえぞオラツ!!」

地雷を無視し、宙を飛ぶようにこちらへ襲い掛かるその体を弾き飛ばすために氷を足元から生やすがまるで読んでいたかのように再度爆発を起こし上へ跳び避けられる。

振るわれた手の平が右肩を捉え、放たれた爆発に体が弾き飛ばされ・・・地雷を避けるため何とか僅かな隙間に足を差し込むようにして立つ。

今の一瞬で、距離を稼がれた。

焦りながら、再度足に力を込め最終手段として周囲の地面をゴールまで凍らせてしまおうと力を込めて

・・・体の横を、凄まじい熱量が駆け抜けていくのを感じた。  
思わず、全身から力が抜ける。

今までに無い、視認できるほどの漆黒の霧と紫電を纏った彼の姿が、残像を作りながら駆けていく。

「・・・他人に与えられた終着点に興味は無い。だが、この先にあるのはオレ達が目指した夢の通過点。あいにくと、譲ろうとは思わない」  
静かに、誰かに語り掛けるわけでもないその声は確かに響き渡り。  
数分後、熱く火照る全身に響き渡るように、何者かの悔しがる叫びと共に彼の一位突破を告げる声が耳に届いた。

## 圧倒的な存在感

「雄英体育祭―騎馬戦―」

ボッチである。

緑谷出久は今までにないほどの孤立状態であった。

騎馬を組んでくれそうなクラスメイトは軒並みこちらとは視線を合わせず、ようやく目を合わせてくれた峰田にはなぜか敵を見るような目で見られる始末。

この孤立無援の中でどうやって味方を見つけなければよいのだろうか。  
(かっちゃんと轟さんの周りには沢山の人だからが出来てるし、頼みの綱の飯田君も轟さんのところだ)

マズイ。

たったり、と滅多にかかないはずの冷や汗が頬を伝ったところで

「あつ、エドモン君！まだメンバーって空いてるかな!？」

救いの女神の声が聞こえた。

「あ、ああ。もちろんだ、メルセデス」

むしろ内心は泣きそうである。

照れくさそうに「仲良い人とやった方が良い!!」なんて言ってくれた麗日さんは本当に女神だろうか。

(でも、これであと二人。一人は決めてるんだ、なら後は相性も考えて動くべきだ。麗日さんの個性を活かすなら、空中でも加速できるような個性がやっぱりベスト。それなら、飯田君をなんとか――

『うむ。良き体の女が多すぎて迷っていると見た。ならばどうだ、あの女など程よく豊満な体つきで良いのではないか?』・・・え)

頭に響くのは猛々しく、しかし一本の槍のように芯を感じる男の声。

その声に導かれるように体が、勝手に動く。というより

「エドモン君?」

操作がきかない。

不思議そうに声をかけてくれる麗日さんに返事すら出来ず、向かう

のは

「やあ。良き胸と尻の女よ。俺と共に戦を駆ける気はないか？」

ゴーグルをかけた桃色の髪の少女。あまり見たことのない人だが、それよりもこの操作の利かない口があまりにセクハラまがいの事を口にし過ぎている。

内心、一気に血の気が引いていくのを感じながら

「丁度よかったです！ 私はサポート科の発目 明！ あなたの事は知りませんが、その立場を利用させてください！」

奇跡が起きた。むしろ表情を輝かせ、身を乗り出すように食いついてくる彼女。

「私のベイビー達が大企業の目に止まることが出来て、なおかつあなたたちは私のベイビーたちで個性の増強が出来るんですよ！」

「ん？ 俺の目には既に子を産んでいるようには見えんが、まあ良い！ お前の気持ちはよく分かった、共に行こう良き体の女よ!!」

ガシリ、と肩を組んだ辺りで体の自由が戻ってくる。

後は上手くやれ、と謎の声が脳内から徐々に遠のいていくのを感じながら、ひとまず組んでしまった肩を慌てて離し、謝ろうとして

空気の凍り付く音と、断続的な爆発音が耳に入る。

恐る恐る振り向けば、視界に入るのはまさに鬼のような形相の幼なじみと能面の様に無表情な氷を扱うクラスメイトの姿。

恐怖に凍り付いた体をなんとか動かし、背中を向ければ最後の一人である『彼』に向かって逃げるように駆け出した。

騎馬戦開始直前、轟の心中はブリザードが吹き荒れていた。

ストイックだと思っていたクラスメイトがセクハラまがいの言葉でいきなり話し始めたのだからそれも当然かもしれない。

（でも緑谷があんなこと言う筈が無い。精神操作系の個性がはたっているのか、それともあの声自体が何者かの個性で歪められていた可能性もある。まずは試合後に落ち着いて緑谷とハナシアイをする必要があるな）

薄い氷の膜が張った手を握り込めば、音を立てて薄氷は砕け散る。

その音に、彼女を支える馬役の一人、上鳴が肩を跳ねさせるが気付くことは無い。

今の彼女の脳内は彼への興味と———今も観客席から見下ろしてくる父親への怨嗟が支配しているのだから。

「カウントダウン!!3・・・!」

父親の姿を見上げた轟の表情は、一瞬何かを抱え込んだかのようにクシャリと———泣き出す間近のただの少女のように歪んで

「2!!」

それでも、涙はこぼさず前を見つめて彼の姿を探す。

「1!!」

この冷めた胸の内を溶かしてくれるであろう彼は

「スタート!!!」

しっかりとこちらの目を見つめてくれていた。

（———ああ・・・。氷に包んで家に持って帰りたいなあ）

轟 焦子は体を震わせながらそんなことを考えていた。

「実質、そのの争奪戦だ!!」

「いきなりの襲来とはな。まずは2組……追われし者の宿命、選択しろ緑谷！」

「御意!!」

「メルセデス、浮遊!!」

「メルセデス、ジェットパックを使うぞ!!」

さらに緑谷のマントの外側に取り付けられたジェットパックが音をたてれば一気にその体は動き始め——こちらを狙っていた2組へ突き進んでいく。

$$\begin{array}{c} \dot{\mathbf{i}} \\ \mathbf{e} \\ \mathbf{!!} \\ \mathbf{\_} \end{array}$$

50

黒炎。

視界を奪う様にまとわりつく炎だが、熱量はそれほどでもない。だが、迫る炎に一瞬も怯まないものは少ないだろう。

「その鉢巻、貰い受ける!!」

「行け、黒影!!」

黒炎の壁を突き破るように伸びた黒いスーツの腕と、黒い鳥のような影が2組の鉢巻を奪い去る。

飛んだ勢いのままほかのチームを引き離せば、

「クハハッ、良い動きだ同胞。過ぎ去る怨嗟の声すら今は心地良い!」  
「俺を選んだのはお前だ、緑谷。俺と黒影、上手く使いこなしてもらおう」

次の獲物を探す。

今の動きを見たほかのチームがしり込みしている今がチャンスだ。追われるだけではこの狭いステージでは追い詰められるのは必然。それならば

(それなら、全員の鉢巻を取るつもりで動いてやる)

彼が持っていなかった闘争心が、なにかのきっかけで開花し始めていた。

「つらあ!!死ねえ!!」

BOOOM!!

「ねえ、女の子なのにヘドロに包まれるなんて変わった経験してるよねえ!!感想聞かせてよ、ほら!!」

「あああああああああ!!!」

再度、振るわれた手が爆発音を鳴らす。だが、一定の距離を保たれてしまい軽い爆発では衝撃すら与えられない。

額に青筋を浮かせ、牙を剥く爆豪に対し騎馬である切島は慌てて足を止め

「お、落ち着け爆豪!! ポイント取られてんだぞ、冷静になんねえと!!」  
「ああああアアアア!! 進めえ、切島!! 俺は冷静だ、冷静に……ブチコロス!!」

もはや女子がしていい顔ではないと思いつつも、再度距離を詰めていく。

それに対し

「分かりやすく困るなあ本当に!」

先ほどまでと違い、一気に距離を詰めてくる相手——物間 寧人。

その左手が切島の頭へ触れるが、その隙を見逃さず爆豪がその顔面に拳を叩き込み

「はははっ、良い個性だ!!」

硬質化させた右腕でその拳と爆発を防ぎきる。

「っ、こいつは……」

予想外の硬さに爆豪の右腕に痺れが走り——今度はその隙を物間が詰める。

振りかぶられた拳が爆豪の頬に振るわれ……なんとかあたる直前に反応し顔を逸らしたその頬に容赦なく爆発が襲いかかる。

「……チツ、コピーしやがった」

至近距離で受けた爆発で火傷した頬を気にせず、切れた口の中に溜まった血を地面へ吐く。

「正解。まあ馬鹿でもわかるよねえ」

ふたたび距離を詰めようとする物間に対し、けん制するように爆破を行う爆豪にそう口にすれば、その視線はその向こうへと向けられる。

「ついでに……あの個性もコピーしてみようかなあ」



視線の先に居るのは、地面から襲い掛かる氷の槍から逃げる黒いスーツの男であった。

上鳴による全方位への電撃により周囲のチームは軒並み勢いを殺され、現在は緑谷チームと轟チームの一騎打ちとなっていた。

「残り4分、このまま緑谷チームが逃げ切るのか!!それとも轟チームが1位をかつさうのか!!」

プレゼント・マイクの声が響く中で向かい合う二人はお互いの動きを見つめていた。

（緑谷の体が右に傾いた。だが、視線は僅かに左を向いている。あの動きの場合必ず!!緑谷は左へ動く）

動きを読むのは轟に分があるようで、動きの初動を遮るように氷の槍が足元から突き出してくる。

とはいえ、炎は氷により相殺され黒影による物理も八百万の創造によって防がれている。

（決め手に欠ける。けどそれなら、彼らも同じ——『訳が無いだろうキミ。冷静に考えてみたまえ、先は読まれて徐々に足場も奪われているじゃないか。布石と言うヤツさ、結果は計算するまでもないネ!・・・そして感謝するといい!!あえて間に合わないタイミグで教えてあげたんだからサー』）

脳裏に聞こえた声に緑谷がハッ、と顔を上げるのと飯田の加速が始まるのはほぼ同時であった。

気が付いた時には体のわきを風が駆け抜け、ギリギリ上がった手は何かの衝突を受けたかのようにビリビリとした痺れと痛みを伝えてくる。

額に手を伸ばせば、奪われたのは二本の鉢巻。

葉隠から取ったものと、

「っ、・・・まだだ。終わりの鐘が聞こえぬ以上、この足を止める理由などない!!」

1000万。取り返さなければ自分たちに勝機は無い。

「やるか・・・緑谷。アレを」

（飯田がやってくれた。これで緑谷に点数上で俺は勝っている。だから存分に・・・緑谷を氷漬けにできる）

思わず吊り上がりかけた頬を手で押さえながら、半冷の右腕を構える。

ついでに垂れかけたよだれも隠す。

彼らの遠距離攻撃の手段はこちらに通じず、ほぼ詰みの状態だが相対する瞳に諦めは見られない。

ならば、不純物は混じるがまずは足元から凍り付かせようと、右手に生み出した氷の棒を地面に擦り付け冷気を伝わらせようとして

「っ、なにをするつもりだ!!」

飯田の声に顔を上げる。

視界に入ったのは彼の手から放たれる黒炎。

暗い輝きを放つそれだけであれば、彼がここまで驚くことは無かっただろう。

問題は、その炎を纏いながら巨大化していく黒い影。

（あの鳥の影は光を嫌うはずだが・・・まさか緑谷の炎が光を遮断しているのか）

そもそも炎とは光を放つものだ。ならば、あの炎は一体何なのか  
何の力によって生み出されているのだろうか。

（ああああああああ。触れたい、溶かされたい、氷漬けにしたい!!）  
ついに視界に収まりきらない程に成長を遂げた黒い炎を纏った影  
に、観客席が静まり返る。

おぞましい怨嗟の炎の中から唯一見える巨大な目が、こちらを見下  
ろし

「クハハッ！ 良い光景だ、怨嗟によって生まれた黒鳥の一撃、受けて  
もらおうか!!」

「よもやここまで相性が良いとはな。さしずめ『獄炎黒鳥翼撃―エ  
ヴィルフアイヤーウイング―』とでも言うべきか」

その奥で、似た表情を浮かべた二人がそんな事を口に出しているのが  
見え

巨大なその翼が横薙ぎに振るわれる。

騎馬を狙わず、轟のみを狙ったその翼に対し最大出力で氷柱を放  
つ。

ズガガガガガガガッ!! と氷が削り取られる音が辺りに響き、ひと  
際大きな氷塊に衝突した瞬間あたりに強い衝撃が巻き起こり

思わず、飛び散る氷の破片から顔を守るように腕を顔の前に当てた  
轟の頭に何かが触れて――

再び目を開け、振り向けば走り去っていく彼の姿。その手には確か  
に、さきほど奪ったはずの1000万の鉢巻が握られており

「取り返すぞ!! みんなで取ったポイントだ、必ず――!!」

胸中にあるのは、ただ悔しき。自分の油断で奪われたポイントを取  
り返さなければと動くその胸に、いまだけは父親の姿など無く

「・・・この時を、待ってたんだよね!!」

彼の脇から衝突するように迫った騎馬、その上に乗った少年が鉢巻ではなく彼の肩に触れる。

その瞬間、体中を冷気で包まれたかのようなそんな悪寒が走った。

「この個性、増強型で炎も出せるとかなかなかだよ。まあ、それすらコピーできる僕の個性の方が――がガガガガガッ!!」

少年の体が大きく揺れる。

同時に、早鐘を打ち始める自分の心臓の音が聞こえはじめる。

なにか、自分の根幹を揺さぶるような――生理的嫌悪、吐き気をもよおすような存在が彼の体から這い出そうとしている。

震えていた彼の体が、ピタリと動きを止める。

虚ろだったその瞳は、飢えた獣のような光を放ちギョロリとこちらを見つめる。

(な、んだ・・・こいつは。ワタシを、見ているっ!!?)

危機感を覚えた体が反射的にのけぞり

「――おやおや」

「デュフフフフフフ!! 黒髭ティーチ参上ですぞー!!・・・  
ジュルリ、そこにいるのは僅かに成長の兆しを見せる胸を持つ全人類の宝ですな!! よいですが、ペったんこはニツチ趣味ではなくつつまし

さを愛でる紳士のたしなみですぞーい!!ん・・・んんっ!? そののツンツン頭の女子は胸をきゅうくつな下着で押さえつけておりますな? 拙者の目を以てすればその豊満なおもちは誤魔化せんでござるよ! しかし、その怒った顔はなにゆえ・・・はっ、さてはさっきの発言で拙者がべったん派閥と勘違いしたのでは!?・・・デュフフッ、安心するでござるよ拙者は大きな胸からあふれる母性も感じられる男。そのDカップも拙者が――」――「死ね」

試合終了の合図と共に、かつてない規模の爆発音が会場中を揺らした。

あとに残ったのは黒焦げになり、意識を失った物間と騎馬の上で呆然とする緑谷。

そして、彼が最後の言葉を聞いていた事に気づき、真っ赤になった顔を押しえ泣き顔を見られない様に背を向ける爆豪の姿だった。

## 天使降臨

「雄英体育祭——トーナメントガチバトル——」

「クソ親父がワタシにしてきた事はただそれだけ。オールマイトへ勝つために、ワタシという存在は生まれてきたそうだ」

控室から呼び出され、人気のなくなった廊下で轟さんが最初に話したのはそんな言葉だった。

なんなんだよそれ、と。

そう思ってしまうほどに目の前の少女から受けた話は衝撃的で、とても同年代の子が抱えている悩みだとは思えないほど世界が違っていた。

「母はいつも泣いていて、ワタシの髪の色を見ては怯えていた。そんな母に笑顔になってももらいたくて近付いたワタシが悪いんだ、『お前の左側が醜い』なんて煮え湯を浴びせた母の気持ちが今ならわかる。……最後の記憶の母は泣いていた。女の子の顔に痕をつけたって泣いて……錯乱してそのまま病院に入れられて、それっきり会っていない」

淡々とかたる彼女の顔に表情はなくて、それでも僕には彼女がこの話を聞いて共感を求めている訳ではないと感じていた。

「あのクソ親父の炎が憎くてたまらなくて……同時にワタシは怖くてたまらないんだ。映像だろうが写真だろうが火を見ただけで体は震えて——気付けば炎が出せなくなっていた」

記憶をたどる。そう……確かに彼女が炎を使う姿は見えていなかった。

授業中も、USJの時も今回の体育祭も。

「世間体って奴でワタシの個性は炎も使えるってことになっている。だが、それもクソ親父の策だ。『失敗作の娘に早く個性婚をさせる』ためには強力な個性だってアピールが大事らしい。既に候補は絞り込んでいて、『あとはお前が結婚できる年になればいい』だとき。……まるで出荷される家畜みたいだと思ったよ」

いったい、どんな気持ちで彼女はいままで過ごしてきたのか僕には

想像もつかない。

かけるべき言葉も、僕なんかがかけて良いのかすら分からない。

「生きてるのか死んでるのか分からない毎日で、親父への憎しみだけがワタシの生きる力になっていた。——そんな中で、あの日お前の姿をテレビで見たんだ」

それでも、

「とても綺麗な炎だった。憎しみも、怒りも、優しさも温かさも混ざり合ったようなそんな炎だった。あんな炎もあるんだと、そしてその炎で誰かを助けようとする姿はワタシが成れたヒーローの形なんじゃないかって。泣きながら見たあの時の気持ちは忘れていない。．．．なあ、み．．．イズク、ワタシがヒーローを目指したのはクソ親父を見返すためじゃないんだ。ここに来たら、ワタシに火をつけてくれたヒーローに会えるんじゃないかって．．．そう、思ったんだ。だから

「——僕はツ．．．まだ、．．．ヒーローなんて名乗れないよ」

自分の言葉で、答えるべきだと思ったんだ。

代償として、炎の中に放り込まれた様な痛みが全身を襲うが関係ない。

「でも、．．．いつかきつと．．．僕は君のヒーローになってみせるよ」  
彼女を縛るのはきつと、父親だけじゃない。

「それは、つまりワタシのこんやく——」「だから今はまず君の友達になりたい。．．．友達としてこれからの事を一緒に考えていきたいんだ」

彼女自身が自分を縛っていると、そう彼女の言葉から感じる——

「それは．．．つまり．．．これからも良い友達で．．．つてことか？」

今までとは少し違った雰囲気で、なぜか恐る恐る聞いてくる轟さんを安心させるために、強く頷く。

「うん！　これからずっと、いつまでも友達でいよう!!」

そう返した瞬間。

ゴツ、と轟さんの体から強い冷気が放たれる。

唐突なそれに反射的に顔を庇いながら、いきなりどうしたのか何とか目を開けて轟さんの顔を見れば

「——バカっ!!」

「なんで!!?」

なぜか涙目で走り去っていくその背中に僕は何も言えなかった。

トーナメント進出者の物間 寧人が精神に異常をきたし一時中断していた体育祭も、30分後に彼が起きその心身に異常がない事が分かれば再び再開された。

彼に失神前の記憶は無いが、爆破少女を泣かせた様子とあまりに業



の深い長ゼリフの影響は色濃く残っており、彼を見る会場の目は冷ややかだ・・・が。

「関係ないけどねえ!!!」なんせB組の出場者数はA組と同じ。あれえ?? ヴィラン襲撃の経験とやはらはどうなったんだろう!!?」

物間が叫ぶように、序盤に緑谷チームが二組から鉢巻を奪い、逆に爆豪は物間撃破時に殺意が高すぎて鉢巻まででは取り切れなかったり。

波乱に満ちた騎馬戦の結果トーナメント表はA組B組、さらには普通科サポート科が入り乱れている。

すでにリング上に上がった緑谷出久の初戦の相手は、現在もこちらを煽り続けているそんな物間 寧人であった。

さきほどの出来事で会場内の物間への評価は低いが、緑谷の評価は真逆。

(さっきの騎馬戦でもかっちゃんを一度はあしらったみたいだし、何より最後の奇襲のタイミングはこちらの虚を完全に突いていたと思う。『ふむ、少しばかり考え方が歪んでるけど計算の上手な子だと思うがネ。頭脳の良さと社会の評価とは反比例するものさ。ただのちよい悪の私への評価がその良い例だと言えるだろう!』)

たまに語り掛けてくるこのおじさんはどちらの味方なのだろうかと考えながら、プレゼント・マイクの声に耳をすませる。

姿はどのような状況にも対応できるよう、火力は低いが精密性の高い『20%』スタイル。

そして、始まりの合図が聞こえるその刹那

「スタアアアアート!!」「それで・・・僕はいったい誰の個性をコピーしたでしょうか?」

い スタートの声が鳴り響く中、小さなその声を聞き取ろうとしてしま

一瞬で距離を詰めた物間の拳が下方から突き上げてくる。

だが、鋼鉄の決意により強化された身体能力の前では常人の拳は問題なく防ぎきれる。

拳に対し、左腕で押さえた右腕を盾の様に構え衝撃に備え――

メキメキツ!!と音を立てて腕が押し上げられていく。

有りえない衝撃と、圧、激痛に思わず腕を避けようとするが、拳はまるで腕を逃がさないかのように力を向ける方向を下方へ捻るように落とし

「まずはあ……一本!!」

何かが折れるような音と共に、緑谷の体が弾き飛ばされる。

(っ、切島君の……いや、違う。手の色が……)

満足げに、見せびらかすように振るその手は銀色に輝いている。

その手が視界に入ったと同時に、ようやく地面に接触した体がゴロゴロと転がり……緑谷は素早く起き上がり体勢を立て直す。

(右手は……もう痛みは遮断してもらえてるけどたぶん折れてる。肘から先が殆どうごかない。僕はバカだッ……彼が速攻を仕掛けてくることなんて簡単に予測できたはずだ)

「A組の秘密兵器なんて呼ばれてるみたいだけど、個性頼りで頭は使えないみたいだねえ。速さを売りにする君との距離を詰められるのは最初だけなんだ、その内に厄介な手か足を潰すのは読めたはずだろう」

すぐさま距離を詰める物間だが、今度こそ初動に合わせ対応できた緑谷がその側面へ回り込む。

利き手ではない左手で振るわれた拳は鈍い音をたてて物間の頭部へ突き刺さるが、銀色に変色した頭部には傷一つつかない。

「気付いた? そうステイル。鉄哲の個性にしちゃ悪くないけど、硬くなるだけなんてやつぱり地味だよな」

カウンター気味に放たれた蹴りが、攻撃後の緑谷の脇腹へ衝突す

る。

(ま・・・ずっ!!?)

わき腹から異音が鳴る。

自ら跳ぶ余裕はあったものの、鋼鉄が衝突したダメージは馬鹿にできない。

今度は倒れずに立ち直るが、表情の変わらないその頬に冷や汗が流れる。

(彼の個性には制限時間があつたはず。それを待てば有利になるはず・・・だけど!!)

それは、ヒーローだろうか。誰かが助けを求めているかもしれない、そんな時に敵の弱体化を待っていましたなどと言いわけるのだろうか。

緑谷 出久が目指すのは『笑いながら』全てを――

「ク・・・ハハ。クハハハハハハハハハハッ!!慈悲などいらぬ!!オレの理想はお前の先に・・・!!」

黒炎が両手に纏わりつき、古ぼけた手袋を編み上げる。同様に、深紅であつたネクタイは黒く染まり、その中で小さな光が流れるように明滅する。

「・・・はっ、コスプレする余裕なんてまだ――ツ!!?」

笑う物間の視界が一瞬で黒く染まる。

それが、どこか古ぼけた匂いの黒い手袋に包まれた左手だと気付くと同時に

その手から放たれた炎が顔面を焼く。火力は抑えられ、スティールの個性で耐えられてはいるが

「が、ああああ!!」

口から入り込む、暗く冷たい、だが焦がすような熱は防ぐことはで

きない。

思わず距離を取った物間の顔面を、追撃してきた緑谷の拳が捉え、岩同士をぶつけたような音を立て、物間の顔面がのけ反る。

だが、すぐに姿勢を戻せばその顔には僅かにダメージのあとは見えるが未だ倒れる様子は無い。

「つ、ちよつとは力が上がったみたいだけどそれで何がどうなるのさ！ 傷がつけられなきゃ同じだよねえ!!」

身を乗り出すように、一歩踏み出した物間が拳を振りかぶり……ゆつくりとその体が倒れていく。

(なつ、……目が、視界が揺れる!!?力が、入らない……!!)

「ランサーと同様に……硬質化した体は無事であろうと脳までは守れるはずもない。強い衝撃を与える事には苦労したが、オレの勝利だ」揺れる視界の中、背中を向ける緑谷。

さきほど起きたアレを思い出し、僅かに顔を歪めた物間は――

――ガシリ、とその足を掴む。

何を、と振り向きかけた緑谷だが、次いで起きた異常事態に目を見開く。

自身の体が、いつの間にか宙に浮いていたのだ。

ズキズキと痛む足首と、遙か下に見えるステージが『足首を持ち上げるように投げ飛ばされた』のだと伝えてくる。

それを起こした男が

「――感じます。負傷者、そして殺菌されていない傷」

ぐりつ、と首を上げこちらを見上げる。

元の彼とは違う、どこまでも透き通るような赤い瞳がこちらを見据え

「あなたの命を救います。あなたの命を奪ってでも」

その静かな言葉に、何故か自らの体に宿る彼がため息をついたのを感じた。

実況をしていたプレゼント・マイクの動きが完全に止まっているのを横目で見ながら、イレイザーヘッドは今回ばかりは仕方ないと考えてしまっていた。

そもそも実況出来ないのだ。

緑谷が高速で動くのに対し、物間はその体を瞬時に掴み上空に放り投げる、あるいは地面に叩きつけているのだ。

先ほどまで物間にはなかった怪力も原因だが、異常なのはその胆力と勘とでも言うべきだろうか。

目で緑谷を追っている訳ではない。迫る拳が顔面に迫ろうとも瞬きすることなくその拳を最後まで捉え、直線的な動きに入り目で追えるようになった瞬間を掴み取っている。

あれの恐ろしさは、対峙している緑谷が一番実感しているだろう。

蹴りを放つ。

足首を掴まれ投げ飛ばされる。

拳を放つ。

腕を掴まれ放り投げられる。

全身で体当たりするようにその体へと突っ込めば

「――処置します」

頭部を掴まれ、地面へ叩きつけられる。

破碎音と共に地面に亀裂が入り、爆発したように砂煙が立つ。

（ツは・・・威力が、おかしい）

セメントスにより作られた会場だ、生身の拳で簡単に碎ける筈が無いのだ。

ふらりと立ち上がった体へと、瞳孔の開ききった赤い瞳が迫る――

――と思考した瞬間には懐へその体が入り込んでいる。

クロスするように振るわれた両手刀が胸元に叩き付けられ、胸部に痛みが襲い掛かると同時に後方へ体が吹き飛ぶ。

「・・・受傷部の増加を確認。これ以上、受傷部を増やさないためにも患者の鎮静化が最優先でしょう。・・・覚悟はよろしいでしょうか？」  
地面を転がる間に一瞬意識を失っていた緑谷が次に目を開ければ、カチャリという音が耳にまでする。

仰向けの自分の額に付きつけられているのが世に言うリボルバー  
と言うもので、その引き金に指がかけられている事に気付けば

「・・・なぜ治療を拒否するのですか」

間一髪で首を傾け、銃弾を避ける。

こちらと同じように首を傾げ、心底不思議そうにこちらを見るその  
姿に背筋を凍らせながらけん制として炎を放つ。

距離を離れた物間に対し、緑谷は頭を回転させる。

（かつちゃんみたいな反応速度に怪力。でも、炎を避けたという事は  
防御面は並みの可能性が高いんじゃないか。それに――）  
ゆっくりと、顔を上げる。

かく乱するように、緩急をつけ彼の周囲を駆け巡る。

速度に慣れさせない。視界の陰に入る。

まるで陰から攻めるように見せかけて

物間（？）は視界に入る彼を冷静に見つめていた。

（？）に名だたる英雄のような戦闘経験は無いが、人体の動きを把握する観察眼と判断力、そして胆力が備わっていた。

故に、視界の端から伸びてきた腕を再度捉えようとして

その手の平から、拡散した炎が視界を奪ってしまえば観察眼による予測は出来ない。

遮られた視界のどこから攻撃がとんでくるか分からない。常人であれば焦る状況

だが、その反対から炎を突き破るようにして現れた拳を――  
迷いなく掴み取る。

飛び出したところを掴むだけ。冷静な（？）には造作もない事で

「――神秘への知識の薄さ。それがお前の敗因だ『メルセデス』」

背後から現れたもう一人の黒衣の男の拳がその側頭部を打ちすえた。

明滅する視界に、ようやく殴られたのだと認識した（？）が振り向けば、捕まえている彼とは違うどこか愁いを帯びた表情の男が立っていた。

「最初からそうやって増えて対処すりや良かったんだよ、クソデク」  
「あら、爆豪ちゃんもう行くの？」

なんだかんだ、最後まで試合を見届けた爆豪が隣で立ち上がったのをカエル少女が見上げて首を傾げる。

試合開始までまだ時間はあるし、なによりまだ呼ばれていないのだ。

そんな言葉に、軽く舌打ちしながら首を向けるのはちょうど自分の真正面の席に座りこちらを見ている相手。

「あんな敵意むき出しにされて黙ってられるわけねえだろうが・・・」  
ゾツとするような冷えた瞳がずっと見つめている。

緑谷の試合が終わってから、片時も視線はこちらの顔から離れていない。

「俺になんの恨みがあるかは知らねえが、ガンつけといてただで済むと思ってんじゃねえぞッ!!」

牙を剥き、中指を立てる爆豪に対し

ただ静かに、体を1ミリも動かさず爆豪 勝紀の顔を轟 焦子が見つめていた。



見えているモノは

「雄英体育祭―トーナメントガチバトル―」

気に入くわねえと、眼前に立つ少女を見て思うのは何故か。

コイツがデクに絡むからか、何を言ってもすました顔でいるから・・・それとも強力な個性にもかかわらず舐めた戦い方をするからだろうか。

引つかりはするがどうにもしつくりこない、と爆豪 勝紀は目を細める。

コイツの事はそんなに知らねえし興味もないが、No. 2ヒーローの娘であることから情報だけは集めていた。

メディア露出は少ないが、彼女の父の力は良く知っている。圧倒的な熱量と精密な操作でヴィランを焼く炎の筈だ・・・が。

「さあ、両者準備は・・・できてるなあ、オイ！　ここまで闘気がビリビリ伝わってくるぜ!!」

気にしている暇はない。

プレゼント・マイクが話すように、確かに闘気は溢れているがそれ以上に

(どつちかつて言えば、殺気だなありや。・・・悪くねえ)

どんな事情を抱えていようが、強い敵と戦えば自分はさらに強くなれる。

そして

「それじゃあまあ・・・爆豪VS轟!! START!!」

!!

轟音。地をかみ砕きながら、巨大な氷の壁がステージの半分を飲み込む。

啞然、と観客席は瞬時に静まりかえり、見上げるような氷の柱とその中に閉じ込められたであろう少女の末路が全員の脳裏に浮かぶ。

会場の雰囲気文字通り凍り付き

小さな振動が、観客の耳に届き始める。

心臓の鼓動のような音が徐々に力強く響き、透明な氷が赤く明滅を繰り返す。

そして

BOOOOOM!!!

ひととき巨大な爆破音が響くと同時に、氷の一角が爆散する。

その衝撃と共に駆け出すのは、傷一つない爆豪の姿。両手から爆発を繰り返す爆速ターボで距離を一気に詰めれば

「初っ端からやってくれるじゃねえか!!」

その頭部へと勢いをつけた膝蹴りを放つ。

対する轟は左腕で受け流すように衝撃を逃がし、後方へ退く。

表情を苦々し気なものに変えた轟に対し、ようやく表情を変えたかと爆豪は口元に笑みを浮かべ

「・・・幻滅されたかもしれない。彼なら今の蹴りは予想した上で反撃の糸口にした筈だ。やはり、まだ彼の域にワタシは達していない――

――」  
「どこを・・・見てやがる!!」

その視線は爆豪の遥か後方、観客席に立つ緑谷を常に見つめていた。

氷を放つ瞬間も、蹴りを受けた瞬間も、そして対じているこの瞬間も。

「デメエは――ッ!!」

軋むほど歯を食いしばった爆豪がその拳を振るい、眼前で爆破が起こったとしても

たとえ爆炎に彼の姿が隠れ見えずとも、その瞳は常にその姿を映していた。

「観戦中に呼び出してすまなかったね。次の試合でアレと君が戦う前に直接話しておきたかった」

「かつちゃんと轟さんの試合の最中に僕を呼び出したのは目の前に彼、No.2ヒーロー『エンデヴァー』。」

「オールマイトに次ぐヒーローで、昔の僕が憧れたヒーローの一人だった筈だ。」

でも

「あの炎を操る君なら分かるだろうが、アレに宿る炎の個性は対の水より強力だ。活かせれば最強のヒーローになることも可能な筈だが・・・アレは弱い心を持ったために扱う事すら出来ていない」

（違うだろ・・・）

「少しも、この人に胸が熱くならない。」

「雄英に入りたいなどと口にするから入れてみればやはり炎は使わず、目は曇る一方。使えないと分かった以上、これ以上遊ばせておくつもりは無い。早く次の世代を作りあげなければならない」

（轟さんが、弱いわけない）

「そこで提案だが、君も焦子の婚約者として候補にあげても良いだろうか。無論、子を宿すまでも良い、個性をより強く受け継がせるため――」

（そんなこと――ッ）

唐突に、エンデヴァーが表情を青ざめさせた。

まるで僕から距離をとるように、逃げるように飛び退いた彼の体か

ら炎が掻き消える。

荒い呼吸のまま彼が見ているのは僕の瞳。

「——子どもに託す、それは素晴らしい事でしょう。大切に慈しみ育て、そして手を離れていくまで愛をそそぐのが母の……そして父の務めであり喜び」

「……その圧。やはり並みの個性ではないようだ。瞳の色が紫に変わった途端に、内に眠る力も跳ね上がった。やはり君は焦子の——」

「託す。そう、託すことは素晴らしい。貴男のように子の意思を塗りつぶそうとすることのまさに対極でしょう。あれほど強い心を持つ子であれば、ほんの少し貴男の夢を語る……ただそれだけで十分だったでしょうに。……故に先ほどの発言、これから成そうとしている事……関節ごとに切り分けて血の一滴すら切り刻んで処理したいと思うほど腹が立ちましたが、その役目は、かわいらしいひーろー様。あなた様のものですね」

脳裏に響くのは、包み込むような優しさの中に鬼神の様な覇気を持つ女性の声。

「ふふっ。……あなた様の想いは間違っていない。頭の中だけで止めるなんてもったいない。痛みも、回りくどい上に分かりにくい難解な西洋なまりも今は母が遮りましょう。だから、頑張りなさい」

「……轟さんは、僕に会うためにここへ来たと言っていました」

思った通りの言葉が出ているのに、体を襲う痛みと灼熱感先ほどの声の人のおかげか少しも感じ無い。

「そうだ、焦子は心の弱さから俺の鍛錬に折れ炎を操る事を諦めここへ逃げ——」

「なら、どうして轟さんは僕なんかの姿にへ炎で誰かを助けようとする姿」を見たなんて言ったんでしょうか」

轟さんの目に隠れていた感情は、僕だからこそ分かる。

「僕に会うために来たなんて隠していたけど、違うんだ。あの目の奥でキラキラ輝く想いはいつも見ているから。僕の大切な幼なじみとそっくりな目。彼女は・・・諦めてなんていない!!」

「・・・・。折れたことに変わりはない。炎が未だ使えていないことがその証拠だ。いずれにせよ、次でアレは君と当たる。潜在力の高さだけは見てもらえると助かるよ」

「それについても、僕気になってたんです」

「・・・・なにかね?」

「俺の幼馴染をあまり見くびるな」

あれから三度、氷がステージを飲み込んだ。

すでに試合が終わっていてもおかしくない状況で、爆豪は未だ轟の前に立っていた。

火傷の痕が僅かにある程度の轟にくらべ、彼女の体には裂傷や霜焼けが目立ってはいるもののその瞳は未だ強い光を放っている。

すでに四方が氷に囲まれ、観客席などぼんやりとしか見えていない。

そんな状況でも

「イズクはやっぱりちゃんとワタシを見ている。やはり時間をかけすぎていると怒っているだろうか。次の試合はワタシとイズクだから早く終わらせて欲しいのかも・・・」

「・・・オイ」

「それとも、幼馴染をいじめているように見られたか。ヒーローの彼だからそういうところは厳しく見て・・・」

「——居ねえよ。あのクソデク、俺の試合に興味なんぞ無いのかどっか行きやがった」

ぐるりと見渡した爆豪が、目を細めながら彼の姿がない事を確認する。

（氷のせいでほとんど見えねえが、居ねえ。・・・なんで居ねえんだよ）  
気持ち、肩を落とす彼に対しこの試合が始まって初めて轟が視線を爆豪へと向ける。

視線に浮かぶのは疑いと、そして僅かな動揺。

「・・・居るさ。イズクはあそこに」

「居ねえよ。気にはしてたんだ、テメエ視界が塞がってもずっと俺の後ろばかり見てたけどよ。本当に見えてたのか？」

「見えてたさ！ 目は良いんだ、イズクがワタシだけを応援してくれてるのだって・・・!!」

「んなわけねえだろうが。あのクソがこの状況で片方だけ応援する度胸なんてゼツタイねえ!! へ衝突する思いに優劣はつけられん。メルセデス達よ、後悔に溺れぬよう全力で競うがいい!!」とか言ってるやがるだろうよ」

「そんな、こと。・・・イズクは冷静で強くて、ワタシなんかと違って完璧に炎を使いこなすヒーローで・・・!!」

「小学校2年ッ、ドッジボールでアイツは力み過ぎて炎を出して体育館を全焼させた。中学の林間学校じゃカレー作りの火に自分の炎使って消し炭にしやがった」

おかげで空腹のままアイツを追いかけて頭を爆破し、スタミナが切れて気絶しちゃったと苦々しい顔で口にする。

「この前のUSJでも炎の調整に苦しんだって本人も授業で反省してたじゃねえか。・・・それで、テメエが見てるのはいったい誰だ。俺か、それともクソデクか!!」 空想のデクを見る痛い女かテメエは!!」  
八重歯を見せるように笑いながら、強い音を立てて地面を踏みしめ爆豪が迫る。

最初の時と同じ跳び膝蹴り。

視界に入った爆豪に対し、個性を使おうとする轟だが揺さぶられた思考はそれを許さず左手で受け流し

「ワタシは・・・ッ。空想で、イズク君に勝手に——」

唇を噛み、泣き出しそうな顔の轟の耳に爆破音が聞こえる。

宙に浮いたまま左腕を後ろへ回した爆豪。その手から放たれた爆破によりコマのように体を回転させ—— 勢いをつけた右拳が轟の頬へと突き刺さる。

「見てたのはテメエのなりたい姿<sup>ヒーロー</sup>だろうが!! 目の前の敵無視して夢見てんじゃねえぞクソ絶壁根暗オンナ!!!!」

フーフーツ!!と息を荒げて地面に着地した爆豪に対し、初めてクリーンヒットを受けた轟の体は勢いよく飛び、何とかステージ端で踏み止まる。

「俺を無視する奴となめてくる野郎は、誰だろうがブチ殺す!!」

会場中に響き渡る声に皆がドン引きする中、切島だけが「けつきよくそこにキレてたのかよ・・・」と観客席で苦笑いしていた。

「おら、ナメプ絶壁根暗オンナ!! さっさと起きやがれッ、その男みたいな体なら頑丈だろう——」

僅かな変化だった。会場の観客が感じたのは少しだけ気温が上がった程度の、そんな違い。

だが、正面に立っていた爆豪は全身を貫かれたかのような力の奔流に両手を反射的に構えて

——そんな彼女へ突き刺さるように、白い炎が襲い掛かつ

た。

「・・・カップはAから変わらないが、昨年より成長はしている。ば・・・？ばくはさんに比べれば少ないが、成長の余地はあるはずだ。・・・この、炎のように」

左の手の平から白炎を放ちながら立ち上がり、じつと自らの手を見つめる。昔は普通の色だった筈であり、こんな色は彼女も知らない。だが、個性は意思により形を変えることがある。彼の様になりたいという意思と、それでも自分のヒーロー像は自分だけのものだという気付き。

それによりなにかが個性に影響を及ぼしたのかもしれないが（ワタシは・・・思っていたより負けず嫌いなものかもしれない）

見据える先で、白炎が爆風により掻き消され、その中から現れるのは息を切らしこちらを睨む彼女の姿。

「・・・いいぜ、ここからが本番だッ。死ね絶壁オンナ!!」

かく乱するように爆速で左右へブレながら接近するその姿にも、今の轟であれば対処は出来る。

白炎の壁を作り出し、接近を拒む。同時に、恐らく壁を突っ切ってくるだろう彼女に氷の槍も待機させる。

「っ——!!?」

それでも、BOOOM!!と地面ごと壁が掻き消されれば、舞い上がったコンクリートと爆炎と煙により視界は塞がれ、待機させていた氷の槍も意味をなさない。

「まだ炎の使い方がイマイチだッ!!」

黒い煙の中から、グツと突き出してきた左手が轟の襟首を掴み、再び拳がその顔面を狙う。

首を傾け避ければ、今度はお返しとばかりにようやく姿が見えた爆豪の腹部へと蹴りを叩き込み。

「改めて慣れていくッ。・・・クラスの皆とも、イズク君とも！ワタシが彼に憧れているのは変わらないから」



地面に転がったその体を凍り付かせようとすぐさま冷気を放ち

BOOM!!と両手が地面に着いた瞬間に爆破したのだろう爆豪が人体としてはありえない動きで起き上がり――

「なら、次の試合でクソデクも潰して一緒に保健室に放り込んで……は、やらねえ!!アイツは俺の隣を共に歩んでいく運命なんだよッ!!」

ゴッ!!と再度、轟の頬へと爆豪の右拳が突き刺さる。

（……少しだけ、ワタシの事が分かった気がする……。イズクくん、わたしたちいつかヒーロー界のトップおしどり夫婦として有名に……）

満足げな表情で、轟 焦子は倒れ勝者が決定した。

（『ふむ……少女が恐れていたのは諦めきれていない自分であり、激情の炎を押さえつけていたのは諦めたという無意識のアピールだった。実にありきたりだ！ 個性だなんだとサイエンス・フィクション風に脚色してはいるが結局は〈思春期にありがちな逃避〉ではないか。ジャンルはただの青春活劇だ。そういったものは俺の作風には合わない！良い題材がありそうだと来てみればとんだ――』）

慌てて戻ったところには試合は終わっていて、断片的にしかクラスメイトには聞けなかった。

それでも、頭の中の人が言うように彼女は自分の悩みと向き合えたようだ。

保健室の前で、足を止める。轟さんがここに運ばれたと聞いて来たのだが、聞こえるのはその轟さんと

（かつちゃん？）

声を荒げる幼なじみと、笑う轟さんの声。

ノックをして、轟さんの返事が返るとドアを開けて

「ッ、・・・」

「・・・イズク君。来てくれたのか」

椅子に座り顔を真っ赤にしたかつちゃん、その脇のベッドで体だけを起こし小さく、でもしっかりと頭を下げる轟さんの姿。

「怪我は・・・良さそうだなメルセデス」

リカバリーガールの力はやっぱり凄いな、と考えていると急に顔を伏せる轟さん。

まさか治りきってなかったのかと体を寄せて、その背中を擦ろうとして

顔を急に上げた轟さんと、目が合う。

というより、息がかかりそうな距離にある顔に体の動きが止まる。

「なっ・・・轟ッ・・・いや、クソデク・・・!!」

かつちゃんの声が聞こえるが、雪の様に白い肌がゆっくりと紅色に染まっていく様子だとか桜色の唇から漏れる息がこちらの唇に当たってるだとかそんな事に思考が奪われて

「ふふ・・・カツキの言う通り、見た目とはちよつと違うみたいだな」

コロコロと鈴の音のような笑い声が入り唐突に轟さんの顔が寄り、右頬に柔らかく温かい感触とくすぐったい吐息が触れて

（『かくして、少女は自分だけの物語を歩き始めた、とでも三流小説ばりに締めくくればいいか？とりあえず、このままでは俺も激痛を味合わなければならぬのですぐに立ち去るとしよう。では・・・存分に爆ぜろ』・・・え？）

アッパー気味に顎に入った真っ赤な顔の幼馴染の拳と、爆破の衝撃に久しぶりに僕は意識を飛ばした。

## 伝えたいこと

「雄英体育祭——トーナメントガチバトル——」

長かった。

アイツはああ見えて知り合いに力を振るえるような奴じゃねえ。授業であろうと拘束するためにまずは無力化をはかるような手段をとってきやがる。

だが、俺が望むのはそんなモノじゃねえ。

全てをもって奴をねじ伏せて、理解させてやる。

俺はテメエに——

「オイオイどうしたオーディエンスたち!!? 反応がシビイだぜ!」

プレゼント・マイクのセリフももつともなほど静まり返った場内だが、それも当然と言えば当然。

現在フィールドに立つ片方は先ほどプロも真っ青な戦いを見せ、片方は得体のしれない雰囲気を出すスーツの少年である。

2人に対する期待感、そして不安感が妙な緊張感となり場全体を包み込んでいた。

だが、肝心の2人はそのことを気にしている様子は微塵もない。

爆豪 勝紀は普段の姿からは想像もつかない程静かに対面の彼を見つめ

緑谷 出久はへ緑谷エドモン20%スタイルで合図を待っていた。もうじき、スタートの合図が鳴る。そんな空気の中で、口の端を吊り上げた爆豪が小さく鼻を鳴らす。

「勝利の女神にキスをもらったってか? 鼻の下伸びてんだよクソデ

ク」

未だに先ほどの件が脳裏に残っていたらしい。

「普通の少女に貰った贈り物だ。当然ご利益があるとは思えんが、俺にとつては女神などに貰うより格別にありがたい」

「ッ、・・・そうかよ、足元すくわれねえように鼻の下縮めておけ」

舌打ちした爆豪が、つまらなそうにコンクリートの地面に視線を落とす。

一瞬、無言の間があり、ふいに顔を上げた彼女が

「なあ。俺が勝ったら、来週俺と――」

「じゃあ行くぜえ!!爆豪VS緑谷ア!!――START!!」

かつちゃんの出方なら、必ず速攻を仕掛けてくる。

そう思っていたのだが、何故か顔をしかめたかつちゃんは距離をとるように後方へ跳んだ。

少し予想とは外れたが、汗が出るほど威力を増すスロースターターのかつちゃんに時間を与えるつもりはない。

背中から出るジェット機の噴射のような謎の力で一気に体を射出すれば、前の試合と同じように右手から黒炎を放つことで視界を奪う。

同時に、右側面へ回り込む様にステップを踏み狙うはかつちゃんの真横。

黒炎の壁を突き破るように腕をねじ込み、至近距離から炎を放とうとして

グツ、と手の平が胸元に押し付けられる。

「——読めてんだ……出直して来やがれ!!」

BOOOOM!!

ゼロ距離で起きた爆破に、体が揺れる。

次いで、後方へと吹き飛ばされる感覚が続きようやく自分の体が弾き飛ばされた事に気付いた。

何とか宙で力を放出し姿勢を立て直せば、胸元に出来た焼け焦げた跡と全身に走る痺れるような痛みがダメージの大きさを伝えてくる。完全に無防備な状態で喰らったカウンターだけど、冷静になれば前の試合をかつちゃんだつて見ていたはずだ。

つまり、避けられるのも当然。

それなら——

出力を変える。手袋と、黒いネクタイを着けへ50%スタイルへ移行する。

ギリギリ制御可能な高出力の炎と、柔軟さは少し下がるけど速度の上がった移動。

そして何より

「増えるんだろ。やってみろよ」

やはり、さっきの試合で見られたからか読まれてる。

でも、

さっきは1人。でも、今回は違う。

目では確実に追いきれない動きでかつちゃんの懐へ入り込もうとするが、少しでも移動以外の動きをとると確実に見切られてしまう。僅かにしやがみこむ動きをしただけでかつちゃんの手は既にこちらの頭を捉えている。

思考を加速する。加速した思考が肉体を凌駕する。そして、凌駕した思考に肉体が再び追いつく。

結果、何故か増える。

かつちゃんの背後に2人、本来なら存在しないはずの分身が現れそ

の背中に攻撃を仕掛けようとする。

同時に——こちらの頭部を狙っていたはずのかっちゃんの手が、反対の手と組み合いゆっくりと持ち上げられる。

聞こえるのはどこか苛立ったような、かっちゃんの声。

「だからッ……読んでるって言ってたんだよクソデクがあ!!!!」

勢いよく叩きつけられた両手から、地を割るような爆発が全方位へと放たれる。

分身は掻き消え、残った僕の体は爆破の衝撃とコンクリート片に叩かれ再び吹き飛ぶ。

場外へ跳び出そうになる直前、コンクリートへ足を突き刺すようにして止まり、空になった肺に空気を入れるため荒い息を吐く。

50%状態のため耐えてはいるが、さきほどの状態で受けていたら確実に瀕死の状態に追い込まれていた。

試合開始前の予想通り、かっちゃんの反応速度は速い。だけどそれを差し引いてもあまりに早すぎる。まるで——

「イズク君の動きを見て反応してるわけじゃないな。確実に、読み切っているからこそ超反応が活きている」

「あら轟さん、体はもうよろしいのですか?」

観客席に戻りながら、思わずつぶやくと隣に座っていた黒髪の子が話しかけてきた。

「ああ、もう大丈夫。や……やおやさん」

「惜しい! 八百万ですわ、轟さん。少し憶えにくい苗字ですが、これから憶えていただけると嬉しいです」

「・・・悪いな。大丈夫、もう忘れない」

今まで見てこなかったつけがこれだ。クラスメイトの苗字すらうろ覚えなんて、今まで本当にどうかしていた。

「それより轟ちゃん、読み切ってるってどういうこと？ 爆豪ちゃんってそこまで相手の動きを予想して動くタイプなのかしら」

「読みはするが、最終的にはセンスと反応速度で戦うタイプだが今のカツキの動きは違うと思う。何通りも頭の中で考えているからこそ、超反応がさらに早くなっている。あー・・・うすい、さん」

「ツユちゃんと呼んで。・・・それで、緑谷ちゃんにキスしたのはやっぱりそういうことなのかしら？」

「えっ・・・」

「えー!!? 轟ちゃん緑谷とそんなことしてたの!!」

ツユちゃんが耳元で聞いて来た言葉に、また頬が熱くなってくる。後ろから身を乗り出していた丸顔の女子が低い声を上げて、触覚のある女子がぐいぐいと距離を詰めてくる。

「へー、意外。あんた奥手そうだけど、すごいね。・・・それで、緑谷のどこら辺が良いの？ やっぱ強いトコロとか？」

自分と同じようにやや頬を赤らめながら、平静を装いつつ聞いているイヤホン耳の女子に言われ、口をつぐむ。

もちろん、良い所なんて短い付き合いだけど結構出てくる。

でも、そのなかで選ぶとするなら・・・。

爆音が響くステージへと顔を向ける。

先ほどと展開は変わらない。明らかに動きを読んでいる爆豪が一撃を浴びせ、その予想の域を出られない緑谷が吹き飛ぶ。

変わらない流れに、〈弱い者いじめ〉なんて馬鹿なことを言い始めるヒーローも出始めている。

でも・・・彼の瞳はまだしっかりとカツキの方を見ているのだ。負けそうでも、しっかりと前を向いて。

ワタシが勝手に過去を話した時もそうだった。

あの時も、こんなほとんど話したことも無い相手にも向き合ってくれた。

「大切な時に逃げないで、ちゃんと目を見てくれるところがワタシは大好きだ」

そう自分に確認するように呟いて顔を上げる。

そうしたら、何故か八百万もツユちゃんも、周囲の女子が顔を赤くしていたのが不思議だった。

予想以上のタフネスに、爆撃を食らわせ続けていた右手がビリビリと震えやがる。

それでも、ようやくアイツの体がグラついてきやがった。

「オラ、かかって来いよデク!!もう終わりか!!?」

煽るように口にしながら、次の手を予想する。

何百回も、何千回も脳内でシミュレーションしてきた。

これだけは断言できる。俺以上に、アイツを知っている奴はいねえ。

「・・・どうやら、俺の動きは全て予測されているらしい。この戦いの為、体育祭の中でのデータから考察したのか・・・。いずれにせよ、そこまでお前に評価してもらえていた事は——」

「・・・ああ!!?」

コイツは、いま何を言った。

体育祭? それだけなわけが無えだろうが!!

「大昔からだクソデクツ!!俺はずっとテメエだけを見てきたツ!!テメエがどう考えるかも、動きの癖も、好きな物も嫌いな物もツ、テメエの事ならテメエ以上に分かるんだよ!!」

強く、拳を握る。



コイツが、実は自分自身の自己評価が低い奴だつてことも知っている。

こうして言われて、そこまで俺が見ていた事にだって驚いているはずだ。

「怖気づくなら今の内だ。逃げんならその背中、爆破してやるよ!!」  
言っている自分が良くわかつている。

緑谷 出久は逃げない。力があるが無かろうが変わらない。  
逃げちゃいけない場面では、アイツは

「———ありがとう、かつちゃん」

それこそ大昔。物心ついてすぐ、初めてあつた頃の呼び方で呼ばれて思わず固まる。

目に入るのは、先ほどまでの焦った姿ではなく薄く微笑んだ、でも何かを決めたような姿。

ブワリ、這い出すようにとアイツの体から黒い炎が溢れ出す。

体に纏わりついたそれはマントへと変わり、次いで紫電が全身から放出されていく。

強い気配。先ほどまでの比ではないそれに、観客が騒ぎだしているが俺からすればまだ予想の範囲内。

むしろ

「100%つてヤツだろうが、んなモン昔から見でんだよツ!!」

火力は跳ね上がるが、単調になる動きはむしろ読みやすい。

爆破の勢いで飛び出し、フェイントをかけながら奴の斜め後方から拳を突き入れる。

力に振り回されたアイツではこの程度も防げず———

トンつ、と肘が俺の拳の上を叩いた。それだけで、姿勢が下方へ崩れる。

（ありえねえ!! 精密な動きは出来ねえ筈だツ、だがこれはツ!!）

腰を下ろしたアイツの手の平が静かにこちらの胸に当てられる。

ギョーンツ、と音が聞こえそうなほどに捻られていく奴の足が見えて、次に腰、体幹、それが腕へと伝わり

「ツ——カ、ハッ・・・!!?」

気付けば、仰向けに倒れていた。

頭からつま先まで痺れるような衝撃が駆け抜けて、起きようと体を動かせば強い痛みが襲いかかってくる。

だが、痛みよりも今は

（アイツの動きじゃねえ。まるで映画で見た中国拳法だとか、そんな動きだったツ。力任せじゃあり得ない、そんな・・・）

「闇の復讐鬼ここに参上ツ!! クハハハハッ、・・・主よ、しばし目を瞑ってもらおう!!」

普段とは違う口調のアイツの言葉から情報を得ようと体を起こし耳をすました瞬間、先ほどの流水のような気配から岩を砕く様な激流へと気配が変わる。

反射的に飛び退き

先ほどまで自分が座り込んでいた場所へアイツの拳が突き刺さっていた。

拳の周囲はクレーターの様に窪み、ヒビが飛び退いたこちらの足元まで迫り

「鋭く行こうかツ!!」

何とか、顔を下げ姿勢を深くする。

先ほどまで頭部があつた場所を、轟音を立てながら拳が通過していくのを感じ、全身から嫌な汗が噴き出す。

「重く行かせてもらおうッ!!」

声に何とか反応したところには、次の拳が下から突きあがるように振るわれる。

BOOM!!とカウンターとして爆破をその拳に叩き付けるが、勢いを全く失わないその拳が鼻先をかすめる。

「激しく行くぞッ!!」

ふらりと、拳圧によるめいた体がバランスを崩した瞬間、すでに拳が顔の横へ迫っていた。

何とか左腕を盾にするが、アイツのパワーはそもそも受け止めきれぬモノじゃねえ。

軋む音を立てる腕ごと体が弾き飛ばされ、宙を舞う。

落下し、体が叩きつけられる寸前に爆破により体を浮かせ踏み止まるがダメージの大きさに変わりは無い。

灼熱感のある痛みを伝えてくる腕。それを確かめながら、見つめるのは奴の動き。

(・・・ッ、根本的な、攻撃に移るタイミングは変わっちゃいない。ギリギリ動きについて行けてるのもそのおかげだ。なら・・・何が変わった)

アイツはクソデクだが、なにかイレギュラーが――

緑谷 出久の脳内は圧倒的な情報量に処理の限界を迎え始めていた。

きっかけは、先日の個性に対する考察と、最近の座から来る声の増

加だった。

日々増えていく声、自らの繋いだ座へのパイプは絞っているはずだ。それでも、聞こえる声は増えていく。

つまり、少しずつだが自分の上<sup>キャパシテイ</sup>限が増えてきているのではないかという事。

ならば、余ったスペースへ他の何か・・・例えば座の人たちの思考や力の一端を入れることが出来るのではないか。

『不可能だ。英霊の域に達したスキルや、ましてや宝具など入る余地は無い・・・筈だったが』

彼の中で、同様に荒れ狂う奔流の中に流れる木の葉をすくい上げるように情報を選び取りながら巖窟王は笑みを浮かべる。

予想を裏切る彼の、あの日から変わらない不思議な力にはいつも驚かされると。

『まさか、スキルに至る前の英雄の技術のみを得る、とはな。これなら確かに力自体は少ないが・・・英雄の技術とは数々の経験によつて裏打ちされたものだ。その情報量だけで脳が機能停止する可能性もある』

それでも、彼は選んだ。ならばオレがやることは一つだと彼の共犯者は静かに笑う。

(ッ、読み切れねえ!! 確かに動き始めはクソデクの癖に、そこからコロコロ動きが変わりやがる!!)

顔を狙うように下方から持ち上がってくる膝に、何とか手の平の動きを合わせ爆破。

かろうじて距離をとる。疲労からか、それとも先ほどの一撃のどれかで脳を揺らされたか。

震える体を意思のみで立たせ、相手を見据える。

勝ちたい。そして、それよりも

「——俺は強え。・・・強くなったツ。テメエに食らいつくぐらい強くなったんだよ・・・出久」

あの日、川に落ちた自分に差し伸ばされた手が今さらになって頭にこびりついていることに気付く。

「もう、テメエに助けられるような爆豪勝紀は存在しねえツ!! 後ろじゃねえんだ、俺は、テメエの隣を歩くためにヒーローになるんだよ!!」

ヘドロヴィランの時に実感した。コイツにとって俺はまだ守る相手ではない。

なら、やはりヒーローになるしかない。

(それが俺の——ツ!!)

強い爆音を響かせ、爆速ターボで一気に詰め寄る。  
残る体力は少ない。決めるなら一撃。

身を屈め、彼前で瞬時に起き上がる。

フェイントも混ぜた右拳は、真っ直ぐにデクの顔面へと進んでいく。

同時に、個性を発動させる。

僅かに拳の形を変え、一点突破の指向性を持たせた爆破を放とうとして

彼の右腕が、振り払うようにその拳を受け流す。

大した技術も無いそれと、顔を逸らして何とか避けたその姿を見た瞬間、なぜだかいつものアイツが戻ってきた気がして

強く、拳を握りしめる。自爆を覚悟した一撃を放つ。

ひと際頑丈な手は無事だろうが、余波にさらされる自分の体はダメージをまぬがれることは無いだろう。

だがそれでも、最後までぶつかりたいと考えて

自分の体が、大きな何かに包まれているのを感じた。

それが、いつの間にか自分の背を追いつ越した生意気な幼なじみの腕と体だと気付いて

(・・・また、守られるのかよ。・・・ふざけるな、俺はッ!!)

先ほどのデクの拳により軋む左腕を動かす。激痛が脳へ一直線に伝わるが知った事かと力を込める。

爆破直前の右手の向きを前方へ向けなおし、左手は下から添える。同時に、右手から放たれた爆発は膨れ上がり——左手からの爆破により指向性を与えられる。

上空へ広がるような爆発を見つめながら、力を使い果たした左腕が重力に従い落ちていくのを感じる。

(くそっ・・・あたまが、もう)

溶け落ちていくような思考。その中で、考えるのはただ一つ。負けたくない。

しかし、誰に。何をして。とろけた頭は、一番脳裏に焼き付いている悔しい記憶を提示してくる。

それにぼんやりと従いながら、まだ僅かに力の残っていた右手で目の前にある顔を掴み上を向かせ

その唇の端に、ほんの僅かに自分の唇を触れさせて

「・・・へへッ・・・どうだ、これでおれの勝ちい・・・」

プツリと、完全に意識が途絶えた。

「殺せえええええッ!!あのクソ野郎だけは絶対に殺してやるッ!!」

「あー・・・爆豪君。表彰式だからすこし静かにね」

表彰台の前で、肌に優しい拘束用のテープで縛られたまま暴れる爆豪に対してオールマイトが苦笑する。

だが、彼女が怒っているのも無理はない。

先ほどから

『・・・へッ・・・どうだ、これでおれの勝ちい・・・ブハッ!!なにあれ、あのヴィラン顔でヒロインのつもり!!?』

「――殺す、粉々に砕いて・・・むぐッ!」

物間 寧人が彼女の真似をしているのだ。

再度暴れはじめた爆豪の口へ、謝罪しながらカエル少女が猿ぐつわを噛ませ、元凶の物間はB組の拳藤の手刀により意識を奪われる。

「こほんっ。では表彰に移るんだけど・・・三位の飯田少年は家庭の事情により早退のため・・・二位の常闇少年っ!!」

「いやあ、常闇の黒影凄かったなあ!!まさか緑谷の炎を飲み込んであんな姿になるなんて思わなかったぜ!!」

「緑谷の技も凄かったな。こう、手のひらをぶつけたらあの黒影の巨体がぐわーって吹き飛んでコンクリートの柱にぶつかってさー!」

切島と上鳴が興奮した様子で話す中、オールマイトは常闇の首にメダルをかけその体を優しくグツと一度抱きしめる。

「おめでとう!冷静な判断力と黒影とのコンビネーションは見事だっ

た。ただ！今回学んだだろうけど、個性による力は状況や相手によって良くも悪くも変化する。自力を鍛えて沢を増やすことで君はもっと成長できる」

「・・・御意」

「そして・・・」

表彰台の一番上。

そこに立つ彼に改めてオールマイトは向き直る。

思えば、あのヘドロヴィラン事件から不思議な縁が続いていた。

どれが本当の彼なのか悩んだ時もあったが

「二位おめでとう！緑谷少年。強い個性だけじゃない。君は目の前の相手と常に真摯に向き合い、考え勝利を掴んだ。それだけ強力な個性に溺れない強さが、まさに君の個性だろう。・・・で！君の個性。複雑だけど少しだけ分かってきた気がするよ。なので的外れかもしれないが一つだけアドバイス。人の歴史は力を受け継いできた大きな流れだと捉えられる。決して奪ってきたわけじゃない。脈々と受け継がれる知恵や、この命は先人からつながるバトンってわけさ。だから緑谷少年、君の個性は人が誰でも持つ力がほんの少し大きくなっただけなんだ。・・・難しく考えすぎちゃいけないよ」

「つ・・・ファオール、マイト神父」

予想が正しければ彼は、この自らの身に宿る先代達の想いの何十倍、いやそれ以上の数の意思に今後翻弄されるだろう。

それでも、彼ならば潰れる事無くきつと立派なヒーローになってくれるだろう。

「さて!!では最後に一言！皆さんご唱和ください！セーの———」

「プルス『お疲れさまでした———!!』へローマツ!!」ウルトラじやねえのかよ!!」

「ああ、いや・・・疲れたかと思って・・・ゴメンネ!!」

輝く彼らの未来に、大いに期待して。



「・・・失礼します」

ノックした手が震えている。

あれだけ彼らから勇気をもらったのに、ワタシの臆病さは変わらな  
いらしい。

それでも、踏み出す力の強さと・・・諦めの悪さをあの日確かに知っ  
たんだ。

返事のない扉を、ゆつくりと開ける。

まるで牢獄の扉の様に重く感じるそれをあけ、それでも俯いた顔を  
上げることは出来なくて

ふわりと、懐かしい母の香りが鼻をくすぐった。

頭を撫でてもらったり、膝の上で髪を梳かしてもらった時にかいだ  
匂い。

重かった頭が不思議と、軽くなる。

上げた視線が、同じくこちらを見つめていた母の視線とぶつかる。

あの時のような怯えた目では無くて、映っているのは悲しみと強い  
後悔の色。

「つ・・・ごめ、んなさい。焦子、私・・・ずっとあなたに――」

「お母さん」

ちがうんだ。ワタシも謝りたいけど、今日したいのは別の話。

「・・・お母さんワタシ、好きな人と大切な友達が出来たんだ」

再会の日ぐらい、楽しい話がいい。彼のように、彼女のようにしつかりと母と向き合ってワタシは笑うことができていた。

パパと呼んで

「ヒーロー名」

「くはははっ!!」

「ちがうよ!! くははははははははつ !! だよっ」

「違うぞ幼子よ。俺が来たと知らしめるように、口角を上げ笑うとい  
い・・・クハハハハハハハッ!!」

全力で防犯ブザーを鳴らされている幼馴染みの姿を朝から見つけてしまった。

どうだガキども、近くで見ると完全に不審者だろソイツ。

どうも昨日の体育祭の映像をテレビで見ている者は多かったよう  
だ。

たまたま・・・偶然、朝ぼつたりと出会ったためにコイツと歩くはめとなったが、これまで何度も声をかけられている。

だいたいはいコイツに対する称賛で、次に多いのが同年代の女子による俺たちの関係性の追求だ。

こういう奴らは中学のころからいたため気にもならず、あの時の映像の事だからかってくる奴には殺気を送りつけてやる。

あれは酸欠とスタミナ切れで意識がもうろうとしたためおきた事故であつて、なんの意思も絡んでいやしねえ。

それに、唇が直接触れた感触も無ければテレビの映像でも触れた様子  
子は映っていないかった。

だからあれはただの頭突きだった、ただそれだけ。

流れるデマに苛立ちながら、デクが開けた教室の扉から入り

「オイ見てみろよ！ 観客がとった写真らしいがコレ完全に唇が――」

「あああああああッ！！！！」

何かの紙を手を持ち、クラスメイトの中心にいた上鳴の後頭部へ右膝を打ち込む。

ほどほどの怪我を負うようになってなんとか手加減はした。それよりも、と写真を見て――

瞬時に爆破ッ。

・・・端だけ。

再度見る。

再び少し爆破。

見つめる。

これは・・・だが、

「なんだよバクゴツパイ。そんなに自分のキスシーンが――

――」「あああああああああ!!」

聞こえた声に対し、反射的に手の中の物を爆破しちまった。あとに残ったのは消し炭と、そしてなんだか妙な悲しさ。

「あとお前、なんで急にスカート短くして――」

声も出なかった。鈍感なアイツはスカートに気付いていなかっただろうが、いまの言葉は確かに聞こえたに違いない。

少し高いその顔を見上げれば、スカートをみていて慌てて上がってきた視線とぶつかって――

「なんでこんな死屍累々なの」

相澤がクラスを見渡して、最初に出た感想はそれだった。

普段であればチャイムと同時にしっかり席についているはずだが、白目をむいた上鳴は雑に椅子に座らされており、峰田は同じように雑

に座らされたうえに頭部のモギモギが千切られ、断面が生えない様に焼かれ不気味に痙攣している。

その近くでは、あの爆豪が机に突っ伏しておりその周りをクラスメイトの女性陣が固めて思い思いの励ましをかけている。

そして、普段であればこの状態にたいして黙っているはずのない飯田が、まるで気付いていないかのように机を見つめていて――

「……というわけで、今日はコードネーム『ヒーロー名の考案』をするぞ」

このまま始めるのかよ、と切島は思わず叫びそうになるがギリギリで踏み止まる。

改めて考えるとどう考えてもこの状況、簡単に収拾はつかないのだから自然に収まるのを待つのも得策なのかもしれないと考えなおして

「先日の体育祭を踏まえてプロからのドラフト指名が届いている。まあ、これは興味の段階で、もし興味が薄れたら卒業までにキャンセルも当然あり得る」

「で、指名が大まかにこんな感じなんだが……まあ派手さもあつてかけっこう片寄ったな。緑谷4096、轟4017、爆豪3922、常闇1941であとはまあ三桁、二桁、一桁と」

「この候補の中から職場体験に行ってもらう。そのためのヒーロー名でもあり」

「同時に世間に認知されるためにとっても大切なものでもあるのよ。だから皆、慎重につけること!!」

突如入ってきたミットナイトの気配に、まずは峰田がビクリと体を起こす。

当然、激痛に悶えはじめるが心配するものは誰もおらず。

「名は体を表す。将来のイメージを固めるためにもしっかり考えろ」

15分後。最初は大喜利のようなヒーローネームがあがっていたものの、カエル少女フロッピーのおかげで空気はなんとか修正された。

それぞれ個性的なヒーロー名が続々と出る中で、跳び起きた上鳴があわてて爆豪へ謝ったり、轟が

「ヘショークコでいい」

「名前!!いいの!?!」

「苗字は緑谷に変わる予定だから、世間が混乱するとまずい」

「ええー・・・」

ギャグなのか分からない事を言い始める一コマが有ったりしたが、残るは三人。

話しかけにくい雰囲気飯田と、顔を伏せた爆豪。

「・・・爆砕鬼」

「それは誰が聞いてもヴィランの名前だと思うわね」

そして、クラスの視線が集まるのはいろいろな意味で目立つ彼。

無言で動きを止めていた彼が、ようやくゆつくりとペンを動かす。

「やっぱり復讐鬼とか、エドモンとかか緑谷?」

思い当たる候補を切島が聞いてみるが、本人は小さく首を振る。

「それは・・・俺を表す言葉では無い。彼だけのものだ」

先日のオールマイトの言葉で、緑谷 出久は考えていた。

この力はどうして自分に生まれたのだろうか。

そして、これからの自分の夢を表す名前は何か良いのだろうか。

（人の歴史は受け継がれて、今に繋がる。過去に名前も知らない誰かが歴史をつないで、今ここに俺―ぼく―が居る。なら・・・）

「――〈コネクト〉。過去の英雄が繋いだボタンを、俺が受け継ぎ……そして次の世代へ繋ぐ。それが俺の今の想いだ」

ありきたりかもしれない。

ただの場つなぎヒーローみたいな名前だな、と取られかねないのも分かってる。でも

「いいな、それ!!緑谷らしいんじゃないか」

「そうですね。攻撃に向けた個性ばかり注目されていますが、意外と温和な行動はクラスを繋ぐ役割も担っています」

(切島君っ、八百万さん……!!)

この鉄面皮でなければ確実に目からスプラッシュしていた。

そしてその後ろ。

クラスの皆が好意的に、だが少し茶化すように緑谷に話しかける中で

飯田だけが、じつと静かに机を見つめていた。

# 「職場体験」

「――で、グラントリノって奴の事務所はここか？ どう見ても廃墟じゃねえか!!」

「オーファリアマイト神父の書いた住所が正しいければここだ。何にせよ、確認しなければ真実は謎のままだ」

あのヒーロー名を決めた日。僕とかっちゃんはオールマイトに呼ばれた。

オールマイトが口にしたのは、相澤先生からも説明のあった職場体験、その推薦についてで。

『緑谷君の移動手段は不思議な力の噴出だね。それなら私の担任だった方が同じような個性でね、きっと君の力の制御のためになるはずだよ。・・・かなりキツイけど』

『俺は、なんで呼ばれたんだ』

『その方が爆豪君もぜびってね。今後、誰かの隣に居たいなら教えられることがある。そう言ってらっしゃった』

なんだかオールマイトらしくない、どこか怯えた様子であつたことは気になるが・・・オールマイトの先生と聞いて興奮しない訳が無い。すぐさま頷いて了承し――

改めて、廃墟のような建物に付いたドアノブを捻り、勢いよくドアを開ければ

――視界に入るのは赤い何かとその中心に倒れる小さな人影。思わず、一步後ろへ後退し

「生きとる!!」

ガバリと起き上がったその老人の姿にかっちゃんの大きな舌打ちが響いて



僕は今、その老人―グラントリノ―の足によって地面に縫い付けられていた。

100%の状態を表すように全身からは紫電が舞い散り、力もスピードも明らかにグラントリノに勝っているのに、何度足搔いても気付けばその足の下に居る。

「アイツから個性の特徴は聞いておる。確かに力の制御は出来ていない。その原因はいくつかあるが。まず、単純に目が追いついていない。目を閉じながら全力で走ってるようなもんだアな。数日間俺の動きに慣れれば、アレだ60%とやらは制御できるだろうさ」

次にちらりと視線を向けた先には、壁にもたれかかり先ほど蹴られた腹部を押さえながらグラントリノを睨むかつちゃんの姿。

「嬢ちゃんの方は逆だな。目も反応も良すぎてそれ以外がおろそかだ。小僧ぐらい小賢しく考えて予測した方がその反応の速さも生かせるだろうよ。コイツと俺の動きを見て、その先を予測し続けろ」

じゃあ、後片付けはお願いね、と笑いながら出ていったグラントリノを爆散させるために駆け出そうとするかっちゃんを羽交い締めにするのが一番大変だった。

## 2日目。

俺はクソデクとスーパーに夕飯の買い出しに出ていた。

泊まるホテルは部屋は当然違うが一緒に、食事はあのジジイの家で食べるようになってる。

いつもの制服で出てきたが、隣のデクがすでに目立っているためよ

けいに視線を集めている気がする。

「しかし、適切な指導と言えるだろう。合理的とも言っている。確かに体の手綱を握れてきている」

「俺はテメエ等の動きを見て、たまに参加するだけじゃねえか。クソつまらねえ」

だが、確かに頭に考える癖がつき始めているのも事実だ。

たまに入る手合わせも、見る前に手がすでに相手を捉えている事が増えている。

腹立たしいが、確実に戦いの中での選択肢が増えているのを感じている状態で。

「おい、そっちはスジが多い。それも脂身が多すぎるだろうが。・・・コレと、コレだ」

なぜか微妙な肉ばかり選ぶヤツにため息をつき、良さそうな物を選ぶ。

ついでに野菜と、明日の朝食用に卵も買ってスーパーを出る。

さりげなく、大きいほうの買い物袋を取られたため軽くにらみながら小さいほうの袋を持ちヤツの横を歩きはじめて

「家では料理をするのか、メルセデス」

「あ？　うちのババアがうるせえからやつてるだけだ、そんなに大したモノは作れねえよ」

なにがいつか男の胃袋を掴む時が来るから、だあのクソババア。

んな時は一生来ねえよ。

「良い妻になりそうだな」

B O O M！　と買い物袋を持つ右手と反対、左手の中で小さく爆発が起きる。

誰がテメエの妻になんかなるか、クソデク。

急に何を言い始めたかと思えば、訳わかんねえこと言いやがって。

「・・・死ねッ」

思ったよりも声は出ず、それを掻き消すように帰り道に小さな爆発音が響き続けていた。

3日目。唐突に、グラントリノが僕たちにヴィラン退治に行くと言った。

職場見学である以上、付いて行く形になるのは当然で

「で、行き先はどこだよ？」

「夜の渋谷だ。小競り合いが多くていい経験になる」

「んな楽しそうに言う話じゃねえだろうが。・・・おいクソデク、スマホ光ってんぞ」

渋谷へ向かう新幹線の中で、二人の話を聞いていればかつちゃんに言われて初めてメッセージが来ている事に気付く。

相手は、麗日さん。内容は

（飯田君と連絡がとれない・・・？たしか、飯田君の職場見学先は——）

そこまで考えた所で

破碎音と、甲高い悲鳴が辺りに響き渡る。

反射的に横に座るかっちゃんのを支えながら、音源に目を向ければ

ヒーローと思われるコスチュームの男性が、なぎ倒された椅子にもたれるように倒れている光景が見えた。

だが、重要なのはその彼の目の前。

新幹線の側面、突き破られたかのようにぽっかりと空いた穴に手をかけているのは確かに以前見たことのある脳を剥きだしたような独

特のフォルム。

気味が悪いほどに細い四肢など以前みた存在とは違う点はあるものの、アレは

「脳無ッ……。他にもあのような姿にされた者が居たとはな」

「知ってんのか、小僧!!? まあいい、お前らはここに居ろッ!!」

グッ、と膝を曲げたグラントリノが弾丸の様に脳無の体へと突き刺さり、そのまま新幹線の外へと押し戻す。

「ッ、居ろって言われて黙ってられるかよ。見てみる、デク……。何が起きてんだ、こりゃ」

あのかっちゃん、困惑するのも分かる。

大穴から見える外の景色は、昼間なのに赤く染まり町のあちこちで火の手が上がっている。

だが、それだけじゃない。

「破砕音に、怒号。何者かが暴れているな。……。メルセデスよ、俺は引つかかることが」

「……。ああ!!? さっきの電話が関係してんだろ。テメエだけじゃ道すらまともに聞けねえだろ不審者!! 行くなら早く行くぞ!!」

駆けだそうとした肩を、ガシリとかっちゃんに掴まれる。

完全に動きを先読みされているのは、グラントリノの指導のおかげだろうか。

「……。俊足のランサーが、兄の敵であるバーサーカーを追っている可能性が高い。この異常事態だ、無関係とは到底思えん」

「あのメガネ野郎、ヒーロー殺しを追ってやがったのか。……。で、テメエはそれを見つけてどうすんだよ。私怨で動いてる奴なんてまともな説得に応じるとは思えねえが」

「止める。どれだけ俺を恨もうが知った事か。友が犯罪者として裁かれる方が俺にとって最上の苦痛だ」

絶対に、止める。

かっちゃんが、こちらの顔をまじまじと見つめて……。すぐに大きくため息をつく。

「なら急げ。オラ、さっさとあそこから行くぞ」

大穴を指さし、やはりついてくるつもりのかっちゃん。

昔から決めたことを曲げたことは無いのだ。それに時間も惜しい。

「——ああ、時は俺たちの歩みを待つてはくれない。故に」

「っ、テメエ何して・・・!!?」

かっちゃんを抱きかかえて、大穴から飛び出す。

背中から力を噴出し、一気にトップスピードへ乗ってしまえば急に静かになった幼馴染を気にしながら近くのビルの屋上へとまずは駆け上って

（『ん?・・・おおっと!　ようやく流していた一部がつながった!」

あのダンテス君の検閲を潜り抜けるために数千のダミーを流した涙ぐましい努力が実をむすんだようだね。・・・まあそれはさておきっ、キミに少しばかり耳寄りな提案があるのだよ』

いつも嫌なタイミングであまり役に立たない情報をくれるおじさんの声が脳裏に響いた。

（『意外と辛口だねキミ?　・・・コホンッ、とにかく提案だ。キミが接続内の余剰スペースから技術を受け取っていた時に私は良い事か悪い事かについてネ。技術は知識。つまり私のこの犯罪者心理学の知識や無数の犯罪データや、あとオマケに思考もキミは取り込めるのではないかな?　それがあれば君の友達を助ける事にも役立つと思うんだが』

どうだろうかと、聞く声からは悪意は感じないし特にこちらにデメリットがある訳でもない。

確かに助かるけど、少し気になる。

そんな知識があるってことはこの人は探偵か何かなのだろうか。

「(はっはっは!!・・・ああ・・・とても近くとても遠いモノだよ)」

ヒーロー殺し、ステインは足と刀で地面に縫い付けている子供への興味が急激に薄らいでいくのを感じていた。

先に一人の贗物へニセモノにとどめを刺そうとしていた己のみを見つめ、怨嗟の言葉を吐き続ける姿はまさにヒーロー社会が偽物を生み続けているという証明でしかない。

「兄さんは多くの人を助け導いてきた・・・立派なヒーローなんだ!!」

(故に、お前のような勘違いした贗物が生まれ続ける)

「僕に夢を抱かせてくれた立派なヒーローなんだ!!」

(お前の存在が、お前を作り出した奴の罪を浮き彫りにする。その証明が――)

「殺してやるッ!!」「あいつをまず助けろよ」

(不殺。ヒーローの原則すら守れない形だけの贗物)

「自らを顧みず他を救い出せ。己の為に力を振るうな。目先の憎しみに捉われ私欲を満たそうなど、ヒーローから最も遠い行いだ・・・ハア・・・」

(やはり、誰かが正さなければならぬ。この歪んだ世界を)

刀を抜き取り、付着した血液を舐めとる。

個性へ血液凝固により体の動きを奪われた足元の存在へ突き刺す

ため、その頭部へとゆつくりと確実に狙いを合わせる。

「じゃあな、正しき社会への供物」

「黙れ!!」

未だ生き汚い存在に眉をひそめ構わず刀を地面へ突き出す。

「・・・黙れ!!何を言ったってお前は兄を傷つけた犯罪者だ!!」

その頭部へ、髪へ刃先が触れて

「——イヤイヤ全くその通りだよキミイ。下手なりに論点をずらしちやいるけど、犯罪者なのは事実だよネー」

全身に、震えが走った。

振り下ろした筈の右手が止まり、まるで蜘蛛の糸に絡めとられたかの様に全身が硬直する。

「・・・何モノだ? その気配・・・ハア・・・ヒーローではないな」  
薄暗い路地裏の先から、カツツカツツと硬質な物で地面を突く様な音が近づいてくる。

同時に、全身に纏わりつく怖気が走るような感覚も増し——  
「・・・そう身構えず安心したまえ! ただのちよい悪のアラフィ・・・  
ピチピチのティーンエイジャーだよ私は!」

見えたのは、前髪をかき上げたような髪型の眼鏡をかけた少年。  
その左手には鉛色の杖を携えている。

背後に目つきの悪い女もついてきているが、この気配はあの少年で間違いない。

刀をゆつくりと上げ、足元の贋物を壁際へと蹴り飛ばす。

苦悶の声を上げるそれを人質などにするつもりは無いが、とどめを刺そうとすれば目の前のコイツが何をするか分からない。

それほどに、得体のしれない

「——ふむ、拘束系のコセイだねキミ。可哀想に、痛みに悶える人体の正常な反応すら出来てないじゃないか。それと、彼をずいぶん嫌っていたようだが、その刀には一部血が拭き取られたような跡があるね。ケガ一つ無さそうなキミの口には血がついているし……嫌いな相手の血を舐めるなんておかしいナ——」

（コイツは——ッ）

短刀を放つ。

頭部ではなく確実に当てるため人体のど真ん中に1本。

同時に走り出し、3度フェイントをかけて刀を振りかぶり——

「太刀筋はさらにフェイントを加えて左から右斜め上だね。躲されても返す刀で頭部を狙う……。イヤイヤ!! 実に洗練されていて理に適いすぎているネ!!」

くると回した杖がナイフの側面を撫でるように弾き飛ばすのが見えた。

合計4度のフェイントを交えた斬撃は、杖の持ち手に引っ掛けるようにして巻き取られ、刀は少年の後方へ弾き飛ばされてしまう。

「あと、先輩として言いたいんだが犯行現場はもう少しひねった方がいい。路地裏での6割の犯行は本命で、残りは路地裏から意識を逸らす意図と、アピールの為に見つかりやすい場所で犯行を行う。これじゃその他の場所でヤツちやった次は静かな路地裏でやりますと言っているようなものだよキミ。後は外で暴れてる奴らが騒いでくれているから、それでも人が来ない場所を絞って探せばいい」

強く舌打ちし、改めて距離を取る。

意図が読めない。なぜ攻撃をしてこない。

そもそもコイツは何をしに来た。

「……解せんな。お前のような人間がこの場へ来る理由が無い」

「何しろ契約だからネ。ほっほっほ、だいぶ端折ったけど思考を流し込んで意思を乗っ取る代わりにキミの友達を助ける知識をあげよう、という両者合意の上のホワイトな大人の契約だ」

「……なに? それはどう——」



閃光、そして爆発音。

ヤツがまた何かをしたのかと身構え、肩に差したサバイバルナイフを抜き取り目を細め

「オイ。・・・今のはどういう意味だ？ 思考をトレースしているだけじゃなかったのか・・・」

「あー・・・実際になぞってる訳だし、トレースするのが誰かなんて聞かれなかったから——」

少女の拳が、少年の頬へと叩きつけられ同時に爆炎があがる。

「オイオイ、キミのボーイフレンドの体じゃないか!! 大事にしなきゃいけないと私は思うナー!!?」

バランスを崩し、壁際に背中を着けた少年が先ほどまでの気配が嘘のように顔を青ざめさせる。

それでも、無言で詰め寄った少女が容赦なく左右フック、ボディブロー、下がった頭部へと膝蹴り。跳ね上がった顔面へを爆破を加えていけば次第に体から力が抜けていき

「・・・返せ。・・・俺の出久を早く、返せ」

「ふむ。・・・だが契約が——」

俯いていた少女が顔を上げる。

その両眼からは涙が流れ落ち、口元は強く噛み締められている。が、

（下らん。事情は分かんが・・・あの少年の気配からして、中に居るものは生まれながらのヴィラン。情に訴えかけるなど何の意味もない）

虚を突かれたように目を開けた少年が、じっと少女の顔を見つめる。

まるで、すでに解いていた筈の計算の答えの間違いを知らされた時のように。

その式が、自らの全く知らない式だったかのような、そんな

「・・・少しばかり計算外だった。キミは確かに涙を溜める姿は見せていたが、人前で恥も外聞もなく涙を流すタイプには見えなかったが」  
少年の口元が、弧を描くように少し笑ったように見えた。

「ならばキミも契約するといい。対価として彼を返そうじゃないか!!」

「っ、・・・構わねえ。悪魔みてえなテメエなら、寿命でも持つていくか・・・!!? 構わねえから、アイツを」

(交渉に持ち込んだか。抜け目のない奴だ、あの少女から暴利な対価をもらい結局は奴が一人勝ちをするシステム。あとは見るまでもない。油断しているうちにこの茶番を――)

「ではへパパ、私の好きな人を助けて!!」と思春期の気難しい娘が久しぶりに助けを求めてきたかのように言ってもらおう!!」

(なん・・・だと・・・!!?)

予想外過ぎて、思わず後退ってしまう。

少女もあまりに衝撃を受けたのか完全に動きを止めてしまっている。

「格安だよキミイ!!早く言うんだ、愛しの彼がどんどん消えていってしまうよ?」

「あ・・・あああッ!!?言えるかクソが!!・・・だが、ああああああ!!」

頭を掻き毟る少女と、ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべる少年。

しかし、先に少女が覚悟を決めたかのように頭を上げ

「ぱ・・・・・・・・ぱぱっ、私のッ」

「ダメだナー。もっと可愛さが必要だ」

「ツ……パパっ、わたしのすすすツ……」

「こっちは頼まれたから契約してあげるんじゃないか。心を込めてほしいものだネ!!」

「——パパっ、わたしの……好きな人を、助けてっ」

「おおおおおおうけいけい!!! グーだよキミ、赤い顔もいいアドリブじゃないか!! よーし、パパ張り切っちゃうぞー! 具体的には力の流れるパイプを安全な設計で拡張・補強して、ついでに網をかけて必要な情報をエドモン君が取捨選択しやすいようにもしてあげよう!!」

（気配が、消えていく。あの濃密な、吐き気をもよおすような悪がまるで霧のように霞み、薄れて——）

「……なぜだ!!? なぜお前のような奴がああ程度で情に流された! 俺は知っている、お前のような奴は決して……ッ」

「君みたいに計算通りじゃないからさ。どれだけ取り繕っても人を殺害する、傷つけるといった結末に収束する私たちとは違う。私に無い、予想を外れた思考が、ただ単に私にとって価値があったというだけの事」

こちらを、まるで興味のない目で見つめる彼。

眼鏡と杖が不意に青い蝶の群れへと変わり、空気に溶けるように姿を薄れさせていく。

「……とくに、この体の彼は面白いぞ。予想外とはどんな形であれ胸躍るものだ」

静かにまぶたを閉じた少年の体から、渦を巻くように黒炎が巻き上がる。

意思を持つようにまとわりつく炎は、黒い手袋、帽子、マントと順

に形を整えていき

ゆつくりと、目を開く。

その瞳は、目の前で呆然と見上げる少女をまず映し、その耳元で何かを口にする。

頷く少女の盾となるように、体の向きを変えこちらへ向き合った少年の瞳とようやくこちらの瞳が交差して

「ハア．．．なるほど、．．．確かに予想外とは面白い」

あの悪魔が宿った少年が、なぜこんな瞳をしているのか。

音を立てず、こちらへ歩きながら距離を詰めてくる少年にこちらも距離を詰めるため歩みを始める。

あと10m。

7m。

3m。

「——俺だけを見ろ。お前には最早誰の涙も流させるつもりはない」

口の端がまるで裂けたかのように、笑みが広がっていくのを止めることは出来なかった。

## 紅い拳

「ヒーロー殺し」

〈ヒーロー殺しステイン〉。

本名、赤黒 血染はオールマイトに感銘を受けヒーローを志した。  
しかし、ヒーロー科高校へ入学し一年で退学。

その理由は〈教育体制から見えるヒーロー感の根本的腐敗〉。

ヒーローとは見返りを求めず、自己犠牲の果てに得る称号であるべきという思想。

故に、彼は世に蔓延する贗物を粛清し正しい社会を取り戻すために動き続けていた。

「ハア・・・、挑発はもう少し上手くやると良い。・・・飛び道具で奴らを殺させないための配慮だろうが、それは的外れだ」

奴らはこの手で確実に息の根を止める。

社会のガンを万が一にも生き残らせてはいけない。

「・・・お前は殺さん。似ても似つかないが・・・しかしそれでもどこか似ている・・・」

〈私が来た!!〉〈俺を見ろ!!〉〈もう大丈夫だ!!〉〈最早誰の涙も流させるつもりは無い〉

コイツが放った言葉は周囲の足手まといへ俺が攻撃を加えないための挑発。

そして、周囲の者を安堵させるための言葉。

無謀だろうと、見栄だろうとヒーローは常に傷つく者の前に立ち、その姿を見せなければならぬ。

極限の状態で試される自己犠牲、それが

「っ、緑谷君!!なぜ来た!!?君には関係ないだろ!」

(贗物には出来ない。お前の出来る最善は己の舌を噛み切り、俺が居

る理由を一つでも消す事だ)

「好きに言うの良い。……元より、呼ばれたから来たという訳でもない。構うものか」

(関係があるから、友人だから、家族だから助けるだと。それこそが偽り)

「俺がこの場に居るのは、俺の意思だ。それに従い体が動いた以上、止まるつもりは無い」

(ヒーローは助ける。罵倒されようが、無視されようが、親の仇であるうが、助けたいと思いが肉体が飛び越える)

グツ、と手に持ったサバイバルナイフの刃先を僅かに動かす。

あの贋物にその刃先が向いただけで

(故に、簡単に釣れる)

少年の姿が、掻き消える。

反射的に一歩引いたところで、足元から突き上げるように放たれた黒い右腕が顔先をかすめる。

(この程度を読めないという事は……先ほどの悪魔が出ていったのは本当のようだな……)

わざと薄皮一枚で擦らせ、一気に体を前に倒せば視界に入るのは防御の薄い腹部。

右手に持ったサバイバルナイフを左方向へ一閃し――

「ツ……ハア、まだ居るのか?」

こちらの手首を押さえつける少年の左腕。攻撃を誘導されたことに気付いた時には

引き戻された右肘が容赦なく側頭部へ突き刺さる。

ぐらりと揺れる視界。だが、こちらも首に力を込め固めたことで脳自体への衝撃は減らしている。

掴まれたままの左腕の服のそこから小さなナイフを落とす。パチンツと開いたそれを少年の手首へと突き立て――

ようやく、溢れた血液。

痛みに怯んだ隙に蹴りを少年の脇腹に叩き込もうと、笑みを深め

「ッ、な・・・!!？」

痛みなど感じないかのように、硬く握られた拳がすでに眼前に迫っていた。

ナイフを突き刺した腕は、こちらを逃がさないよう万力のように強く握り絞め

今度こそ、脳が揺れる。

勢いよく後方へ吹き飛んだ体は、受け身を取る前に地面へと衝突し強い痛みを伝えてくる。

スパイクの付いた靴で地面を削るように、勢いを殺し姿勢を直すが揺れた視界はまだ回復にしばらくかかりそうだ。

（・・・釣りに気付いていた。だが、隠しナイフには気付かず刺された。この違いは・・・）

痛みの刺激を送らない左腕に力を入れる。

痛みが遮断されたのみで、その他の感覚はしっかりと残っており動かすぶんには問題はなさそうだ。

というよりも。

グツ、と刺された傷口の上に残っていた血液を拭えば、すでにそこには僅かな痕しか残っていない。

（・・・流れた血が固まるより早いって、どういう事なんだろう）

自分の体の変化に改めて寒気を憶えつつ、意識を切り替える。

あのおじさんが残してくれた知識はとても役立っているが、それでも万能という訳ではない。

（知識だけなんだ。今は動きを見てから辞書を引いているようなものの。見えない事には対処法が出せない）

自分のものに出来ていないのだ。

その事に気付かれる前に、早くけりをつけなければ

そう考えた矢先

「血を出して焦らないという事は、・・・ハア・・・悪魔が憑いていた間の記憶は朧げか・・・それが全く無いようだな」

ナイフに付いた血を、ヒーロー殺しが舐めとろうと口を開く。

その動作に脳内の辞書が答えを出す、蹴り飛ばした距離が開きすぎていたために間に合わない。

それでも、足掻くように歩を進め

舌が血液に触れた瞬間、まさに身が凍るような寒気が全身を駆け抜けた。

四肢から、力が抜ける。

いつの間にか両膝が地面へ着き、体は緩慢な動きで前方へ倒れていく。

そこへ、ヒーロー殺しが迫る。

血に濡れたナイフを構え、こちらの体へ突き立てようとその腕を伸ばし――



「おまえは・・・なにをしている?」

凍えるような冷めた声。

背後から響いたその声ではなく、迫る圧倒的な熱量に反射的に横へ飛び退く。

すでに先ほど立っていた場所は白炎に飲み込まれ、どれほどの温度なのか周囲の壁や床は音を立てて溶け始めている。

声のした方向へ振り向くと同時に、視界に入った白い輝きに全力で体を捻る。

のたうつ白蛇のような炎が頬を掠め、嫌な音をたてながら焼き干切っていく。

「ワタシのイズクに・・・なにをした?」

激痛に表情をしかめながらも、ようやく視界に入れた存在に目を凝らす。

暗い路地の先が、徐々に明るさを増していた。

原因は、青白い火の粉を散らしながらこちらへ歩みを進める少女。完全に瞳孔が開き切ったその瞳を限界まで開き、こちらを見据えるその姿に一瞬だが意識が逸れて

「俺を無視すんじゃないぞッ、長舌男!!」

上から降ってきた影が、鋭い蹴りをナイフを持っていた手へと叩きつける。

手から離れていくナイフからすぐに思考を切り替え、サバイバルナイフを構えれば

影・・・先ほど少年の陰に居た少女が、両手をすでに構えており

爆音。そして爆炎。

ステインの体を包み込むような爆発に、——爆豪は確かな手ごたえを感じる。

それでも、手は緩めない。

後方で血を流す少年の為にも、このまま路地から吹き飛ばしてやろうとばかりに、再度爆破を放ち

「カツキツ、下ッ!!」

トカゲのように、地面に這いつくばるように身を伏せていたステインが爆破の途切れた一瞬を突いて立ち上がる。

サバイバルナイフが少女の顔面を狙い・・・ギリギリ首を傾けてかわしたその頬から鮮血が舞う。

素早くナイフに付いた血液をステインが舐めとろうと腕を動かせば

跳んできた氷弾がその手を打ち据える。

手元から離れたナイフを爆豪が蹴り飛ばし――――炎を操っていた乱入者、轟の方へと距離を取りなおす。

横へ並び、お互いの状態を視線で確認しあいながらまず出るのは当然の質問。

「それで・・・イズク君がああなっているのはなぜだ？」

「ああ・・・血を舐めたら固まるんだとよ。やられる前に乱入したかったがあの野郎、まるで隙がねえ」

悔し気に俯く爆豪を見つめる轟。

未だに瞳孔が開いたその瞳は虚偽は許さないと訴え

「・・・なら、早く奴を片付けるぞ。起きたらイズク君とちゃんと話して」

「分かった。その・・・なんだ。あり・・・がとう、な」

謝れと、そう言われただけでなんとなく自分を理解して言ってくれた気がした。

誤魔化すように、片手を振り小さな爆発を起こしながらヒーロー殺しを見つめる爆豪の横顔へ、しかし視線は未だ突き刺さる。

なんだ、と眉を寄せて横を向けば

「よし・・・コンビネーションで行くぞ」

なにを言っているのだコイツはと、爆豪が目丸くしている間に、言いたいことは言ったとばかりに駆け出す轟。

「はあ!!?なに言ってるんだテメエ、やったこともねえのに合わせられるわけがねえだろうが!!」

訳が分からないとばかりに牙を剥きながら、その背中を一步遅れて追いかける爆豪。

それでも、確信したように

「絶対に合う。・・・ワタシ達だからこそ」

白い炎を左手に纏わせながら、少女は笑った。

即席のコンビネーションという言葉に、すでに興味を失いかけていたステインの瞳が暗く陰る。

先ほどまでのやり取りで、あの2人が贗物だと確信していたがその未熟さにもはや見る価値など微塵もありはしない。

強力だが、それ故に大雑把になりやすい炎。

至近距離でなければ破壊力の低い爆破。

いずれも、未熟な今なら確実に一匹ずつ刈り取れる。

グッ、と身を屈め駆け出す。

まずは一匹。前に行く炎の少女へ狙いを定め、その足を止めるため

のナイフを放とうと懐へ手を入れ

白い炎の壁。

視界を、白い炎が遮断する。

そこへ楽し気に、高らかに赤白の髪の少女の声が響く。

「クハハハハハハハハハッ!! 我が憤怒の炎、歩みを止めぬのは我が共犯者のみ!」

(ツ・・・暗号か?)

意味の分からない単語。

しかし、それが何らかの暗号だと判断し前方に立ち昇る炎の壁へと注意を向けなおし

その壁から、鋭い氷の槍が突き出される。

熱に炙られ、光り輝くそれが体へ迫り

(・・・氷も使えるのか。・・・つまり、これが歩みを止めない共犯者)ならば、とても下らない策だった。

注意を向けていた分、避けることは簡単。

体を回すように、その槍を十分な余裕をもってかわし――

横から炎を突き破るように現れた少女の手の平が眼前に突き付けられた。

「よう。・・・とりあえず死ね!!」

ギラギラと輝く瞳がこちらを射抜き、眼前で爆炎が巻き起こった。

焦げ付く臭いと、灼熱感が駆け巡る顔面。

だが、ギリギリで頭を引き回避は間に合った。

腹部に力を込め、左足を地面に突き立てるように踏み出し背後に倒れかけていた体を無理やり起こす。

眼前の少女はすでに爆破により姿勢を崩している。  
無防備な腹へ、スパイクの付いた右の蹴りを振るい

「く・・・うう。く、はははははッ!! 厚い壁を砕くように、我が道は破壊によって続いていくッ」

何故か羞恥を耐えるような表情の少女が小さく跳ね、奇妙な笑い声をあげ再度爆破を行う。

放った蹴りは、爆破の勢いでゴロゴロと後方へ転がっていく少女の髪を数本奪ったのみ。

姿勢を崩した今が好機と距離を詰めるが

間を遮るように、氷の壁が姿を現す。

恐らく、壁の向こうで既に姿勢を立て直されている事に舌打ちしながら壁を砕くためにサバイバルナイフを突き立てようとして

氷の先で、赤い輝きが明滅していることに気付き――

(ッ・・・クソッ!!)

爆破。

砕け散った氷が、散弾のように体中へ叩きつけられる。

氷塊が砕け散る音と共に、体の内からも何かが碎けるような音が響き渡った。

視界の先、仰向けに倒れたヒーロー殺しが完全に動きを止めたこと

を確認し爆豪はようやく溜めに溜めていた息を吐きだす。

あのような恥ずかしい事をさせられたせいなのか、それとも戦いによる高揚感の為か赤くなった頬をパタパタと手で仰ぎながら、ジトリとした目を轟へ向けて

「・・・何か言う事はねえか？」

満足そうに笑っているその顔に問いかける。

きよとんとした顔の轟が首を傾げてしばし考え込めば、ようやく氣付いた様子で

「イズク君なら憤怒じゃなく、怨嗟だった。ワタシもまだまだ観察が足りないな」

やはり週6日に減らしたのが間違いだったかと眉を寄せている少女を、一度怒鳴りつけてやろうかと口を開けて

「——ニセモノ。・・・ハア、・・・正しき世界を歪めたニセモノ・・・」

幽鬼の如く。ステインが立ち上がっていた。

その口元からは、絶え間なく血液が流れ、左肩と脇腹には氷塊の一部が突き刺さっている。

それでも——

（・・・アレを食らってッ）

それでも、2本の足で、立っている。

あれほどの衝撃でも手放さなかったのであらうサバイバルナイフを、だらりと垂らした右手で掴みながらゆっくりと二人へ歩き出す。

「だが、ダメージは通ってんだ!!もう一度行くぞッ」

再度、爆豪が駆け出す。その背後ではサポートをするために轟が左手に炎を纏う。

爆速でステインへと迫った爆豪が、再びエドモン語を口にしようと大きく息を吸い

ステインが、視界に入らないよう隠していた左手を上げる。

「それ・・・はッ!!？」

先端に僅かな血の付いた小さなナイフ。

いつ拾ったのか。

先ほど爆豪の頬を切り、しかしどこかへ蹴り飛ばした筈のそれにステインが舌を這わせ

重い物体が、倒れる音が一つ。

「ッ、カツキッ!!」

倒れた爆豪へと、ナイフを振り下ろそうとするステインに対し、左手の白炎を焦りながら放つ轟。

「・・・ハア・・・動揺が個性に表れているな」

先ほどまでの力が感じられない。

一気に向きを変え、轟の方向へ駆けながらであろうと精細さに欠けた炎は簡単にかわせてしまう。

轟が炎を止め、右足から冷気を放つまでに距離は数歩で到達するほどに狭められ

「ッ、化け物か・・・コイツッ」

地面から生やした氷の槍は、僅かに体をひねったステインの服の一部を持って行っただけだった。

せめてもの防御と、顔の前に腕を上げる。

その腕に、容赦なくナイフが振り下ろされ――

「――レシプロ・・・バーストッ!!」

その刀身が、駆け抜けた風により砕け散る。

強い衝撃に後退するステインと、その前に立ちはだかる少年。

「――ッ、助かった。飯田君」

「・・・関係ない君たちを巻き込んだ事に比べれば、大したことでは無い」

その顔に浮かぶのは

後悔、怒り、罪悪感、そして焦り。

「もうこれ以上、君達に血を流させるわけにはいかない・・・」

ヒーローと呼ぶには、あまりに辛く苦渋に満ちた表情だった。

「・・・下らん。自らを守るために傷つく姿に居た堪れなくなっただか・・・？やはり、お前は贗物。・・・ハア・・・英雄を歪ませる社会のガンだ」

変わらない。人間の本質とは、いくら一時の感情に流されようが変わることは無い。

「そうだ。僕にヒーローを名乗る資格は無い」

この少年がその証明。

「それでも、折れるわけにはいかない。俺が折れれば、ヘインゲンウムが死んでしまう」

どこまでも私情を理由に動く、その根本は変わらない。

「論外」

放った殺気に反応し、赤黒の少女が白炎を放つ。

一瞬で炎に周囲を囲まれるが、すでに退路は見えている。



両足に力を込め、跳躍すれば壁にスパイクを突き立て一時的な足場とする。

視界に入るのは、先ほどの加速で負荷をかけたのか動きの鈍い少年と、その足に手を当てて氷を作り出している少女。

恐らくは先ほどの一撃を放つために冷却しているのだろうが  
そのような余裕を与えるつもりは無い。

左上腕に隠していたナイフを投擲し、勢いを着けて壁沿いに二人の方へ飛び掛かる。

狙い通り少女の右腕へ突き刺さったナイフ。

そして、痛みにも身を引く少女を庇う様に立ち上がった贗物が、再度あの加速を放とうと腰を沈める。

その姿が加速し、回転を加えられた蹴りが、跳び降りている最中で無防備なこちらの体へ迫り

「・・・ハア・・・」

左の壁に手を当て、ぐると体を前方向へ回転させる。少年の足は頭部の下を空振りし、前回りしたこちらの踵が少年の左肩へと追突する。

「ぐ・・・ああッ!!」

衝撃により踵から突き出した隠しナイフがその肩を深々と刺し、回転によって増した力は鎖骨を粉々に折り砕く。

すでに用は無いと。その体を地面へと蹴り落としつつ、足場とする様に跳べば—— 痛みに腕を押さえる少女の背中へと着地する。

その重さと、痛みにも声をせず地面に縫い付けられた少女を見下ろしながら、刃の突き出した右の踵をゆっくりと振り上げる。

「・・・ハア・・・まずはお前からだ。・・・ヒーローとは万人を救う者。ハア・・・贗物であるお前には分かっただろうが・・・」

抵抗するようにその半身から炎を生み出そうとする轟。

だが、スパイクのついた靴で磨り潰すように背中を踏まれれば痛みによりとても力など扱えない。

それでも、肘を押し付けるように体を上げ肺の中へと空気を送る。

「っ、．．．それは、へてメエのなりたかった姿」だろ．．．ワタシ達につ、押し付けるな！」

死の恐怖の前に、こぼれそうになる涙を押さえ込み口にした、振り絞るような叫びもステインには響かない。

無言で踏む力を増やし、抵抗の可能性を減らしていく。

「．．．イズ．．．ク」

掠れたような、もはや吐息と変わらない声とすら呼べない音。当然誰にも聞こえる筈はなく、

「死ね」

断頭台の刃のように、その首へと踵が振り下ろされ

「ッ．．．ハア、予想通りの登場だ．．．ガキ」

唐突に、楽し気に笑みを深めたステインが右足の向きを変える。

視界の端から、金色の雷光を撒き散らしながら迫る紅い拳。

膝を折りたたみ、こちらへ向かっていた拳を蹴り砕くように膝で受け止めた――

（ツ、かつちゃん、・・・飯田君!! ツ、クソツ・・・反応速度、判断力が桁外れだ）

次々と倒れていく仲間の姿に、体が動かせない事に対する激しい怒りが浮かぶ。

それでも、視覚でせめて情報を得ようと目を凝らす。

見えてくるのは、やはりヒーロー殺しの強さ。

反応速度、判断力、経験から来る勘。そこに殺しの技術が噛み合い、ただ目の前の対象を無力化し殺害することに特化している。

（ツ、轟さん!!）

視界の先で、背中を踏みつけられる友達の姿が見えた。

全身の血が沸騰するように熱い。

荒れ狂う感情が、今すぐにでも助けにいききたいと訴える。

だが、動かない。

全力で握った筈の拳は弛緩し、すでに駆け出している筈の足は少しも動かない。

（助けたいッ！僕の、友達なんだ・・・足が千切れてもいい、今だけで

いいッ・・・動けよッ!!)

視界の先で、少女の唇が動く。

声は聞こえない。だが、確かに伝わる。

自分の名を、助けを呼ぶ声。

その頭上へ、無慈悲に刃が振り下ろされようとして――

――『まだ間に合うぜ、奥歯噛み砕いて立ち上がれ。今にも泣きそうな女の子を笑顔にするのが、最高にゴールデンな男ってものだろ』

落雷。

まるで全身に電流が流されたかのように、身の内から力強い何かが溢れてくるのを感じる。

立ち上がるために力を入れた足は、先ほどまでの脱力感が嘘のように地を砕き、踏み締める。

一步、ただ地面を蹴るだけでアスファルトが砕け散る。

体の中ではまるで膨張するように、四肢の筋が太く編み込まれていくような錯覚を感じる。

赤く、紅く熱を放つ右手が色を変えていく。

(でもッ、これは100%よりも出力が高い!? 制御が――)  
確実に、二歩目を出す前に地面に激突する。

不馴れな制御が、ここに来て足を引つ張る。

筈なのに、二歩目はブレることなく地を踏み抜く。

異常な跳躍力はそれだけでヒーロー殺しの眼前にこの体を運び届ける。

脳内に声が響く。強く、そして優しい声音で男が高らかに声を張る。

『英雄の資格があろうが、無かろうが関係ねえ!! 女子供を——』  
「——踏みつけるような悪党にッ、ためらう拳は持ち合わせて無えッ!!」

右の手の平から、雷光が溢れ出す。

飛び散りそうなそれを握り込み、歯を食い縛りながら拳を突き出す。

予想していたかのように、こちらの拳を砕こうとプロテクターのついた膝が押し当てられる。

だが、止まらない。止めるわけがない。

脆く、呆気なくプロテクターが砕けていく。

驚愕に目を見開くステインの膝を弾き、拳はそのまま胸へと吸い込まれるように突き進む。

落雷のような轟音を立て、衝突した拳がひととき強く黄金色に輝きを放つ。

弾けるように、今まで握りしめていた雷撃がステインの腹部で膨れ

上がり——

遙か先に倒れ伏したステイン。

四肢は地に投げ出され、今度こそ動く様子は無い。

その姿を確認しながら、足元で血を流していた少女を抱き起こす。意識を失ったのか瞼を閉じ、腕や背中から血を流す少女の姿に、もっと早く助けたかったと唇を強く噛み締める。

不意に、少女の瞼がゆつくりと開く。

パチパチと、何度か驚いたように瞬きをして、安堵したかのようにその体から力が抜けて――

（『おう、すっかり笑顔にしたじゃねえか。ゴールドデンだぜ、坊主』）

「助けてくれて・・・ありがとう」

守りたかった笑顔を、見せてくれた。

グラントリノが駆けつけた時、最初に聞こえたのは聞いたことがない少女の悲鳴だった。

声を頼りに駆ければ、はるか視線の先でまず目に入ったのは道路脇に倒れ伏した緑谷とその体を揺らす白と赤の髪の少女。

その横で見覚えのある少女——爆豪が、緑谷の脇に立ち目を見開きその姿を呆然と見つめていた。

「緑谷君ッ!!」

叫ぶような声と共に、焦げた臭いの男を担いだ少年が路地裏の影から駆け出してくるのが見えて——

空を切るような異音が、僅かに響いた。

ハッ、と顔を上げれば滑空するように空を飛ぶ、脳無と緑谷が呼んでいた、怪鳥のような者の姿。

「避けるッ、上だ!!」

声を張り上げ、足の裏から空気を噴出し飛び出すが空を駆けるその速さには追い付けない。

呼び掛けに白と赤の髪の少女が顔を上げた瞬間、その体を翼で押し退け太い足が緑谷の体をつかみ上げる。

(不味い!!空に逃げられれば追う術は無い!!)

無情にも、大きな翼はあっさりとその巨体を持ち上げ緑谷ごとその体を空へ送り出す。

あっという間に手の届かない高さまで飛び上がるその体——

その背中へ、黒い影が張り付いていた。

漸くその重みに気付いたのか、ぐるりと首を巡らせる脳無の眼球へ、半ばまで折れたサバイバルナイフが突き立てられる。

激痛に悶え、暴れるその首に腕を回し

目から突き出た柄を影——ステインは掌で一気に押し込む。

ビクリ、と一瞬体を震わせた脳無の体から力が抜け、その体は下降を始めた。

地に落ちた脳無の体から、ゆっくりとステインが起き上がる。

すでに焦点を失い、グラグラと揺れるその瞳はしかし・・・足元に転がる緑谷の姿を見つめていた。

「っ、ヒーロー殺し・・・!!」

背後から駆けつけたエンデヴァーが、その姿にようやく見つけたと歓喜の声をあげる。

No.2ヒーローの姿に、周囲の者達もその動きに合わせ捕縛に移ろうと動き出し――

「贗物・・・ッ」

その眼光に、圧に、その場にいた全ての者の体が止まる。

呼吸は荒く浅い。目は定まらず、まともに立っていることもおかしいような、そんな重症の男を前に誰も動けない

「・・・正さねば。誰かが・・・血に染まらねばッ！来い・・・来てみる贗物どもッ」

血を吐くような叫び。

歪んだ、しかし偽りの無い確たる信念を持って

「――俺を殺していいのはオールマイトだけだ!!」

意識が途切れる瞬間まで彼は世界を正そうと考え、そして世界を敵に回していた。



## カテキン

「VSヒーロー殺し―その後―」

エンデヴァーによりヒーロー殺しは捕縛され、再び平和は取り戻された。

当然それは表向きの発表であり、俺達とクソデクが応戦した事なんて一言も書かれちゃいない。

だが、そんなことはどうでも良い。

犬の顔をした刑事が俺達への被害を減らすためにそうしたとか、職場体験中に抜け出した轟がエンデヴァーに責められ逆に氷漬けにしたとかそういう話も今はあまり頭に入って来ねえ。

「あー・・・緑谷は今日も休みだ。見舞いに行きたい奴は放課後行つてやれ」

あの日から2日。

俺の幼馴染はまだ目を覚ましていない。

「許容量は増えて来てはいたが、それでも神霊や半神は荷が重い。全ての容量を使い、ようやく半神を受け入れられるか……それとも体が弾け飛ぶかの二択だな」

それは背筋がゾツとする話だった。

上も下も無い謎の白い空間で、僕にそんな話をしているのは自らを復讐鬼と名乗る彼へ巖窟王」。

いつの間にか意識を失ったらしい僕は、気が付いたらここに居た。

「あの胡散臭い髭のアーチャーが拡張・補強したと言っていたが、余計な事をしてくれた。現状は水風船に鉄パイプを通して海の水を流し込んでいるようなものだ」

……とりあえず、破裂しそうなのは伝わりました。……あれ？でも力の調整は変わらず出来てました

目の前の彼の力を制御する感覚は変わらなかったはず。

ヒーロー殺しの時も、特に問題は感じられなかったけれど

「パイプ自体へ流れ込む力の制御が上手く出来ていた為だろう。……しかし、感情が乱れることで制御が外れれば、より大きな力が今回のように流れ込む事になる」

確かに、最後に聞こえた声の主は自分が呼んだ訳じゃなかった。

彼の言う通りなら、流れ込む力によって本当にはじけ飛ぶ未来が来るのかも。

……なら、制御の精度を上げて……後は容量を増やさなくちゃならないか。容量って筋トレとかで鍛えられるのか……それとも――

「筋力を鍛えるのは最優先だろうな。お前の体は既に英雄を目指すに相応しい〈天性の肉体〉として最適化された。日々の鍛錬により肉体の許容量は増えるだろう」

え・・・

それは、どういう事だろうか。

というよりも、いつの間に・・・

「あのバーサーカーも半神に近い存在。その霊基の一部を受け取るには肉体が貧弱すぎたのだろう。故に、お前の体は英雄を宿すに足る形に作り変えられ・・・そして、その変化にお前の魂は耐え切れなかった」

耐え切れなかった。その言葉に、嫌な想像が脳裏を過ぎる。

そもそも、自分はどうしてここに居るのだろうか。

魂が耐え切れなかった、ということは自分はまた彼と出会ったあの日のように死にかけて――

「・・・故に、代役を立てお前の魂は一時的に隔離している。およそ5日程度ここで魂を癒やすが良い」

・・・。

「どうした。なんとも間の抜けた顔をしている」

えっと・・・代役って

「ああ・・・胡散臭いアーチャーの前例があるため不安は有るだろうが比較的信頼に足る人物の筈だ。現代の英霊として赤いアーチャーへ依頼したが・・・どうも奴はお前との接触を避けている様で、別の人物を指名された」

赤い、とかは良く分からないけど

英霊なら・・・その変化には耐えられるの？

「無論・・・耐えられんだろうな。数日間は痛みと不快感に気絶し続けるだろう」

「——いやあ、さすがにこの扱いはあんまりだと思っんですがねえ!？」

勢いよく、上半身を起こす。

2日間、実はひっそりと気絶と覚醒を繰り返していたせいで朦朧としたアタマを振り、覚醒させればようやく周りを見渡す。

白い壁に清潔感のあるベッド。

着ているのはうす水色の病衣ということは、脳内の現代知識からしてここは病院だろうな。

飛び飛びの記憶だと医者やらナースやらがいたし、間違いないだろう。

「・・・まあ、雇われた以上はそれなりに働かせてもらいますけどね」  
一度引き受けた以上、やることはやろうじゃないの。

〈報酬は望む物を。・・・アイツが言うには期末試験と言うものが近いらしい。一週間ほど良い、時間を稼いで欲しい〉

少年が目覚めるまで、この体を守りながらガキどもに紛れて居りやあいい。

成りすまし、工作はお手の物ってね。

敵や一市民に成りすまし、まぎれる技術は生前からの得意分野だ。

「それにまあ・・・毒でも奇襲でも使うオレには今でも分からねえが」  
ヒーローってのは、騎士サマとどつか似てる気がするんだよなあ。  
それを目指すガキどもを潰そうって奴らが居るのは少し、胸に引つ  
かかる。

・・・だからどうという訳じゃないがね。  
とりあえず、ナースとやらを呼ぶためにボタンを探そうと――

「イズク・・・」

「・・・げっ!!」

・・・ヤベエ方の嬢ちゃんが来ちゃった。

少年の目から時々見ちやいたが、この嬢ちゃんは少年の特徴を完全  
に捉えていやがる。

下手をすると第一声で気付かれる可能性も

「――じゃない。・・・誰だ、お前」

なにで判断したんですかねえ!?

「――どうした、メルセデス? 俺の身を案じて再び我が前に」「黙  
れ」

なんて凍えるような目で人を見る子だろうか。

と言うより、ダメだ。完全にバレてやがる。

この嬢ちゃんを落ち着かせる為には、もう一人の嬢ちゃんの協力が  
必要だな。

幸い、もう一人の軽い足音が近づいて来ているからそっちに期待し

て、今はとりあえず目の前の危険物の対処だ。

「——あいあい。確かに俺は少年とは別人だけどなあ、嬢ちゃん。この体は本物っスよ？」

「それがどうし……!!? そ……そんな、なににして」

病衣の紐を解いていく。

それだけで食い入るようにこちらを見る嬢ちゃん……ウブいねえ。「むないた……あんなに？腕も細いのワイヤーみたいな筋が……」鼻を押さええていても、ついでにだらだら鼻血を垂らしていても視線だけは逸らさないのな。

けどまあ、これで30秒は稼げる。

他人の体を見せるだけで敵の足止めが出来るとは、なんて安上がりな工作だ——

「容量は……そうだな。高校へ入った頃が10今の全量が15とする。9を俺の霊基が占め、技量が2……残りの4にあの男の霊基のほんの一部が入った形になる」

まあ、実際はそれ以上流れ込んでいたため、今回は負荷が大きくなったのだろうと。

でもあの時、その人が力を貸してくれたからこそ僕は轟さんを助けることが出来た。

だから、せめてお礼は言いたかったな・・・。

「今回の事でパスは通った。お前が望めば、存外簡単に手を貸してくれるかもしれない」

それなら、今度こそお礼が言えたらいいな。

ちなみに、その人はどんな人なんだろう。

名前くらいは知りたいです。

「お前の世界に居たかは分からんが、この国の生まれの筈だ。確か、坂田金時・・・だったか」

え・・・それってきんたろ——

「デメエ轟イ!! 病院の前で待ち合わせって話だったろうが!!」

やっと来たかつ。

鬼のような形相だが、今は救いの女神に見えるから不思議なもんだぜ。

「メルセデスよ、メルセデスが錯乱した。取り押さえる為に——」

赤白髪の嬢ちゃんと同じようにこちらの体を見てる隙に、協力を取り付けようかねえ。

なるべくそれらしく表情を固めて、呼びかければ

迫る掌底。

何とかベッドから転がり落ちるように紙一重で躲したが、なんなん

ですかねえこの嬢ちゃんたち!?

「ッ・・・また何か憑りつきやがったか!?おい轟、痛みは感じるらしいから限界まで痛めつけて追い出すぞ」

「ッ・・・分かった、必ず助ける・・・とりあえず参考の為に写真は撮った。家のPCにも送ってあるから安心しろ」

「オタクラ、鼻血拭いながら言う事じゃないでしょうよ」

とりあえず、これ以上痛いのは嫌ですわ。

悪いけど話を聞く気になるまでトンズラさせてもらおうかね。

「参ったね。普通さー、好きな男の顔面爆破しようとする?そらあ少年も心の中で、2人に実は嫌われてるんじゃないか・・・とか心配するのは当然ですわー」

「——!!?」

ビクリと動きを止めた2人の隙を突き、上げた右手に青白い光が集まる。

形作られるのは、使い古されたようにくすんだ緑の外套。

それを羽織れば

「ッ、消えただと!!?轟、足元を——」

やつぱり勘の良い嬢ちゃんだ。この個性あふれる世界なんだから、どこかに転移したとか一瞬考えてもおかしくないんだけどなあ。

まあ、それでもまだ経験不足だぜ。

「ハイハイ、ここが病院だってコト忘れてない?赤白の嬢ちゃんも当然ためらうでしょうよ」

言う方は簡単だが、自分の力を知っている本人は一瞬動きを止めちまった。

病院である以上、デリケートな患者や薬もあるさ。

そこを無視できるほどその嬢ちゃんも常識が無いわけじゃない。

右手に瞬時に展開した手甲。そいつに付いた緑の弓を引き、爆発の嬢ちゃんに突き付けながらサービスで笑顔も付けてやる。

「んじゃ、少し落ち着いたところで・・・説明会とさせてもらいます



か」

イズクの中に居た影の薄そうな人の話では、来週には彼はワタシのところに戻ってきてくれるみたいだ。

いつまでも目が覚めないんじゃないかって、そう考えてしまつてここ数日一睡もしなかったぐらい心配だったからそれはすごく嬉しい知らせだった。

「・・・嘘だつたら、後遺症が残らない程度に爪先から凍り付かせてくけど」

「轟ちゃん、恐いわ」

つい口から出てしまったみたいだ。

独り言を言っている奴なんて不気味だから、蛙吹さんが恐がるのも当然だ。

「悪い、明日緑谷の体を氷漬けにしなきゃいけないかも知れなくて・・・そのことで頭がいっぱいだった」

「・・・それが恐いって言われてるんでしょ。だいたい緑谷は入院中なんだからむしろ見舞いくらいしてやらないと」

「いや、これが一番イズクのためになる。彼も喜ぶはずだ」  
「アンタらどういう関係になつてんだよっ」

耳郎さんがやけに興奮しているが、何か嫌な事でもあったのだろうか。

首を傾げながら、悩みでもあるのかと聞こうとして

「という訳で、夏休み林間合宿やるぞ」

相澤先生の声と同時に上がった歓声で、聞くタイミングを失ってしまふ。

肝試しやカレーと、みんなが盛り上がる中でワタシだけが少しだけ反応が遅れてしまふ。

小学校も、中学校も行事には参加できなかったし友達と肝試しとかもしたことが無い。

初めての事だから、すこしワクワクするけどそれでもみんなと同じように楽しめるのか不安になってしまふ。

「ただし、その前の期末テストで合格点に満たなかった奴は・・・学校で補習地獄だ」

みんなが楽しんでる雰囲気壊してしまうんじゃないか。

それが今はとても怖くて

「寝食皆と!!ワクワクしてきたあ!!」

・・・寝食、いっしょ？

「・・・デクの野郎はまだ病院だけどどうすんだ？」

「今朝病院から連絡があった。昨日目が覚めてから検査して体に異常は無かったようで、明後日には退院出来るらしい。んで・・・当然だが親御さんが心配してな。テストまでは家で自主勉強する方向で話はついた」

「ケロ・・・。緑谷ちゃん、無事みたいで良かったわね轟ちゃん」

同じ屋根の下で一緒にご飯を食べてお風呂に入って布団で眠る。  
それって

・・・同棲だ。どうしようお母さん。

「ドクター、彼について他に分かった事は？」

「あの個性……。未だかつてあそこまで様々な力を扱う個性を先生以外に見たことが無い。もちろん、イメージを具現化する個性なんかは似たような事は出来たけど、常にイメージを固定させなきゃいけない分思考が鈍るゴミ個性だったからなあ」

「ハハッ……。まあ、個性も大事だがより重要なのは彼の考え方だよ。あの個性についてはおおよそ見当はついているんだ」

「ふむ、ワシが見た中でもかなり癖の強い個性で判別は難しいはずだが……」

「少し、似た個性を知っていたからね。……。だからこそ、彼には早く消えてもらわなくちゃいけない。器が完成に近付けば、そこに残り火を足そうとする者が現れるかもしれない」

「しかし、あの個性ならば先生のその傷も……」

「——構わない。少しでも、次の僕の為に不安の芽は摘み取ってあげるべきだ……。それが先生というものだよ」

「期末試験当日」

「そう!! 君らの判断力が試される!! けどこんなルール逃げの一択じゃね!? そう思っちゃいますよね」

辺りは人気のない市街地。

期末試験用に用意されたステージで、オールマイトと二人の少年が向かい合っていた。

「はい!! 確かにそれが最適な方法と考えられますが、先生方がそんな抜け道を残すはずがありません!」

ビシッ!! と左手を上げて大きな声を出すのは、ヒーロースーツに身を包んだ飯田であった。

どこか以前よりも強張ったその表情に、オールマイトが目細めるが・・・すぐに腰に手を当てて笑顔を浮かべる。

「ハッハッハッ!! さすがは飯田少年だ!! そう、この手足に付けた重りはサポート科の特注品だね。体重の半分の重さのこれを着けて試験をする。ハンデってやつさ!」

手足に付けたそれを見せながら説明すると、オールマイトは未だに喋らないもう一人の彼へと視線を向ける。

普段から口数の少ない少年だが、ここまで無口なのは少しおかしいと飯田も同じように隣の彼へと顔を向けて

「そういえば緑谷君、今日はどうしてそのような緑の・・・外套? だろ

うか、すまないファッションには疎くてな。とにかく、それを着ているんだい？」

首を傾げる彼に対して、話しかけられた緑谷は頬を引きつらせたように笑い・・・そしてため息をつく。

「なんでもねえっスよ。・・・ただまあ、少しばっかし俺も人が好過ぎるなあと思ってたところだ」

世界のトップヒーローを前にしながら、弓兵は右手に手甲と弓を装着する。

体を守り続ける事は契約内。

契約期間は、一週間ほど・・・そう、〈ほど〉と言われた以上ここで放棄するのは契約違反に当たるだろう。

（健康そのものに見えるが・・・とりあえず、祈りの弓を隙を見て撃ち込んでみますか）

——何故か走る強烈な嫌な予感に、オールマイトは強い寒気を感じていた。

## 凶弾の先

### 「期末試験」

「で、オタクは正直体の具合はどのようなのよ？さっき左手上げたのも、オレはちゃんと動かせますよーってアピールにしか見えませんでしたけど？」

狭い路地裏の中、索敵に優れた緑谷が前を走りその後には飯田が続いていた。

開幕同時に緑谷がオールマイトの顔面に足元の砂を蹴り上げ、目つぶしを食らわせたと同時に飯田に発破をかけて逃走。

ゴールへとひたすら距離を詰めている現状であった。

「その口調。やはり緑谷君ではないというのは本当らしいな」  
眉を寄せるのも無理はない。

自分を助けに來た事で友人が魂に負荷を負い、現在も治療中と聞けば元気になったと安堵していた分申し訳なさは積もるばかりで・・・

（俺にできる事は、少しでもこの人を手伝い緑谷君の負担を減らすことだけか）

「・・・左腕は上げる分には問題ないが脱力感と痺れが強い。以前の半分程度といったところだ」

「そうかい。ならあのぶつとい腕と正面切って戦う訳にはいかねえな。裏をかいて何とか機動力を落とせばワンチャンスってところかねえ」

ゴールまでは未だ距離はあるものの、上手く敵はかく乱出來ている。

彼が戦場としていた森とは違うが、

（この地面も、足音を殺すには不便だ。あの巨体なら、よほど慎重に歩かなければ気配は殺しきれねえ）

鋭敏な聴覚に足音が聞こえてこない今が、ゴールへ向かう最大のチャンスであり――

ゴオツ、と巨大な何か風を切る音が聞こえた。  
何かが放り投げられているのかと、緑谷が顔を上げれば・・・上空に見えたのはゴマ粒のような小さな黒点。

「・・・ええ。ホントに人間かよ、あのオッサン」

「H A H A H A H A !! まぎれもなく人間だよ、緑谷少年の中の人!!」  
響き渡る声。

ほぼ同時に、着弾。

地面が砕け散り、アスファルトが周囲へと散弾のように飛び散る。

緑谷の中の人——ロビン・フッドが飯田の頭を地面に押し付けるように引き倒せば、先ほどまでその頭部があつた位置をアスファルトが通り過ぎていく。

「ツ・・・助かった。しかし、まさか空を飛んで来るとはさすが・・・  
非常識というべきか」

「いや、足音が聞こえない時点で上しか無いでしょうよ。下なんかはもつと音でるしさあ」

でも、ホントにやってくる姿を見ると流石にドン引きですわあ。  
と、げんなりした顔を見せるロビンに対し、オールマイトは厳しい視線を向ける。

「こうして緑谷少年の中の人にコンタクトが取れて嬉しいよ・・・君達が少年をどうしようと考えているのか、是非とも聞きたくてね」

多岐に渡る膨大な力。それらと共に現れる口調や性格の変化。

その裏に多くの人格が居ることは予想はしていたが、しかし容易に楽観視はできない。

「オレに聞かれてもねえ。他の奴らがどう考えているかは知らねえし、知りたくもねえ。俺はただのしがない弓兵ですから、契約通りこの体を守るだけですよ」

肩を竦めなら話すその姿に、嫌な気配は感じられない。

多くのヴィランと戦い続けてきたオールマイトからしても、彼から発せられている気配は邪悪な物ではないと判断できる。  
が、

「でも、この前は君と同じ中の人が緑谷少年の体に乗っ取ったらしいじゃないか」

「あー……」

（適当に取り入って不意打ちかまそうとしてたのに……あの髭、なにしてくれちゃってるんですかねえ!!?）

言いわけできない前例が、既にあった。

頭を抱えるその姿。

その前に、白い鎧のようなヒーロースーツが立ちはだかる。

「何であろうと、俺は緑谷君に借りを返さなきゃいけない。まずはこの試験、彼を突破させるのが俺の使命です」

開始前と同じ、気負った声。

そこに、以前の彼が持っていたものがこもっていないことにオールマイトの表情が一瞬悲しげなものに変わる。

「——そらよつとっ!!」

その隙を逃すロビンでは無かった。

敵の隙はどのようなものでも突く信条の彼の手甲から、何かが連続で射出される。

だが、オールマイトの隙など一瞬の物であり彼にとって弓矢は瞬時に躲す事の出来る速さでしかない。

身を屈め、あるいは逸らし容易くかわし切る。

現在飛んできているモノも含めて確かに避け切った、そう口元に笑みを浮かべ



飛んできていたうちの一本。それが蛇行するように進路を変えながら赤い光を纏い、彼の体を狙っていた。

「そんなの有りかい!？」

大きさ、速度からして体に当たったとして大したダメージは受け無いはず。

(でも、なんだかそれだけじゃ無さそうなんだよねえ、彼!!)

勢いよく、足を上げ次の瞬間には振り下ろし地面に足を突き刺す。

そのままボールを蹴り上げるように地面を蹴り上げれば

起き上がった地面に硬い何かがぶつかったような音が鳴り響き――

オールライトがその裏をのぞき込めば、既に彼らの姿はそこには無かった。

「さすがNo. 1は違いますねえ。矢も見切るとかどういいう目してんだよヒーローサマは」

「個性に関しては様々な予測がされているが、答えは出ていない。だ

が単純な脚力でも俺より確実にオールマイトの方が上だろう」

先ほどと同じような路地裏に隠れ辺りを警戒するロビンに対し、害虫を噛み潰したかのような表情で自らの足を見つめる。

「これでは緑谷君の足を引っ張るばかりだ。……彼に恩を返したいのに、それすらも出来ない。俺は……」

やはり未熟だと、そう口にする彼はヒーロー殺しの一件から未だに立ち直れてはいなかった。

兄を殺されかけ、ヒーロー殺しへ殺意を抱いてしまったこと。

助けに来てくれた友人たちへ酷いセリフを吐いてしまったこと。

彼への借りを返したいのに、こうしてまた力不足で足を引っ張っていること。

「オタクさあ、そんなに他人のことばかり考えてて楽しいわけ？」

不意に、辺りを窺っていた筈の彼が自分を見ていることに飯田は気付く。

翡翠色のその瞳に射抜かれながら、しかし言われた言葉が脳に届けば、自らの想いを否定された様な気持ちに頭が熱くなる。

「っ、兄の仇をとるためと暴走した俺を助けようとした彼に恩を抱くのは当然だろう！」

「いや……良いんだけどさ。オタクは何のためにここに居るのかなあ、って気になっただけよ」

「それは……ッ」

彼への恩を返すため。

なら、この戦いで恩を返したら自分はどうするのだろうか。

この学校へ通う以上、ヒーローへなる。

だが自分はいまヒーローを目指しているのだろうか。

インゲニウムを指すと、そう即答できていた筈なのに今は――

「で、何のためよ？」

「俺は……」

あの日、彼らを見て思った事は

「本当のヒーローになるため。・・・そのためにも、彼への借りを残したままでは進めない。彼と、対等になってその上で競い合っていたかった」

（変わらないじゃないかッ。彼を免罪符に、俺はまた自分が助かる事を・・・楽になる事しか考えていなかったッ!!）

「俺は・・・」

「なるほどな。はつきり言わねえから貸し借りの計算する変な奴かと思っちゃった。借りは返さないと確かに気持ち悪いからな、存分に手伝ってくれよ」

表情を朗らかな物に変えた彼が、安心したかのように肩から力を抜く。

その表情の変化に驚いたのはむしろ飯田の方で

「いや、俺は緑谷君への借りを言い訳にこの試験を利用して罪悪感を消そうと――」

「別の生き物に説明してるわけじゃねえんだ、細かく言わなくても分かるっつーの。・・・要は、真っ直ぐ誰かと向き合える器用さなんて全員が持ち合わせてるわけじゃねえんだ」

自らを迫害した村に迫る軍を追い払う理由を、自分自身にすら様々な理屈で覆い隠しながら戦い続けた名も無い弓兵のように。

「不器用なりに一圖片付けたら次に進む。生きて最後になにか残れば儲けもんじゃねえか。自分誤魔化しても良いから、いまはやりたいことやった方が良くないじゃねえの？」

理想通りに生きる選択肢がなかった弓兵。

様々な理由をつけて戦い続けた真っ直ぐな捻くれ者の彼だからこそ、いくら誤魔化したところで結局は意味がない事を知っているのかもしれない。

「んじゃ、オレは陰から奇襲するって事で!!・・・デカイ体縮めてんじやねえですよ。正面からぶつかって碎けてこい、ヒーローの卵さんよ!!」

どの理由も、彼の本音であり  
本当のヒーローになる。その言葉もまた彼の秘める本音の一つな  
のだから。

オールマイトの耳に、ガチャガチャとした足音が届いた。

ゴールまでの距離はだいぶ迫っている筈なのに、逆走するようにこ  
ちらへ走るその足音に自然と嫌な予想が浮かび眉を寄せてしまう。

果たして、道路の先に見えてきたのは白いコスチュームに身を包ん  
だ影。

（飯田少年のみ・・・緑谷少年の姿は見えない、か）

嫌な予想が当たってしまった、と。

そう少し落ち込みながらも、教師としてヴィラン役としての立場を  
忘れるつもりは無い。

今回の失敗を次に生かしてもらうためにも、正面から向かい合っ  
てあげなければならない。

「飯田少年。緑谷少年の中の人は・・・あそこだね」

ゴール方向へ進む様に、がれきが落ちたような音が幾つか聞こえ

る。

「君が囧で、彼がゴールする……そういう考え方、私はあまり好きじゃないね」

鋭い眼光が、飯田の体を貫く。

叱咤されている、そう感じる前に生き物として強大な力への恐怖が先に来る。

止まりかけた足を——強く右の拳で殴りつけ、無理やりにも再びオールマイトへと向け駆け出す。

「……それでも、俺は彼へと借りを返すんです!!」

「それで、君がここで捕まっても良いと？それはナンセンスだよ!!」

「そうしなければ前に進めない!!それが俺という人間なんです!」

強いその言葉に、先ほどまでの彼とは違う何かを感じる。

彼の中で何か変化があったのかもしれない。

だが、しかし生徒の無謀な自己犠牲を認めるわけにはいかないのもまた事実。

高まる排気音。

それと共に、飯田の動きが加速していく。

そして、ひと際大きく力強い音が鳴り響いた瞬間——

「っ……飯田少年。確かに、君の速さは驚異的なものだった」

胴体へと激突する寸前で、その体を正面からオールマイトの腕が押さえつけていた。

惜しむ様に優しい声音で、俯く飯田に声をかける。

「一手、足りなかった。彼がまだここに居れば今の私の不意を突いて攻撃できていただろう。ヒーローは他のヒーローやサイドキックとの共闘も求められるんだ、だから——」

「——はいはい、呼ばれたので来ましたよ」と

その喉元に、不意に現れた手甲と弓が突き付けられる。

腕、胴体、足とゆつくりと姿を現し、最後に現れた顔はしてやった  
りという笑みを浮かべている。

〈顔のない王〉により姿を消し、飯田の背中に張り付いていた彼の姿に  
オールマイトは目を見開く。

「・・・ゴール方向から確かに音がしたんだけど。アレは君かい？」

「トラップ作りにはそれなりに自信はあるんでね。トップヒーローも  
嵌められるトラップを作るとか、オレも良い自慢話が出来たもんです  
わ」

引きつった笑いを浮かべながらも、それでもオールマイトはこの程  
度で止まるつもりは無い。

「さっきの威力の矢だと私の動きは止められないよ。まだ合格条件は  
——」

「オレの矢は撃った相手の毒とか病気とか増幅して爆発させるんだけ  
ど・・・オタク、なんか持病とか持ってない？動きからしてその左わ  
き腹とか・・・」

バツ、と自らの脇腹に手を当てそうになり、飯田の視線がある事に  
気付き動きを止める。

宙に浮かんだ手は、ふらふらとさ迷い・・・最終的に腰へと当てら  
れる。

「じ・・・持病の腰痛があるかなあ」

平和の象徴を今後も続けるため、いさぎよく両手を上げた。

赤い後ろ姿が見えた。

彼から別れを告げられ、現実へと戻るのだと思ったけど僕はどうしてここに居るのだろう。

そして、目の前にいる彼はいったい誰なのか。

見たことが無い後ろ姿だけど、僕はその背中になぜか強く胸が締め付けられるような感じがして――

「・・・お前はあの男に憧れてヒーローを目指した。その姿に憧れ、そうなるうとして来た。その贗物の理想を目指す姿を俺はこの目で見続けていた」

その言葉に、胸の奥が震える。

オールマイトへの憧れが、それを目指した自分が間違っているとう言われた気がして

「贗物の理想で目指すヒーロー、これを偽善と言わず何と言う。・・・お前は誰かを救いたいと、本当に思ったことがあるのか？ ああ平和

の象徴ならばこう動くだろうという考え。誰かを救えると信じ続ける無謀な理想を動かしていることを否定は出来んだろう」

言い返したいと、そう思った。

強い否定の言葉が口から出そうになって・・・  
気付いた。

この人はどうして、こんなにも苦しそうに僕へ言葉を投げかけるのだろうか。

「その理想は破綻している。そんな夢を抱いてしか生きられぬのであれば——抱いたまま溺死しろ」

突き放すようなその声に、せめてなにか一言でいいから言いたい。

唐突に、後方へ体が引つ張られていくのを感じる。

現実へと帰るのだと、そう自然と理解しながら

「なんでっ・・・そんなに辛そうに、そんな事を言うんですか!!」  
知りたいと思った。

言い返すのではなく、彼の考えを聞きたいと。

一瞬の空白の間を置き、落ち着き払ったその声は

「・・・贗物の理想を追い求め、正義の味方を目指した者の末路を私は知っているからだよ」

いつまでも、僕の耳に残っていた。



「期末試験―後日談―」

「つてな感じでやってきました！木榔区ショッピングモール!!」

手を上げて喜びを表す芦戸の隣で、八百万に腕を引かれた轟が戸惑いながらも辺りの服屋へと視線をさ迷わせる。

「蛙吹ッ、俺は新しい服なんて必要ねえんだよ!!」

「ケロ。でもせっかくの買い出しなんだから見ただけ見ましよう」

その隣では同じように、しかしこちらは抵抗しながら蛙吹に腕を引かれる爆豪の姿があった。

「にしても、緑谷も大変だったよなア。試験のあとまた氣イ失ったんだって?」

切島に背中を叩かれ、無表情ながらどこか苦笑いのような表情を浮かべる緑谷。

「魂の定着のために幾ばくかの猶予が必要だったらしい。案じずとも既に俺の身に不具合は無い」

「あー・・・もう大丈夫つつーことだよな！良かった!」

彼のトレードマークである帽子と黒いスーツはいつも通り着こなされており、以前との違いは表面上では特に見当たらない。

安心したように笑う切島と、普段通りの緑谷のやり取りに体調を気にしていた周囲も一安心とばかりに安堵の息をついて。

集合時間を決めた後、自然とグループは分かれていった。

芦戸にからかわれ、緑谷を気にしながらも顔を赤らめながら付いて

行く轟とそれについていく八百万と耳郎。

帰ろうとする爆豪をなだめながら、普段から気になっていたのかラ  
ンジェリーシヨップへ連行する蛙吹と麗日。

それぞれが目的の場所へ散らばっていき

「・・・本当に、無事でよかった。あの人から聞いてはいたが、まさか  
試験直後に倒れるとは」

残るのは、実は周りの動きに着いて行けなかった緑谷と彼に伝えた  
いことがあった飯田の2人。

「試験では俺が不甲斐ないばかりに彼にも、そしてお前にも迷惑をか  
けた・・・」

本来であれば自分の力で突破すべき試験であつたはずなのに、と他  
の皆に対しても目の前の飯田にも申し訳ないと感じていた。

「だからといって実技が赤点という評価は妥当ではないと思うが・・・」  
「構わん。良い課題だ、俺の糧にするだけのこと」

それでも止まることなく前に進むうとする姿に、飯田は口を開  
き・・・しかし閉じる。

かわりに、どこか吹っ切れたような笑顔を浮かべて

「俺もようやく課題が見つかったよ。お互いに頑張ろうじゃないか  
！」

手を上げ、人ごみの中へ消えていくその背中を見送りながら緑谷は  
ふと、未だに記憶に残っていた赤い誰かの背中を思い出す。

彼はいったい誰なのか、そう思考が逸れた瞬間――

「――見いつけたあ」

背後から、手が迫る。

右方向から迫るその手に対し、見てもいないのになぜか脳が警告を  
発する。

「・・・チート野郎が」

その右手を、服ごと掴む。

瞬時に動きかけた左腕も、ポケットから出る前に同じく左腕で固定してしまえば背後の襲撃者は憎々し気に言葉を発する。

「死柄木か」

あのUSJで聞いた声。

子どものような、しかし悪意に塗れたこの声を緑谷は確かに覚えていた。

その手が、イレイザーヘッドの腕を崩した瞬間も確かに憶えている。

「あーあ、これじゃあそんなに話す時間はないじゃないか」

残念そうに口にするその声に、捕まったという悲壮感はない。

自分が捕まることなどありえない。

ただのアクシデントが起こっただけだと考えているような余裕すら窺える。

「まあいいか。聞きたいんだ、お前はオールマイトをどう思う？」

知った事かと、取り押さえようとした手が止まる。

あの後ろ姿が再び脳裏を過ぎる。

オールマイトは――

「俺の理想であり・・・原点となった一人だ」

それでも、自分の始まりを偽るつもりは無い。

それだけは否定したくない、と自分に言い聞かせるように口にして背後の男を取り押さえようとその腕に力を込めて

「ああ・・・やっぱりそうかあ。お前もアイツのせいで始まったんだ」  
悪意。背筋が凍るようなそれが、背中から伝わってくる。

取り押さええている筈の腕が、痛みを無視したように強い力で動き出す。

「ここにいる奴らがへらへら笑ってるのも、あのゴミがへらへら笑ってるからだよなあッ!!」

ここで止めなければ、何かが起きてしまう予感が緑谷にはあった。

骨を折ってでもその動きを止める。  
その為に

「救えなかった人間などいなかったかのようにつ、へらへら笑ってるから——」

乾いた音が辺りに響いた。

目を見開いていた死柄杓は、自分を押さえつけていた力が消えていくのを感じ視線を目の前の少年へと落とす。

ゆっくりと、その体が前のめりに倒れていく。

その光景に

「……は？」

思わず呆けたような声が漏れる。

音を立てて倒れ伏した少年の体から、青い光が散る。

帽子は宙へ溶け、スーツは雄英の制服へとその姿を戻す。

倒れた少年の下からは、ゆっくりと赤い液体が広がりはじめる。

周囲でその異常事態に気付き始めた客が悲鳴を上げ始める中で、死柄杓は確かな動揺を抱えながら——背を向けて駆け出す。

（アイツを撃つ？誰がそんなリスクをおかして得をするんだよ。……一体何がツ——）

その姿は、すぐに周囲の客へ紛れ込み消えていった。

## 受け継がれる拳

「合宿間近―ホームルーム―」

1―Aの教室は重苦しい空気に包まれていた。

昨日の事件、一番近くにいた飯田が何とか人ごみをかき分け辿り着いたところには既に緑谷は救急車へと運び込まれていた。

残ったのは、野次馬から断片的に聞こえた情報のみ。

雄英の制服を着た少年が血だまりに倒れていたこと。

そして少年が倒れる前に、銃声のような音を聞いた人が大勢いたという話だけだった。

「ッ、俺が緑谷君のそばを離れなければ・・・!!」

机に強く拳が叩きつけられ、軋む音が辺りに響く。

その音に、自然と俯いてしまっていた皆の視線が飯田へと集まる。

白くなるほど握り絞められたその拳に、声をかけようとした上鳴も口をつぐんでしまい――

ダンッ!!とより大きな音が再度教室へと響く。

音源の主は、大きく舌打ちをしながら机に乗せた足を揺らして

「どんだけ自己評価高えんだよテメエは。アイツが撃たれたんだ、テメエなんて居ても居なくても結果は変わんねえよ」

再び踵を打ち付け苛立ちを露わにし、顔を俯かせたままの爆豪がそう吐き捨てる。

「それでもッ、最後まで彼といたのは俺なんだ!! 友達が・・・撃たれたのに、俺は・・・」

勢いよく立ち上がる飯田だが、爆豪の顔を見れば悔し気にその顔を逸らす。

飯田だけでは無かった。

友人が銃で撃たれたショックは大きく、それを未然に防げたかもしれない自分を責めてしまう。

ヒーローを目指すような心根の子供たちは、自らに重い責任を課してしまう。

未だに言葉を発していない轟が俯きながら唇を噛み涙をこぼさな  
い様にしていること。俯いたままの爆豪の目が泣きはらした後のよ  
うに赤く腫れていることも、みんな気付いているからこそ下手な慰め  
の言葉などかけられず。

「――ホームルームの時間だ。席につけ、主に飯田。委員長な  
んだからしつかりしろ」

普段と変わらない様子で入ってきた相澤の姿に、『マジかコイツ』と  
いう絶望の表情を向けたのは当然の事だろう。

「なに、お前らその空気ってことは知らないの？ 発砲音は勘違いで、実  
際は吹き矢の矢みたいなのモンで緑谷は軽傷」

教室の空気が先ほどとは違う理由で一度固まる。

その様子に構いもせず出席簿で自らの肩を叩きながら、ニツと笑い

「ナゾ個性のおかげか救急車に乗せられた時にはもう傷は塞がってるわ目覚めてるわけで、晩飯も普通に食ったらし——」

「「「ナゾ個性バンザイ!!」「」」」

男泣きする切島と尾白、飯田に砂藤の4人。

抱き合いながら目じりに涙をこぼす麗日に蛙吹、葉隠。

目じりに涙を浮かばせながら笑顔を見せる耳郎や八百万。

それぞれが落ち込んでいた気分を爆発させる中で、笑顔で涙を流す事ができた轟を横目で見て、口元の端に笑みを浮かべる爆豪。

——とはいえ。銃なのは間違いない。わざわざ銃弾じゃない何かを銃で撃てるように改造して撃ち込んだ上に……弾は緑谷の体内からは見つからなかった)

運悪く動脈を掠めたために出血したが、撃った奴の狙いはそうじゃない。

(運よく入り込んで皮膚の下数センチの威力の弾だ。弾自体を体内に入れることが目的だったはず。だが、撃ったはずの男は……)

近くのトイレで死んでいるのが発見された。

男のバッグからは銃が発見され、その体内からは大量の薬物と毒物が検出され、薬に脳をやられた愉快犯が犯行後に自殺を謀ったとして捜査は進められている。

だが、気になる事は幾つかある。

男の個性はへ手に握った物を一定時間後に手元に戻すもの。

これで弾を回収したのであれば、弾はどこへ行ったのか。

そしてもう一つ――

拳を握る。

白い病室の中で、何かを確かめるように何度か手を開いては握り・・・そしてまた開く。

何度も繰り返し試してみたが、結果は変わらない。

寂しいと、そう感じるほど当たり前のことだったのだと今さらながら気付いてしまう。

開閉を終えた手を上げて、自らの緑色のくせつ毛をなんとなく掻き乱しながらついその少し上を探すように手を動かす。

すこしくたびれたような感触のあの帽子は、僕の頭の上にはもう無かった。



「林間合宿」

「なあ．．．緑谷の奴本当に来るんだよな」

待ち切れ無いように、そしてどこか不安げに切島が口にするのも無理はない。

あれから1週間、緑谷の姿は誰も見ておらず、今こうして林間学校行きのバスの集合時間も残り5分まで迫ってきている。

普段の彼であれば30分以上前についていてもおかしくないと、示し合わせたわけでもないのに皆が40分前には集合しているのに彼の影すらいまだに見えない。

さきほどから集まって来ているのはB組の生徒ばかりでスーツ姿の人物はどこにもいない。

「急に体調悪くした．．．とかじゃなきゃ良いけど」

心配そうに眉を寄せ、口にする耳郎の目が建物の影から現れた姿を捉えすぐに目を凝らす．．．雄英の制服を着ている。

スーツと帽子をかぶっていない時点で違うだろうとため息をついて．．．。

先ほどまでオロオロとしていた轟を励まそうと、なるべく笑顔を意識しながら振り向き

「え．．．？」

その隣を、風が通り過ぎていった。

気付けば、轟の姿は無く、よくよく見てみれば、バスに背中を預けながら興味は無いとばかりに腕を組んでいた爆豪の姿も無い。  
一体どこへ、と辺りを見渡し――

「――イズク・・・うう!!」 「デクツ、テメエ・・・遅えんだよ!!」

背後から二人の声が聞こえた。

慌てて振り向けば、そこに居たのは先ほど見た雄英の制服を着たB組の生徒。

その首元に、顔を埋める轟と・・・そしてガンをとばすようにその顔を至近距離で睨み付ける爆豪の姿。

「ちよ、ちよつと待ってくださいいお二方!! その方はB組の方です・・・か・・・ら?」

慌てて二人を止めようと追いかけていった八百万の動きが壊れた機械のようにゆっくりと停止する。

口元に手を当ててあわあわと似合わないほどに動揺しながら、なんとかこちらへと視線を向けて・・・ぎこちない動きで手招きをする。

八百万らしくもないその様子に首を傾げながらぞろぞろとI―Aのクラスメイト達はその生徒の周りへと集まり始めて――

「――みんな、ごめん! 最後の検査が遅くなっちゃって」  
聞きなれない口調の、聞きなれた声。

緑の癖っ毛に、少しのそばかす。

生真面目そうな表情に、あまりみたことはなかった困ったような笑

顔。

雄英の制服を着た緑谷 出久がそこに居て。

普段とは違う口調はどういうことなのか、服装はどうしたのか。

聞きたいことがいろいろある中で、かなりの変化を起こしたクラスメイトに一瞬皆が立ち止まり――

「お前、あの口調とカツコウは高校デビューだったのかよ緑谷!!あの路線も悪くないけど、今も真面目そうでいいと思うぜ!!」

駆けよった上鳴が勢いよく緑谷の背中をバシバシとじゃれつくように叩く。

「こ、高校デビューって訳じゃなくて。もともとは小学生くらいの時に――」

興味津々で聞き始める上鳴と、楽し気に会話を始める緑谷を見てクラスメイト達もそばへと寄り始める。

一言二言かわして、口調は変わったがその返答が普段の彼と変わらない事に気付けば次第に雰囲気はいつものI―Aへと戻り始める。

「緑谷君!!怪我はもう問題ないのか?」

「緑谷ちゃん、梅雨ちゃんって呼んで?」

「おい緑谷、お前トドロキッパイいまだたってんだろツ。どうだ、やっぱりそんなに無い――」

「おい。そろそろ乗り込め、歩いて行かせるぞ」

意識を失った峰田をバスに放り込みながら慌てて乗り込むクラスメイト達。

その後ろについて行きながら、緑谷は何もない自らの手を今一度強く握りしめた。

「林間合宿2」

「休憩だ」

相澤の声に合わせ、バスの中で騒ぎ疲れていた生徒たちがぞろぞろと外へと出ていく。

辺りを見渡し、だだっ広いだけの場所に数名がすでに違和感を覚える。

「つーか、何ここ・・・パーキングじゃなくね？」

徐々に、嫌な予感が膨らみ始める。

「何の目的もなくでは意味が薄いからな」

ぽつりと呟かれたその相澤先生の台詞に、いよいよ勘の鋭い数名が表情をこわばらせ始め――

「ようイレイザー!!」

「煌めく眼でロックオン!!」

「キュートにキャットにステインガー!!」

「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!!!」

ビシイ!!というの間にか現れていた二人組が名乗りをあげながら

ポーズを決める。

金髪セミロングの女性に、赤茶色の髪の女性。

「今回お世話になるプロヒーロー〈ブッシーキャッツ〉の皆さんだ」

相澤先生の紹介に合わせ、グツと拳を握った緑谷が身を乗り出しながら目を輝かせ

「連名事務所を構える4名1チームのヒーロー集団〈ワイプシ〉!! 山岳救助などを得意とするベテランチームだよ!! キャリアは今年でもう12年目に――」

「――心は18!!・・・へえ、やるね」

突如話し始めた緑谷に、お前そういうキャラだったのかと空気が一瞬生暖かくなるが、それを切り裂くように金髪の女性〈ピクシーボブ〉の手が緑谷の顔面に迫り

流れるように、円を描くかのような右手の動きにより受け流されてしまう。

何度か同じように手を再度緑谷へ伸ばすが、結果は変わらず――

その後ろでもう一人の女性、マンダレイが遠くの山を指さす。

「やばい」と全てを察した瀬呂が声を上げて背を向け、芦戸や上鳴がバスへ戻ろうとするが、既に遅い。

「あんた等の宿泊施設はあの山のふもとね。今はAM9:30。12時までに辿り着けなかったキティは――」

緑谷へと猫パンチを繰り返していたピクシーボブが、距離を取るように後ろへ下がる。

その両手を勢いよく地面へ叩き付ければ

「お昼抜きね」

まるで雪崩のように土砂が崩れ、1―A全員を飲み込みながら崖下へと流れ落ちていく。

「私有地だから個性の使用は自由だよ!! 今から三時間!! 自分の足で施設までおいでませッ、この〈魔獣の森〉を抜けて!!」

マンダレイの声と共に落下していった体は、数秒後に柔らかな土と共に地面へと着地する。

口に入り込んだ土を吐き出しながら、緑谷は記憶にうつすら残る魔獣の森という言葉に、首を傾げながらも周囲へ視線を巡らせ

周囲の樹木と同等の大きさを持つ、巨大な牙の生き物と見つめあう峰田の姿を見た。

拳を握る。

今この胸の中に、彼は居ない。

頭の中に響いていたはずの彼らの声もあの日から一度も聞こえてはこない。

手から炎を出すことも出来なければ、空を駆けることもできやしない。

それでも、巨獣に襲われかけているその姿を見た瞬間から体が自然と動いていた。

ほとんど同時に駆け出した影の一人が、その速さをもつて巨獣の前足を一本蹴り碎く。

あつけなくバランスを崩したその巨体を支える残り三本の足はもう一人により凍り付き、そのわきを駆け抜けて行つた影が凍り付いたその足を粉々に爆砕する。

残るは、その質量を持つてこちらへ突き進んでくるその頭部と胴体。

圧倒的な質量のそれに対し、やることは決まっている。

足を地に叩き付けるように踏み出せば、視界が瞬時に切り替わる。弾丸のように飛んだ体は、すぐに巨獣の眼前に迫り

巨大な牙が、こちらの胴体を狙うように動く。

鋼鉄の意思により強化されていない体では、槍により決して軽くは無い怪我を負うのは明らか。

だが、

（今、僕の中にあの人達は居ないッ。でも——）

確かに、この体が憶えていることがある。

迫る牙。

それに対し、僅かに体を逸らし薄皮一枚で避け切れば、目の前の牙へ手のひらを滑らせるように当てる。

ギョルツ、とまるで蛇のように絡みついた腕は——如何なる力が働いたのか容易く牙をその手で噛み碎く。

飛び散る破片、それすら踊るような足さばきで躲しきるその姿はまさに十面埋伏。

そして——今度こそ巨獣の眼前にその身を置けば、強く左足

を地に突き立て腰を低くする。

振りかぶった拳は高く上げられ、その動きからは先ほどの技術は微塵も感じられない。

だが、その体から放たれるのは奇妙なまでに強い威圧感。

喧嘩殺法、喧嘩上等——振り上げた拳を限界までに硬く握る姿はまさに凄女。

武術家から聖女へ繋ぐ拳。

「——鉄拳 聖裁!!!!」

風を切り裂き、落し潰しながら拳が走る。

土塊で出来た巨獣。圧縮された土の高度は拳で碎けるものではない。

だが、拳がその頭部へ直撃した瞬間——その体全体を這うように蜘蛛の巣状に亀裂が走る。

それでも拳は止まらない。

頭部を碎き、挟り込み胴体にまで沈み込む様に腕が突き進み

衝撃に耐えきれなかった巨獣の体が、乾いた音を立てて弾け飛び四散した。



「くうー!!逆立ってきたあ!!」

獣を突破した四人組の姿に、ピクシーボブはその体を震わせる。

まずはその反応速度。

本来であれば巨獣に驚き、反応が遅れるのが学生であれば普通。

だが彼らはその虚すら見せず、一瞬で反応して見せた。

(でも、特にあの緑の子!!強化系の個性だろうけど技術もなかなかつ、小さいころから武術でも習ってるんでしょうね!!)

未来のヒーロー達への期待に頬を緩ませながら、楽し気にその姿を再び目で追い始めた。

「ねこねこねこ!!正直もつとかかると思ってた」

楽しそうに笑うピクシーボブさんの前で、重い体を何とか動かしゴールまでたどり着けばようやく息を吐きだす。

金太郎さんの力で変わった僕の体は、確かに前よりも力も上がったし想像した通りの動きも出来る。

でも、英雄の体とはいえ空腹には勝てないようで完全にダウン寸前の状態だ。

「私の土魔獣も簡単に突破されちゃって・・・特にその四人、躊躇のなさは経験値による物かしら?」

ビシッとこちらを指さしたピクシーボブさんが、ゆつくりとこちらへ距離を詰めてくる。

思わず体を引くけど、それに合わせるように近づいて来て

「キミ、なかなかいい動きしてたね!! 三年後に期待してツバ付けちや  
お!」

「えっ、ちょよ!」

「あ!!? 何してんだテメエ、コイツに手出してねえで同年代のオス猫  
探せ!!」

「なに、やろうつての!!?」

ツバ交じりの息を吹きかけてくる彼女に思わず顔を守るように  
ガードすれば、不意に間に挟まるように入ったかつちゃん爆風でツ  
バを散らしてくれる。

「マンダレイ・・・あの人あんなでしたっけ?・・・あと、だれか  
轟止めろ」

「彼女焦ってるの、適齡期的なアレで」

鋭く尖った巨大な氷柱を片手にピクシーボブさんの背後に忍び  
寄っていた轟さんを、耳郎さんがなんとか羽交い締めにして取り押さ  
える。

その応援に駆け付けようとして、ふとある一点で視線が止まる。

気にはなっていたのだけど

「あの・・・ずつと気になっていたのですが、その子はどなたかのお子  
さんですか?」

「ああ、違う。この子は私の従甥だよ。洗礼! ホラ挨拶しな、一週間一  
緒に過ごすんだから」

マンダレイさんの甥っ子さんだったようだ。

膝を折って目線を合わせようとして・・・小さいころのかつちゃん  
を思い出し、そのままの目線で声をかける。

「えと、僕は雄英高校ヒーロー科の緑谷。よろしくね」

返答の代わりに、小さな拳が金的を狙って飛んできた。

思わず体が反応してしまい、左手が絡めとるようにその腕を受け止  
めてしまつて——なんとも言えない間が空く。

不意に、バシンツと強い音を立てて手が弾かれれば睨み付けるよう

な視線がこちらを見つめる。

「ヒーローになりたいなんて連中とつるむ気はねえよ」

そう吐き捨てるように口にして、小さな背中が離れていく。

弾かれた手に残る衝撃が未だ残っているが、それよりもまるでヒーローを嫌っているようなその言葉から感じた、小さい体に似合わない思いが強く頭に残っていた。

俺が来た

「林間合宿3」

『——それでっ、轟ちゃん続きは!? ヒーロー殺しをぶっ飛ばして緑谷の奴なんて言ったの!!?』

『たしか・・・俺の女を踏みつけるような悪党にためらう拳は持ち合わせてねえ』って言ってた』

『マジか緑谷。恥ずかしいけど、やるじゃん』

『爆豪ちゃん、どうして私たちが選んだ下着つけて来てくれなかったの?』

『ああ!!? あんなヒラヒラの飾りがついたモン着れるわけねえだろうが!!』

『そうなの・・・。カバンの一番下に入ってたから着るのかと思ってたわ』

『なに勝手に見てんだテメエ!!』

「ハア・・・ハア、この壁の向こうにアヴァロンがあるんスよ」

峰田君の目がすごい事になってる。

壁に耳をつけながら息を荒くする峰田君を横目に、みんな今日一日の疲れを追い出す為に温泉につかっていた。

あの後、何だかんだと美味しいご飯をふるまってもらっただけで温泉に放り込まれたけど、源泉のおかげかすごく体が安らいでいくのが分かる。

「そう・・・事故。もうこれは事故なんスよ・・・」

(でも、そっか・・・2人も向こうにいるんだ)

正直、バス乗り場に来るまで少し悩んでいた。

あの特徴的な服装じゃなくなった僕に、みんなが気付いてくれるのか。

だけど、2人は僕が声をかける前に気付いてくれた。

（今度、どうして気付いたのか聞いてみよう）

「峰田君やめたまえ！君のしている行為はツ・・・む、緑谷君顔が赤いがのぼせたんじゃないか？」

「え、そう？言われてみると少し熱くなってきたかも」

むしろ長湯する方だけど、温泉は少し勝手がちがうのかもしれない。

パタパタと顔を手で扇ぎながら湯から立ち上がって、近くの石へと腰かけようとして――

「やかましいんすよ。壁とは超えるためにある!! P l u s U l t r a !!」

「速っ!!」

「校訓を穢すんじゃないよ!!」

頭のモギモギを貼り付けながら、凄い勢いで壁を上る峰田君の姿が目に入った。

声をかける間もなくてっぺん近くまで登った峰田君が・・・

「ヒーロー以前にヒトのあれこれから学び直せ」

恐らく、仕切りと仕切りの間の空間から飛び出してきた小さな影に、トンツと体を押されて

「くそガキイイイ!!?!」

怨嗟の絶叫を上げながら落ちてきた。

峰田君には悪いけど、とりあえずこれで雄英の名誉は守られて良かったよ。

『やっぱり峰田ちゃんサイテーね』

『ありがと洗汰くん!!』

女子の方から聞こえてきた声に、影・・・洗汰君が振り向けば、次の瞬間何かに驚いたかのように小さな声をあげてバランスを崩してしまう。

『っ、爆豪その凶器隠しなよ!!洗汰君驚いて引っ込んだじゃん』

『なんで俺がガキ相手に隠れなきやならねえんだよ!!』

(っ、まずい——!!)

腰かける予定だった岩に足をつけ、ばねの様に膝をたわめれば蹴り抜くように一気に足に力を入れる。

弾けるように飛び散る水飛沫を横目に、一瞬で淘汰君まで距離を詰めれば地面にぶつかる前に何とかその体を抱きとめる。

「淘汰君!!? ちよ、鼻血出てるけど大丈夫!？」

淘汰君の様子を確認するが完全に意識を失ってしまっている。

とりあえず脈は大丈夫だけど、だれかに見てもらった方が良いな。

「落下の恐怖で失神しちゃっただけだね、ありがとう」

そう微笑みながら淘汰君の頭を撫でるマンダレイさんの姿に、ようやく一安心することが出来た。

「よっぽど慌ててくれたんだね」

ホッとしたと同時にもれた息に笑うマンダレイさんだけど、落ちた時には本当に焦ったのだから少しは大目に見てほしい。

ソファアーに寝かされた淘汰君の、年相応の寝顔はかつちゃんみたいな目つきをしている普段とはちがって落ち着いたものだ。

『ヒーローになりたいなんて連中とつるむ気はねえよ』

だからこそ、あの言葉が気になった。

小さいころの僕は、オールマイトに憧れていて…それはかつちゃんも、ほかの子だってそうだった。

「淘汰君は…ヒーローに否定的なんですね。昔から、僕と他の子たちはヒーローに憧れてましたから。この歳の子がそんな風なの珍しいな、って」

つい、疑問に思ってしまった。

マンダレイさんは少し顔を俯かせて、それから小さく頷いて

「そうだね。普通に育っていれば……この子もヒーローに憧れてたんじゃないかな」

「普通……？」

「マンダレイのいとこ、淘汰の両親ね。ヒーローだったけど殉職しちゃったんだよ」

「え……？」

不意に聞こえた声とその内容に、おもわず顔が強張ったのを感じた。

声の主、ピクシーボブさんは淘汰君を起こさないように気をゆつくりとドアを閉める。

その表情は昼に見た明るい物ではなく、惜しむような少し悲し気なものだった。

「2年前……ヴィランから市民を守ってね。ヒーローとしてはこれ以上ないほどに立派な最後だし名誉ある死だった。でも物心ついたばかりの子供にはそんなこと分らない」

引き継ぐように話すマンダレイさんの言葉に、いままで僕が見ていなかったヒーローの側面を知らされた。

それと同時に、こんな小さな子がヒーローを嫌ってしまった理由が分かってしまった。

『僕を置いて行ってしまった』のに世間はそれを褒めたたえ続けたのさ……。淘汰にとってヒーローは理解できない気持ち悪い人種なんだよ」

この子は、両親のこともそう思うしか無くなっているのだろうか。それはとても悲しい事で

僕は夢見ていた理想の一面しかまだ知らない事を、今日知った。

「林間合宿4」

阿鼻叫喚である。

透明なボールに入れられ崖を転がらせられる麗日に、両手を釜茹でされている爆豪。

硬化させた体を頑丈な尾白の尾で叩かれる切島に、限界まで糖分を摂取させられる砂藤。

合宿2日目、個性を伸ばす特訓を開始した1―Aだが、はたから見ればただの拷問にしか見えなかった。

その中で、小高い崖を上る特訓をしていた雨吹がなんとか天辺まで登り切っていた。

高い所から一望すればさらに分かるこの訓練の過酷さ。

上鳴によって放たれる電気がまぶしく、思わず目を背ければ――

「あら・・・緑谷ちゃん？」

自分と同じように高い場所で座禅を組み、目を閉じた緑谷の姿が見えた。

（あれも個性を伸ばす訓練かしら？）

炎も出さなければ、あの凄い動きもしていない。カエル少女はその姿に首をかしげた。



（っ、・・・繋がる。でも、狙いが合わないような、そんな感じだ）

あの日、銃で撃たれた日は全く力が使えず一時は少し焦ったけど、翌日にはパイプを繋げる感覚が戻って来て、さらに翌日には以前と同じぐらいまで力が届いたような気がした。

でも、パイプを繋げようとしてもまるで彼らの居るあの場所が存在しないかのように力が空回りする感覚だけが残っていた。

（探すんだ。・・・僕はまだ、あの人たちにお礼だつて言えてない）  
未だ力不足だと、そう感じているから確かに力を借りたいと思って  
しまう。

でもそれ以上に彼らにお礼を言いたい。

少しでも繋がって、一言伝えられるだけでも良い。

（僕がこうして居られるのは、あの人たちのおかげだから）

日が暮れるまで力を使い続けたにもかかわらず、僕はあの人たちに  
声を届けることは出来なかった。

「「いただきますーす!!」」

特訓後の晩御飯、体を動かしたわけじゃないけどパイプを伸ばすために個性を使い続けたからか普段より空腹度がもの凄い事になっていた。

スプーンを止める間もなく、皆で作ったカレーをひたすら口に運

ぶ。

かつちゃんがけつこう料理上手だったとか、轟さんの炎で飯盒が溶けたとかいろいろあったけどとにかく美味しい。

「ヤオモモがつつくねー!!」

「私の個性は脂質を様々な原子に変換して創造するので、沢山蓄えるほど沢山出せるのです」

「う〇こみてえ」

瀬呂君それは・・・。

泣き出す八百万さんと、瀬呂君を殴り飛ばす耳郎さん。

「ワタシの友達を泣かせたな・・・?」

倒れた瀬呂君へ無表情で迫る轟さんの姿に、フオローすべきかと口を開いて・・・

「何が個性だ・・・本当に下らん・・・!!」

独り言だっただろう、小さな声が聞こえた。

振り向いた時には既に声の主である小さなその背中では遠くに行つてしまっていた。

なぜか暗くても異常に夜目が利くようになったため、足跡は意外なほどすんなりと見つけられた。

少し辿れば、聴覚も子供の小さな足音まで拾ってくれる。

それらを頼りに辿り着いたのは、斜面を登った先にあるせり出した岩場。

木々よりも高いそこは景色は良いが、先ほどまでいた賑やかさからは離れてしまい少し寂しく感じてしまう。

「お腹すいたよね？これ食べなよ」

「てめエ!!なぜここが・・・!」

足跡追ってききましたと正直に答えながら、近くのちようどいい岩の上にカレーを置く。

「いいよ、いらねえよ。俺の秘密基地から出てけ」

一蹴だった。

チラリと、彼の背後の岩陰に視線を向ける。

ここに来るまで、鋭敏になった聴覚は何か液体が飛び散る音と硬い物が碎けるような音を拾っていた。

岩陰から崖下へ落ちるように流れているのは、恐らく冴汰君が個性で出した水。

夫婦のヒーローであり、冴汰君ぐらいの子供がいて・・・ヴィランと交戦し殉職したときいて予想はしていたけど冴汰君が出しただらう水をみて、確信した。

「・・・『ウォーターホース』」

「ッ、・・・マンダレイか!？」

呟くように口にした言葉に、冴汰君が初めてこちらに視線を合わせる。

「違うよ。・・・でも、そうじゃないかなって。・・・残念な事件だった、憶えてる」

そう、憶えていたはずなのに僕はヒーローの明るい面しか見ようとしていなかった。

目の前の少年のように、心を救われなかった子が居る事なんて想像もしていなかったんだ。

「・・・頭イカれてるよみーんな」

ポツリとつぶやかれた言葉。

それが、僕にはなぜかとても悲しい事のように感じられてしまった。

「馬鹿みたいにヒーローとかヴィランとか言って殺しあって、個性とかひけらかしてるからそうなるんだ。バーカ」

さつきまで個性を使っていたんだ、個性が嫌いなわけじゃない。きつと、個性によって出来たヒーローとヴィラン・・・両親を殺した社会をこんなに小さな子が憎んでしまっている。

「・・・なんだよ、もう用無いんだつたら出て行けよ!!」

『まるで救えなかった人などいなかったかのように』

死柄木が言っていた。

オールマイトだって、きつと助けられない人は居たんだ。

直接的にも、そして・・・間接的にも。

全てを笑いながら助ける僕の理想はまさに夢でしかなくて、現実は目の前で悩み苦しむ子にすら慰めの言葉をかけることも出来ない。

でも、

「・・・僕は、2人憧れてる人が居るんだ。一人はオールマイト、笑いながら誰でも助ける僕の理想像。・・・もう一人は、ヒーローじゃないけど僕をいつも助けてくれるヒーローみたいな自称復讐鬼」

きつとヒーローが嫌いな冴汰君からすればとても嫌な話だろう。

でも、なにか少しでも彼が今の苦しさから吹っ切れる手助けがしたい。

「僕にとつての原点はあの2人で・・・この前、僕の理想は彼らの真似だなんて言われちゃって悩んだ時があつてさ」

贋物の理想。偽善。

誰かになりたいと、そう思うから誰かを助ける。

助けたいと、無意識に体が動く時がある。でもそれとは反対に、オールマイトなら、彼ならこうしていた筈だと考えてしまう時が僕にはある。

彼が伝えたかったのはきつとそんな僕の心のブレ。

結局僕は、僕の想像した完璧な理想になろうとしてしまう。

「でも、いくら考えてもそれだけは否定したくないって思ったんだ。どれだけ言われても、今の僕は原点のおかげでここに居るんだから」

「それが何だって――」

「君の原点はどっ？・・・君が苦しんでるのは、嫌いな世の中と嫌いなれない原点の間に挟まれてるからじゃないのかな」

嫌いになりたいヒーローと、そのヒーローであった両親、そしてきつとあつた両親への憧れ。

それが

「——うるせえ!!勝手な想像で話すなつ、出てけよ!!」  
叫ぶように放たれた言葉。

噛み締められた唇に、何も言つてあげられない自分。

オールマイトなら上手く伝えられたのだろうかと、やはりそう考えて後悔してしまう弱さが未だ自分の中にあつた。

少年たちの苦悩の夜も、ヴィランにとってはただの殺戮の前夜ではない。

ヒーロー殺しの発したあの言葉に感化され、社会の隅で蠢くだけだった闇が暗い光に誘われるように姿を現す。

闇夜に紛れた影は10。

強い血の臭いをまとつた影達は、遠くに光るヒーローの卵たちの居場所を見つめていた。

「大変心苦しいが、補習連中はこれから俺と補習授業だ」

「ウソだろ!!?」

林間合宿3日目、訓練と夕食も終わってこれから肝試しが始まるというところが無慈悲な言葉が補習対象者達を強く打ち付けた。

とつさに逃げようとする芦戸や瀬呂だが、相澤の拘束具により簡単に拘束されてしまう。

「すまん。日中の訓練が思ったよりも疎かになっていたのでこつちを削ることにした」

「うわああああ、堪忍してくれえ!!試させてくれ!!」

暴れないと判断されたのか、唯一動かない緑谷は拘束はされていない。

口元に手をあて、なにか考え込んでいるようなその姿に相澤も足を止めて

「緑谷、早く来ないとお前も拘束するが・・・どうする?」

「あ・・・はい。今行きます!!」

彼にしては歯切れの悪い答えに、眉を寄せるのも当然だろう。

その表情が、誰かを気にしているような・・・心配しているようなそんなものであればヒーローであるイレイザーヘッドが気付かない訳がない。

だが、ついてくことに決めたのか歩き始めた緑谷。  
何かを探すように彼は遠くの小高い丘を見つめていた。

「なにが原点だ。しらねえよバーカ」

俺だけの秘密基地。

マンダレイにも、誰にも教えていない一人になれる場所。

そこで、膝を抱えて座り込みながら考えるのは緑の頭の変な奴の言葉。  
おせっかいで、急に変な事を話し始めてカレーだけ置いて行ったア

イツ。

俺の何も知らないくせに、あんなこと急に言われても俺は何とも思わないんだ。

2人が死んじやった時、名前も知らない人がいろんな事を言っていた。  
2人は勇敢だったとか、誇らしいとか。

素晴らしい人だとか、強かっただとか。知るかよ。

どれだけ勇敢で凄くても。誰がどう褒めても、……俺は傍に居てほしかった。

死んでも褒められるヒーローなんてあるから、2人とも死んじやつたんだ。

だから、ヒーローを嫌いになろうとして……それでもヒーローだったパパとママは嫌いになんてなれなくて。

2人に憧れた時の気持ちが消えなくて、ここで個性を使ったりしてしまう。

「……もう無い。みんな、アイツが壊したんだ」

絶対に忘れない。

テレビで何度も見たあの――

――唐突に、地響きのような揺れと爆音が大地と空気を通し、全身に響き渡った。

まるで昼間になったかのように、洗汰の眼前の森が火に飲み込まれていく。

「っ、なんだよこれえ!？」

幼い子供には眼前の光景はすでにひどく恐ろしい物に見えたが、事態はそれだけで収まることは無かった。

『皆!! ヴィラン二名襲来!! 他にも複数いる可能性アリ! 動けるものは直ちに施設へ!! 会敵しても決して交戦せず撤退を!!』

「なんで、……ヴィランなんて、ここに居るはずなのに……っ」  
両親を殺したヴィランという存在は、少年にとっては何よりも憎く



何よりも恐ろしい存在であった。

震える体を何とか立ち上がらせ、それでも脳に響いたマンダレイの  
声に従い歩き出そうとして――

「おう……いたいた。まあ待て、逃げんなよ子ども」

「え……あ……」

遙か下方。

崖の下から、巨大な影が跳躍し冴汰の眼前へ降り立つ。

黒いマントに身を包み、顔をマスクで隠したその人物に冴汰は恐怖  
に表情を歪めながら後退り――

『冴汰、聞いてた!!? すぐ施設に戻って! 私、ごめんね知らないのあな  
たがいつもどこへ行ってるか……。ごめん冴汰! 助けに行けないす  
ぐに戻って!!』

後悔、焦燥をにじませたその言葉を聞く余裕も今は無い。

「見晴らしの良いところを探しに来てみれば、どうも資料になかった顔  
だな」

本物のヴィラン。子供であろうと、子供だからこそ伝わる目の前の  
人物の異常。

「なアところでセンスの良い帽子だな子ども。俺のこのダセエマスク  
と交換してくれよ」

目の前のコイツは、自分を同じ人間だと思っていない。

まるでおもちゃを見ているかのような、そんな空気に

「う、あ……」

もつれそうになる足を動かし、背を向けてただ逃げ出す。

それしか自分が生きる方法は無いと、本能的に足が動く。

だが、既にヴィランの巨体は冴汰の眼前に回り込んでいる。

壁を蹴り、回り込んだ男の左手には砕けたマスクの欠片。

その左腕を覆うように、赤い何かが生き物の様に生えていく。

その腕をしかし、少年は見えてはいなかった。  
マスクが外され、露となった素顔

「ウォーターホース・・・素晴らしいヒーローたちでした。しかし二人の輝かしい人生は一人の心無い犯罪者によつて断たれてしまいました」

癖のついた金色の短い髪。

「おまえ・・・!!」

「犯人は現在も逃走を続けており警察とヒーローが行方を追っています。個性は単純な増強型で非常に危険です」

腕を覆いきった赤い何か。

木の幹のように太く変化したその腕を、男は眼前の少年へ振り下ろすために背後へ振りかぶる。

「この顔を見かけたらすぐに110番及びヒーローに通報を。なお、現在左目に」

吊り上がった右目。その対となるはずの左目があるべき場所には牙のようなペイントの義眼が押し込まれ

「ウォーターホースに受けた傷が残っていると思われる」――>

―― 巨大な傷が左の顔面を覆っていた。

「パパ・・・!! ママツ・・・!!」

振り下ろされる巨腕。

圧倒的な質量と速度を前に、少年の体に待ち受けるのは死しか存在しない。

そんな中で、彼に出来たことは一つしかなかった。

いまはもう居ない、彼のヒーローへ助けを呼ぶことだけ。

当然、彼のヒーローは来ない。

その頭部へと無慈悲にも拳が振り下ろされ―― 砕けた地面と共に鮮血が舞った。

「……あ？」

振り下ろした拳の感触に傷の男——〈血狂い〉マスキュラーは首を傾げる。

血の臭いはしたが、確実に潰した感触がその手に無いのだ。

さらに、狙った位置から大きく逸らされたようなそんな違和感がある。

拳撃により舞い上がった砂塵。

その中に、立つ影が2つ。

小さな影と、それを庇う様に立つくらいか背は高いがガキと言ってもいい背丈。

「んん？……お前はリストに載ってたな。面白え、いま何しやがったんだよ？」

砂煙が晴れ、見えた姿。

緑の髪にそばかす。恐らくマスキュラーの腕をいなした左腕は、僅かに皮が裂け出血している。

疑問を浮かべた声を無視しながら、荒れた心臓の鼓動をなるべく抑え緑谷は必死に考える。

眼前のヴィランの力量は、洗汰を守りながら戦えるのか——視線は洗汰へ自然と向いてしまい、自らの考えの間違いに気付き首を振る。

（……できるかどうかじゃないツ!!やるんだ!!）  
やるんだ

（言え!!安心させろ!今は真似でも良いツ、今だけは!!）

「ハッ……」

「あ?なんだよ、口元笑ってんぞ。頭がおかしくなったんじや——」

「クハハハハハハハッ!!」 もう大丈夫、俺が来た!!」  
眼前のヴィランなどではなく、背後の少年を安心させるために。  
高らかに、けたたましく笑って見せた。

## 運命の歯車

「ヴィラン襲撃1」

『相澤先生。すみません、どうしても気になることがあって』

補習へ連行される中で、洗汰の事が気になり、その声をかけて良かったと、緑谷は、今この状況になって心の底から思う。

『良いぞ。・・・そのぶん補習は2倍だ、覚悟しておけ』

意外なほどすんなり(?) 頷いてくれた先生には感謝しかない。

(あの個性、赤い・・・筋肉? ニュースで見た時は単純な肉体強化って話だったけど・・・)

相対するヴィランの顔に、緑谷は憶えがあった。

ウオーターホースが殉職したあの事件の犯人、その証拠に顔に大きな傷跡が残っている。

ならば背後に庇う少年は、両親を殺した男に命を狙われ今はどんな気持ちでいるのか。

小さな子供にはあまりに理不尽な運命。

だが、だからこそ今自分は彼を安心させる必要がある。

笑って、大丈夫だと口にして。

「はあ? オールマイトのモノマネかよ、全然似てねえな! 正義面して出てくるところはそっくりだけだよ」

マントから出た男の右腕から、ズルリと先ほどの赤い筋が姿を現す。

その光景に、怯えた様に震える洗汰の視線を遮るように立ち塞がりながら、左の手の平を体の前に置き腰を低くする。

(さっきの攻撃、受け止める事はできないけど受け流すことなら出来た。隙を見て、筋の無い場所にヤンキーパンチを打ち込めればッ)

勝機はある。

「で、緑谷って奴だろおまえ? お前だけは何があっても殺しとけって

お達しだ。悪く思うなよ」

完全に男の右腕を筋が覆い尽くす。

まるで鎧のようなそれを振りかぶりながら、マスキュラーは口元を半月の様に吊り上げ笑う。

左腕で自らの纏ったマントを剥ぎ取りながら、その義眼が鈍く光を放ち、

「——じっくりいたぶってやつからツ血を見せろ!!」

跳ねるように飛び上がったその巨体が、こちらへと距離を詰める。

だが、その速度はまだいくらか速い程度。

着地と同時に赤色の巨腕が、風を切り裂きながら迫る。

(でもッ、まだ目で追える!!)

顔に向かい、迫る巨大な腕に添えるように左手を当てそのまま右方向へと押し流す。

「・・・ッ、さっきの奴か——!!」

顔のすぐ右脇を通り過ぎる拳と、楽し気なヴィランの声。

それを無視し、左足へ重心を移しながら右足を渾身の力で振り上げる。

「——カ、ハッ・・・!?!」

無防備なマスキュラーの胴体へ、杭のように膝が撃ち込まれ——

——予想外の一撃にその口から空気が一気に吐き出される。

そのまま右足を伸ばし振り抜けば、その大柄な体は地面に激突しながら先ほど立っていた位置よりも後方へと転がっていく。

「っ、出来た・・・!!」

(やれる! 目で追える以上、行動の予測もつく)

何より、背後の少年から遠ざけられた。

視線を向ければ、その表情もヴィランの姿が離れたことで先ほどまでの絶望は見当たらぬ。

（このまま抱えて逃げれたらっ。でも・・・）

両足へ、力を込め一気に倒れたマスキュラーへと駆ける。

ほぼ同時に跳ねるように立ち上がったその姿は、腹部を押さえいている様子は見られるが追って来れない程のダメージを受けた様子は無い。

「んだよさっきのは!! ケンポーって奴か緑谷あツ面白れえ!!」

（見えてるところだけじゃない。たぶん、さっきの一撃もとっさに筋を張り巡らせたんだ）

再び飛び掛かるその姿に、両肩の力を抜くように大きく息を吐く。

手で受け流すのはこの力を前にすれば悪手だ。

背後に守るべき相手が居ない今――

剛腕が振るわれる。

既に両腕は筋により赤く染まり、その速度は空気を押しのけ風圧により緑谷の体が揺さぶられる。

「ッ、当たらねえ!! 当たれよッ、早く俺に血イみせろ!!」

揺れるように避ける上体に対し、足は異様な速さで動き続ける。

紙一重で躲し続けるその姿に苛立った男は、左足で地面を蹴り――  
筋によって強化された右足を不意打ち気味に蹴り出す。

ニヤリと笑みを浮かべた表情は、緑谷の手があつさりとその足を横へ押し流してしまえば舌打ちをしそうなほどにしかめられる。

対して、拳を握りしめたまま緑谷は腰を僅かに落とす。

振りかぶった拳に対し上体を逸らし、齒は碎けるほどに食いしば  
る。

ドッ!!と左足を地に打ちつけ、振るわれた拳はがら空きのその胴体へ吸い込まれるように到達し、

鈍い音。確実に通ったはずの拳は硬い何かで押しとどめられる。

「無駄だッ、さっきより筋肉増量しといたからよ!! 残念だったな緑谷ア!!」

無防備な緑谷の体へと巨大なその右腕が再度、叩き潰すように振る

われ――

「……にッ……貫くように!!」

腹部に突き刺さった拳の勢いは未だ衰えていなかった、まるでドリルのように捻られたその拳が、マスキュラーの筋繊維をこじ開けるようにめり込んでいく。

「!!?」

「ああああああ!!鉄拳ッ……聖裁!!」

貫くように振り抜かれた拳から、今度こそ確かな手ごたえが伝わってくる。

地に何度も打ち付けられながら、今度こそ受け身も取れず飛んでいくマスキュラーの体は崖の淵でようやく動きを止めた。

「っ……す……い……」

息を整えるように胸を押さえながら、こちらへ歩いてくるその姿に洗汰の口から思わず声が漏れる。

あのヴィランが現れた時、その姿は決して倒れることのない化け物のように思えた。

彼が助けに来てくれた瞬間も、僅かな安堵と共に決して助かる事はないという絶望感が胸の内には未だ大きく渦巻き続けていたのだ。

だが今、倒れているのはヴィランで立っているのは緑髪でそばすのヒーロー。



絶望を晴らすには十分な光景に、ようやく口元に安堵の笑顔が浮かびかけ――

地面が、軋む様な音を立てた。

次いで何かが砕けるような音と、爆弾が弾けたかのような耳を塞ぎたくなるほどの爆音が届いて。

近づいて来ていた筈の緑谷の姿が掻き消えていた。

残るのは、離れているはずの洗汰の体まで吹き飛ばされそうな衝撃波と赤い巨体。

「イイねえ、悪くないパンチだツ!! 普通なら内臓持つてかれてたぜ。．．ほら、早く立てヒーロー気取り! 遊びは始まったばかりだツ!!」

上半身全てを真っ赤な筋で覆い尽くし、口元から垂れた胃液を拭いながら獣のように叫ぶ男の姿がそこにあった。

久しく感じる事の無かった痛みを訴え続ける、筋で隠された腹部へと手を当てながら、マスキュラーは高まり続ける高揚感を抑え切れな  
い。

「肉体強化の個性にしちや微妙な出力だ。そいつを補うためにさっきのワザを練習したんだろ？ 使えねえ個性持ちのわりに良い発想じゃねえか」

だがそれも無意味だったけどな。と、全力で殴り飛ばした先に嘲るように声を投げかけながら、何かを探すようにポケットに左手を入れる。

ボロボロとそこから落ちるのは様々な、悪趣味なペイントを施された義眼。

「遊びのつもりだったけどヤメだ!! だってお前強いもん!」

ようやく目当ての物を見つけたのか、右手は今入っている義眼を取り出し——強く握りつぶす。

代わりにその空洞に埋め込まれたのは深紅の瞳が描かれた義眼。

「——こっからは本気の義眼だ」

満足げに頷きながら、視線を向けるのは岩壁に出来た何かが激突したかのような大きな窪み。

その下に倒れ込む緑谷の体は痛みに耐えるように丸められている。「さっさと立てよ。そうしてくれねえと、他のオモチャに血を出してもらわなきゃいけなくなるだろう?」

一步、マスキュラーが洗汰へと足を踏み出す。

怯えた様に、後退る小さな体に嗜虐心を感じながら——グルリと首を真横へ向ける。

「だよなあ!! そうくるよなあツ、緑谷ア!!」

額から血を流し、衝撃に未だ目を揺らしながら迫る緑谷の姿を残った右目が捉えた。

既に先ほどの2倍に膨れ上がった右腕を、容赦なく叩き潰すために

その体へ振るう。

対する緑谷は、おぼつかない足で躲さず腕でいなすことを選ぶ。

赤い巨腕に、先ほどまでの光景の焼き直しのように左手が添えられて――

目を見開いた緑谷が、残っていた右腕を左手の補助のように押し当てる。

(さっきまでと違うッ・・・ま、ず――!!?)

押し流せない腕が、脇腹の一部をかすめながら通り過ぎていく。ただそれだけで彼の体は数メートル先へと吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられる。

転がったその隙をヴィランが逃すことは無い。

両手を組み、筋を絡め作りあげられるのは巨大な赤色の鈍器。

「俺の個性分かるかッ!!? 《筋肉増強》、皮下に収まんねえ程の筋繊維で底上げされる力ッ、速さッ!! 何が言いてえかって!? 自慢だよ!!」

強靱なその足で高く宙へ跳び上がりながら、体を反らし巨大な鈍器を大きく振り上げる。

「――つまりお前は俺のッ完全な劣等型だ!!ちまちまケンポーなんて覚えたテメエの今までの努力はッ、ただの無駄だったんだよッ!!」

大地を穿つように、赤色の鈍器が撃ち込まれた。

砕け散る地面、辺りへ走る亀裂。

頑丈な筈の地面は砕け、噛み合わないまま隆起し――圧倒的なその衝撃に、大地の一部が崩落した。

衝突の寸前、地面を四肢で跳ね除けるように弾いて跳んだ体を容赦なく、砕け散った地面と衝撃が打ちすえる。

あと一瞬、目蓋をほんの一瞬でも遅く開いていたら体は潰されていた。

その事実には、ゾワリと背筋が凍りつくのを感じた。

眼前のヴィランはプロヒーローを殺した、紛れもない殺人者であり悪なのだと脳が理解する。

ヒーローを目指す学生とはいっても学生である。

今までにないほど近づいた死への恐怖に怯まない訳がない。

それでも、絶え間なく血が流れだす頭部を押さえ、俯く顔を上げる。眼前のヴィラン。

その後方で、涙を流しながらこちらを見つめる姿を今は見つめる。守りたいもの。

オールライトならこんな奴は簡単に倒して、きっと彼も笑顔に出来たはず。

——ここに居たのが僕じゃなくてオールライトなら、洗汰君が殺されることも無いのかもしれない。

自分の弱さで、助けるべき誰かが死ぬ。

その恐怖の方が、迫る自らの死より何倍も恐ろしい。

『あの平和の象徴ならばこう動くだろうという考え。誰かを救えると信じ続ける無謀な理想を動かしていることを否定は出来んだろう』

ただ、その何十倍も。

「あ・・・あああああああああツ!!!!」

この場で、もし助けられなかったらなんて・・・無謀な理想だから動けないなんて、そんな自分になることの方が嫌だった。

霞む意識と、燃えるような体の中。

どこかなど分からない胸の奥で―――――軋んだ歯車が動き出すような音が聞こえた気がした。

「なんでッ・・・なんで!!死んじやうつ・・・これ以上たたかったら、おまえっ・・・!!」

血液をまき散らしながら戦う姿に、涙が落ちる。

少し、話しただけの子供である自分のためにどうして緑谷がそこまでするのか、彼には分からなかった。

化け物の腕が振るわれるだけで、受け流すことすら困難な緑谷の体は簡単に吹き飛ぶ。

それすら紙一重で、一歩間違えばその体は簡単に肉塊に変わってしまう。

それでも、吹き飛ばされたそばから姿勢を立て直し食らいつくように化け物へと向かっていく。

それでも、彼があんなに必死に何度も向かう理由は分かっていた。自分へあの化け物が襲い掛からない様に、注意を全て引き寄せて絶え間なく戦っているのだと。

(オレが、居るからっ・・・)

既にマスキュラーの拳は、緑谷の受け流しなど容易く破れるほどに強化されている。

同様に強化されているその足を使えば、腕一本で手いっぱい緑谷など簡単に打ち倒す事は出来るはずだ。

(遊んでるんだっ・・・)

何度も倒れる彼の姿が、両親の姿に見えてしまう。

(パパとっ・・・ママもっ!!)

ああやっていたぶる様に殺された、そう思ってしまう。

溢れ止まらない涙に、強く唇を噛んだ。

「オラッ、次はどうすんだ!!」

圧倒的な質量で振るわれた腕を何とか両腕で受け流し——弾  
き飛ばされる。

それでも、足を地面になんとか押し当て姿勢を立て直して顔を上げ  
続ける。

（洗汰君に注意が向かないようにッ!!）

今はただ、引きつけるしかない。

足を踏み出し、狙うのは唯一筋に覆われていない頭部。

以前の物間との対決で脳を揺らしたように、弱い体の内側を攻めれ  
ばいかに筋肉があらうと関係ない。

無謀な突撃で思考が落ちていると、そう敵は考えている。

今がチャンスだと今までの直線的な動きから、フェイントをかける  
ためにクロスするように右足を出して

——膝が、カクンと力なく曲がった。

限界を迎え始めていた体に起きた一瞬の不具合。

（な……んで!? 動けッ、立てよッ!!）

「終わりかッ!!? なら血撒き散らして、死ねエ!!」

拳が迫る。

肥大化した巨腕が、その頭部を粉碎しようと振るわれ——

マスキュラーの体を叩くように、大量の水が背中に浴びせられる。  
「ウォーターホース・・・パパ・・・ママもそんな風にいたぶって殺したのか・・・!!」

動きを止めたマスキュラーが振り向き、赤い義眼が少年の顔を見つめる。

意外な物を見つけたとばかりに表情を変えながら、緑谷に振り下ろしかけていた腕を引き足の向きを少年へと向けた。

「ああ・・・？マジかよ、運命的じゃねえの。ウォーターホース、この俺の左目を義眼にしたあの2人だ」

歩み寄ってくるその化け物の姿に、冴汰の体は恐怖に震えるが今はただ激情にまかせて口は動く。

視線の先には力が入らないのか、崩れ落ちるように倒れた緑谷の姿。

「おまえのせいで・・・おまえみたいな奴のせいで!! いつもいつもこうなるんだ!!」

「・・・ガキはそうやってすぐ責任転嫁する。俺だって別にこの眼のこ」と恨んでねえぞ？俺は殺りたいことやって、あの2人はそれを止めたがった。お互いやりてえことやった結果さ」

蠢くように、両腕の筋肉が膨れ上がり始める。

既に、目の前にまで迫ったその異様な姿と自分を見下ろす赤い瞳に冴汰の体が一步後ろへさがる。

本当に理解できないものの存在に、全身が震える。

「悪いのは出来もしねえことやりたがってた—————テメエのパパとママさ!!!」

赤い瞳が!! 冴汰の全身を縫いとめる。



小さなその体を前に、無慈悲に巨木のように太く肥大化した腕が振り下ろされた。

いくら力を入れても、手足は応えてくれない。  
僅かに動く指を使い血を這うように動くが、マスキュラーの背中はずいぶん遠い。

（助け・・・たいのに・・・ッ）  
力が足りない。

こんなことは有つてはいけなないと、強く心は燃え盛っているのに血を流し続けた体は逆に冷たくなっていく。

（無謀な理想？・・・諦めれば良かった？諦めたらここには他のヒーローが居て洗汰君を助けてくれた・・・？）

有り得ない想像。

だが、守りたいものを守れなかった時。

抱いていた理想が到底かなわないものだと思った時。

その絶望は、何よりも重く突き刺さる。

（・・・うるさい。そんな想像、何の意味もない!!いまここに居るのは僕でッ、守りたいのも僕で理想なんて今は関係ない!!）

折れかけた理想の代わりに、自分の想いを立てる。

（助けたいから助けるんだッ、守れないじゃない・・・守るんだ!!全力で!!全てを出し切って!!）

動かない体は切り捨てる。

全力で振り絞るのは、今は意味を成さない自らの個性。

伸ばすが、空まる。  
場所が定まらない。

マスキュラーと洗汰の会話が耳に入る。それほどの距離に2人は近付いてしまっている。

（どこだよッ・・・お願いっ、今だけでいいんだ!! 一生、力を借りなくていい、今だけ!!）

無意味に手を伸ばしながら、祈るように心の中で叫び、

重く、軋むような音が聞こえた。

金属が擦れあうような、まるで大きな歯車が回り続けるような音。その音に目を見開き・・・導かれる様に手を伸ばす。

『――叶わないほどに無謀な理想は自らを滅ぼす。この場を切り抜けてどうする、助けられない人間などこれからいくらでも現れるだろう』

歯車の音に混じり皮肉気な、でもなぜかこちらをいたわるような声が聞こえる。

こうして、今になってわかる。

笑いながら全てを助けるなんてのは僕の理想で、きっとオールマイトにだって助けられない人は居た。

「でもッ・・・助けられないから助けないなんて嫌なんだッ!!」

誰かを救えなかった時、自分は折れてしまうのかもしれない。

それでも、

「ヒーローはッ・・・僕は!! 助けたいから助ける、その気持ちだけは贗物なんかじゃない!!」

四肢に力を入れ、動かないはずの四肢を無理やり動かす。

強い痺れが、体がもう限界であることを伝えてくる。

それでも、足は地を踏み軋みを上げながら体が持ち上がっていく。  
持ち上がった視界の先で、マスクユラーがその腕を振り上げている  
のが見えた。

その光景に、足を踏み出し——無慈悲にもほぼ同時に赤い腕が  
振り下ろされ

『だ。間違えず復唱しろ、後は私がサポートする』  
脳裏に響いた声に疑問を抱くことは無かった。  
ただ信じてとも良いと、その声音から感じたのだ。

故に、迷い無く〈彼〉の言葉を口にする。

「――トレース、  
投影、開始」

体の中で、巨大な歯車が一つ噛み合った音が聞こえた。

## 赤い背中

「ヴィラン襲撃2」

「血イ見せろおおおお!!」

無慈悲に振り下ろされた拳が洗汰の眼前に迫り——背中、筋で覆われた肩甲骨の辺りに何かが衝突した衝撃で真横へと逸れていく。

「・・・ああ?」

空を切ったその拳の余波で転がる少年などもう興味は無いとばかりに、獣のような顔つきをいぶかしげなものへと変える。

背中へと手を回しその何かへと手を当て、指先に走る痛み在眉を寄せる。

（刃物?あのボロ雑巾が投げやがったのか?）

緊急用にそういった小道具を隠し持つヒーローは多い。

だがそういった小道具を最後に出すヒーローは既にほかに打つ手がないと、そう自ら言っているに過ぎない。

苦し紛れの一撃と、そう笑い飛ばそうとして——

「——はあ?」

今度こそ驚愕ではなく、困惑した様な声が口から漏れる。視線の先に居たのは確かに先ほどまでいたヒーローの卵。だが、先ほどまでとの違いが多く存在する。

「実は取り寄せの個性だった、とかか?武器使うならもっと早く使えよなあ、緑谷!まだ楽しめそうじゃねえか!!」

「——随分と頭が回るじゃないか。申し訳ない、てつきり脳の中まで個性通りなのかと思ったよ」

挑発的な口調。

注意は集めようとしていたが、ここまで煽るような口調では無かったはずだ。

そして、その左手に握られた弓と反対の手には短刀のようなサイズ

の刃物が握られている。

服装も変化しており、胴には黒の鎧が見えるが羽織る様に・・・というよりも縫付けてあるように赤い外套を羽織っている。

特徴的な緑の髪はオールバックにまとめられている。

顔を見なければ別人と間違うその姿。

しかし、マスキュラーにとってそんなことはどうでもよかった。

壊れかけのオモチャが勝手に直り、立ち上がる姿に喜びしか湧いては来なかった。

「イイぜ!!面白いじゃねえかつ、その小さいナイフで何が出来るか見せてくれよ!!」

地を蹴り碎き、マスキュラーが跳ぶ。

距離を詰め、腕を振るおうと右肩を上げ——緑谷が手に持った、自身の前腕ほどのサイズの短刀を弓につがえ、小さく息を吐き矢のように放つ。

「スゲーな、どうやってんだよソレ!!」

対するマスキュラーは構わずそのまま直進する。

腹部を狙ったその刃は——しかし、その分厚い筋繊維に阻まれ、再使用を封じるようにその中に飲み込まれてしまう。

「これで矢はもう無えなあ!!」

拳が、振り下ろされる。

小柄な体を簡単に粉碎する力と、目で追いきれないほどの速さをもつ拳が振るわれ——身を屈めた緑谷の頭上を容易く通り過ぎていく。

（見切っただとツ、さっきまで手で押さえるのが精いっぱいだった筈じゃ・・・ツ）

「あいにくと筋力には自信が無くてね。代わりと言っては何だが、少しばかり手品をお見せしよう」

だが、武器は無い。

そう笑みを深めた巨体の下で、小さく緑谷が何かを口にする。灼熱感。

腹部に感じた痛みには視線を下げれば、左右に奇妙な形の剣を持つ少年の姿。

その白と黒の双剣に腹部を筋繊維ごと切られたのだと気付けば、激高しやすい脳に血液が一気に上り詰める。

怒りに任せて左右の腕を組み、真下へ振り下ろすがすでにそこに緑谷の姿は存在しない。

体を回転させ、迂回するようにマスキュラーの背中へ回り込めばその背中へと二本の剣を振り下ろす。

（ッ、……させるかよオ!!！）

背中中の筋繊維が断ち切られるのを感じた瞬間に、両腕を止め背中に生み出す筋量を増やしていく。

振り下ろされた双剣は容易く筋繊維の中へ飲み込まれ、無手になったはずの背後の敵を振り払うように腕を振るう。

だが再び、その腕は霞を掴んだかのように空振る。

（チッ……やつぱ取り寄せか。呼ぶ武器が無くなるまで付き合うのはやってらんねえな）

振り向いた先で、あの小さな子供を守る様に立ち塞がるその姿に目を細めた。

『・・・一つ良いだろうか。なぜ剣ではなくナイフになっているんだ？  
靈基を預けた以上、本来の使い方と違う事は理解している筈だが』  
〈彼〉の時ほど強い力が出ないが、代わりに目が凄いい事になっている。  
動体視力、だろうか。さつきまで目の前まで見続けてやつと合わせ  
た動きが、動き始めから最後までよく見え、躲す事が出来る。

（えっと・・・さすがに剣は殺傷力が高すぎるかと。それよりも、あな  
たは―――）

『靈基を受け渡した以上、あまり長くは留まれない。伝えるべき事の  
み伝えさせてもらおう。・・・まず、今回の個性消失はあの銃弾によ  
るものではない』

（・・・え？　でも、それならどうしてッ）

『正しく言えば、あの弾は確かにお前の個性に傷をつけたがパイプが  
壊れたのは別の話だ。弾の影響が個性に及んだ瞬間、パイプは自壊を  
始め崩壊し、今も原因の究明に君の相棒は大忙しだ』

銃弾は関係が無かった。

それなら、近くにもう一人・・・パイプを壊すような誰かが居て僕  
はその個性にやられた？

『目的も方法も分からないが、気をつけるといい。外敵か、内敵かいず  
れにせよまともな者の犯行ではない。おぞましい計画の一端の可能  
性であることすら有り得るだろう』

内側から、声の主の存在が薄れていくのを感じる。

この人の助けが無ければ、洸汰君を助けることなどできなかった。

だから

（・・・ありがとう、ごさいます!!）

お礼の言葉は、いくら言っても言い足りない。

でも、多くの言葉を重ねるよりも一言でいいからこの気持ちをぶつ  
けたかった。

『・・・なに、大した事はしていないさ。これからは君が戦うんだ、私  
の助力など大した意味もない』

霊基とは座に登録された英霊の記録であり、その存在全てである。巖窟王は緑谷出久を7日間の地獄で試しその霊基を譲った。

己の力、技量・・・人生においてあらゆる努力によつて得た力を赤の他人へ譲る者など多くは存在しない。

故に、そのようなことが出来る者は一部のお人よしか、狂人か——  
——正義の味方なのだろう。

「取り寄せの個性だろうが、俺が取り上げている間はどっかから取らななきゃならねえな!!」

マスキュラーの腕が、再び緑谷の体を狙う。

一撃、ただ一撃入れてしまえば相手の体を四散させることが出来る。

そして相手の武器は僅かに腹部まで到達したが、刀身の短さからこちらに致命傷を与えることは出来ない。

空ぶった腕を、下方向からいつの間にか手に持っていた白黒の双剣が切り上げる。

その刃は容易く太い筋繊維を両断し——しかし、蠢く筋に再び飲み込まれてしまう。



先ほどから繰り返される光景。

だが、目の前の少年が再びいつの間にか二振りの剣を手にとった所で僅かに違和感を覚える。

いかに剣の貯蔵があろうとも、その数には限りが存在するはずだ。

その数が無意味に減り続ければ、多少の焦りも見えてくる筈。

にもかかわらず、その表情に焦りなど微塵もなくただ淡々とその剣を振るっている。

「どうした？ 考えるとはらしくない。力任せの特攻が君の得意分野のはずだが」

水を差すように挟まれたその言葉に、違和感がさらに積み重なっていく。

この煽るような言葉も、なにかから気を逸らそうとしているとしか思えない。

「良いんだよッ、こまけえことはどうでも!! 楽しく個性使って、楽しくぶっ潰す!! それだけできりやあ問題ねえ!!」

だが、己の快楽に僅かにあつた冷静な思考は簡単に流されていく。両腕を振り上げ、組み合わされた腕は筋によって再び絡み合い一つの鈍器として形成されなおす。

大地を砕いた凶腕が、再び緑谷へ振り下ろされようとして――

ズッ、と。

繋ぎ合わさったその両手の間に、銀色の剣のような矢が突き刺さり

「こんなもんで止まるかよ!! さっさと血イ撒き散らして、死ねえええッ!!」

何の障害にもならないと、その腕は鈍る事無く振り下ろされる。

狂気に笑みを深め、撒き散らされる血に心臓を高鳴らせたマスクユラーの顔を、緑谷はただ何もせず見上げ――

マスキュラーの背中——肩甲骨の直上で、爆炎が上がる。

「ッ!? 何が——!!?」

吹き飛ぶ筋繊維、そして背中を覆う熱量に体を思わず丸めれば、その体を黒いブーツが突き放すように蹴り飛ばす。

「——決めるとしよう」

背後へ倒れていくように離れていくその巨体に、緑谷は口元へ初めて笑みを浮かべる。

どこまでも爽やかなその笑顔のまま、告げるのはこの戦いを終わらせる最後の台詞。

「——ブローケン・ファンタズム壊れた幻想。健気にも大事に剣を回収していてくれ

て助かったよ」

マスキュラーの背中、腕、腹部に張られた筋肉の鎧の中で投影された剣が熱を帯びる。

先ほどの爆発の原因、それによりやく気付き筋繊維を緩め剣を落とそうとするが間に合うはずもない。

「ッ、ま——!!」

夜空を照らし切るような閃光が、放たれる。

爆炎はマスキュラーの筋繊維を容易く弾き飛ばし、その肉体を露わ

にしていく。

そして同時に、圧迫された筋繊維の中で起きた爆発の衝撃波は容赦なく彼の肉体を貫き、打ち付ける。

波紋のように広がる衝撃は、脳を打ち揺らし——人の姿へと戻ったマスキュラーの体は、ゆっくりと地面に倒れ伏した。

淘汰の視線の先で、両親を殺したヴィランがゆっくりと倒れていく。

それを成した背中が、涙の止まった瞳にしっかりと映っている。

赤い外套に身を包んだその後ろ姿。

急に恰好は変わって圧倒するようにヴィランを打ち倒したが、目を凝らせばその髪には血がべったりと付着しており、手足には無数の傷跡が刻み込まれている。

「淘汰。あんたのパパとママ……ウォーターホースはね、確かにあんたを遺して逝ってしまった。……でもね、そのおかげで守られた命が確かにあるんだ」

脳裏に響くのは、両親が殺され何も信じられなかった時にマンダレイが話してくれた言葉。

「へあんたもいつか・・・きつと出会う時が来る。そしたらわかる」  
あの時はただ、自分を励ますための誤魔化しだとしか感じなかった。

こいつもまたヒーローで訳が分からない考えの持ち主なんだと、そう思ってしまった。

唐突に、目の前の彼から青い光が飛び散る。

ほどけるように赤い外套が消え去り——現れた背中。  
血だらけで、晒された両腕は傷のない場所を探す方が困難で。

「なんでっ・・・何も知らないくせにっ」

「へ命を賭してあんたを救う。あんたにとつての——」

目の前の後ろ姿と、先ほどまでの命をかけてヴィランへと食らいついでいく姿が重なる。

殴り飛ばされて、いたぶられて、それでもただ自分にヴィランが手を出さない様に必死で喰らい付いて行ったあの姿。

さっきの大男に比べれば、小さく見えるその後ろ姿から目が離せない。  
い。

小さく、大きなその背中に安堵と共に強い——名前など分からない熱い気持ち溢れてくる。

その後ろ姿はまさに少年が憧れた両親の後ろ姿と同じ。

命がけで助けてくれる——

（僕の——・・・ヒーロー）

## 交戦 混戦

「ヴィラン襲撃5」

「くっそ・・・!」

「勝紀ちゃん、これ使って!」

片手で口を塞いでも指の隙間からガスが入って来やがる。

隣から伸びてきた手からハンカチを受け取って口に当てたら少しはマシになったが、まだ臭いはしやがる。

丸顔女・・・麗日とペアになって中間地点を越えた辺りで妙なガスが漂い始めて、妙な臭いだなんて考えてたらすぐに意識が朦朧としてきやがった。

とつさに軽い爆破で散らしはしたが、全部消し飛ばそうにも森のど真ん中なせいで大きな爆発は起こせねえ。

「・・・麗日、重かったら言え」

「ううん。勝紀ちゃんはヴィランの警戒をお願いつ。私の個性じやきつと一瞬遅れちゃう」

ガスでやられたのか、ここに来る途中で拾ったB組の男を麗日が個性で浮かせて運んでいる。

この襲撃、目的は分からねえがヴィランの数は最低2人以上。

猫ヒーローのテレパスの言うように交戦中の広場は避けて施設に向かうのが今の最善か。

「・・・みんな、大丈夫かな。エド・・・デク君、個性今は調子悪いって言ってたよね?」

「知るかよ。アイツは心配するだけ損だ。・・・後ろから来る奴らはさっきのラグ・・・なんとかつープロに任せる。俺たちが戻ってもガスにやられて足引っ張っちゃう」

「なら、森を斜めに突っ切って・・・はいけない、か。暗くて全然道が分からないもん。でもこのまま進んだら、道沿いにヴィランが待ち伏せしてるかも」

「だろうな。後ろの奴が俺達の行動範囲を狭める役ってんならこの先

に居るはずだぜ」

「・・・追い立てた私たちを狙うヴィラン・・・が？」

悪い予想が当たらなけりやな。

んな事を考えながら、歩き続けて・・・ようやくガスが無くなった辺りで一瞬、視界の先で何かが動きやがった。

屈んで・・・いや、這ってやがるのか？

それに、あの足元――！

「おい、俺らの前・・・誰だった？」

頭までかぶった黒い服に、棘の付いたバンドを幾つも巻いた男。

「きれいだったよ　ダメだ仕事だ　見とれてた　ああいけな  
い・・・」

やっと見えたのか、麗日の奴が悲鳴をこらえるみてえに口元を押さえてやがる。

「っ・・・常闇君と、障子・・・くん」

こっちの声か、それとも寄って来てたのにもともと気付いてやがったのか、立ち上がった奴の足元には小さな血だまりが広がっている。

その中に、ボンと誰かの手が落ちてやがる。

「きれいな肉面　ああもう誘惑するなよ・・・」

障子も常闇も体育祭で見た限りじゃ、簡単にやられる奴らじゃ無かったはずだ。

あいつらのどっちかがこの短時間に腕を落とされた。

「仕事しなきや」

振り向いた奴の口は、服から伸びたベルトで唇がめくられて歯茎が剥きだしになっている。

その見た目もだが、空気もやべえ。

奴に背中を見せれば、すぐにでも誰かと同じように手を落とされる、そんな予感がしやがる。

「交戦すんな、だと・・・？」  
んなモン、無理だろこの状況ッ！

（あのオカマッ、虎のキャットコンバットをさばき切るなんて・・・ッ。  
目の前のコイツだけでも面倒なのに・・・！）

広場に響き渡るのは、虎による拳撃とそれを受け止めそして打ち返されるサングラスの男の掌底の音。

プッシーキャッツの中で近接戦闘を担当する虎が有効打を未だに与えられない現状に、マンダレイは襲撃者達の技量の高さを思い知らされる。

以前聞いた、雄英襲撃とは違う悪を成して指名手配されている本物のヴィラン。

（お願い、無事でいてよッ。みんな、淘汰・・・!!）

この広場に居るのは二人だが戦闘音は遠くから未だ聞こえてくる。  
そんな、守るべき学生と小さな少年の事が・・・一瞬脳裏に浮かび

距離をとっていた筈のトカゲのような、爬虫類染みた顔と鱗肌のヴィランがこちらへと一息に距離を詰めてくる。

「しつこっ——」「——いのはお前だッ、ニセ者！」

サバイバルナイフや鉈、およそ刃物とされるものを何十本も束ねべルトで固定した様な武器を振りかぶり爬虫類男——スピナーは跳ぶ。

マンダレイの頭上へ、その巨大な武器が振り下ろされる。

元が小型の武器の集合体とはいえ、金属の塊と考えればその重量は一人を潰すには十分な鈍器となる。

「とつとつ、シुकセーされちまえ——ッ」

幾つもの刃で空気を切り裂きながら、マンダレイの頭部に迫ったソレは——

「——クハハハハハハッ!!俺を呼んだかッ!？」

「なっ!？」

銀の光を纏った影により容易く打ち碎かれる。

飛び散る刃物の群れに、マンダレイは距離をとりながらも飛来した銀光へと目をこらす。

スピナーもそれは同様であり、睨み据えるようにその瞳を向けた。地を削り取りながら停止したその影、黒い帽子に黒のスーツ。赤いネクタイと漆黒のマントが着地の風圧で揺れる。

「君はっ……無事でよかった!でも早く施設に向かいなさいッ、こは——」



スピナーから庇う様に間に割り込みながら叫ぶマンダレイに応えるように、その背後で青い光が弾ける。

眼前のヴィランが嫌に静かな事に不気味さを感じながら、視線のみ背後に向ける。

「マンダレイ、洸汰君は無事に相澤先生のところに送り届けました！」  
スーツから、雄英の体操着に姿が変わったことに驚く間もなく、伝えられたのは心に引っかけた少年の無事を伝える言葉。

思わず安堵してしまいがちながらも、それならばなおさら背後の消耗しているはずの少年をここに居させるわけにはいかない。

「相澤先生から伝言ですッ、テレパスで伝えてくださいー！」

イレイザーヘッドからの伝言。

その言葉に、まさかと目を見開く。

「A組B組総員——プロヒーロー〈イレイザーヘッド〉の名に於いてツ戦闘を許可する!!」

（イレイザーッ、本気で……!）

学生にヴィランを鎮圧することなんて本来は出来る筈が無い。

恐怖によって鈍った思考では下手に交戦するよりも、逃げに徹する方がまだ生存率は上がるはず。

だが、現実主義のイレイザーがそれでも彼らを信じてそれを選んだのだとしたら。

彼は信じているのだろう、雄英のヒーローの卵達がこんな逆境でもヴィランと交戦する強さを持っている、と。

（……いいんだね、イレイザー）

マンダレイのテレパスにより生徒達へ、戦闘許可が伝えられる。

今までヒーロー志望ゆえの法に縛られていた彼らは、その言葉に確かな信頼と期待を感じとり、そしてそれぞれの想いを元に行動する。

容易く消えたスーツに、緑谷は今までの違いを自覚する。

パイプの接続が一度切れた感覚を憶えたためか、接続の切断が可能となっていた。

（よしっ、これで戦いの幅が広がる。いままで一番の副作用だった言葉の壁も、多分これで大丈夫なはずだし）

本来であれば、力をリセットし弱体化を挟むなど敵に付け入る隙を与えてしまうだけだ。

実際、巖窟王の霊基のみ使用できていた今までの状態ではデメリツトにしかならなかったはずだ。

「——伝言ありがとッ。でも、すぐ施設に行きな！君、血だらけじゃない！」

雄英の体操着には既に固まり黒くこびり付いたものから、未だ新鮮な鮮血までこの暗さでも視認できてしまうほどの血液が付着していた。

その姿に顔をしかめるマンダレイが、今まで沈黙していたスピナーへと鋭い蹴りを放つ。

舌打ちしながら交差した両腕でそれを受け止めながら後退するスピナーへと、マンダレイと入れ替わる様に緑谷が飛び出す。

「待ちなさい——ッ！」

青い光を纏ったその姿。

しかし、次の瞬間には黒い軽鎧にオールバック気味に流された緑髪と先ほどのスーツ姿とはまた違う姿へと変わる。

露出されたその腕を目にしたマンダレイは、傷一つないその肌に気付き自らの目を疑う。

（返り血だった？だけど、あの服の裂け方は・・・）

ヒーローとしての経験から、傷一つないその姿に強烈な違和感を覚えてしまう。

その間にも、緑谷は動きを止めることは無い。

両手に黒白の双剣——干将・莫耶を投影しスピナーの懷へと一  
気に潜り込む。

「待て、ガキ！お前に手を出すつもりは……！」

「申し訳ないが、戦場で敵の話を聞いてあげられるほど器用ではなく  
てね」

庇う様に突き出された腕を右の白剣で叩くように右へ跳ね除けれ  
ば、そのまま回る様に体勢を変え。

回転により勢いを増した左の黒剣が撫でるようにスピナーの腹部  
を叩く。

「かッ……！」

的確にあばら骨の僅かに下、筋に守られているとはいえ柔らかな腹  
部を殴打され、倒れ込む男の体を容赦なく前方へ蹴り飛ばせば、つい  
でとばかりに手に持っていた二振りの剣をその眼前へ放り投げる。

「少しばかり痛いかもしれないが……〈ガキ〉のすることだ、大目に  
見てくれ」

地に伏したスピナーの眼前、地面に突き刺さった二振りの剣。

その先に立つ少年の顔が、ニコリと場違いなほど穏やかに微笑んだ  
瞬間。

爆ぜるように、双剣から爆炎と衝撃波が膨れ上がった。

至近距離でそれを浴びたスピナーの体と意識は容易く吹き飛ばさ  
れ、未だ拳撃を打ちあっていた二人ですらその異常な爆発音に動きを  
一瞬止めてしまう。

「——レイ。……マンダレイ、聞いているのか？」

「っ、……ごめんなさい、聞こえなかったわ」

流れるような動きと、破壊力、そして意外なほど容赦のない攻めに  
固まっていたマンダレイは緑谷の声で我に返る。

「すまないが、もう一つ共有したい情報がある。私が交戦したヴィラ  
ンの話ではリストというものが有るようだ。奴らはそのリストに  
載っている人物を狙い行動を起こしている可能性が高い」

「っ、ならなおさら早く合流しないと。無差別な襲撃じゃないなら、狙  
われてる子がもし孤立していたら……！」

「このタイミングでの襲撃。恐らく、そのターゲットが孤立に近い状態になるのを見越した物だろう。つまり――」

施設と、合流地点であるここに居る自分たち以外。

肝試しのために森へ入った誰かがターゲットである可能性が高い。

「ッ、やだ……。この子、本ト殺しといった方がイイ！」

虎と交戦していたマグネが、振り払うように虎を突き放せば緑谷へと駆け出す。

強盗、殺人未遂、そして殺人。

その間の抜けた口調に反し、凶悪ヴィランとして名を知られた彼の内心は今焦りが大半を占めていた。

（遠くで聞こえていた爆音……！それに簡単に情報を漏らすなんてアイツしかいないじゃないッ……血狂いマスキュラーをこの小さな子が!?!）

マスキュラーを無傷で倒した少年と、プロヒーロー二人を相手にしなければならぬこの状況を打破するためにも、一番未熟な少年を狙う。

が――

「焦り過ぎたな、マグネ……」

「ッ、邪魔をしないでヨ！」

左腕を、ミシミシと骨が軋むほどの力で何者かに強く握られる。

振り向けば太い右腕でこちらの腕を掴む虎の姿。

予想だにしない速さでのスピナーの敗北、リストの存在の漏えい、そして偏り過ぎた戦力差。

予想外の事態が続く中で、冷静さを失った結果振り払った腕は虎の姿勢を崩し切るには至っていなかった。

虎は、マグネを見据えながらその遙か向こうで倒れる影に目を細める。

強襲によりマグネにより頭部を打たれ、戦場の端で未だ血を流し倒れるピクシーボブの姿に左拳を強く握りなおす。

「――女の幸せ踏みにじろうとした罪・・・清算してもらおうよ」

引き倒すように虎が左腕に力を込めると、苦し紛れにマグネがその腕を振りかぶったのは同時だった。

振り下ろされるマグネの腕を虎は欠片も気にしてはいない。

――名を売ることが優先される現在、関係性の悪化や収入面などトラブルを抱えやすい複数名義のチームは減少し続けている。

そんな中で、今も多くの人々を助け続けるプッシーキャッツの強さは、他のヒーロー達と大きく異なる。

『虎ッ、首右！迎撃、角度左上に修正！』

脳内に響く声に、思わず口元が吊り上がる。

言われるままに首を傾ければ、その僅か数センチ脇をマグネの腕が通り過ぎていく。

「っ、離れなさいヨッ、このッ！」

マグネの体を羽交い締めにするように後ろから抱き着いたマンダレイが、ニヤリと笑いながら小さく頷く。

抱き着く力をそのままに、上体を反らすようにマグネの体を無理やり反らせば、当然ボディはがら空きとなってしまう。

そこへ、吸い込まれる様に虎の巨大な拳が挟り込まれる。

下から上へ、胃から――本来であれば肋骨に守られているはずの肺めがけて進んだ拳は、マグネの肺に収められた酸素全てを追い出していく。

ぐるり、と白目をむき全身から力の抜けたその体は、マンダレイが

手を放せば重力に引かれるまま地面へと倒れ伏す。

「私たちを舐めるからよ。……こんな奴らに構ってる暇は無いわ。虎、こいつら拘束してピクシーボブを施設まで送り届けて」

その姿からすぐに目を逸らし、マンダレイは今後について考えを巡らせる。

「事態は一刻を争うわ。テレパスの私の方がみんなと合流しやすいし、ラグドールと会えば現状の把握も出来るはず」

肝試しの中間地点に居たラグドールの個性、〈サーチ〉によって少なくとも生徒たちの情報は分かる。

「だから、君は虎と一緒に——」——「僕も行きます」

これ以上生徒を危険に巻き込むわけにはいかない。

振り向いた先には、いつの間にか体操服に戻った少年が真っ直ぐにマンダレイの瞳を見つめ返していた。

「友達を助けたいのは分かるよ。……でも学生の君をこれ以上危険な目に遭わせるわけにはいかないの」

「はい。僕も、きつとヒーローとして守らなきゃいけない相手がついてくるなんて言ったらそう言うと思います」

(……この子)

頷くその瞳は、激情に駆られているわけではない。

ただ静かに、見つめ返すその瞳に彼女の表情が変わる。

「敵の戦力も読めない今、僕が役に立てるなんて自惚れなのは分かります。でも、助けに……行きたいんです。みんなが今も戦っているのに、助けに行かないなんて嘘、自分にはつけないんです」

だが、それでもプロヒーローとしてマンダレイは頷くことは出来ず——。

「良いではないか。気絶するまで殴らなきゃ止まらないタイプの馬鹿

よ、ソイツは」

「虎ッ、あなた・・・なにを言つて!？」

「猫の手も借りたい状況よ。我が守れない分、頼んだぞ有精卵」

ダンッ、と肩を叩かれ予想外の重さに沈み込む緑谷の姿に、納得しきれないものはあるもののマンダレイも現状の最善かと大きくため息をつき頷く。

「なら、私について来て。離れたらすぐに声をかけて——」

「はいッ、ありがとうございます!・・・それで、移動手段なら僕に考えが一つあるんです」

考え?と首を傾げるマンダレイの前で、やや見慣れ始めた青い光が弾ける。

先ほども見た黒いスーツ。

その上に、見たことのない赤い外套を羽織ったその姿。

オールバックに撫でつけられた緑の髪の彼が——

「遠くを見通す力と走力には俺も自信がある。君は大人しく俺の腕の中で念話を送り続けるがいい」

「な・・・ななっ、き、み!？」

マンダレイを抱き上げる。

横抱き・・・お姫様抱っこである。

人生初の状況と、かなり近くに寄ったその横顔に思わず取り乱す。

(さっきまでと顔の画風が全然違うじゃない!)

未だ幼さの抜け切れていなかったさっきまでとは違うその横顔。

影をもった、それでいて世の理不尽を理解したかのような大人びたその顔に気を取られ——

光を纏い始めた自分と彼の体に気付けなかったマンダレイは、急激な加速により舌を勢いよく噛んだ。

「焦子ちゃん、あなたとっても素敵。私と同じ匂いがする・・・」

「ツユちゃんにか縛るものってある？」

「好きな人が居ますよね」

「居るよ」

「そしてその人みたくなりたいてって思ってますよね。分かるんです、乙女だもん」

「そう」

「好きな人と同じになりたいよね、当然だよね 同じ物みにつけちやったりしちゃうよね でもだんだん満足できなくなっちゃうよね その人そのものになリたくなっちゃうよね しょうがないよね」

「かもな」

「あなたの好みはどんな人？ 私はボロボロで血の香りがする人大好きです だから最後はいつも切り刻むの ねえ焦子ちゃん 楽しいねえ」

「ッ、轟ちゃん！その子の手、なにか持ってるわ！」

「恋バナ・・・楽しいねえ!!」

地へ押さえつけられていた少女。



その手が、注射器のような何かを背中へ乗っていた少女の左足……  
雪のような白い肌へと突き刺した。

## スグリ

「ヴァイン襲撃6」

ギリギリで傾けた首筋をかすめる様に、白い刃が通り過ぎていく。

「ッらあ!!」

その側面に手を当てて爆破しようと力を込めれば―――刃から枝分かれするみてえに、刃が生えてきやがる。

舌打ちしながら体を反らして躲すが、さつきから同じような事の繰り返しばかり。

いい加減、イライラしてきやがった。

っ―かッ・・・!!

「逃げんじゃねえ、クソムシ野郎ッ!!」

遙か頭上で、歯茎から生えた刃を使いまるで虫のように六足歩行する陰に中指を立てる。

歯を自在に伸ばして操作する個性・・・かは知らねえが、歯の数だけ手数があるのは間違いない。

目が布で隠されている分、視界は狭いようだが見えていない訳じゃない。

聴覚の役割は大きいが、視界の狭さを狙った奇襲は避けるべきだろうな。

「ッ―――!」

声に反応して、また上から何本も刃が降ってくる。

照準を合わせるみてえに手を向けてみるが・・・数本だった刃はすぐに枝分かれし始める。

爆破での対処を諦めて横に跳ぶが―――軌道修正しやがった何本かはこっちの方に来てやがる。

「あああああ!面倒くせえッ!」

限界まで引きつけて、至近距離で両手を前に突き出す。

BOOOOM!!

それなりの火力で何とか碎けるのが数本。

それ以上は、ただの勘・・・感覚だがおそらく抜かれる。

砕け散った刃の破片が浅く手足を切り裂く感触に舌打ちしながら、ヤツの動きを頭の中で予測する。

あのクソジジイのところで付けた考える癖が、今少しだけ役に立ってやがる。

——奴の動きは虫に近い。

俺達を切り刻んで、奴の言う・・・肉面？切った後を見るためだけに動いてやがる。

そのために、まず目の前で動く獲物を狙う。

普通の思考ならB組の奴を背負った麗日を狙うだろうに、奴は麗日を無視して俺にも攻撃を仕掛けてきやがった。

目の前を動く者にすぐに意識が移る、野性的な思考。

なら不用意な動きは奴の攻撃を誘うだけだ。

足並みそろえて2人がかりでぶつかって、注意を分散した方が勝率は上がる。

だが——

BOOOOOOOOOM!!

「——オラッ、かかって来やがれクソムシ野郎！」

足元を爆破し、自ら周囲に張った爆煙による煙幕を散らし爆豪は声を張り上げる。

目の前で動く新鮮な獲物に、再び刃が降り注いでいく。

死刑囚へムーンフィッシュの思考は爆豪が予想した通り単純な欲望により左右されていた。

人体を切り裂き、その断面に興奮を覚える彼にとって敵の優先順位などどうでも良い。

もちろん無防備に意識を失った男子生徒を切り刻むほうが簡単だという思考はあったが、自分に飛び掛かってくる少女を切り裂いた方が早くてむしろ活きが良い

その程度の〈虫〉のような思考。

しかし、彼の思考の単純さは戦闘面での反応速度にも繋がる。

歯の刃で追いかけて、避けられたら追う。

それが出来るだけの操作性と速さが彼の個性にあった事は彼にとって最大の幸福と言えるだろう。

足元よりもさらに下で、今も刃を爆破した少女の体に再び裂傷が刻まれた音が耳に届く。

確実に、追い詰めている。

流れ出す血の臭いも濃くなり始めた事から、ムーンフィッシュは獲物が弱り始める時間が来たことを確信する。

後は失血により動きが鈍った所を切り刻むだけで、肉面が見られる。

そのことに体を震わせて――

視界の端で、何かが動いたことに気が付く。

顔に布を巻きつけるためのベルトの隙間から確認すれば、そこに居たのはいつの間にか姿を消していたもう一人の少女。

その背に背負われていた少年が居なくなっていたが、それよりも見失っていた筈の獲物が戻ってきたことに彼の心は喜びに染まる。

先ほどまで追っていた少女が何かを叫び駆け寄っているが、そんなことはもう気にすることは無い。

新しく表れた肉に、彼は複数の刃を口元から射出する。

その僅か前に、爆発を推進力にしてもう一人の少女が底う様に突撃したため、爆煙が邪魔だがそれでも確実に切り裂けるだけの数の刃を打ち込んでいく。

ガガガガガガッ!!!

掘削機が地を削るような音が煙の中で響き渡る。

刺した傍から分裂させ、爆煙の中を隅から隅まで抉りつくす。

確実に、2人のうちどちらかを細切れにする。

そんな斬撃の雨が——数十秒後によく止む。

「肉 見たい」

斬撃によって撒き散らされた砂塵と爆煙が、ゆっくりと晴れていく。

地面に飛び散った血の跡に、ムーンフィッシュの口元は弧を描いて

BOOOOOM!!

「!？」

唐突に、爆発音が彼と同じ高さで鳴り響く。

驚愕により、反射的に顔を上げれば木よりも高い自分と視線を合わせる位置に浮かぶ二人の少女の姿。

血の流れ続ける両腕を背後へ向ける少女の背中へ抱き着くように、先ほど戻ってきた茶色髪の少女がしがみついている。

背後へ向けた少女の手。

それが、強い光を放った瞬間——まさしくロケットのように2人の体が飛び出す。

次いで、驚愕から覚めたムーンフィッシュの刃が2本、その柔らかい体を切り裂くために突き出される。

だが、少女が手を空へ向け爆破を行う事で容易くその刃は躲かれ、動きに合わせて刃の途中から枝分かれするがすでに刃が届くころには彼らの姿は通り過ぎている。

歯である以上、伸びる事しかできない刃は点の攻撃でしかない。

左右だけではなく、上下に避ける選択肢が出来た彼らに当てることは視覚情報を絞った彼には困難であった。

故に——

彼もまた、移動を開始する。

下へ伸ばしていた歯を縮めれば、グンツと重力に引かれ沈み込む体。

その頭上を、少女の腕と舌打ちが通り過ぎていく。

下の歯を近くの木へ突き刺し、縮めることで木から木へその体を移しながら、獲物たちの能力を再度評価しなおす。

地を這う獲物から、宙を駆ける獲物へと。

狙う場所が変わっただけ。彼にとって何の問題にもなりはしない。

「いよいよ動きが変態染みてきやがった。クッソ気持ち悪い奴だぜ！」

「あの動き、追いつくのは難しいかも。やっぱり、アレをやるしかないけど……」

俺が注意を引きつけている間に、B組の生徒を遠くの茂みに隠して戻ってきた麗日がすぐに発見された時は肝を冷やしたが結果オーライだ。

自然な流れで空中戦に持ち込むことが出来た。

後は、奴に作戦を気付かれる事無く動くだけでいい。

「元からそのつもりだ。テメエには危ねえ橋渡してもらうんだ、ンな小せえ傷気にしてんじゃねえよ」

「……うん。助けてくれてありがとう、勝紀ちゃん……！」

煙幕で直撃は免れたが、麗日の個性で浮かぶ前に何本かの刃が降つてきやがった。

咄嗟に急速浮上するために爆破を起こした時に少し手を切つてから、ずっとコイツはジロジロ見てきやがる。

一人で勝つことが出来ねえのは腹立たしいが、一人じゃ出来ねえことがある事ぐらい俺にも分かる。

クソデクの背中に追いつくまで、こんなところで躓くわけにはいかねえ。

「さっさと口閉じろッ、行くぞッ!!」

奴の動きを視線で追う。

先ほどの攻防とは逆、浮遊という状態を爆破の推進力で無理やり動かすこちらに対し、奴は複数の長い手足で自由に動き回っている。

こちらが捕らえるには奴が攻撃に回った瞬間を見極めなければならない。

跳ねるように、右から左へと影が動く。

その中へ、爆破を利用し突撃しながら暗闇の中をただじっと見つめる。

暗闇の中で刃を使って移動した瞬間は見えるが、刃を戻されてしまえばそれも見えない。

奴の黒い服が一瞬見えるが・・・再び闇に紛れる――

唐突に右から、木が揺れる音が響く。

「違うっ、左!」

その音に首を向けかけて――麗日の声に、左を見る事無く下方へと爆破を行い、麗日を背負ったまま浮き上がる。

同時に、左から突き出した刃が足裏を僅かに掠めながら通り過ぎていく。

僅かでも対処が遅れていれば、確実に体を貫かれていた状況にあの爆豪ですら息を飲み。

それを飲み込んだうえで、注意を引くように声を張り上げる。

「ッ、ムシの癖に意外と頭回るじゃねえかッ!」

浮かんだまま上空から見ればよく分かる。

右から聞こえた音は、右にあった木へと左から伸ばした刃を突き刺



しただけの囹。

だがこれで、奴の居場所は分かった。

刃の根元へ、爆破によるターボで距離を詰める。

「避けるな 肉 見たい 見せろ 見せろオツ！」

至近距離を、白い刃が通り過ぎていく。

それらを避けられているのは、予測に基づいた爆豪の勘による物も大きい。

しかし、それを支えているのは麗日というもう一つの目がある事への安心感も確かにあった。

繰り返すこと三回、幾度か刃が掠めることはあったが直撃はせず。眼前に迫ったヴィランへ牙を剥くように口の端を上げ爆豪は浮かべ腕を振りかぶる。

「来てやったぜクソムシツ!! 大人しく死にやが——」

爆豪の眼前に、刃が迫る。

その数、10本以上。

枝葉のように分かれながら迫る様は、巨大なミキサーの内部のようにも見えた。

「……ッ!!」

迫ってくるのであれば、包む様に刃を作れば良い。

ムーンフィッシュの思考がそこへ辿り着いたか、爆豪に知るよしもないがいま確実に分かる事はその刃が避けられないという事と、刃の中に捕まればそのまま内側へ伸ばされた刃で串刺しになるという事。「ッ……やるしかねえッ」

両手を眼前に向ける。

折れて数本、それでは逃げ切る事は出来ない。

それでも、悪態をつきながら今できる最大の火力で吹き飛ばすしかない。

背中 of 麗日の手が、離れたのを感じる。

重みが消え、突撃するのは爆豪一人。

白い刃の中心で、森を照らしつくすような巨大な爆炎が膨れ上がった

た。

眼前で巻き起こった爆発に、ムーンフィッシュは前方へ伸ばしていた自らの歯を戻す。

肉を切り裂いた感触は感じなかったが、あの爆発はほぼ自爆に等しい威力だった。

爆破に耐性があつたとしても、弾けた刃の嵐の中で確実に少女の体は切り刻まれた筈だろう。

先ほどまでよりも強烈に匂う血の香りに気を良くしながら、晴れていく視界に目を凝らす。

「つ、手を放さなきゃ・・・私も危なかったつ。だから・・・!」

視界の先。

離れた空中で顔を押さえ、体を震わせる少女が一人。

恐らくアレが浮かせる個性持ちであり、こちらの刃の盾として爆破少女を使つたのだろう。

なら、後は無防備なあの少女を切り刻むのは簡単。

そう結論付けたムーンフィッシュは顔を大きく逸らす。

グンツと振り下ろされた頭部。

大きく剥きだされたその歯茎から、白く輝く刃が伸びる。  
少女を切り裂き、その断面をようやくくみられる喜びにこぼれる涎な  
ど気にせず歓喜の感情を瞳に浮かべ――

BOOOOOOM!!

遙か下方で、爆発音が一つ鳴り響いた。

先ほどの少女がまだ生きていたのかと思考が逸れた瞬間。

ズパンツ!!と湿った布袋を叩いたような音が自らの腹部で鳴った  
事に、遅れて気付く。

くの字に折れ曲がった体、遅れて駆け巡る痛み、吐き気。  
鳩尾に突き刺さった何かにより意識が一瞬で白に染まる。

下方を見下ろしたムーンフィッシュが見たのは、自らへ中指を立て  
て笑う少女の姿だった。

全力でブン投げて、爆破で加速までした石は狙い通り奴の体に刺さったようだ。

今までのストレス分、中指を立てて笑ってやろうと口元を開いて――

「勝紀ちゃんっ、怪我は・・・!」

「地面に激突していくらか腕にヒビが入ったぐらいだ。あそこまで広く逃げ道を潰してくると思っただけ分、爆破の威力が必要だったからな」

上から落ちてきた麗日が、こっちの体に怪我がないか触ってきやがった。

確かに傷は多いが、深かったのは右腕だけだ。

「後はツバ付けときや直る」

既にほとんど服として成り立っていない体操着の上を引きちぎって右腕の付け根に巻き付ける。

これでそのうち血も止まるだろう。

「っ、・・・危ない役押し付けてばったかりだった、私」

「・・・あぁッ? 作戦立てた俺に文句でもあんのか丸顔!」

自分自身を浮かせたせいで真っ青な顔をしてる奴が何を言ってるか。

演技だろうと、俺を見捨てたような事を口にしたこともどうせ気にしているんだろうが、それでもしなきゃ勝てねえ相手だったのは事実だ。

最後の一撃、失敗してたら串刺しにされていたなんて、自分の事を棚に上げてコイツみたいな奴は自分を責めちまう。

こっちが退かねえ事を、言葉からかそれとも表情からか理解したら

しい麗日はしばらくこちらを困ったように見てやがったが・・・あきらめた様に笑って。

「・・・おかしいよ！さつきまで名前呼んでくれてたのに！」

「知るか。仲良しごっこは終わりだ、さつきと施設目指すぞクソ丸顔ッ！」

「待ってよ勝紀ちゃん！というか服っ、それじゃほんとに危ないよ！」動き出す。

今、止まって口論する時間など無い。

明かりを目指して、一步を踏み出し――

「・・・・・・・・肉にくめん 肉を 見せろおおおおお!!!」

「クソッ――！」

まだ、意識がありやがった。

刃を足のように地面に突き立て起き上がった奴が再び空中へ浮かび上がるとする。

白い刃は一瞬で周囲の樹木を越える高さまで伸びきり――

「・・・・・・・・はぁッ!？」

上から振り下ろされた巨大な黒い何かによって押しつぶされる。見上げれば、そこに居るのは巨大な・・・見覚えのある生き物の姿。

黒い影によって形作られたソレは、クラスメイトの常闇の野郎の個性に似ているが。

「まともじゃねえだろ、ありや・・・」

白く光る瞳が、こちらを見下ろす。

さっきヴィランを潰したのはコイツの手で、反対の手は既に振り上げられている。

確実に、こちらを潰そうと狙うその怪物の中で、何かが動く。

「・・・っ、逃げろ！俺では・・・ッ、もう、黒影を押さえられない・・・！」

微かに見えた、常闇の口がそんな言葉をこぼしたと同時に巨大な左腕が振り下ろされる。

膨大な質量と、想像以上の速さをもって迫るその黒い塊は既に避けられない位置まで迫っていた。

（速すぎるッ、避けきれ——）

片手をなんとか突き出し、爆破により勢いを僅かにでも殺そうと構え

黒影の胴体に、黒い何かが激突する。

視線を下げた黒影の目に映ったのは、六本腕で脳が剥きだしという奇妙な生物と——その胴体に突き刺さる、先端が膨らんだ奇妙な形をした矢のような何か。

「……何ダ、コレ……ハ!?」

唐突に、矢の膨らみが弾け飛ぶ。

その中から溢れ出すのは、黄金色に輝く雷。

謎の生き物——脳無の体を焦がしながら、放たれた眩いばかりの閃光。

その光から逃げるように、振り下ろされていた筈の腕がシユルリと引き戻されていく。

その閃光に、爆豪は憶えがあった。

以前、ヒーロー殺しを吹き飛ばした幼馴染の拳から放たれた光。つまり、アイツが近くに居るという事。

「——メルセデスッ、メルセデスさん!!」

空から降りてくる大きな影が一つ。

聞きなれた声に、なぜだか漏れ出る安堵の息に。

それを誤魔化すように、大きく舌打ちしながら着地したその影を睨みつけ。

「オイ、クソデク……テメエ、俺達が戦ってる間ナニしてやがった……?」

思わず、低い声が漏れる。

いつもの帽子に、黒いスーツ。その上に何故か赤い外套みたいなモンを羽織っているのはどうでも良い。

右手が紅くなって、白い文様が這うように描かれて別の生き物みたいになってるのもまあ良い。

腕の中に青い髪の女を抱えて、ついでに背中にもう一人を抱き着かせて居るのはどういう了見だろうか。

声に反応したわけではないだろうが、弾けるように飛び散る青い光。

いつの間にかボロボロの体操着に姿を変えた幼馴染は、何故か視線をさ迷わせながら

「え・・・つと、怪我したラグドールさんを助けようとしたら近くにいた脳無が襲い掛かってきたんだ。たぶん、コイツがラグドールさんを襲ったんだと思う。・・・だから、ここまで矢で吹き飛ばしてきて、したら常闇君と黒影の姿が見えたから」

—— マサカリを矢にしてもう一度射抜いて、黒影を鎮めるために雷を解放した。

説明されたがまるで意味が分からない。

が、よく見れば確かにラグドールと呼ばれた女性は腹部に血の滲んだ布を当てており、暗闇とはいえ近くで見れば重傷なのは爆豪にもすぐに分かる。

もやもやした気持ちが引つ込むのを感じながら、それでも少し複雑



な感情がのこる爆豪の顔をデクの背中から顔を覗かせていたマンダレイが見つめて。

「確かに出血は派手だったけど、すぐに命に関わる物じゃないわ。その木に寝かせてもらっていい？ 比較的安全なうちに応急処置の続きをしておくわ。『その子も十分重症よ。今は止血後みただけど唇の色も悪いし、かなり出血してるはず』」

付け加えるようにテレパスで最後に緑谷だけに声を届け、背中から降りたマンダレイが、言われるままに木にもたれかかるように預けられたラグドールから血を吸った布と服を脱がしていく。

「俺が手伝う。テメエはあっち向いて——」——私がやるよ！デク君は……ね！」

先回りするように声を張り上げた麗日が処置に回れば、残されるのは二人。

「常闇を回収に行くからテメエは——」——すでに救助した。常闇を止めてくれたこと、本当に感謝する」

動き出そうとした先、茂みの中から意識を失った常闇を背負った障子が姿を現す。

肩に付いた口のような器官からそんな言葉を口にしながら頭を下げる障子に、慌てて手を振りむしろ怪我は無いかと聞き返す緑谷の姿を爆豪はチラリと見つめる。

「……緑谷、うまくやれ」

最後にそう言い残し、何故か全く爆豪へ視線を向けないまま近くの木に常闇を下ろし身体状況を確認し始めた障子の姿。

彼の言い残した言葉に、どういう意味だと眉を寄せて。

ふわり、と肩にかけるように黒い布がかぶせられた。

どこか古い匂いと一緒に、嗅ぎ慣れた落ち着く匂いが鼻をくすぐって——それが、幼馴染のいつも付けていたマントだと少し遅れて気付く。

どういうつもりだ、と少し高い位置にあるその顔を睨み付ければ、

いつもの少し困ったような笑顔が見えた。

「無事で、ほんとうに良かった。かつちゃんが無事か心配で、ずっと落ち着けなかったんだ」

「・・・うるせえ、口閉じろ」

死ね、は怪我人がいるから自重したのか顔を逸らしながら悪態をつく。

血の気が薄い頬に、僅かに朱を差しながら横目で睨み付ければ

「で、この古くせえマントはなんのつもりだ、クソデク。俺は欲しいなんて言っただろ」

良く燃えそうだし、わざわざどこから取り出してまでのプレゼントというなら貰ってやらないでもない。

マントの端を指先でいじりながらそんな事を口にして、確認するように視線を合わせようとするススツ、と幼馴染に逸らされる瞳。

「なんで目え逸らしてんだテメエ！俺の目見て話せよ、オイ！」

どういふつもりだと、その頬を両手で挟んで無理やり正面を向かせながら叫ぶ少女に対し、少年はあまりに強い視覚情報に顔が一瞬でぼせ上がる。

「か・・・かつちゃん。放してもらわないと、・・・だって」

その視線が、空と・・・そして自分の胸元で往復している事に少女は今さらながら気付く。

「あ・・・ああ・・・うあ!!？」

マントの下、ほぼ破けた体操着と下に着ていたインナーは切り裂かれ、服の役割をほぼ全く果たしていない。

当然見える肌色と、奇跡的に被害をまぬがれた下着がマントの間から見え隠れして――

滅多に聞くことなど無いだろう、少女らしい悲鳴が森へとこだました。

「十数分前」

「奇襲。ヴィランらしいが、致命傷になる場所はわざとさけたのか？」  
「焦子ちゃん、冷静なのは心強いわ。とりあえず、怪我は無いわよね？」

マンダレイからのテレパスを受けてコースを引き返そうと体の向きを変えた瞬間、背後からナイフを持った手が突き出された。

間一髪で避けられたが、気を張り始めた今じゃなければ確実に斬られていた筈だ。

それだけの速さと、躊躇の無さがあのナイフには込められていた。「ん？んー、切れてないっ、血付いてない！」

その犯人は月明かりに照らすように、ナイフの刃を見て肩を落としている。

奇襲という手段をとったにもかかわらず、急所ではなく斬る事を優先していたような刃の動き。

血、なんて言葉からどうしてもヒーロー殺しの個性が頭に浮かぶ。「急に切りかかってくるなんてひどいじゃない。何なのあなた」

視線を、一度地面に向けてから微かに頷いてヴィラン——黒いマスクをつけた同い年ほどの少女へと体を向けなおしたツユちゃん。

その意図を読み、こちらでも準備を始める。

「トガですー2人ともカアイイねえ。・・・轟さんに、蛙吹さん」

「・・・メディア露出したばかりだ、それくらい少し調べれば分かるか」

「ええ。でも、情報が割れてるのは不利ね」

だが、すこし妙な感じがする。

情報を知っている、と牽制するのは分かるがどうにもこの女子からそんな空気は感じない。

むしろ、ただ名前を知っていたから呼んだ、ただそれだけのような・・・そんな違和感。

不意に、少女がその左手を背中へ回す。

聞こえてきたのは、金具から何かを取り外したかのような金属音。

「・・・血が取れないとね、ダメです。普段は切り口からチウチウと・・・その・・・吸い出しちゃうのですが」

取り出されたのは巨大な注射器のようなナニか。

「この機械は刺すだけでチウチウするそうで、お仕事が大変はかどる

とのことでした」

右手に持ったナイフと、左手の注射器を突き出し狙いを定めるかのようにこちらへと向けてくる。

明るい口調とは裏腹に、ゆつくりと沈む体と曲がる膝は今にも飛び掛かろうとする肉食獣を思い出させて――

「刺すね」

あつさり、ただ一言口にして駆け出すその速さは、想像通りかなり速い。

すぐに詰められる距離、前方にいたツユちゃんが

「……ケロ」

大きく上へと跳ね、背の高い木の枝へと登る。

標的が消えたことに怯む様子もないヴィラン――トガに構わず、右足から一気に冷気を放出する。

一気に凍り付き始める地面は、足元を伝いこちらへ駆けるトガの足を貼りつけ……その直前で、小柄なその影が勢いよく跳ねた。

真横にあった木へと片足を当て、蹴り飛ばす事で軌道修正しながら再びこちらへと飛び掛かる。

「っ、なに……!?!」

とつさに、壁上に氷壁を作り出せばガガガッ!!と氷が削られるような音が壁越しに響く。

それが、ワタシに振り下ろされるものだったと、そう思うと背筋がゾツとして。

ガガガガガガガッ!!

ナイフの音は鳴りやまない。

徐々に壁の端へと近付く音と、半透明な壁越しに見えるニタリとした笑み。

「焦子ちゃん！焦子ちゃん！チウチウするよつ、まっててね！」

「ダメよ。私の友達に手は出させないわ」

壁から姿を現した瞬間、木の上から伸びた舌がトガの体を巻き取る。

グルリと巻き上げられた体のまま、ナイフでその舌を切りつけようと腕を振るうが、その余裕すら与えられずうつ伏せに地面に叩き落とされる。

腹部と顔面への衝撃に、トガの動きが止まった瞬間、その背中へと伸し掛かる。

右手をひねり上げ、背中に付いた妙な機械とトガの体へと冷気を浴びせ――

「それで、襲撃の目的はなんだ？早く答えないと凍傷になるが……」  
応える気などないだろう。

なら

「仲間は何人――」――焦子ちゃん、カアイイねえ。恋してる顔だね」

腕をひねり上げる力を強くするが、苦痛がまるで表情に浮かばない。

むしろ頬を赤くし、恍惚に表情を歪ませる少女にこちらの声は届いていない。

目の前にいる相手を、見ているようで見ていない。

その顔を見た瞬間、何故か苛立たしさが溢れてくる。

「焦子ちゃん、あなたとっても素敵。私と同じ匂いがする……」

焦がれる誰かだけを見つめて

「ツユちゃんなにか縛るものってある？」

他の人間に興味を向けない

「好きな人が居ますよね」

たとえその人が自分を見ていなくても

「居るよ」

自己の中で完結する

「そしてその人みたくなりたいてって思ってますよね。分かるんです、乙女だもん」

理想の姿である彼になりたくて、  
「そう」

彼を手元に——自分の中に置きたくて

「好きな人と同じになりたいよね、当然だよね 同じ物みにつけちゃったりしちゃうよね でもだんだん満足できなくなっちゃうよね その人そのものになりたくなっちゃうよね しょうがないよね」  
彼を氷漬けにしたくて

「かもな」

彼を誰にも渡したくなくて

「あなたの好みはどんな人？ 私はボロボロで血の香りがする人大好きです だから最後はいつも切り刻むの ねえ焦子ちゃん 楽しいねえ」

でもそれは

「ッ、轟ちゃん！その子の手、なにか持ってるわ！」

「恋バナ・・・楽しいねえ!!」

地へ押さえつけられていた少女。

その手が、注射器のような何かを背中へ乗っていた少女の左足・・・  
雪のような白い肌へと突き刺して。

――針先が、ドロリと溶け出す。

「つ、熱いよ。焦子ちゃん、ねえ！」

初めて、表情を歪ませるトガ。

熱さもあるが、彼女が取り乱す原因は自分を見下ろす空虚な瞳にあった。

無表情。

仮面のようなその顔で、ゆつくりと轟は口を開く。

「なあ、その相手と付き合いたいと思うか？一緒に映画見に行つて、ポップコーン一緒にたべて手が触れあつて恥ずかしくなつて。服も見たい、なんてわがままをきつと笑つて許してくれる彼に甘えて、本当はもうほとんど決めてるんだけどこっちはどうかなんて、少しでも一緒に居たいから選んでもらつたりして。そんなデートして、ついには同棲なんかしてさ、下手な料理を食べてもらうのが申し訳なくて練習したり、いっしょに作つたり。一緒に布団で寝たりするんだけど、ワタシはきつと恥ずかしいからすぐに逃げちゃうんだと思う。それで、何年かして最初のデートコースに行つて、プロポーズとか・・・してくれたら嬉しいけど、とにかくそれからお互いの両親に挨拶して。結婚して子どもなんかも出来ちゃつてときどき喧嘩して、でもそんなに長くは喧嘩は続けられなくてすぐ仲直りするんだ。出子と、焦久が大きくなって独り立ちしたらまた二人にもどつて、静かに暮らし静かに一緒に老いていく。そんなこと、考えたことあるか？」

白炎が轟の体を包み込む。

制御されているのか、トガの体へ燃え移る事はないがその熱は体を炙り熱傷を与えていく。



暴れるように腕を振り回すトガの左手が轟の体を叩くが、拘束が解ける気配はない。

自身を見下ろすその瞳に、彼女は生まれて初めて理解できない何かを感じ取る。

「ないよ！そんなの、いっしょじゃないもん！」

グツ、と体を捻り今度こそ左の肘が轟を押しつけるように直撃する。

赤くなつた左手足を押さえながら、立ち上がるトガに対し冷静に立ち上がる轟の表情は驚くほど静かで。

「・・・なら、良かった」

小さく呟き、距離を詰めようとする彼女にトガは既に役に立たなくなつたマスクと注射器を投げつける。

「っ逃がさないわ！」

いつの間に拾つたのか、舌を伸ばす蛙吹の舌を振り向きざまに右手のナイフで切り裂く。

痛みに反射的に舌を引き戻す彼女から逃げるように、森の中へと姿をくらませようとして――

「――轟さん！」

目を見開く。

血の匂いを漂わせる、ボロボロの体操服を着た緑髪の少年の姿。

傷は無い、だが人一倍血に敏感な彼女だからこそ分かる、この場の誰よりも血を流した彼の匂い。

「ああ、やっぱり・・・いい匂いだね、出久クン」

小さく呟いた声は誰にも届かず闇に消える。

だが

——彼に、先ほど自分の肌を焼いた少女が抱き着くその姿を、闇の中で金色の瞳はジツと見つめていた。

きつと、あのトガという女の子とワタシは似ているのだろう。

好きな人、求めるものに対して盲目になってしまふ。

世間のしがらみなんて関係なく、ただ欲望のままに動く。

ワタシは好きな人をどんな形で有ろうと自分のモノにしたくて……。

好きな人そのものに彼女はなりたくて……。

でも、いまはイズクを氷漬けにしたいなんて思わない。

あの日、確かに彼女と彼のおかげで変わった筈なのだ。

ワタシは踏み止まることができて、彼女はそれが出来なかった。

だけどそれは、ワタシの考えはヴィランに近いということに繋がるんじゃないか……そう思ってしまった。

今もこうして、彼の腕の中で泣いているワタシはヒーローである彼

の傍に居てはいけないのではないか。

彼のようなヒーローになつてはいけない存在だと、そう言われているような気がして

「・・・イズクは、ワタシが恐いか？・・・傍にいたら、迷惑だろうか？」

急にこんなこと言われても、彼だつて困る筈なのにそんな質問をしちゃう。

それが分かっているから、彼の胸に顔を埋めながら卑怯なワタシは問いかける。

どこか困つたような、そんな無言の間があつて・・・温かな指先が髪の毛を撫でる感触がした。

「ごめんね。轟さんが何に悩んでるのか、僕は分からない」

ワタシが何も言っていないんだから、彼が分からないのは当たり前だ。

髪をなでる感触に、いつの間にか涙の止まった目を細めながら、それでも真剣に考えてくれてありがとう、と伝えようと口を開いて。

「でも、僕は君のヒーローになるって誓ったんだ。そばで見えてもらわなくちゃ困る、だから僕はずっと・・・轟さんに傍に居てほしい」憶えていてくれた。

あの時のワタシは自分の事だけを彼に押し付けていただけなのに彼は、そんなワタシの言葉を憶えていて。

「・・・ずっと、か」

ずっと

ずっと

ずっと

押し付けた口元が歪むのを抑えられない。

だって、永遠に彼はワタシの傍に居てくれると言ってくれたんだから。

## 混成接続

『ヴィラン襲撃6. 5』

—さらに10数分前—

「・・・ラグドールが居るとすれば、この辺りのはず。生徒たちの救助に向かったのなら、もう離れてる可能性もあったけど・・・ッ」

腕の中のマンダレイさんの声が、少し震えて聞こえる。

木々を乗り移って、ようやく開けた場所・・・肝試しの中間地点に降り立って、彼女を地面に下ろしながら僕も辺りを見渡して、啞然とする。

木々が生い茂っていた筈の場所は、へし折られ、切り倒され、粉碎された木の残骸がいくつも倒れている。

一度接続を切り、飛び散る青い光に照らされた足元の血液に指を当てる。

べつたりと付いた血は、少し指を動かせば未だ全く固まっていない事が分かって。

「・・・まだほとんど固まっていません。傷を負った人は近くに居るかもしれません」

そのいたる所に、赤黒い液体が飛び散っている。

焦る思考を、おじさんの知識が鎮めてくれる。

大量の血液だけど、折つても切つても、そして潰しても即死するにはまだまだ足りない量だと。

なら、血液の主が逃げ延びたか、あるいは攫われた可能性を考えるべきだ。

マンダレイさんも同じことを考えていたんだと思う。

すぐに頷いて、目を閉じる。

『ラグドール!!何でも良いから、合図をしてっ・・・!』

恐らく、ラグドールさんと状況理解を早める意味でも僕にもテレパスで声をとばしたみたいだ。

周囲に意識を巡らせて、耳をすます。

力を使うと、そちらに集中力を割かれてしまう。  
生身でも、金太郎さんの力で変化したこの体なら――。

カサツ、と。

微かに、何かを搔いたような音が聞こえた。

「――接続、開始ッ」

駆け出しながら、彼の言葉に倣った言葉を口にしながら脳裏に浮かぶのは一つのイメージ。

暗闇の中で小さな炉に火種を入れる。

静かに燃え始めた小さな白い炎が――天に渦巻く無数の星を照らし出す。

その中で輝く一つ、力強く金色に輝く光へと手を伸ばした。

「ッ、マンダレイ！そこに誰かが居るッ、手伝ってくれ！」

右腕から黄金色に輝く雷が溢れ出す。

邪魔な倒木を飛び越し、目指すのはさらに先に見える倒木の一つ。  
もどかしい時間が過ぎて、辿り着いたその場を金の輝きが満たせば  
見えたのは蹲る様に倒れた女性と、その体に覆いかぶさった木の残骸。

「おいッ、起きろ！見つけたんだッ、目閉じんのはまだ早えだろうがよ  
！」

右腕で、巨大な破片を投げ捨てていく。

マンダレイの声に応えてきつとこの破片を掻いたんだ。

まだ、意識はあつたはずなのに光に照らされたラグドールさんの顔は血の気が失せている。

助けたい。

こんな状態で、助けを求めたこの人が助からないなんてあつちやいけない。

彼女の体を押さえつけていた最後の大きな残骸を掴み、投げ捨て――

耳が、音を拾う。

マンダレイさんの足音じゃない、もつと重い足音。  
それが近付いてくる。

「出久君、前に!!」

「――ネホヒヤンツ」

顔を上げた先に、浅黒い肌の大きな人型の影が居た。

太い二本の腕を振り回し、辺りの木々をなぎ倒しながら迫るその巨体がこの周囲の状況を作った事はすぐに分かった。

まるでダンプカーのように、辺りを破壊しながらもう目の前に迫ったその体――そして、剥き出しの脳。

（こんなところに、こんな時に脳無がッ・・・）

あのUSJ襲撃の日、僕は奴に勝てなかった。

力に振り回されて、あの人に助けてもらった完全な敗北だった筈。  
なのに、胸の中に何故か怖さは沸いてこない。

あるのは、いま自分が逃げたら足元の彼女は誰が助けるのかという考えだけ。

そして、その答えはもう僕の中にあつた。

ここには――

「・・・僕が居るッ」

振り下ろされた右拳に対し、こちらも右拳を返す。

およそ数倍以上巨大な脳無の拳は簡単に僕の腕を押し返す。

そう考えていただろう脳無の拳は直撃の寸前、拳を開き手刀へと変わった手で左へと叩かれて横へ受け流されていく。

それでも、怯むことなく残ったもう一本の左腕が振り下ろされる。近くまで迫り、その手に砕けた万力のような何かが握られているのが見えた。

工具のはずなのに、人を殴るための姿に変わったソレが、脳無と同じに見えてしまった――。

全力で駆けるマンダレイの手は、しかし未だ二人に届く距離には無い。



「ッ、だめ……！」

逃げろと、そう口にできない自分が憎くてたまらない。仲間を見捨てられず、まだ子供ともいえる彼に心の中で頼るしかない自分が居る。

だが、遠くにあつた影の正体が分かつてしまえば、その胸中に浮かぶのは焦り。

少年よりも何倍も大きなその巨体、異様な風貌。

そして何より、纏った血の匂いとその雰囲気。

恐らく、先ほど広場で交戦した2人よりも――

大男の拳が、少年の頭へと振り下ろされる。

だが、

「……あの子ッ」

自分の頭より大きな右拳が、まるで見えない自分から向きを変えたかのように受け流されていく。

学生とは思えない……いや、今の個性社会で力任せになりやすいこれらのヒーローにも決して出来はしない技術による技。

いったい、どうやってあそこまでの技術を身に着けたのか。

だが、残ったもう片腕が再び振るのを見ればそんな考えも吹き飛ぶ。

一度出来た事が、二度出来るとは限らないのだから。

「――ネホヒヤンッ!!!」

奇声をあげながら、振るわれた拳に対して――少年は、自らの拳を真っ直ぐに打ち返していた。

辺りに響くのは空気が破裂した様な音と、液体が地面に落ちた湿つ

た音。

「ッ……あぁっ」

間に合わない。

小さく声を漏らす彼の右手が、赤く染まっていく。

大男が握っていた碎けた万力が、彼の手を潰したのだ。

血によつて染まった彼の手が、動く。

彼の体ではなく、大男の方へ――

彼の腕に、白い線のような何かが浮き上がる。

赤く……紅く染まってその二の腕が、大男の腕を押し返していく。

「――テメエの想いも捨てさせられた拳なんぞ、軽いに決まってるよなぁ」

異音が弾ける。

金の雷が飛び散る音と、骨が折れていく生々しい音――。

「倒れたダチのために握った虎の姐さんの拳の方が、何倍もゴールドデ  
ンだったぜッ!!」

重さに耐え切れなかった大男の拳が跳ね――その胸元へ、勢いを止めず男から見れば小さな拳が突き刺さる。

弾ける雷。

金の光が膨れ上がり視界が一瞬真っ白に染まった。

それでも、ようやくたどり着いた。

彼が作ってくれた時間が、こうしてラグドールの体に触れる時間になった。

ゆっくりと静まっていく光に、目をなんとか開ける。

そこに立っていたのは、さっきまでの大人びた顔よりは少し幼さが残る……しかし、頼りになる男の横顔を見せる少年の姿。

「……良い子だね。イレイザー……あんたの生徒は」

強さだけじゃない、大切な事を学び続けるヒーローの卵の姿がそこにあった。

「ラグドールは、すぐに命に関わる訳じゃ無さそう。今の内に……つて訳には、いかなそうね」

「……奴は恐らくまだ動けるだろうよ」

紅く姿を変えた右手を開閉しながら、吹き飛ばした先を見据える。幾つもの木をなぎ倒しながら吹き飛んでいった筈だけど、今も動き続けるような、もかく様な音が鋭敏な耳に届く。

そして、もう一つ。

「ごめんなさい。少し、我がままを許してくれねえか」

聞こえるんだ。

大切な、彼女の声と何かが碎けるような音が。

背後でラグドールさんの状態を確かめるマンダレイを振り返り、その瞳を見つめる。

ラグドールさんにだって無理をさせてしまうかもしれない。

でも、僕は。

「今さらよ。助けてもらってばかりだもの、私にも手伝わせてくれるなら構わないわ」

少し、悔しそうな顔のマンダレイさんが頷いてくれた。

申し訳ない。

だけどそれを押しても――

マンダレイさんに作戦を伝えるのと、脳無が姿を現すのはほぼ同時だった。

「接続開始。コネクト・オン 巖窟王 アヴエンジャー エミヤ。 アーチャー 混成接続」  
ハイブリット・コネクト

種火へと、星が降る。

身に纏っていた体操着は黒いスーツへと姿を変え、その背中に縫い付けられたかのように赤い外套が羽織られる。

紅く変わったままの右手に、青い光が集まればどこか色あせたポークパイハットが姿を現す。

それを頭へと乗せ、大きく息をつく。

以前聞いた、キャパシティの許容量。

ならば、すべて20%であれば体に宿せるのではないか、そう考えていたけれど上手くいって良かった。

「——よくなくてよ！」

脳内に、焦ったような小さな女の子の声が届く。

今まで聞いたことが無い声だけど、マンダレイの念話じゃないだろうし座の人だろうか。

「『あなたっ、なんて無茶するの！英霊の霊基の融合ですって！?破裂するわっ、あなたの制御を少しでも外れた瞬間に木っ端みじんに体が無くなっちゃう、そんなのダメなんだから！早く止めなさい——』」

「『——退け。新たな戦術を生み出す為に犠牲が無いなど、その方が有り得んだろうに。良いか小僧、もって5分だ。我が直々に接続の調律をしてやろう』」

起き上がった脳無が、迫ってくる。

脳内で、尊大な口調で話す誰かの声が本当なら残り時間はあまりに少ない。

信じるか、信じないか。

（――お願いしますッ）

そんなこと、考えるまでも無かった。

（『待ちなさい！わたしも手伝うからっ、待って！そんな急に手を付ける前に解析をちゃんとしなさいっ』『要らぬ。所詮は魔術師ごときの真似ごと、その過程・・・手段程度が我に見通せぬわけがなからう』）

トレース・オン  
「投影開始」

左手に生み出した巨大な洋弓。右手には、自分の腕よりも大きな鋼鉄の矢を作り出す。

本来なら持つことも難しいそれを、紅い右腕は簡単に持ち上げてしまふ。

先端を潰されたそれを弓につがえ、弦を引き絞る。

眼前に、奴が迫る。

すでに数メートル。

でも、まだ引きつける。

その息が聞こえるまで、ギリギリまで引きつけて。

「マンダレイッ！」

声を張ると同時に、右手を放す。

腕を振るえば届くほどの距離に迫った脳無の動きが、止まる。

指示通り、マンダレイによって大音量の声がテレパスによって脳内に流れているのだろう。

その隙を、矢が打ち抜く。

「ネホヒヤンツ!？」

上空へ打ち上げるように、斜めに打ち出された矢は脳無の胴体へ直撃し——上空へと運んでいく。

横にされていたラグドールさんの体を抱えて……背中に、マンドレイさんが抱き着いた重さを感じる。

時間が無い、その中でできる事を。

体を、銀の光が包む。

地を蹴れば、足から放たれる力が体を宙へと浮き上がらせる。

あつという間に木々を飛び越し、視界に入るのは薄明りの中で動く大きな影と——その足元に居る大切なあの人達の姿。

——ツ！落ち、着け……！あれは

強化された目が、影の中に埋もれたクラスメイト——常闇君の姿を拾う。

なら、あれは黒影なのだろうか。

なら、やることは。

イメージする。

体に宿る霊基から、光を……雷を打ち出すために最も適した形を。

『贗作者。そして、過去の幻影から力を借りる模倣者である貴様に価値は無い。だが、人類史に於いて初めて生み出したその戦術には、我も幾ばくかの興味を惹かれはした』

「——偽・黄金喰い」  
ゴールドエンイーター

右手から空気中に溢れ出した雷が、金色に輝く矢を形作る。

斧のような先端に、カートリッジのようなものが2つ付いているそれを弓に番え——それを、空から落ちてくる脳無へと向ける。

「——ネホ・・・ッ、ネホヒヤンツ!!」

ふざけたような声を出しながら、その背中から何かが生え始める。現れたのは、4本の新しい腕とそれぞれに埋め込まれた巨大なチェーンソーやドリルといった工具の姿。

それを、盾にする様に構え——

手の中で、金の輝きが弾ける。

迷いなく、放たれた矢は一条の金の光の筋を残しながら夜の闇を駆けていく。

1秒と待たず、脳無と接触した矢は

「・・・本当に、どんな個性なのよ」

まるで障害にも値しないとばかりに、その鋼鉄の武器ごと腕を粉砕し突き進む。

人形のように力を失った脳無の体を運びながら、矢は——黒影の体へと着弾し

弾ける閃光。

黒影の巨体が揺れ、縮んでいくのも確認せず僕は跳ぶ。

少しでも、早く彼女達の無事が知りたくて、会いたくて。



木々から跳び降りて、ラグドールさんやマンダレイさんに負担をかけるに様子をしながら、それでも焦りながらやつとかつちゃんの前に跳び降りて――

「――メルセデスツ、メルセデスさん!!」

麗日さんも無事だつ、かつちゃんは!

着地と同時に、その姿を確かめる。

切り裂かれた体操着の中に見える、健康的に焼けた肌とか意外に可愛いピンクのフリルの付いた上下の下着。

それに一瞬、目が奪われ。

傷だらけの体に、すぐに別の意味で心臓が跳ねる。

無事なのか、そう声をかけたくて……せめて無事を確かめるために手を伸ばして。

「オイ、クソデク……テメエ、俺達が戦ってる間ナニしてやがった……?」

大きな舌打ちと、低い声。

幼馴染だからこそ分かる、怒った……ちよつと悲しそうなかつちゃんの姿に思わず手が止まる。

(な……なんでき)

最近、少し気になっている幼馴染みとの距離感に思わず胸の中でそ

んな声が漏れた。

待て、しかして・・・

「ヴィラン襲撃7」

青山優雅は口元を両手で覆い、近付く足音に体を震わせていた。

いっしょに肝試しをしていた八百万は周囲にガスがただよい始めてすぐに、Bクラスの生徒を助けに行くといい残して森の中へ消えていった。

足元に倒れているのは、耳郎と葉隠の2人。

ガスを吸い、倒れた彼女たちを任せれここまで何とか運んできたが

「予定通りにはいかねえもんだな・・・」

「そりやそうさ！予定通りだぜ」

漂っていたガスが霧散していく。

声の主である全身タイツのようなマスク男と、黒髪の男が言っているように奴らにとって何か予定外の事が起きた。

（誰かが、ガスを出してたヴィランを倒したんだ・・・！）

誰かが、今も戦っている。

なら

体を乗り出し、青山は茂みの影からヴィランの姿を確かめようと体を乗り出す。

戦う訳ではない、少しでも自分にも情報を集めるぐらいの役割は果たしたい、そんな気持ちで。

（——ッ、目が合った!?）

黒髪の男。

その瞳と、確かに目が合ってしまった。

急ぎ茂みに体を戻すが、すでに遅い。

男たちの足が止まり、痛いほどの視線を感じる。

体が震え、恐怖を誤魔化すように全力で目を閉じ——ヒーロー科

であるなんて、そんな事は考えられなかった。  
傍に迫る死が、ただ恐ろしくて。

唐突に

グツ、と肩を掴まれた。

――！！！！  
(!!!)

干上がる喉。

その喉から、絶叫が飛び出しかけて。

「(しっ、落ち着いてくださいまし青山さん。私ですわ)」

その口を、女性らしい柔らかな手の平が押さえていた。

張り付くほどに閉じていた目蓋を開けば、別れたはずの八百万の  
姿。

少しの切り傷はあるが、無事なその姿を確認し青山の体からようや  
く力が抜けて。

「(っ・・・B組の方はどうなったんだい?)」

「(無事合流して、ガスの発生源を倒すことに成功しましたわ。負傷者  
は固まって施設に向かってもらって、私は青山さんの援護に戻ってき  
ましたの)」

ガスの発生源であったガスマスクの少年は、B組の鉄哲によって殴  
り飛ばされ、同じくB組の泡瀬によって木に溶接されている。

「おい茶毘ー！そーいやどうでもいいことだがよ！脳無って奴、呼ばな  
くていいのか!?お前の声にのみ反応するとか言ってただろ!？」

「ああいけねえ。何のために戦闘に加わんなかったって話だな」

「感謝しな 土下座しろ！」

茶毘と呼ばれた黒髪の男が、その首に手を当てる。

青山の口元から手を放し、茂みの影から目を凝らしていた八百万は  
その動きに目を凝らす。

「(脳無。緑谷さんがUSJで交戦したというヴィラン・・・他の個体も発見されたとは聞いていましたが、こんな時にそんなものが来たら)」

戦況は大きく傾くかもしれない。

その事実には、八百万は苦しい気に口元を引き結び――。

「死柄木からもらった俺仕様の・・・ん？こつちも予定外か・・・？」  
「どうした、教えろよ!! しばらく黙ってろ！」

「ああ・・・脳無の反応が無い。やられたか、それとも暴走したか」  
「マジかよ！ツイてねえなッ、ラッキー野郎！」

再び歩き出した男たちの姿は森の中へと消えていく。

その姿を見失わないようにしながら八百万は考える。

「(誰かが倒していた？・・・いえ、希望的観測は思考のはばを狭めますわ)」

考えるべきは、今の状況で自分たちにできる事。

「(行きますわよ、青山さん。耳郎さんは私が背負います)」

「(っ、行くのかい？でも、ヴィランに付いて行くなんて・・・)」

「(彼らは既に活動を行っているようには見えません。このまま集合して、撤収するかもしれませんわ)」

なら、何かの目的を果たしたと考えるのが自然。

それは――

「——いやあ、ギャラリーが多いってのは良いもんだね」  
轟さんから体を離すのと同時に、背後からそんな声が響いた。  
そしてようやく気付く。

さつきまで聞こえていたかつちゃんの声が聞こえない。

雨吹さんも、麗日さんの声だつて——。

「何者だ!？」

膨れ上がる嫌な予感に振り向くのと、障子君が怒鳴る様に叫ぶのはほとんど一緒で。

「そんなことより、こつちの方が大事だろう？ホラ、よく見て見ない！」

木の上……見上げるような高さに立つのは、妙な仮面にシルクハットの男。

その手、指に挟めるように見せつけられているのは小さなビー玉のようなナニか。

暗闇の中、優れた視力でも完全には見えないけど……うつすらと、人影のような何かがそこには見えた。

「まさか、爆豪や麗日、蛙吹をその中へ封じ込めたと言っても言うのか！」  
常闇君が口にする内容と、全く同じ想像が浮かぶ。

そうと分かれば、視線は急に像を結びはじめる。

ぼんやりと見えていた影が、見知った姿に変わって

「――返せッ」

緑谷の体から、紫電が弾ける。

〈接続開始 巖窟王80%スタイル〉

背中から吹き出す力を推進力に、仮面の男との距離を一瞬で詰める。

挟る様に、振るった手――指先が、男の腕をかすめてそのコートの一部を千切り取る。

「おおッ。こいつぁ失敗したなあ。つつい癖で一言かけちまったけど、サツサと退散すりや良かった!」

手放しそうになった玉を掴みなおしながら、男――ヴィラン〈コンプレス〉は想像以上の速さに内心で冷や汗を流す。

しかし、エンターテイナーである彼がそれを表に出すことは無いが。

「・・・勝紀を、返せ!!」

そんなコンプレスの足元から、白い光が襲い掛かる。

闇を照らすように迫るそれは白色に輝く炎。

容易く木々を消し炭に変えるそれに――勢いよく足元の枝を蹴る。

くるくると宙を舞いながら、耳元へ手を当て

「開闢行動隊! 目標回収達成だ! 短い間だったがこれにて幕引き! 予定通りこの通信後、5分以内に〈回収地点〉へ向かえ!」

「させッ、るか!!」

再び迫る銀の閃光に、コンプレスは宙へ浮いたまま体をひねる。

手の中の玉を弄ぶように転がし、次いで強くその拳を握って見せる。

「――止まらなきや潰す・・・とかどうだい？」

「・・・ッ!？」

読み通り、緑谷の体から銀の輝きが失われる。

（賢いじゃないか。でもバカだよ）

その体を、勢いよく地面へ蹴り落とす。

体の回転と、落下速度、体重も込めた蹴りは確実に緑谷の胸を打ち抜いて

「――ッ硬っ!?どんな体してんのよ?」

予想外の衝撃に、逆にコンプレスの口からそんな声が漏れる。

だが、

「まあ、・・・とにかくく!さらばだヒーロー科諸君!」

飛行能力を持った者は潰した。

なら、あとはおさらばするだけ。

足元から巨大な氷の槍がせり上がってくるが――それすら足場にしながらコンプレスは闇に体を溶かす。

木々を足場に遠のいていく姿を追えるものはおらず。



「あれ？まだこんだけですか」

セーラー服を着た金髪の少女——トガが茂みをかき分け顔を出せば、集合場所に居たのは黒髪の男〈荼毘〉とパツツンスーツの男〈トウワイス〉の2人が彼女へと顔を向ける。

「イカレ野郎、血は採れたのか？何人分だ？」

「一人です」

「一人イ!?最低三人はって言われてなかった!？」

「仕方がないのです。頭のおかしい子に殺されるかと思った」

トウワイスの言葉に、トガの瞳が一瞬暗く光る。

だが、すぐにその表情は先ほどまでと同じように明るい物へと変わる。

殺されかけたと話すには、あまりに無邪気な喜びの表情を浮かべて。

「トガちゃんテンション高くねえか!?何か落ち込む事でもあったのか!？」

「あだ名で呼べる友達が出来たのと、気になる男の子がいたのです」

「それ俺!?ごめんムリ！俺も好きだよ！」

思い出すように、赤く染めた頬に両手を当てるトガに、迫るトウワイス。

騒がしいその姿に

「うるせえな、黙って——」

呆れた様に荼毘が口を開き、黙らせるための言葉を口にしようとした瞬間

何か空を切り、迫る音を耳が拾う。

首を捻り、その方角へ体の向きを変えて——

「——かつ・・・はッ」

眼前の地面に、音を立ててスーツ姿の男が叩き付けられる。

その背に乗る影が二つ。

一つは、黒い帽子とスーツの少年と、赤白の髪をした少女。

「知ってるぜこのガキ共!! 誰だ!？」

叫ぶトウワイスとは対照的に、少女の姿を捉えた茶毘の表情が、一

瞬固まる——。

が、それも一瞬。

「・・・Mr. 避ける」「ッ・・・ラジャ了解!」

突き出された左腕。

その手から

赤黒い炎が吐き出される。

肌を焦がすような熱量にトウワイスは身を引くが、それよりも驚愕すべきはその密度。

火炎を放った本人の腕が大きく跳ね上がるほどの反動を与えたその炎は、一瞬でコンプレスごと二人の姿を飲み込む。

「おい茶毘ッ、気合い入れすぎだろ! ヤル気出せ雑魚!」

「適切な火力だ。話に聞く通りならこんなんじゃないだろ」

目を細める茶毘の視線が、彼らの居た場所を気だるげに見据える。

その予想を裏付けるように、火炎に飲み込まれた一部が内から膨らみ――食い破る様に黒と白の炎が飛び出す。

大きく開いたその穴から飛び出す二つの影に、茶毘は小さく舌打ちする。

「玉になつてた。もうここには用は無い」

「ああ。奴らにその気があるうが無かろうが関係無い、速やかに撤退するでしょう」

轟の片手に握られているのは、火炎から身を隠すために自身をへ圧縮し玉へと変えたコンプレス。

目的を果たした二人は既に逃走のために身をひるがえしており。

「させるか！ さっさと逃げろ！」

その姿を、ヴィラン側も逃がすつもりは無い。

進路を断つように回り込んだトウワイスが、その行く手を阻む。

そして

並ぶ二人を分断するかのように、茶毘の火炎が再び放たれた。

そう簡単には帰してもらえないのは分かってたけどッ。

「――トガです！出久くん！」

炎を避けるために跳んだ先で、金色の髪の子の姿が一瞬見え  
て。

次の瞬間には僕の首を射抜くために大きな注射器が飛んできて  
た。

なんとか首を傾けて、首筋をかすめながら通り過ぎたソレを追うよ  
うに――ナイフを振り下ろしながら女の子が飛び掛かってくる。

「さっき思ってたんですけど、もっと血出たほうがもっとカッコイイよ  
出久くん!!」

「・・・理解出来んな」

ナイフを持った右手を跳ね除けて、手首を捻る。

激痛に跳ねた手からナイフが落ち、少女の顔が一瞬歪む。

だが動きは止まらない。

グイツ、と手首の痛みなど無視するように近づくとその顔に浮かぶの

は恍惚とした笑み。

「でも、血どばどば出てましたよね！匂いで分かるよ、ほら！」

ギリギリと軋みを上げる腕を代償に、鼻先を出久の胸元に押し付けて肺に染み渡らせるように深呼吸する。

この場で、最も濃密な血液の匂いに熱くなる体を、トガは震わせて

その表情が、ストンと無に変わる。

「嫌な臭い。さいあくな気分になりました。あの子、やっぱり友達にはなれないです」

「ワタシもそう思う。早く離れろ、やぶ蚊女」

トガの体が、緑谷の体から横へ大きく跳ね飛ばされる。

それを成したのは、薙刀のように成形された氷塊であり当然握るのは赤白髪の少女。

「あのピチピチスーツは追い払ったけど、黒髪は動いてない。すこし気味が悪いな」

焦りが、見えない。

まるで何かを待つかのような、その姿が不気味であり。

「策があるのは確かだろう。だが俺達にとれる道が一つしかないのもまた事実だ」

なら、押し通るしか無い。

そう口にした緑谷が、茶毘を睨み――

対する茶毘は、大きく息を吐く。  
呆れた様に、待ちわびたとばかりに眉を寄せて。

闇が広がる。

茶毘の背後で、広がる黒い霧のようなそれに緑谷達はおぼえがあった。

USJで遭遇したヴィラン、その能力は――。

「遅いんじゃないか黒霧」

「申し訳ありません。脳無の回収に手間取りまして」  
ワープ。

唐突に、茶毘が片手を上げ・・・その手を黒い霧が包み込む。

その動作に、次の動きを予測した緑谷の頬が引きつる。

（ま・・・ず、いッ!?!）

「遅え」

轟の眼前に、焼けただれた皮膚を繋ぎ合わせたような手が現れる。  
黒い霧から突き出た、手首から先だけのソレが――火炎を吹く。

人体など簡単に炭に変えるだろう熱量に、体を傾け回避しようとする彼女とその体を押しつけるように跳ぶ緑谷。

僅かに服の一部を焼かれた緑谷が轟ごと地面に転がる事で、最悪の事態は回避された、が。

パッ!!

と轟の手から光が弾ける。

跳び出すように姿を現したのは、仮面をつけたコートの男。

その手に玉を転がしたコンプレスは忌々し気に2人を見下ろし……素早く茶毘の方へ駆ける。

「油断しすぎだ。あんたが捕まってどうする」

「ホホホ、想像以上に手癖の悪い子たちだったようで一本取られましたよ。でも、ほらターゲットとおまけはこの通り」

「よくやったぜコンプレス！　しっかり働けッこのごく潰し！」

倒れた二人に見せつけるようにかざす3つの玉。  
状況は負へと転がっていく。

「撤収だ。さっさと送れ、黒霧」

「はい。皆さま、どうぞお入りください」

荼毘は、唯一この戦況を俯瞰的に見ていた。

戦力差を考えればコンプレスを奪還するのは容易い事であり、もはや任務はほぼ達成されたと考えて良い。

唯一残った、任務を除いては。

「とおう！」

「ごめんね、出久くんまたね！とど……焦子ちゃんは知らないですけど」

黒霧のワープゲートへ消えていくその他。

2人とも相性が良くない以上、足手まといでしかない。

撤収までの時間は彼一人で十分稼げる。

「ああああああああ!!!」

銀色の光が、迫る。

表情を焦りに歪めた少年の、しかし暴風を纏ったその怪力を秘めた右腕を荼毘は体を反らし避けて見せる。

その腹部へ、打ち抜くように右足で鋭い蹴りを返してやれば――

（意外に冷静だな。焦って見えるのは演技か？）

体を捻り、避けた少年に残った軸の左足を蹴り払われ、横向きに体は倒れていく。

横向きに傾いた視界をかすめるように、こちらなど無視して駆け出そうとするその背中。

地面に片手を着き、着地しながら姿勢を整えそれを追おうとして。



その足元を氷が覆う。

「行かせない。イズク君の邪魔はさせない」

「・・・遅え。コンプレスを逃した時点で、こっちの勝ちが決まった。お前を庇わなかったら変わったかもしれないが」

茶毘の視線の先で、コンプレスの姿がワープゲートの中へと消えていく。

迫る緑谷の手は僅かに届かない。

「ショウが短くて見せ場も足りないと来たもんだが致し方なし。少し不満はありますが」

「返せッ!!!」

「これにてショウはお開きだ」

「返せよッ!!!」

「ああ！お代は3つ、ちゃんと受け取らせていただいたので心配しないでくれ」

仮面の男が、手のひらに乗せた玉を緑谷へ見せつける。

その体は既に黒霧のワープゲートの中にあり、転移しないのは彼が緑谷へ戦利品であるそれを見せたいがためでしかない。

彼の手が間に合わず、撤退可能なタイミング。

それを理解した上でコンプレスは最後の一瞬までショーを行う。

「そんじゃー・・・」

一歩、退がる。

残るは、玉を持ったコンプレスの腕が宙に浮かぶのみ。

「ッ、返せええええ!!」

「——お後がよろしいようで」

銀の光をまとった腕が、伸ばされるが決して届かない。

あと一秒あれば届いたはずの距離。

血を吐く様な声に、無情にもコンプレスの手は闇へと消えていき——

「——ッ!?!」

THOOOOOOM!!

煌びやかな一条の閃光が、その手を叩く。

開いたその手から、3つの玉が飛び出し——それを、視界の

端の茂みから飛び出した影が目細かい大きな虫取り網のような何かですくい取る。

「緑谷さん！これで全員ですか!?」

「メルセデスッ！ああ、捕らわれたのは三人。覗くが良い、その姿が見えるはずだ！」

影——網を創造しすくい取った八百万が、玉を確認しその背後から青山がその姿を追ってかけてくる。

先ほどの光は青山のネビルレーザーであつたのかと、安堵共に心の底から感謝して

「っ、見えます！麗日さんつつ、蛙吹さん——」

「っだよ今のレーザー……。俺のショウが台無しだ」

苛立ったような声を出したコンプレスが、霧の中から身を乗り出し撃たれて未だ痺れる手を動かし指を鳴らす。

パツと弾けるように八百万の手の中で光るのは、残り一つ……爆豪だと思われていた玉。

「そんなっ、どうして……!」

「本命はすぐにしまつて見えない様に隠しておく。忘れたところに出すとみんな驚くだろう？エンターテイメントだ」

霧の中から飛び出す左腕。

その手がゆっくりと開かれれば——乗っているのは一つの玉。パツと弾ける音と共に

「ッ、んだよクソがあ!!」

首を背後から掴まれた爆豪の姿が現れ、すぐに霧の中へ沈み込む。その顔が、沈む間際。

視界は彼女へと走り寄る幼馴染みの姿を捉える。

間に合わないという焦り、安堵に一瞬でも足を止めてしまった後悔。

普段の彼であれば絶対に見せないソレが隠せていない。

今の彼では、きつと——

「手を伸ばしてッ、勝紀!!」

「——来んな 出久」

真っ暗だ。

視界は黒い霧みたいな何かに遮られてやがるし、首を掴まれている  
せいで下手に動きもとれねえ。

だが、だからといって大人しくするつもりもない。

「さて、君に会わせなきゃいけない人が居る。大人しく——」  
するかボケ。

手を後ろに回して、男の腹を爆破してやろうと力を込め——その右手を、ギリツと握りつぶさんとばかりに強く掴まれる。

悲鳴が漏れそうな口を閉じて、奥歯を噛み締めてなんとか耐える。耳に、奴の顔が近付いてくるのを感じて背中に這う嫌な気配に小さな悲鳴が漏れかかつて。

「シヨウを台無しにされて少しイラついているんだ。変な動きをしたら……」

言葉には出さず、右手を掴む力がさらに強まりやがった。意地でも、悲鳴なんぞあげてやるか。

死ね、クソ野郎とでも言い放とうと口を開け——

眼前の空間から、闇を掻き分け生身の腕が現れた。次いで、肩、胸と……アイツの体が現れていく。

「——勝紀を、返せ」

「っ、嘘だろー！黒霧ツ、早く閉じ——」

恐らく、殆ど閉じかけのゲートに体をねじ込んだその体を追い出すように、周囲の闇が動くのが分かる。

「——っ、ダメだ！逃げろよッ、死んじゃう・・・頼むから・・・」  
ブチ、とその腹部が切れていく音が聞こえる。  
空間が遮断され、物理的な防御など意味を成さずその体は両断される。

黒霧のワープゲートとはそういう能力であり。

「・・・断る。お、まえを助けず逃げるなど・・・俺がすると思うか」  
するわけがない。

だからこそ、目を背けたいと爆豪は思う。  
容易く両断されるその体など、けっして見たくはないと。

「さて・・・なんでまだ切れてないんだ？おい黒霧、この期に及んで体内を血で汚したくないなんて思ってたんじゃない——」

未だに両断されないその体に、コンプレスが抗議するように天を仰ぎ見る。

爆豪から視線が逸れ、すでに死に体の緑谷など気にするには値しないとあげた声は。

「・・・トレス、オン投影、開始」

彼にとって致命的な隙となる。

爆豪の首を掴んだ右腕、その付け根となる肩口へ一本の白い中華剣が突き刺さる。

「ッ、ああああ！このクソ餓鬼ッふざけんなよ！」

深々と突き刺さった剣とその衝撃にのけ反るコンプレス。

爆豪の首が解放され、しかしとつさに服を掴まれよろけるように倒

れたその姿へ緑谷は剣を投擲した手を伸ばす。

お腹も、上にある肋骨も切られていく感触が分かる。

冷たい刃が通って――——すぐにその断面が再生していく。

見えはしないけど、きつと映像を巻き戻すように傷は癒えてすぐにまた切断されているんだろう。

気が遠くなりそうな激痛が、痛みなんて殆ど感じないはずの体に襲い掛かってくる。

それだけの傷、損傷。

でも、それが止まる理由になんてならない。

『牢獄の裁定に従い、その手を伸ばす事を諦めさえすればそのような苦痛からは逃れられるだろうに』

それが彼女を救わない理由になんてならない。

『鉄格子は降り、お前は永遠にあの娘と邂逅することなどないだろ

う』

そんな未来、僕は認めるわけにはいかない。

『ならば燃やセッ。お前の中で燃える憤怒をッ!!人ではないッ、お前達を裂く運命を呪い力とするがいい!!』

切り落とされかけた胴体が、再び再生していく。

淡く、青い光を放ちながら——悪逆な、絶望的な、悲劇的な現状に抗い続けるように。

〈アトンドリ・エスペリエ  
待て、しかして希望せよ〉

その肉体は、精神が屈するまで再生を続ける。

『お前が抗う事を止めぬ限り、その体が千切れることは無い。一筋の光とは、運命とはそういうものだ』

閉じかけた霧が、青い光に浸食されていく。

巖窟王の宝具は肉体を再生させ、その能力を引き上げるもの。

物理法則を無視する切断は防ぎきることは出来ない。

故に、もう一つ。

黒霧のワープゲート。

彼の物ともいえるその世界を、緑谷の体から出た青い光がゆつくりと作り変えようとしていた。

肩に突き刺さっていた白い中華剣を抜き、投げ捨てたコンプレスは爆豪の左腕をひねり上げるように拘束する。

諦めの悪いガキをどうしようかと、緑谷へ目を向け……緑谷の体から数メートル、円形に浸食された黒霧の空間に——ギラギラと輝く無数の光を見た。



「——ッあ……!?!」

その正体を確認しようと目を凝らして、彼の喉は声を出すことすら出来なくなる。

それが、自分を見つめる数え切れないほどの人間の目だと気付いた瞬間、彼の精神は一瞬で崩れた。

品定めするような目、観察するような目、つまらない物を見るような目、獲物を見るような目——。

そして、憤怒に染まり切った目。

その瞳が、徐々に大きくなっていく。

近付いて来ているのだと、そう理解した彼だが未だ僅かに余裕はあった。

空間に投射された様なその影は、映像の向かい側に過ぎない。

映画を見て本気で死の恐怖を感じる人間が居ない様に、彼の心は一定のラインをなんとか保ち。

ガンッ!!

憤怒の瞳、近付いて分かる長髪の女性の影が手に持った何か——

―刀のようなものを振り下ろす。

ガンッ！ガンッガンッガンッガンッガンッ！ガンッ  
ガンッガンッガンッガンッガンッ！ガンッガンッガンッガ  
ンッガンッガンッガンッ！ガンッガンッガンッガンッ！

狂ったように打ち付けられるその音に、狂気にコンプレスの脳は冷  
静な思考を奪い去られていく。

掴み上げたはずの爆豪の手からは力が抜け、既に拘束の意味は成し  
ていない。

拘束から逃れた少女は――

かっちゃんに、手を伸ばす。

理由は分からないけど、体を切られる感触もいまは無い。  
ヴィランも、何かに怯えるみたいに動きを止めている。

「早くッ、かっちゃん！今ならッ」

「うるせえ、分かっているから無理に喋んな！」

そして、今度こそ——かっちゃんの手を掴んだ。

強く引き寄せて、空間から体を引いて。

「——はあ、予定外ばかりだ。嫌になる」

体が、横へ吹き飛ばされる。

それが、脇腹を蹴られたのだと理解した時にはもう掴んでいた筈の  
彼女の手の感触は無くて——。

「でもまあ、これでおさらばだ。じゃあな、お互い二度と会わない事を  
祈って」

地面に転がりながら何とか視界が捉えたのは黒髪の男の姿。

僕が離れたから制御が戻ったのか、かっちゃんを包んでいた黒い靄  
が炎使いの黒髪の男ごと消えていく。

「ッ、行くなよ！かっちゃんッ……勝紀ッ!!」

地面を叩いて、走る。

体から青い光が霧散して、生身の体になった事すら頭には無くて、  
ただ必死だった。

それでも伸ばした手は、届くことは無くて。  
最後に見えたかったちゃんの顔に浮かんだのは――二度とさ  
せたくない表情だった。

## 別世界線 俺の幼なじみは死んだ 前編

「俺の幼馴染は死んだ 前爆」

中学三年の教室で出る話題なんて成績か進路の話しか出てこねえ。ヒーローを目指すなんて口にしていた奴らも居たが、いざこの時期になってみれば実際に進路希望に書く奴なんて数人。

雄英を目指す奴なんて俺一人だけだ。

「勝己スゲーな！先生も爆豪君なら合格間違いないって言ってたじゃん！」

「あ？・・・決まってるだろ。俺が受かんないや全員落ちるぜ」

俺はヒーローになる。

化け物を殺していいのはヒーローだけなんだからよ。

「なあー！ヒーロー科に入ったら先生のサインとか貰えるんでしょ！僕に貰って来て——」

ギッ——

目の前で話していた、そこまで親しくもない男子生徒が俺の右隣の机に腰かける。

それだけで、ギシリと机から軋んだ音が鳴った。

他の机より、傷の多い机。

何か・・・油絵の具をこぼしたような汚れや、他にもいろいろな痕が残されたその机と椅子は汚れているという印象しか受けない。

「そろそろホームルーム始まんذار、さっさとそこ退けろ」

俺の内申が下がるじゃねえか。

俺にしてはなるべく静かな口調で、目の前のクソに忠告するが奴のへらへらした笑いは変わらない。

ギシギシと、足を揺らすたびに隣の机が軋む。

汚えケツに敷かれた端から、刃物か何かで刻まれた文字が見える。

——は死ね。

「ええーっ、いいじゃん！サインもらってくれよ『かつちゃん』！」

ああ、駄目だコイツ。イライラさせんじゃねえよ。

「・・・死にてえのか、デメエ」

気が付けば、俺はクソ野郎の襟首を左手で掴み、器用にも床に引きずり降ろしていた。

右手はその頭をわしづかみ状態。

指の隙間からは黒い煙が漏れ、そのさらに奥には恐怖からか目を見開いたクソがこちらを見返している。

止めてほしいんだろうが、それで止まるつもりはねえ。

必死に言葉を話そうとするその口ごと爆破してやろうと力を込めて――。

妙に、周囲が静かな事に今更気付いた。

俺が暴れたから静かになった・・・訳じゃねえ。

うるせえ女子共の悲鳴もなにも聞こえなかった。

なら、原因は。

「――」。

視線を、クズから上げる。

クラスメイト全員の視線の先、教室の入り口に見えたのは小さな

影。

「…チツ、根暗なオーラ全開で入って来てんじゃねえよクソオンナ」  
静かな教室で、俺の声は簡単にアイツまで響く。

飯を食ってんのか疑いたくなるそのひょうい体がまた、怯えたみてえに震えるのが遠くからでもわかる。

いくら怯えようが知った事じゃねえ。

クソを捕まえていた手を放し、自分の椅子に座りなおした。

誰かが動いたからか一度は固まっていた空気が、ゆつくりと動き始める。

まるで、いま何も起こらなかったみてえにさっきまでの会話がまた繰り返される。

気持ちわりイ。

アイツが、自分の席に来るために近寄れば嫌悪感をすぐに顔に出す癖に。

アイツが放課後教室から出れば、気が楽になったとひと際大きく騒ぐぐせに。

誰かがなにか問題を起こせば、アイツを引き合いに出して自分はまだマシな人間だと口にして笑いあう癖に。

右隣に、アイツが座る。

机と同じように耐久性の減った椅子は簡単に軋んだ音を立てるはずなのに、アイツが座っても小さな音すら立てやしない。

カバンを開けようとしているのか、カチャカチャと金具の音がする。

以前いつのまにかゴミ箱に入れられていた時から、あのカバンは金具が少し歪んでいた。

カチャカチャ。  
カチャカチャ。

鳴りやまないその音が、今日も耳にさわる。  
はやく親に買ってもらえばいいのによ。

毎朝、毎朝――。

「うるせえぞクソがッ！ぶっ飛ばされてえのか!？」

細く、しかし日本人離れた鉛色の手からカバンを取り上げれば、  
バチンッ！と金具を片手で押し上げる。

簡単に取れるじゃねえか。

壊さない様に気を使うから取れねえんじゃねえか、コイツ。

開いたカバンを奴の机に叩き付けるように置いて、こんどこそ椅子  
に座ってホームルームを待つ。

今日はやけに先公がくるのが遅い。なにか事件でもあったのか……  
そういや、今朝のニュースで確か……。

耳に残りやすい声のオッサンニュースキャスターの声を思い出し  
かけたところで、俺の方をじっと見続けるウゼエ視線に気付く。

真横。

それも、おれの目線より低い位置からこっちを見ていやがる。  
無視してやろうとも思ったが、それでコイツが止めるとも思え  
ねえ。

コイツは脳みそが空っぽみてえに『自分の考えを出さない』癖にな  
ぜか俺には執拗に絡んできやがる。

「……んだよ。こっち見てんじゃねえよ、クソがッ！」

舐められてたまるか、怒鳴りながら横を向く。



少しはビビるだろうと考えていた俺を馬鹿にするみてえに、俺が顔を向けた瞬間にアイツは笑って――。

――

「分かんねえんだよツ。喋らねえならこっち見んじやねえ！」

俺の言葉に、笑顔は少し悲しむような、申し訳なさそうなもんに変わっちゃう。

目を隠すように伸ばされた緑の癖ツ毛のせいで、涙が浮かんでいるかすら分からねえが、クシヤリと掴まれたスカートから俺に怒っているのは分かる。

「話さねえなら終わりだ。悔しかったら口がきけるようになってから出直せ、根暗オンナ」

返事は無い。

俺の、世間というところの幼馴染。

緑谷 泉（イズミ）はあの日から壊れ続けていた。

「やあ！爆豪少年、お邪魔しているよ！」

家に帰ると、居間でクソババアと談笑するNo.1ヒーローの姿があった。

出会ってすぐなら少しはビビったこの光景も、週に一度こうして押しかけられれば流石に慣れるってものだ。

うちの一般用ソファーに、ヒーローコスチュームの巨漢が座っているって光景自体はなんだかんだ言ってみるたび少し体がのけ反りかけるが。

「なんでも雄英を目指すそうじゃないか！昔からの付き合いなのに水臭いなあ、進路相談なら私だって少しは役に立てるハズさ！」

「あんたは話が長えんだよ。それに、たまに訓練付けてくれただけで十分だ。・・・だからさっさと帰れ」

「H A H A H A！そう言わず、少し話そうじゃないか、お母さんのいれてくださった紅茶もまだ飲み切っていないんだ」

話し相手を取られたクソババアの声を無視して、適当にソファーにカバンを放り投げる。

「要件はどうせアイツの事だろうが。回りくどい、直接行けよ」

「そう言わずに！私としては君の近況も知りたいんだ。教え子の事が気になるのは当然さ」

一週間でそう変わってたまるか。

残念だが

「特に無えよ。8年前から変わらず、アイツは喋らねえし誰も話しかける奴は居やしねえ」

「そう、かい。緑谷君はまだ・・・」

知るかよ。

アイツが話そうがなにしようが関係無い。

俺が強くなるための障害にならなければどうでも良い。

「良いから、今日も特訓つけろよオールナイト。今日はその面、吹き飛ばしてやる」

「もうかい!? 私はもう少し君の話を聞こうと思ったんだが」

「無えよ。あー・・・けどまあ、終わったたらあのクソの話を少し思い出すかも知れねえな」

「クツ・・・昔はもう少しだけ素直なコだったのに!」  
んな頃は無え。

1時間、なんだかんだ特訓に協力したオールナイトが帰るのを見届けたのが10分前。

帰ってくるのが遅いと文句を言い続けるババアを無視しながら夕飯を食べ始めたのが5分前。

「ッ、クソが！・・・し・・・ぶっ飛べあのクソ女！」

アイツの母親が泣きながら家に電話をかけてきたのがついさつきだ。

あの寄り道する所なんてある筈もない根暗オンナが暗くなっても帰って来ない。

よそのガキの事なのに自分も顔を青くしたうちのババアがそう言ったところまでは憶えている。

そこからなんで、気付いたら俺はこんな時間に学校までの道を逆走しているのか。

まるで意味が分からねえ。

頬を流れる汗が邪魔だ。

全力でたった5分走った程度で汗が流れるようなやわな鍛え方はしてねえだろうが。

焦んなよ、何に焦ってんだよカツコ悪イ。

商店街を過ぎる。

小さな公園を過ぎる。

アイツの親が連絡したのか無人の駐在所を過ぎる。  
だが、居ねえ。

後は――

考えすぎてうつ向いていた顔を少し上げれば、その先に小さな林が見えた。

昔、アイツと少しだけ遊んだ場所。

確か、土地の開発中に偶然できた空白地帯を残そうとか、そんな運動が昔あった・・・みてえな話は聞いたことがある。

暗い中で入り込めばそれなりに迷うぐらいの広さだが、アイツにあらんなどころに行く用事があるとは思えねえ。

違う。

もっと先のどこかだ。

近くに迫った林を通り過ぎ、ペースを変えず追い抜く。

これでゲーセンなんて行ってやがったら本気でぶっ飛ばして――

「■■■■」  
「!!!!」

その獣のような何かの咆哮に

心臓が、一瞬動きを止めたような気がした。

落ち着け、息を吐け。

ここにアレは居ない。

俺は死なない、だから——息を吐け。

「——かつ……ハッ」

固まった全身の筋肉を無理やり動かし、体をくの字に曲げる。

そうしなきゃ、呼吸すら出来ねえ。

息を吐いているのか、それともゲロでも垂れ流してんのか分からない  
いまま荒く息を吐いて——。

足を無理やりにも動かす。

今の声でよくわかった、あのクソはここにいる。

それも、あの時と同じような何かがここで起きていやがる。

体の後ろに突き出した両手に力を込める。

BOOOOOM!!

両手から出た爆発で一気に体が射出され、体は立ち並ぶ木々の内の  
一本へと迫る。

スパイクの付いた靴がその木の幹を削り、掴むと同時に次の爆破を放てば体はジェット機みてえな速さで飛んでいく。

だが、それでも遅え。

アイツが、あの状態ならもう何が起きていてもおかしくない。

4本、6本木を蹴り、次の木を蹴ろうとしたところで不意に視界が開く。

林の端にたどり着いた訳じゃねえ、早すぎる。

まるでなぎ倒されたかのように円形に倒れている木々。

その中心で、二つの人影が立っていた。

月の光で照らされ、気が抜けたように立つ片方がアイツで、その目の前で腕を振り上げているのが名前も知らない男というのが分かる。マズイ、マズイマズイッ。

最後の一本、木を蹴り飛ばし

「やめろおおおオオオ!!」

出したこともないような声が、口から吐き出される。

男の腕が、月の光ではない腕自体から強く白光を始める。

何かの個性だろうが、それを振るおうとしている以上何らかの害があるはずだ。

気の抜けたように立つアイツの胸元に迫った腕が、異音をたてて巨大な肌色の刃へと変わる。

それでもアイツは――――。

俺が伸ばした手はまた、アイツに届きやしなかった。

小学3年に上がったばかりの頃、俺は今よりも頭が足りなかった。個性が使えるようになって、近所のガキどもをまとめて気が大きくなっていたのも原因だろうがアホだったのに変わりはない。

あの日、街に連続通り魔として指名手配されたヴィランが入ってきたなんて話を聞いて探しに行こうなんて、俺が近所のガキどもに言うて。

幼なじみだったアイツも当然のように俺の後ろをついてきていた。

『かつちゃん、今日はどこにいくの?』

『だ、だめだよ。あぶないよ?』

『かつちゃんのお母さんにも。いずちゃん、あぶないことしないように見ててねっておねがいされたから』

あの時の俺は、下に見てたアイツの言葉になぜか苛立ったんだ。

帰るように怒鳴りつけて、びーびー泣くアイツを置いていろんな場所をまわって。

薄暗い路地裏で、本物のヴィランに会っちゃった。



気づいた時にはその汚いボロキレみたいな男に蹴り飛ばされて、近くにいた他のガキどもはどこかへ消えていた。

あのヴィランが何かをぶつぶつ口にしながら、その唇の端からよだれを垂らし近付いて来るのが恐くて。

個性なんて使うなんて頭は無く、ただ近付いて来るそれが恐ろしくて。

ソイツがいつの間にか右手に持っていたナイフが、だらりと脱力した腕と共に振るわれて

ドンッ!!

と、小さな何かがヴィランを突き飛ばした。

『か、かつちゃんっ。に、にげよ!』

男が小柄だったから、あんなに怯えていたアイツでも転ばせられたんだろう。

どうやってここへ来れたのか、汗と涙を垂れ流したアイツのそばかす顔を見て俺は助かったと、内心では物凄え感謝して。

手を伸ばしたんだ。

余計なことしやがって、とか。

そんな言葉を口にしながら、アイツのまだ普通の肌色だった手を握ろうとして。

アイツの胸から、銀色の何かが突き出てきた。

それが、あの男のナイフだと分かって。

そのナイフから赤い血が一気に伝って流れ落ちて、俺の服がアイツの血で真っ赤になって。

アイツの目から、光が消えていくのが見えた。

一瞬開いた口から声は出て来ず、光が消えていくその目だけでアイツが死んでいくのがわかった。

そしてあの日、俺の幼なじみは死んだ。

あの時と同じように、刃がアイツの体に突き立てられる。

相手は違うが、刃であることに変わりはない。

容易く、刃は服を切り裂き胸元に潜り込み。

そこで、容易く動きを止めた。

小柄なガキ、それも女に刺さらなかったことに動きを止めたソイツが目を見開く。

「・・・は？なんだよ、このガキ・・・？」

その腕に細い鉛色の手が触れる。

鋭い刃となった腕を撫でるように触れた細い指が――――

肌色の刃を、握り潰す。

ぐしやりと潰れた刃は、血を撒き散らしながら辺りへと散らばり、対して右腕の肘から先を失った男は呆けたように口を開けて。

「あ、あああああああ――――、あ………？」

「うるせえ、黙ってろ!!」

叫びだした男を、空中から加速したままの勢いで放った飛び蹴りによってアイツの前から蹴り飛ばす。

そのまま一気に距離をとって、着地。

蹴り飛ばした男の顔を見れば

「……自業自得じゃねえか、クソヴィランが」

見覚えのある面だ。

確か連続通り魔事件で指名手配されているヴィランだ、12人近く殺したとか、朝のニュースで見た覚えがある。

人気のない場所に連れ出して殺そうとしたのか、その結果がこれなら自業自得としか言えねえ。

意識を失っていたクズをさらに遠い場所に蹴り飛ばし

そしてアイツへと振り向く。

アイツが死んだあの日と同じ。

鉛色に染まった肌に、赤い瞳。

元はアイツの細い体だ、なのに何でこんなに体が震えやがる。

アイツの体から、目に見えない圧力みてえなモンでも出ているのか  
空間すら歪んで見える。

「テメエ、意識は、．．．無えよな」

それもあの時と同じだ。  
なら、次は――

「????????!!」  
瞬きの一瞬、目を眼前にアイツの赤い瞳があった。  
獣の咆哮と共に迫る拳。

それを

BOOOM!!

無理やり右手から起こした爆破の勢いで真横へ転がるように避ける。

あの時とは違う。

目覚めたんなら仕方ねえ、俺は

「・・・今日こそぶっ殺してやるよ、化け物」

## 別世界線 俺の幼なじみは死んだ 後編

「俺の幼馴染は死んだ 後爆」

あの日、アイツが死んだあの瞬間。  
きつと何かがアイツに乗り移った。

ニタニタと笑うヴィランが、突き刺さったナイフを抜き取ろうとして、何か違和感を感じた顔をしやがったのを憶えている。

そして、虚ろにこつちを見ていたアイツの目に染み渡るように光が戻っていった。

元の色とは似ても似つかない、真っ赤な光がこちらを見返して。  
すぐに興味を失ったみてえに、自分の手を見下ろしていた。

その時にはもうアイツの肌は鉛色に変わっていた、筈だ。

変化したその色が気になってか、静かに・・・記憶が確かなら首を傾げながらアイツはただ手を見て――。

『っ・・・拔けない。死んだら邪魔すんじゃねえよ』

生き返ったアイツに気付かず、あのヴィランが苛立ったように口にした言葉を今でも覚えている。

ムカつく言葉だったのもあるが、それだけじゃねえ。

『――あッ!?なんで生きて・・・んだよお前!!』

その言葉に反応したアイツが、ゆっくりと振り返る。

情けなく叫ぶ声が響き――

『は・・・?』

間の抜けた声を奴の口が呟いた瞬間、後ろ向きに振るわれた鉛色の細腕が、一瞬でヴィランの体を吹き飛ばした。

まさに飛ぶ、としか表現できねえぐらい真っ直ぐに飛んだソレが壁に叩き付けられ

ただのその一瞬で、あのヴィランは動かなくなった。

壁に半分まで埋まったその体が地面に落ちる音と、アイツの背中から押し出される様に落ちたナイフが落ちた音が同時に聞こえて。

気付けば振り向いていたアイツ……に入った何かがこっちを見てやがった。

『ッ、なんだよ！……おまえ、そんなにつよいなら！』

なら、なんだったのか。

俺は何を言おうとしてたのか。

俺の言葉に、何かは眉を寄せて——俺を殺そうと決めたんだろ  
うよ。

大の男を簡単に吹き飛ばした拳が握られて、大きく振りかぶられた  
それを俺は馬鹿みたいに眺めて。

音は無かった。

気付けば鼻先から数ミリの場所で、すでに小さな拳が止まり。

その腕を、大きな手が掴みとめていた。

『——ッ、寸止めとはいえ危ないなあ！……それで、どう、いう状況なのかなあ少年!? つと、まってまって放すから、そんなに力入れたらダメ!』

No. 1 ヒーロー、オールマイト。

奴が……今思い出せば冷や汗を流しながら俺を庇っていた。

それから、言ってみりや怪獣大決戦だ。

ビルを何個か更地に変えて、いつの間にか気を失っていた俺が目覚ませば全てが終わった後だった。

オールマイトは自分がヴィランを半殺しにしたと訴え出たみてえだが、あれだけ町を壊せば野次馬も集まる。

アイツが化け物みてえに暴れた映像なんて夜にはネットに溢れていた。

そっからは早かった。

アイツは今みてえに化け物扱い。

大人も子供も関係無え。

近付く奴なんて殆ど居なくなり、教師もアイツを居ないものとして扱った。

あれから、喋らなくなったのも原因の一つだろう。

アイツはあの日から——。



「オラッ、見えてんぞクソ化け物!!」

遠慮はしねえ。

爆破の反動を使い転がった先で、左手を地面に叩き付ける。  
手の平と地面の間で起きた爆発は簡単に俺の体を押し上げ――  
|。

アイツの眼前に押し戻す。

振るわれたままの拳をかくぐる様に右腕を潜り込ませ制服越し  
にそのどてっ腹に押し当てれば。

「1ッ・・・発目エ!!」

B O O O O O O M !!

至近距離で放たれた爆発は細い体を簡単に押し退け――。

「マジかよ、クソが・・・」

僅かに体をのけ反らせるだけにとどまる。

爆破したはずの腹は、制服は少し焦げちやいるが破けた場所から見  
える肌は傷一つ見えやしねえ。

視界の端でアイツの腕が動く。

あの怪力と正面切って戦うつもりは無い。

勢いよく地面を蹴り飛ばして、後ろへ跳べば——追うように迫った拳による風圧が冗談のようにこちらの体を後方へ押し流す。

だが、そのおかげで思ったよりも距離が稼げた。

要は、オールマイトと同じだ。

硬くて、速くて、力が強エだけ。

その力が人間なんて簡単に潰せるレベルなのがネックだが。

「全部ッ……避けりや良いんだよッ!!」

アイツの両腕から目を離さねえ。

地を後方へ削り飛ばしながら、アイツの体が真っ直ぐにぶっ飛んて来る。

視界の端から滑り込む様に振るわれた右腕を、体を屈めることでやり過ぐす。

ぶわり、と余波だけで地面から足が浮きそうになるのを、指先のみに限定した爆破により抑え込む。

動きを止めた俺を潰すために、既に上から左腕が振ってくるが……オールマイトならもうワンテンポ早え!

屈めた姿勢のまま右足で鉛色の二本の足を蹴り払えば、軽すぎるアイツの体は簡単に横向きに姿勢を崩す。

見当違いの方向へ振るわれた腕は無視。

仰向けのまま地面に向かって倒れていくその胸元に右手を押し当

て――

「2発目ッ!!」

BOOOM!!

地面と俺の手に挟まれたアイツの体に、全力の爆破を叩き込む。  
巻き上がる爆風と、砂塵。

そして――

「ッ・・・クソがッ!!」

手の平が胸に触れてねえ。

アホみてエな力で右手首を、掴まれてやがる。

爆破するギリギリのタイミングで、俺の手を胸から離しやがった。

「ま・・・ずッ――」

折られるッ。

いや、その前にこのまま殴られれば、

「・・・・・・・・・・は・・・？」

掴んでいた手が離れていく。

徐々に回復していく視界の中で、倒れたままこちらを見上げる赤い瞳はジツとこちらを観察するように見つめて。

「ざけんじゃねえ!!俺はッ、テメエをぶつ殺せんだよッ!」

じゃなければ、意味がない。

怪物を殺すために、俺はヒーローになると決めた。

コイツを殺せなければ――。

「ッ・・・!」

グンツと視界が一瞬で切り替わる。

倒れていたアイツに足首を掴まれ、どつかへ放り投げられたんだと気付いた時には体は宙に浮きあがっていて。

くるくると回る視界の中で、ゆつくりと起き上がる小さなアイツの姿を目で捉える。

「舐めんじゃねえ!!俺はッ・・・」

爆破。

両手から放つソレによる爆速ターボで、宙を駆ける。

同時に手を組み合わせ、ハンマーみてえに組み合わせちまえば――。

「アイツに・・・テメエなんか簡単にぶつ殺せるって証明しなきゃならねえんだよッ!!」

今出来る、最高威力の爆破。  
オールマイトとやった特訓で編み出した・・・。

「——ッ!!」

組み合わされた手によるハンマーをアイツの肩に振り下ろす。  
呆気ないほど簡単に、鈍い音を立てて衝突したそれは、ぐらりと体をよろめかせる。

「そんでッ・・・3発目ッ!!!」

組んだ手の下から、両手で放つ全力の爆破が指向性を与えられ解き放たれる。

膨れ上がる爆風と爆炎がアイツの体を包み込み——

「ッはあ・・・ッ・・・さすがに、効いただろ」

爆風に吹き飛ばされ、またもや地面を転がされはしたが自分でやった事だから復帰も早え。

すぐに姿勢を立て直して、今度こそ倒した筈のアイツの居た場所です未だに燃え続ける爆炎を睨み付け。

唐突に、爆炎が四方へ弾け飛ぶ。

その中から、小さな影が冗談みてえな速さで突っ込んでくる。

「見え、てんだよ！ちつとは工夫してかかって来やがれッ!!」

さっきまでと同じように、工夫も無く振り回される腕を体をひねる事で回避しながらアイツの体を観察する。

制服は殆ど意味がねえくらいに破け、肌に焦げ跡までついてやがるが皮膚なんて少し赤くなっている程度だ。

まともにやつてもぶっ倒せる気がしねえ。

攻め方を変える必要がある。

まずは――

「!!!!」

ズンッッ!!

と、何かが重い物が突き立てられたような音と同時に視界がガクンと下がる。

足元にあったはずの地面が消えた様に、落ちるような、そして浮く様な感覚に体が硬直し。

アイツが地面を片足で踏み抜き、文字通り地を割り砕いたせいで地

面が一段下がりやがった事に気付いたところには。

再び、褐色の拳が迫り。

ギリギリで、前に突き出していた手から出力すら調整出来てねえ爆破を撃つ。

砲弾みてえに迫ってくる拳に対して、反対にロケットみてえに飛んだ体が

「ッ、が、・・・ぐッ！」

受け身すら取れずに地面に転がる。

上下すら分からねえ状態で地面に指を突き立てて何とか止まろうとして——ダンッ、と背中が勢いよく何かに衝突する。

衝撃に息を吐きだし、それでもぎげんじゃねえと目を開けて。

視界に入った奴の姿に全力で、体をねじる。

先ほどまで脇腹があつた場所を突き抜けて、アイツの手が俺の背後にあつた木に沈み込み——

空気が弾ける音と同時に、木が爆散した。

弾け出した先ほどまで木だったものと、衝撃波が背中を叩く。

激痛に思考が一瞬鈍る。

その隙間を埋めるように今度こそ腹部に硬い何かが突き刺さった。

一瞬、意識がとんでいた。

最初に感じたのは、口の中に溢れる血の味と土のジャリジャリとした感触。

だが、それでも

「・・・生き・・・てる、だと・・・？」

ふざけやがって。

あんな化け物みてえな怪力で腹を殴られて生きてる理由なんざ一つしかねえ。

目を開けて見りや、薄暗い視界の中でこっちを見下ろす赤い瞳。見慣れたアイツの面だがやっぱり違う。

情けなく垂れ下がった居るはずのアイツの目は、別人みてえに鋭い。



それだけで別人だと分かる。

「その・・・テメエは・・・何で手加減なんて舐めくさったマネしてんだよ」

アイツが死んだあの日、俺を殴ろうとしたコイツを止めたオールマイトは何て言った。

『——ッ、寸止めとはいえ危ないなあ!』

寸止めだ。あの日も今日もコイツは俺を殺そうとしてねえ。そうかよ。

「——関係無エんだよ!!!」

地面を爆破し、仰向けから一気に起き上がる。  
見下ろすアイツのどてっばらに両手を押し当て、突き飛ばすように爆破を起こす。

僅かによろめくその体へ、再度手の平を押し付けようとするがやみくもに振った両腕は簡単に押さえつけられる。

「テメエなんざ——」

簡単に殺せるって分からなきや、あの根暗オンナはまともに過ごせねえじゃねえか。

言葉だって、喋ればテメエが出てくると思ってんのかも知れねえ。口から漏れそうになる言葉を、噛み殺す。

みつともねえ。

言ってたまるか。

こんなもんだの八つ当たりだ。

こいつがあの時乗り移らなきやアイツは死んだままだったかもしれない。

「ぶっ殺してやるッ!!」

交差した手で、腕を掴み取る鉛色の手を爆破する。

「ツぐ……ああああ!!」

手の皮と違って薄い腕の皮膚が千切れ跳ぶが痛くも痒くも無え。引きはがした右腕を今度はこっちが掴み取る。

グンツと引き寄せれば至近距離へ迫るアイツの無表情な面。

だいたい硬さは分かった、少し焦げるだろうが気にすんのは後だ。

「責任でも何でも取ってやるからよ、慰謝料でも何でも請求してきやがれッ!!」

俺は化け物でも何でもぶっ殺せる、トップヒーローになったらいくらでも払ってやるよ。

小さなアイツの頭を、右手でガシリと掴む。

体にいくら攻撃しても意味がねえなら、意識をぶっ飛ばすしかないねえ。

「誰だか知らねえが、もう二度とテメエに出番は無え!!俺がいる限り二度とッ——」

コイツは危険な目には合わねえ。

右手から閃光が弾ける。

意識を奪う為、手の平と五指から脳を揺らすように爆発が巻き起こり——最後の一瞬

「■■■■」

獣によく似た、しかし確かに人間の声が聞こえた気がした。

「・・・え、きみそれ本当にやったの？」

うちのソファーにいつもみてえに座って、うわあと口元を押さえる  
オールマイトの面を全力で爆破してやりてえ。

今回の事件を処理してくれたことには感謝しているが、んなドン退かれるような事をした記憶はない。

「女の子の頭を爆破するのは完全にアウトだとおもうよ」

知るか。結局、少し髪が焦げついた程度だったじゃねえか。

実質的な被害はゼロだ、ゼロ。

「・・・それで、緑谷君はどうしているんだい？」

「知らねえよ。むしろ、あのヴィランとアイツが組んで自分を殺そうとしてきた、なんて奴が出て来て状況は悪くなったんじゃないか」

実際はどうなのか。

本人が喋ろうとしない以上、誰も分からない。

アイツの居場所はこうしてまた狭まっていく。

「いやあ、俺もヒーロー目指そうかな！ヴィラン二匹から逃げられる

なんてけっこう才能あるんじゃない?」

ホームルーム前のくだらない会話の中に、ひと際くだらない会話が混じっている。

どう考えてもおかしな話も、今じゃクラスで一番熱い話題の一つなのだからクソ笑える。

ギツ、ギツと俺の右隣の机を椅子のようにしながら笑っているのはこの前爆破し損ねたクズ。

「ならやつぱ英雄だよなあ!悪い、お前の粹取っちゃうかもな爆豪?」

どうも、先週の俺は甘すぎた。

こんなに俺を苛立たせる奴をぶつ殺さねえなんて、頭がイカレてたとは思えねえ。

ぶすぶすと煙を上げ始めた手を上げれば、一気に静まり返る教室。  
んなもん気にせず、振り上げた手を――

「おつ、ヴィランが来たぜ。やるならあっちにしろよ、なあ!」

目の前のクズが、教室の入り口を指さす。

同時に、すたすたと軽い足音が駆け寄ってくるのも分かった。

クラスの奴らの邪魔にならない様になんてあほみたいな理由で登校時間をギリギリにしているあのアホが、そろそろ来るのも分かっていた。

こうして俺が暴力を振るおうとしていれば、近くに来て咎めるみてえにこっちを見るのも分かっている。

「俺を殴ったら英雄になんて入れなくなるぜ?ヒーローが守る一般人

なんだからさあ」

「ヴィランぶっ飛ばしたら試験無しで合格だろ！ほらさっさとやれよ、爆豪」

「……. 知るかよ、クズ野郎」

「は？」

アホ面のクズの頭を上から叩きつけるように右手で押しつぶす。  
潰れたカエルみてえに机に乗った体を更に捻りつぶすように腕に力を込めて――。

既に耐久性が限界を迎えていたアイツの机の足がひしゃげ、そのままぶっ壊れる。

机の残骸と一緒に今度は床まで落ちた男子生徒の腹に右足を乗っ

けてやれば、

「っ、や．．．．め．．．．!!」

「聞こえねえなあ!? 悪い、アホでクズの言葉は聞こえねえみてえだわ」

体重を乗せてやる。

一気に顔を真っ赤にしていくクズに耳を向けて、安心させる様に笑みを見せてやる。

「ひっ．．．」

「好きにしろ。雄英だろうがどっかの学校だろうが関係ねえ」

んなもんは選択肢の一つだ。結果は変わらねえ。

「No. 1は俺だ、オールマイトだろうがほかの馬の骨だろうがなれんのは2番しかねえ。んで．．．ツ、邪魔すんじやねえクソオンナ!っ、手え離せよ!」

せつかく気分が乗ってきやがったのに、クズから俺を引きはがすようにアイツが俺を後ろへ引っ張りやがる。  
というより

「お前ツ．．．」

まるで車に引っ張られてるみてえなバカ力で引っ張ってきやがる。カバンの鍵開けでいつももたついてたから勘違いしてたが、コイツあの状態じゃなくても怪力じゃねえか!

抵抗しながらもクズから引きはがされちまったから、最後に軽く蹴りを入れてよろめきながら離れて。



見下ろせば、俺の右腕にしがみついているそばかすの付いたアホ面。

癖ツ毛の跳ねた前髪からのぞく目が、俺を責めるように見上げていて。

「・・・喧嘩でぶっ壊したんだ、あのクソ担任には俺が言う。テメエは黙ってろ」

コイツが言えば面倒になる未来しか見えねえ。

きよとんとした、さつきよりもさらにアホになった面でこっちを見上げるアホ。

その手に持ったカバンに、目が行く。

「貸せ。それもぶっ壊してやるから新しいの買え」

毎朝開けるのはいい加減、面倒くせえ。

取り上げるようにカバンを掴み上げようとするが

「――」

ふるふると見たことが無いほど必死に首を振り、カバンを守ろうとする姿に困惑する。

「テメエの母親にまた買ってもらえ。底のほうも破れてきてんじやねえか！」

貰いものだから大事にしてえのか。

そもそもカバンとして役割を果たさなくなってきたているんだ、母親だって納得するだろうに抵抗がより強くなる。

終いには涙目になってきた辺りで、万力のようなコイツの力でカバンが1ミリも動かなくなり諦める事となった。

こっちはアホな力比べで息切れしてんのに、涙目なこと以外はほとんど変わらないコイツの姿に苛立ちが溢れ出してくる。

実力行使でこのまま爆破してやろうか。

右手を、前に伸ばしたところで逆に、アイツがカバンを突き付けてくる。

「……………！！！」

「あ……………？ テメエいま……………」

唸り声のような、しかしやけに感情のこもった声が聞こえた気がした。

だが、俺の声を遮る様にコイツはカバンを目の前に押し付け続けて来やがって。

「なんだっつーんだよッ!?! ぶっ壊せば良いのか？」

「……………！！！」

「うるせエ!!」

こっちが手を伸ばせば、さっきより強くぶんぶんと首を振る。

いい加減、本気でイライラしてきた所で

カバンを持つ手と反対、左手の人差し指がカバンの留め具を指さしていることに気付く。

「……………」

まさかと思いながら、むしろそうだったら本気でどうしてやろうかと考えながら留め具を外してやる。

「……………」

「ッ、テメエの怪力なら——ッ……………」

ただ留め具を外させたかったのだと気付けば、あまりの訳の分からなさに怒鳴ろうとして――。

アホ丸出しに緩んだ顔で、馬鹿みてえに顔を赤くして。

あの日以来、一度も見たことが無かった笑顔を見せるコイツの顔を見てしまえば、何故か苛立ちも、なにも全部引っ込んじまって。

「ナニソレ、甘酸っぱい!! クラスメイトへの暴力はアウトだけでも!」  
「急に叫ぶんじゃねえよ、うるせえ!」

「変わらないとか言って凄く変わってるじゃないか、君も彼女も!」  
「変わんねえよ。クズがゲロツたから誤解は無くなつたが話かける奴は俺以外ゼロだ、なんにも変わってねえよ」

「へー、ふーん：：まあ、君達がそれで良いなら、今はこれで良いのかな」

「ウゼエ。とりあえず話は終わりだ、サツサと帰りやがれ」

「ああ、まってまって！今日は君にひとつ話があつてきたんだ」

「あ？なんだよ改まって気持ち悪い・・・」

「僕の力の秘密に興味はないかな？」

## 呉越春秋

### 「神野編1」

目の前で、一人の男がゆっくりと倒れていく。

彼の顔半分を覆っていた骸骨の仮面はすでに砕け、同様に折り砕かれた異形の爪同様に地面に飛び散っていた。

倒れ行くその目に映るのは、今よりずっと小さなころの僕の姿。

目の前で起きる戦いをただ見つめる事しかできなかった、弱い僕だ。

青年が倒れ、赤い液体が荒んだ石の床を濡らしていく。

誰とも知らない、想いの形。

命があるものじゃないとあの人は言っていた。

強い欲が、この監獄塔ではただ人の姿をとっているだけだと。

でも、あの影は人みたいに言葉を話して、人みたいに血を流して倒れていった。

あのころの僕は、その光景を見る事なんて出来なくてすぐに目を背けたんだ。

そう、ずっと忘れていた。

これは、あの人が課した初めての〈悪夢〉の試練だ。

『目を背けるのか？確かにオレに命じたのはお前の筈だ。己をこの悪夢から抜け出すために協力して欲しいと！ああ、別に構わん。この試練を一画の令呪のみで突破したお前に何も言うつもりは無い』

ほとんど言っていると思う。

言いたいことは言えるだけ言って、それから少し突き放したようなことを言うのがあの人だ。

そして、僕がどう動くのかその姿を後ろから見えてくれたことを今でも覚えている。

この頃の僕は、どうしたんだろう。

まだはつきりと思いつけなくて、小さな〈僕〉が顔を上げ・・・それでも未だ動けないその姿を見つめる。

その姿は、やはり立ち直れるようには見えなくて自分のことだけどころまま試練なんて続けられないと言い出しそうな気さえしてしまう。

そして、ようやく〈僕〉が口を開く。

きつと、これ以上誰かを傷つけてまで進みたくはないと、そう話すために。

『・・・おじさんは、あのひとのことしってるの?』

思い出した。

あの時のあの人の顔を。

『・・・ああ。だが、知ってどうする? あれは敵だ。奴自身にとっても唾棄すべき過去の亡霊でしかない存在かも知れん。それを知ったところで・・・』

『だって、あのひと・・・ずっと泣いてたから』

『――・・・』

『おしえてほしい、です。あのひとがなんで泣いてたのか』

その足りない言葉に、あの人は目を閉じて。

『・・・お前のソレは甘さでは無いのだろう。共感ともまた違う。奴が悪に属するものと知りながらも、その姿を見据えようとする。度し難い・・・お前がこの悪夢を切り抜ける確率は限りなく低い』

『知る必要はない。俺が奴の生を語った所で、それはすでに奴の物語ではない。・・・憶えておくがいい。お前はいずれ星の数ほどの生と対面しなければならぬ時が来るだろう。だが決して、理解しようとするな。ただ観測者としてあればいい。それがお前が生きる唯一の』

あの時あの人は、どんな顔をして

目を覚ます。

白く染まった視界に目がくらんで、すぐにその白さが病院の天井だと緑谷は気付く。

一瞬、脳裏に残っていた湿った牢獄の記憶とのギャップに頭が混乱しかけるが、それより先により鮮明な記憶がよみがえる。

「ッ、かつちゃん!!」

激んだ爆炎と、離れていく幼馴染の手とその表情。

言葉にはしていない。でも確かにあの時、彼女は救いを求めている。

（それに、僕は応えてあげられなかったッ・・・）

力の問題じゃない。

あの時、あの手を一度確かに握って救われた気がして——油断した。絶対に油断などしてはいけない場面だったのに。

「ク！・・・こつちを見てっ、イズク！」

焦ったような、泣きそうな女の子の声が聞こえる。

いつの間にか俯いていた顔を上げれば、こちらの顔を覗き込む様に顔を寄せる轟の姿。

普段の落ち着いた印象とは違う、その表情。いつから彼女は居たのだろうか。

「え・・・つと、轟さん？」

「おき・・・起きたあ。良かった・・・良かったよう、イズク」

瞬きを挟んで、再び目を開ければ視界の端には彼女の白い髪が見えて、胸元に感じるのは僅かな重み。

目の前で泣きかけていた少女が抱き着いているのだと気付くが、普



段なら慌てるはずの状況もなぜか心は動かない。

ただ――

「とど……ろきさん？ かつちゃんは……」

「っ……」

息を呑む音が聞こえた。

驚いたように……怯えた様に、胸元に感じていた重みが震えたのを感じる。

ゆっくりと重みが離れていく。見えるはずの彼女の表情は、俯いている為全く分からない。

「カツキは……まだ、見つからない」

その言葉に、心臓が早鐘を打ち始める。今さら焦ってどうする。

あの時、彼女を助けられなかったのは誰でもない僕だ。攫われた事なんて、分かっている筈じゃないか。

「でもっ……オールマイトが言ってくれた！ きつと助けるってっ、きつと先生達と……プロの人たちがカツキを助けてくれる！」

そうだ。プロヒーローが居る。

オールマイトだって動いているならきつとかつちゃんは助かる。助けられなかった僕が――今、かつちゃんを助けるために動いて邪魔になつたらどうするんだ。

「イズクはゆっくり体を休ませてっ。先生は体に何の問題も無いって言ってたけど、心配だから……」

落ち着け。動くな。

頭の中で、理由を探す。今すぐに助けに行きたいと。そう訴える体を必死に押しとどめる。

（あの時、皆に助けを求めるべきだった。スピードの出る僕が先に出了ところで、足止め出来てなきや何の意味もないじゃないかッ。僕の判断が、かつちゃんを助けるチャンスをつぶしたのかも知れない――）

そんな僕が行ってどうにかなるのか。

何が、変わるのか――。

「――イズ……」

「……轟さん。少しだけ一人になりたいんだ……。ごめん……。本当に、ごめん」

ためらうように一歩退いて。駆けるように離れていく足音。ドアが閉まる音が聞こえ、去っていくその姿が全く記憶にない事に気付きようやく、俯いていたのは僕自身だったことに気付いた。

（情けないッ……）

弱い自分が出そうになる。

真っ白な天井をただ見つめ、白いシーツを握りしめる。落ち込む暇なんてない無いはずなのに、今すぐ動かなきゃいけないのに。

静かになった部屋で、ただ止まっている。動きたいのに、何かが邪

魔をする。

ヒーローになりたいなんて言っていたのに、助けられなかった。

（僕は――）

『よくつてよ！やっぱり何事も挑戦が大事だと思うの。さすがに3日で作るのは無謀じゃないかしら・・・なんてちよつと思っただけで、こうして完成したのだからこれこそマハトマの導きよね！』

唐突に、頭に響いたのはなんだか少し前に聞いた覚えのある声。

思わずガバツと上半身を起こせば、清潔感のある掛布団がするりと落ちて。

『王様は一番やかいところだけに改造してどこかに消えちゃうし、どうして天才肌の人ってあなのかしら？途中でジェントルマンの助けが入らなかつたら終わらなかつたわ、きつと』

（あの、工事っていったい・・・？）

『あら・・・？起きたのね！安心して、マハトマのおかげで・・・えつと、こんせい？接続のためのサブパイプが完成したわ。そもそも一つのパイプで二つの液体を流そうとするから混ざっちゃうのよ、5本もあつたらきつと大丈夫よ！』

（サブ？5本・・・ですか？あつ、もしかしてあの時、力を調整してくれた方ですよ。あの時はありがとうございましたっ）

たしか、この人ともう一人の男の人が手伝ってくれなければ僕の体は大変な事になっていたはずだ。

伝わりますようにと、沈みかけていた声に力を込めて明るく感謝を伝えて。

『勝手にやった事だもの、よくってよ』

ふふ、と笑う声が胸の内側から聞こえてくるのは少しくすぐったい。

だがそんなくすぐったさも、驚きも少し薄れてしまえば嫌な考えと焦りが顔をのぞかせる。

『――・・・それで、どうしたのかしら？いつものあなたらしくない気がするわ。声に元気が無いもの』

（えっ・・・っつと）

らしくない。

そんなに、声に表れていたのだろうか。不思議そうな、その声にどう返したら良いのか分からなくなつて、つい黙り込んでしまう。

『なんて・・・ちよつと意地悪な質問だったわ。ごめんなさい、本当は私も見ていたから状況は分かつてるつもりよ』

僕の見たものは全部向こうの人達に伝わってるのだろうか。

なら、今回のことを見てあの人はどう思ったのだろうか。

あの人なら僕とは違う未来を選べたのだろうか。

『だから、いいわ。何があつて、誰に何を言われて、どうなったのかはいいの。あなたがいま何を感じて、何を言いたくて、どうしたかったのかを話してみて』

少し高い、僕よりきつと小さな女の子の声なのに、その言葉は焦りに流されかけていた気持ちを落ち着かせてくれる気がして。

ぽつり、ぽつりと言葉がこぼれだしていく。

口を動かしているつもりは無いのに、押さえつけていたそれらが溢れてしまう。

救けられたと思った時の気持ちと、救けられなかった時の気持ち。感じたことも無いほど気持ちが揺れた事。

今すぐにでも助けに行きたくて、なのに——怖くて仕方ない事。

・・・怖い？

(・・・僕は)

何が怖いんだろう。僕の目指したヒーローは、オールマイトは：あの人は怖さになんて負けず立ち向かっていけるはずなのに。

(こんなこと・・・今まで考えたことも無かったんです。目の前で誰かが困ってたら、体が勝手に動いててそれでも皆さんの力があつたから僕はただできる事をやって・・・)

何だ。何が違う。

(何かが怖いんです。ヒーローを目指しているのに：皆さんから力を貸してもらっているのに)

情けない。

(『・・・そうね。テレビの中の彼も、・・・もう一人の彼も怖がる姿なんて見せ無いものね』)

なるほど、と小さく呟いた声に思わず顔を上げる。

今の言葉だけでこの人は僕の悩みが分かったのだろうか。

(『あら、私にだってわからないわよ？でも、すこし安心したの。：あなたもまだまだ成長途中なんだ、ってね』)

(え・・・っと、あの。どういう・・・？)

くすくす、と。笑う声が胸の中で響くたびに、頭の中は疑問だらけになっていく。

僕が成長途中なのは当たり前だし、それはこんなに嬉しそうに笑えるほどいいことなのかというそれはちよつと違うような気がして。

すう、と息を吸うような音が聞こえる。

そして、聞こえるのはさつきよりも少し大人びた声音で――。

（とにかく！まずは顔を洗って、寝グセをなおしてから部屋の外に出なさいっ。それであの子の顔を見るの。学生に大事なのは勉強とお友達と・・・こ、恋なんだから。大人と同じようになろうとするなんて60年早いわ！）

「っ――ハイっ!!」

ビシッと思わず背中が伸びる。

転がる様にベッドから下りて、足に布団が絡まってしまう。

次の瞬間には顔の前に床が迫っていて、ガツンツと脳まで響く様な音と同時に視界が真っ白になる。

痛みに悶えながら床の上を転がって、鼻が折れてないか手で確認して。

「な、なんだか凄い音がした・・・イズクっ!?だ、だいじょうぶ?」  
耳に入ってくるのは轟さんの声と、ぱたぱたと軽い足音。

急いで駆けて来てくれるのが足音だけでも分かって、申し訳ないと思う反面なぜだか嬉しい気持ちもあって。

（あれ?でも、これ・・・）

足音が増える。

どたどたと重い足音から、軽い足音。  
数人どころじゃなくて――

「轟さん、いきなり入っては緑谷さんも……み、みどええええ!」  
「どしたのヤオモモ、らしくもない声出し……て? うわつ、大丈夫  
緑谷!」

「おわつ、マジだ! 大丈夫かー緑谷」

「おい緑谷、布団にくるまって何してたんだよ? ビビッて落ちたんだ  
ろ? なあ?」

「み、みんな!? どうして……?」

大丈夫、と口にするより先に疑問が先に来る。

その間に、頭のしたに温かなものが滑り込んで、なんだか柔らかい  
ものの上に頭がゆっくりと乗せられる。

「い、イズク……?」

少し熱を持った鼻に、今度はひんやりとした指先が触れて、気持ち  
のいいその感覚に痛みなんてあつという間に消えてしまう。

ようやく開けられるようになった目を開ければ。

目を大きく開きながら、こちらを心配するようにのぞき込む轟さん  
の顔が見えて。

同時に、泣き腫らして真っ赤になった目元と、頬を何かが伝ったよ  
うな濡れた痕が目に入った。

さつきは見ようともしていなかった、その顔が。

「――ごめん、轟さん」

急に謝られて、轟さんも驚いたんだろう。

鼻に触れていた手が止まって、少し充血した目は戸惑ってるのかま

ん丸くなっている。

「泣いてたことに気付かなくてごめん」

自分の事で頭がいっぱいになって、轟さんの事を見ていなかった。目を逸らすのはダメだって、あの人に教わっていたのに。

（轟さんだって、気にしない筈が無いんだ。かつちゃんに手が届かなかったのは僕も、轟さんもいっしょなのに）

「泣かせて、ごめん」

一人で突き進んで、一人で負けた気になって。

また一人で進もうとして・・・助けられない事を怖がって。

怖くて当然じゃないか。失敗したことを、また同じやり方でやろうとしているんだから。

「ツ・・・ワタシが先にやられたせいで・・・カツキが拐われたつ。イズクも・・・目をさまさなくて・・・！」

僕の何倍も、怖かった筈だ。

かつちゃんがどんな目にあっているかわからない。

僕の目も、ずっと覚めないかも知れない、それが自分のせいだっと思ってしまうそんなの怖くなって当然だ。

強く唇を噛んで、泣かない様に耐える轟さんの膝の上からゆっくりと体を起こす。

今更だけど、膝枕をしてもらっていたことに少し恥ずかしさを感じるけどなるべく顔を赤くしない様意識して――。

病院の白い床の上にしっかりと正座にすわり直して、正面から轟さんの顔を見つめる。

「・・・轟さん」

「は・・・はいッなに・・・じゃなくて、なんででしょうか？」

同じように正座のままの轟さんの顔が、いつもの白い肌から赤へと変わっていく。



泣きそうだった表情も、どこか緊張しているような顔になって。

「——かつちゃんを、助けに行こう」

もちろん、先生達やヒーローが動いてる。

できる事なんて殆どないかもしれないけど。

「できる事だけでもやりたいんだ。聞き込みでもいい、何でもいいんだ。ここで待つてなんかいられない！」

（居場所が分からないなら、探すことだけでも手伝いたい。直接戦えなくても、動きたい。ダメになるかもしれないから動かないなんて、嫌だ）

少しずつ、胸の内から何か沸き上がってくるのを感じる。

あれだけ動けないと、こもっていたベッドから飛び出して、落ちて・・・友達の顔を見ただけでこれだ。

色々考えてた理由なんて関係なしに、言葉はすんなりと出てしまった。

と、いつまでたっても轟さんの返事がない事に気付く。

少しずつ、緊張していた表情は変わって、少し惚けたようなものに変わっているんだけど・・・。

「・・・ああ。もちろ・・・うあああああああああ!!」

「ちよつ、轟さん!?なんでまた泣いて・・・!?」

大号泣だった。

大きく口を開けて泣き始めてしまった・・・僕が泣かせてしまった女の子の姿に思わずオロオロと右往左往してしまう。

それでも、なんとか泣き止んでほしいと手を伸ばして。

「ストップ!!緑谷君は近付いちやダメだよ、轟ちゃんもつと泣いちゃうから!」

目の前にふらりと雄英の女子制服がふわりと浮かぶ。

それだけで轟さんの姿が見えなくなつて――

「焦子ちゃん!わかる、わかるよ!嬉し泣きだよね・・・」

「私達が来る前によほどひどい顔の緑谷さんとお会いしたのでしよう。最近になつて表情が変わる様になりましたから、今回の落ち込んだ顔は見ているのが辛かったのでしょうか・・・」

「緑谷ちゃん、仕方ないけどダメね。男の子として」

(凄く責められているのが伝わってくるッ、けど・・・言われて当然!)  
男子として、すごく心には刺さるけど。

「少し良いか、緑谷」

「あ・・・うん、どうしたの障子君?」

まるでさつきまでの僕みたいに、重苦しい雰囲気の障子君に声をかけられる。

「すまなかつた」

「え!そんなつ、頭を上げてよ!」

勢いよく、そして深く頭を下げた障子君の姿に思わず正座から立ち上がってしまう。

何とか頭を上げてもらいたくて、その肩を押し上げて。

「俺と青山があと一步早く駆け付けられれば、爆豪は攫われることは無かつた・・・本当にすまないッ」

「それは――ッ」

まるで、じゃない。さつきまでの僕と同じだった。

それは違う、なんて言つて納得なんて出来るはずもない。

だから、言葉を飲み込む。

励ましや、慰めや共感なんかじゃなくて。

「――取り返そう！今度こそ、僕たちで！」

一人で先走ろうとした僕が言える事じゃないけれど。

ヒーローは、一人で戦うだけじゃないんだ。

「・・・ああ。そうだな、俺も・・・ッ!？」

「良いじゃねえか！オレも混ぜてくれよッ・・・見えないところでダチやられてよオ、正直腹が立ってたんだ」

グイッと、けつこう高い場所にある障子君の肩に無理やり腕を回しながら切島君が顔を見せる。

「聞き込みぐらいならオレもやるぜ！あとはケータイ使って掲示板とか回ってみるのもイイんじゃない？」

「ここは病院だ！携帯電話の電源は切るべきだと正面玄関で言っただろう！それと、携帯電話の扱いなら女子の方が長けている以上、そちらに任せるのが得策だ！僕達は足で稼ぐぞ！」

ブンブンと手に持ったスマートフォンを回す上鳴君に、詰め寄る飯田君。

皆、動きたかつたんだと思う。まるで、怖かったのも悔しかったのも僕だけだったみたいに考えていたけどそうじゃ無いんだ。

あの女の子が伝えたかったのはきつとこのことだ。

成長途中の僕達には悩む事なんか星の数ほどあって、それでも孤独じゃない僕たちは弱音を言い合って悩んでも良いんだって、きつとそう伝え――

「うおおおおおおお！しまったつ、エロエロ温泉事件簿の時間じゃ

ねえか!!？」

誰かによつて病室のテレビがつけられる。

思わず耳を塞ぎたくなるような大きな声にくらりと一瞬頭が揺れて

『この度、我々の不備からヒーロー科1年生27名に被害が及んでしまったこと。ヒーロー育成

の場でありながら敵意への防衛を怠り社会に不安を与えた事謹んでお詫び申し上げます。まこ

とに申し訳ありません』

テレビから聞こえてきたのはイレイザーヘッドの声。

病室の小さなそのテレビの中で、イレイザーヘッド達が頭を下げている。

誰からともなく、部屋に居た皆が何も言わずいつの間にか視線をそちらへ向けていた。

『イレイザーヘッドさん、事件の最中生徒に戦うよう指示したそうですね。意図をお聞かせく

ださい』

『私共が状況を把握出来なかったため、最悪の事態を避けるべくそう判断しました』

『26名もの被害者と1名の拉致は最悪と言えませんか？その中で

も、特に重症らしい少年は今も意識が戻らないそうじゃないですか』  
イレイザーヘッドが責められる事なんてない。

あの場に行つて、そう言えればどれだけ良いだろう。

思わず、拳を強く握りしめて……。

不意に、イレイザーヘッドを責め立てていた記者が懐へと何かを探  
すように手を入れる。

どうやらケータイが鳴っていたようで、記者は周りから注意を受け  
ながらもなぜか電話に出て話しているようだ。

『ああ……はい、なるほど。良かったですね、部下からの情報ですが、  
意識不明の彼も目を覚ましたそうですよ』

（あ………れ？なんだろう、この嫌な予感……）

『ッ、そう言った情報は今すべきでは無いはずだ。控えてもらいたい』  
『ああ、失礼しました。雄英としては被害状況はなるべく隠しておき  
たいようでしたから、皆さんにお知らせしておこうかと』

「先生を怒らせるための策だろう。下策も良い所だ、あれではただの  
内通者に過ぎん……敵に情報を渡したただけだ」

常闇君の言う通りだ。

敵に……。

（そもそも……かつちゃんをさらった理由はなんだ……人質にする  
ためなら、僕だったらかつちゃんを選ばない。なら、かつちゃん個人  
に何かがある。もし、もしも……かつちゃんを仲間に引き入れる為  
なら）

雄英の動きをかつちゃん本人に見せるだろう。

それこそ、救助にも向かわず雄英は記者会見なんて開いてるん

だ、って……。

むちやくちやかもしれない。

でも、あの死柄木 弔ならそんな子供じみた考えもあるかもしれない。

というより――

「……かなり、まずいかも知れない」

「ん？ いや、確かに情報は漏れたかもしれないがそこまで致命的なものではないだろう。先生方もそこらへんは分かった上で放送を続けている筈だ」

「かつちゃんがつ、動き……出すかも……」

「1名・・・ねえ。まあいいか。・・・しかし、なぜ奴らが責められる!? 奴らは少ーし

対応がズレてただけだ!」

大げさに手を広げ、まるで演説でもしているかのように声を上げているのは、人の手のようなオブジェで顔面を覆い隠した青年、死柄木弔。

「現代ヒーローってのは堅ッ苦しいなア爆豪ちゃんよ!」

対して、その彼と向かい合う少女は寡黙であつた。

両腕は背中へ回され、その上で手錠で拘束されている。

だが、普段の荒れ狂った様子の彼女は、まるで何かを待つかのようにただ静かに、目すら閉じている。

「——静かすぎるのもつまらないなあ。・・・もしかして、誰かを待ってるのか?」

にやり、と笑う死柄木は自らのポケットをあさり始める。

少しして、取り出したのは小さなガラス玉のようなナニか。

「コンプレスが持つて帰つて来た。スピナーの話じゃ爆発するらしいからコンプレスにとりあえず圧縮してもらつてるけどさあ・・・このダッサい剣の彼、無事じゃないだろう。体が真つ二つになりかけてたみたいだし、意識不明じゃなくて本当は死んでるんじゃないか?」

言っている本人ですら、そんなことは思つてもいないだろう。

これはただ、余裕を見せるアピールに過ぎない。

自らの手の平の上で、物事はいま動いているのだと。

『ああ……はい、なるほど。良かったですね、部下からの情報ですが、意識不明の彼も目を覚ましたそうですよ』

カタカタ。

「は？……目え覚まして無いつて言ったばかりなのに、なんだよそりやあ……あー興ざめってやつ？」

カタカタ。

悪態をつく死柄木は自らが誇らしげに見せつけていた物が、変化していることに気付いていない。

小さな玉の中、白い中華剣が震えている。

当然、圧縮された空間の中からでは音など外へは響かない。

だからこそ――

「……遅えんだよ、クソデク」

ゆっくりと目を開いた爆豪の目にだけ、はっきりと見えていた。テレビになど欠片も目を向けず、ただじつとその白い刀身を見つめる。

「そろそろ、また爆豪ちゃんにも圧縮されてもらおうか。ラグドールのサーチで見つかったらチート野郎がとんで来る。……コンプレス、やってくれ」

「……殆ど説明も出来てない気もするけど、仕方ないか」



カタカタ。

呆れた様に口にしながら迫るコンプレス。

その手に触れただけで再び圧縮され、閉じ込められるというのに動こうとしない爆豪に死柄木だけではない。

荼毘すら、眉を寄せる。

手が、迫る。

それに対し、爆豪が思う事はただ一つ。

「――まずは1ポイントツ!!死ねッ、○○無し野郎ッ!」

BOOOOOOOM!!

膨れ上がる閃光に、放たれる熱量。

飛び散る鮮血すら蒸発する中で、自らの皮膚すら爆発で千切り飛ばしながら手錠を外した少女。

その拳が、コンプレスの顎を真下から撃ち抜いた。

「・・・正気か、こいつ」

「やるじゃねえか、見直したぜー!ふざけたマネすんじゃねえよ!」

最初に反応したのは荼毘とトウワイスだった。

素早く距離を詰めようとした彼らに対し、爆豪はだらりと脱力したコンプレスを左腕で掴み寄せ顔を右手で覆う。

その破壊力は先ほどの一瞬で理解させられている。

故に、敵連合は動きを止めることを余儀なくされる。

「・・・この人数差でそうくるとは思わなかった。お前はもう少し頭が良いと思ってたよ」

「ああ!? 十分お利口だっただろうがよッ! アイツが目え覚ますまでメモエらぶつ殺すの待っててやったんだからよオ!」

彼女の行動理由は敵どころか他の誰にも、一人を除いて理解できないだろう。

ただ一人に勝てばいい。

勝って、横に立ちたい。

ただそれだけが彼女の望みなのだから。

この状況ですら、敵は敵ではない。

BOOOOOM!!

コンプレスの顔面が、右手から放たれた爆発により大きく揺れる。死なないように手加減はしているが、意識を奪う点では容赦のない一撃。

砕け散った仮面がバラバラと地面に落ちる——よりも先に、まるで興味は無いとばかりにその体は横へと投げ捨てられる。

「さっさとかかって来いよ。あと何分かしたら来るぞ、テメエがビびってるあのクソが」

人質すらいない。

そんな挑発ですら表情を動かさなかった死柄木が、青白い手の隙間

から覗かせた瞳をスツと細める。

「来るわけ無いさーこの場所がどうやって分かるんだよ、聞き込みか？」

分かるわけが無い。

ここを当てるとすれば、ラグドールのサーチで爆豪が探し当てられた時だけだ。

そして・・・。

「ビビる？面白いこと言うじゃないか・・・根拠はあるのか？」

「無エよ、ただまあ・・・さっきアイツの事を話してた時のお前、死んでくれた方が助かるみてえな顔してたぜ？」

BOOM!!

一瞬の加速。爆豪の両手が光を放った瞬間には、すでに死柄木の眼前にその姿はあった。

未だに血を流す右腕が死柄木の顔面をかすめて、一瞬遅れた爆発がその体を揺らす。

小さく舌を鳴らす爆豪は、しかし僅かに頬に熱を感じた瞬間大きく背後へ飛び退く。

寸前までいた場所へ襲い掛かるのは赤黒く燃える炎の塊。

紙一重でそれを躲した瞬間、今度は彼女の脇腹をかすめる様に銀のナイフが突き抜けていく。

「ふふふ、勝紀ちゃんもイズク君の事が気になってるんですね！恋、恋だよね！」

「うつせえ、空気読めよクソサイコがッ!!」

右手から大きく爆破を放ち、大きく側転しつつ距離をとる。

敵は――

「――ダメージは殆どない。コンプレスはやられたが、黒霧が回収の準備を進めている。・・・つまり、ラグドールが個性を使う前に俺達6人でコイツをぶっ潰せばいい」

爆発で揺らされた体に入れないおし、死柄木は頭を振る。  
まだ想定内だと。

（いや、焦るな。ラグドールの個性を使われたところで、コイツを圧縮して逃げりゃいい。ただそれだけだろ・・・なら）

自らの予想が、僅かにも外れるとは思っていない。

現に、今でさえ目の前の少女によつて状況は刻一刻と変えられている筈なのに。

「黒霧、撤退の準備も進めろ！ トウワイスツ、トガ・・・お前達なら接近戦でやれるだろ。他は黙ってろ」

茶毘の個性はこの狭い部屋では使えない。

マグネの個性でトゥワイスとくつつけた方が早いけど、戦闘能力を奪っていない状態でそれは悪手だろう。

なら、対処できる戦力で確実に潰すべきだ。

「お前も動けよ！良い判断だぜ死柄木！」

「勝紀ちゃん！ちうちうタイムだよ！すこーし、シュツとしてスパッとするけどだいじょうぶ！」

個性が戦闘の柱として存在しない分、2人の動きは読まれにくい。

「チツ・・・カサカサ動くんじゃねえよッ！クソウゼエ!!」

「その表現はいや。オンナノコはもつとカワイイのがいいです！」

確実に、少女の体には打撲傷と切り傷が増えていく。

対して、2人に傷は殆どない。

再び、トガのナイフが爆豪の足を掠めていく。

その痛みに僅かに体の動きが止まった瞬間、トウワイスの蹴りがその腹部を蹴り飛ばす。

地面を跳ねながら転がっていくその姿に、決着がついたかと死柄木が口元に笑みを浮かべ。

地面に手を突き、腹部を押さえながら姿勢を立て直す姿に大きく舌打ちをする。

だが、確実にダメージは通っている。

呼吸は荒く、息を吸っているのがやつとの状態だ。

「やれ。時間が惜しいんだ」

トガとトウワイスが迫る。

その先で、爆豪は両手を大きく開き迎え撃つ。

その口元には先ほど死柄木が浮かべたような笑みが浮かぶ。

自分が信じていた事が現実になった、そんな笑みが。

ドゴンッ!!と金属がひしゃげるようなその音に一番最初に反応したのは荼毘だった。

次いで、死柄木と続き——すでに駆け出していたトウワイスたちは完全に反応が遅れていた。

砲弾のような速度で、先ほどまで部屋の入り口を塞いでいたドアが宙を飛ぶ。

小柄なトガの体を庇ったトウワイスの体へ、冗談のような速さのドアがめり込めば——次の瞬間には二人の体は壁に叩き付けられていた。

爆豪以外の視線が、一瞬二人の元に向き——次に見つめるのは当然先ほどまで扉がはまっていたはずの入り口。

だが、遅い。

二人に視線を向けるべきでは無かったと、死柄木は憎々し気に視線を爆豪へと向ける。

あの一瞬で、すでにその姿は室内にあった。

「っ……嘘でしょ……何なのよあのコ」

「……あの時は、もっと遅かった筈だが」

およそヒーローらしからぬ黒い外套が揺れる。  
体からまるでその気持ちを表すように紫電が生まれては消えていく。

その後ろ姿を見つめる少女から見えているのは、外套と後ろへ流れるように逆立つ緑の髪だけだろう。

だが、それだけで十分だった。

その後ろ姿に、言わなきゃならない事がある。

「・・・テメエが来る前に全員ぶっ潰そうとしてたんだ。今更後ろに隠れてるとか言いやがったら——」

「——うん。一緒に、戦おうかつちゃん」

彼の手握られた、黒い中華剣が揺れる。

「今度こそ、一緒に」

目を逸らさず

「神野編2」

（コンプレス・・・あれはもう意識ねえな。トウワイスもダメージはデカそうだが、上手く右の肩で受けてたから大丈夫だろうな）

「ッ、何故止めるッ茶毘!!」

なら、庇われていたトガも無事だろう。

先ほどまで人質であったはずの少女と言葉を交わす少年。

その姿を見て、愚かにも隙と捉えて動き出そうとするスピナーの眼前に抑えるように腕を突き出す茶毘。

その目は恐らく、この場において実質指令役である死柄木よりも冷静に現状を見つめていた。

だからこそ、見過ごせない事が二つある。

（・・・戦力差が分からねえ奴には見えなかったが）

なぜ一人で来たのか。

焦りか、それともこちらの戦力が減っていることに賭けたのか。

どちらも、しつくりと来ない。

そして、もう一つ――

「・・・建物潰して埋まる訳にはいかないな。スピナー、マグネ・・・やれ」

死柄木も気付いている。

現状の違和感を払しょくするために、場を動かすために指示を出す。

「――当然ッ!!少年ッ、まさにこの場に飛び込むその姿こそステインの理想ッ!」

「もうっ、この前先にやられたの忘れたの!?!」



スピナーに殺意はない。

マグネは死柄木の意思を上辺だけだが汲み、先に飛び出したスピナーの後を追うように駆け出す。

スピナーが自らの腰へ一瞬腕を回したと思えば、その両手に握られているのは二振りのサバイバルナイフ。

持ち前の継ぎはぎ巨大刃物鈍器は砕かれ今は無いが、その怪力をもってすれば人体を損壊させることなど容易いだろう。

そして肉体が変化するタイプの個性にもれずスピナーの動きはまさに野生の獣のような瞬発力を持っている。

それも、爬虫類のように滑らかで、それでいて鳥類のように跳ねるような速さ。

グンと曲がった右膝が、バネのように一度縮み——床板を踏み砕きながら突き進む。

その歪な思考回路をのぞき、まぎれもなく油断すれば命を一瞬で切り潰す敵であり——

その懷に黒い影が滑り込む。

揺れる黒い外套、その姿を追うように銀の軌跡がスピナーの視界に映る。

「……ッガア!!?」

「クハッ……クハハハハハハッ!!ぬるい、思想が、思考が、思念がッ！自らの芯を他者と照らし合わせる為に動きが遅れる!!」

だがその外套すら、すでに視界には無い。

腹部に強い衝撃が伝わり——鈍い音を立てて腹部に当てていたプロテクターが砕け散るのを感じる。

浮き上がる体、見下ろす視界の中で自らの腹部を恐らく蹴り上げたのだらう少年が足を地に下ろすのが見えた。

黄金に強く、目映く輝く瞳。

口が裂けるほどに吊り上がったその口元が——フツと緩めば、バヂッ!!と弾ける紫電が、黄金色に移り変わる。

「スピナーっ!だから言ったじゃないのよっ!!!」

下方で、マグネが木製のテーブルを少年へ投げつけているのが見える、が。

「生ぬりイ!!ヴィランだろうがッ!?もつと殺意入れるや、ぶつ殺すぞッ!!」

B O O O O M !!

マグネの眼前に滑り込んだ少女がテーブルを爆破し、その破片に紛れながら距離を詰めていく。

少年の右手から奔る黄金の雷が何かを形作る。

強い力で天井近くまで蹴り上げられていた体が落下するのに合わせ、その何かが見えてくる。

(.....な、ぜ.....サングラス.....?)

「.....ゴールデンだからよ」

サングラスだった。

濃い紫のゴールデンなソレを目元にかけながら見上げる少年が、腰を据える。

「——要はッ、俺は俺でッ!!」

溶岩のように赤く変わるその右腕、ボコボコと湧き上がる様に浮か

び上がった白線が明滅するそれを大きく振りかぶりながら――

ニヤリと、先ほどとは正反対の笑みを浮かべる少年の黄金色の瞳とスピナーの視線が交差する。

「――テメエはテメエって事だ。憶えとけ」

その腹部に、かち上げるように赤い拳が突き刺さる。

室内を照らす黄金の瞬きに目元を覆い隠した数名を除き視界が真っ白に焼ける。

鳴り響く轟音に、追うように聞こえる断続的な爆発音。

「ちよつ、なんで!!見えてるのよっ!!」

叫ぶようなマグネの声。

腕をかざし、閃光から目元を覆い隠していた茶毘が腕を下ろせば――

――天井に空いた大穴。

そして視界の端で壁に叩き付けられたマグネが、全身を焦がした姿のままゆっくりと地面に倒れ伏していく。

「テメエツ、ピカッてやんならもつと早く言えやクソデクツ!!ブチ殺すぞッ!」

「っ、……待てって!顔が近えよ、ちつと離れてくれ!」

(……アイツ、二重人格か?いや……そんなことより)

胸倉を掴み寄せてガンをつける少女に対し、顔を赤くして離れよう

とする少年。

まるで付き合いたてのカップルのような、この場にそぐわない隙だらけの行動だが先ほどスピナーはそれを隙と捉えた故に空の星となった。

あれは、敵を誘うための高度な演技。

(・・・やるな)

茶毘は数日前に相対した少年の印象を一度リセットする。

速さも、力も・・・誘う技術も先日の比では無い。

ならば最初に抱いた疑念、その答えは――

(・・・慢心か。全力なら一人で俺たち全員を潰し切れると考えたワケか)

茶毘の中で、イズクへの警戒度が忙しく上下していた。

そして、<sup>ヴィラン</sup>敵だからこそ気付けない。

あれだけの勢いで吹き飛ばしたスピナーの生死を彼が気にしないという異常事態。

拳撃は殺さず調節できるだろうが落下死までは防げない――

「お、おいッ、ホントに降ってきやがった！いくぞ、瀬呂!!」

数秒前、天井が爆散した建物から少し離れた大通り。

細身だが長身の少年を、大柄な少年が上空へ浮かぶ月へ向かい放り投げる。

「っ、高え!!馬鹿か緑谷あ!?!」

砂糖の個性「シュガードープ」により強化された筋力で投げ飛ばされたその体は、あつという間に近くのホテルの天辺に近付き———すぐに落下していく。

想定していたより上空に跳ね飛んだ人影へはとてもではないが届かない。

「お、落ちるっ……けどっ……!!」

受け身を取らなければ、すでに大怪我、あるいは死を迎えるだろう状況で、漏れそうになる泣き言をぐくりと飲み込む。

彼の能力であれば、この市街地なら容易く宙を跳び回れるのだ。

それが分かっているにも怯んでしまうのは、これが授業ではなくまぎれもない実戦であるためだろう。

少年——瀬呂の右肘から伸びるのは彼の個性「テープ」、平たいまさに厚いセロハンテープのようなものがビルの上、その上に乗った貯水タンクにぐるりと絡みつく。

「うっし!!」

そのまま一気に巻き取れば、勢いに乗って彼の体は上空へと再度射

出される。

右腕のテープを切り離し、近付いてきた人影——スピナーへ左腕を突き出せば、射出されたテープはその体を絡め取り。

「後はっ！掴むトコ・・・掴むトコ!？」

跳び回る訓練はしたが、右腕のテープのみでこれほどの高さから落下しなおかつ地面に救助者を叩きつけない様に着地するなどしたことがあっただろうか。

25m・・・20m落下していく体。

焦れば焦るほど、テープを貼りつける場所が目映らなくなる。

それでも、先ほどテープを貼りつけた貯水タンク、それを固定する柱にテープを巻き付け

メギツ！と聞いたことが無いような音と共に支柱が簡単に折れ曲がる。

よくよく見れば錆び錆びの支柱ごと宙を舞うテープを見て、

「・・・ま、じ・・・」

加速する落下速度。

迫る地面に、せめてもの足搔きと適当な方向へテープを射出しようとして——

視界の右、ビルの壁に何かが張り付いたかと思えばその影が一気に

瀬呂へと迫る。

「――痛あ!?!」

「ご、ごめんね瀬呂君!」

べちんっ

頬を叩かれた感覚と共に、一気に落下速度が落ちる。

むしろふわふわと浮かぶような感覚に、用意していた保険が成功したのだと涙目になりながら声の方向を見る。

「た・・・助かった・・・」

壁に四肢をくっつけて張り付く少女と、その背中にしがみつこう  
一人の少女。

ヒーロースーツではなく自分たち同様普段着の彼女たちが用意  
していた保険であり。

「ケロ。私たちが偶然通りがかってよかったわ」

「うんうん!瀬呂君たちも偶然空に放り出された人を見つけるなんて  
びっくりしたよね」

偶然、たまたま、奇跡的ここに居合わせたクラスメイトであった。

未だ爆音が鳴り響く建物へ目を向け、ここへ来る選択肢を選んだ事  
を少女の一人は安堵する。

（・・・ヒーローは間に合わなかった。結果として動いたのは正解だけ  
ど、緑谷ちゃん私たちは時間稼ぎだけよ）

記者会見会場に居た記者の、さらにその部下は引き続き先ほどまで意識不明だった雄英生徒の部屋を見張っていた。

先ほどまでは医者が診察のために部屋に入っており、『あー…緑谷君、その姿は…?』『メルスイ、ドクター…みんな僕が心配だったみたいだね☆』と声が聞こえていた。

その医者が出て行ってから、外に出されていた彼のクラスメイト達が再度部屋に集まっている。

気付かれない様に、部屋をのぞけば

「緑谷！リンゴ、リンゴ食べるでしょ！…もー…葉隠ちゃんが途中で止めなかったら危なかったんだよ…!」

「むぐッ!?むぐぐ(ぎゅ)☆!!」

「ウィッグとカラーコンタクト、簡単なメイクで誤魔化したとしても、口を塞いでおかなければやはりボロが…いえ、話し過ぎてエネルギーを消耗していますからリンゴをどうぞ!」

「む…む…☆」

いつそ落としてしまえばかりに、ピンク色の肌の女子と上品そうな女子に物理的に口を塞がれている緑色の髪の少年。

彼の口元には半分ほど包帯が巻かれており、顔には色々な色のマ



ジツクで「心配させたバツ」「青緑谷」「クハハハハハハ」などなど書かれており恐ろしく表情が分かりにくくなっている。

近くであわあわと口を両手でおおっている大柄な、それも個性的な姿の男子生徒も居るが彼では止められないのだろう。

「・・・少年、いい青春をおくっているじゃないか」

友情にほろりと涙しかける記者は、今のところは元気そうだと上司へ定期連絡を入れるのであった。

「っらあ!!!」

まるで覆いかぶさってくるように迫る赤黒い炎へ、照準を合わせるように右腕を向ける。

BOOOOOM!!

なるべく低い出力で炎を散らすように爆破すれば、作り出した一瞬の余裕で左手から真横へ爆破を放つ。

スライドするように右へ跳ぶ体、そのまま地面を後ろへ蹴り出せば眼前に居るのは炎を放った黒髪のピアス男。

(このまま距離を詰めりや・・・ッ!?)

後方から、もう一つの足音が微かに聞こえた。

相方の足音ではないと、反射的に地面へ体を伏せれば――髪の一部を切り裂きながら、ナイフが通り過ぎていく。

「――刺す。刺すよカツキちゃん！血出た方がもつとかわいいです」

ギラギラと、その刃のように目を輝かせた少女がそのままナイフを下方へ振り下ろすのに対し

「知るか。可愛さなんてはなから気にしてねえし、これからもするつもりは無え！」

うつ伏せから、体を全力で横へ転がす。

一拍遅れて、着いた腕を軸に床へ突き立ったナイフを払うように蹴れば、甲高い音を立てて根元からナイフは折れる。

「でもでも、かわいい方があの人は好きだと思う。もつとあかあくて、もつとズタズタで・・・」

武器が折られた事など気にも留めずに、折れたナイフを体勢を立て直している爆豪の顔面に放るトガ。

紅潮していく表情、迷いのないその動きと狂気にしかし爆豪は動きを止めることは無い。

(勝手に喋って酸素使ってろサイコ女ツ。テメエには似ても似つかねえが頭のぶっ飛び方だけは似てる女が居て慣れてんだよ！)

体を傾け、最小限の動きでナイフを避けながら今度こそ立ち上がり

「クソデクがんなフェチ野郎だったら俺が頭ふっ飛ばして――」

「ああ・・・やっぱりカツキちゃんもイズク君が好きなんだ。デクってさつき呼んでたもんねえ」

あの人ってしか私言っていないのに。  
続く言葉に――

(うぐう・・・誘導だ、文脈から想像しただけだ・・・!!)

初めて動揺が爆豪の表情に表れる。

のんびりとした口調のまま繰り出されるトガの蹴りを右腕で受け流しながら、思考を収めようとする。

「わあ、顔まつかだよ勝紀ちゃん！大変だよねえ、恋するオンナノコつて。甘酸っぱいねえ、ちゅーとかしたらもつとまっかになるのかな？あ、もしかしてもう・・・？」

トガの精神攻撃は続く。

(う、おおおお・・・)

「うんうん。さつきからイズク君こっち見てるから、きつとそうなのです。ほら！」

(おおお・・・ん・・・?)

ひらひら、ひらひらとトガは自分のスカートをつまみ上げ揺らして見せる。

先ほど吹き飛ばされた衝撃のためかところどころ破けた部分から、どこかで切ったのか血は流れているが――

それよりも、当然見えているのはあからさまに覗く白い下着だろう。

(・・・)

急激に冷静になった思考、脇腹を狙うように迫るトガの右のつま先を掴み取り、捻るように受け流せば――視線を右へ向ける。

ピアス野郎と牽制しあっている緑髪の少年、その顔がしかしこちら……トガの方を向いている。

そのまま、コクリと頷く所まで見てしまえば

「ああ……早く出て、話し合わねえとなア……」

「……勝紀ちゃん？」

唐突に、爆破少女は自らの雄英体操服……その左そでをめくる。

そこにあつたのは、やや複雑に太い縄のようなものを編み込んだ……ミサंगाのような飾り。

「アイツをぶつ殺すために発目に頼んだ特注品だったんだが仕方ねエ……」

ざわり、と爆豪の空気ではなく戦闘の流れが変わる気配にトガは体を僅かに震わせる。

（この感じが続くと、あんまりいい思い出が無いです……）

勘。

彼女の戦闘スタイルは個性を軸としていない。

本来なら戦闘向きの個性に押し負けかねない彼女の戦闘力を底上げしているのは、直感。

その勘が警鐘を鳴らしている。

故に、だからこそ先手を打つ。

（流れが変わったらまたスパスパって切るのが一番だって、トガは思っています）

警戒すべきは、あのミサンガ。

目を細め、駆け出したトガは右へステップし——さらに左へ大きくステップする。

フエイントを重ね繰り出したしなやかな右の蹴りは、交差した両腕に弾かれる。

肉を叩いた鈍い音はしかし、上手く腕の腹で受けられたのか骨を折った感触は無い。

蹴るために伸ばした足を下ろすその時間は、拳を受けるには十分な時間——迫る爆豪の右拳を、わざと後方へ倒れるように避ける。

両腕を地面に突き、バク転しながら距離をとる。

およそ1・5m。

爆豪の弱点があるとすれば、そのリーチだろう。

爆破は至近距離でなければダメージが拡散してしまう。

もちろん出力を上げればまとめて吹き飛ばせるだろうが……

(この建物内じゃあむりだよねえ。勝紀ちゃ——)

BOOOOOM!!

両足を地面に着け、顔を上げたトガ——その右脇腹から、唐突に爆炎が上がる。

「か……っあ……!？」

(なん……で……、どこ、から?)

爆豪ではない。距離が遠い、だからこそ緑谷が何かをしたと思考は跳ぶ。

だからこそ、眼前の少女の左手に巻かれていたミサンガが消えている事に気付けなかった。

そして、だからこそ少女の左手が右のそでの中に潜り込み——

そこから細長い何かが飛び出した事に気付くのが遅れた。

細長いナニか・・・それを右手でシュツと擦る様に握りながら滑らせれば。

左手を振るう。

それだけで、まるで蛇のようにトガへと迫ったソレは――――強  
く、その胸を打ち付ける。

「・・・使いきりつてのが難点だが」

(っ、これ・・・!?)

爆豪の手から、まるで導火線に付いた火のように小規模の爆発がトガの胸元へ迫る。

その正体に気付いたトガだが、すでに一度目の爆発で体はバランスを失っている。

BOOOOOOOM!!

膨れ上がる爆発は小規模だが、0距離でその爆破を受けた小柄な体は容易く宙へ跳ぶ。

地面に落ちる衝撃を感じる前に、ブツリと少女の意識は断ち切れていた。

急に動きの鈍くなった爆豪へ狙いをつけるように右腕を向けなおす茶毘、その肩へ矢のような速度で何かが飛ぶ。

それが短刀のようなもの——だと判断をつける前に僅かに左肩を切り裂かれながらも紙一重で避け切る。

「・・・目を離す暇もねえな。嫌になる」

短刀に次いで、銀の軌跡を残しながら迫る少年の姿に茶毘は表情をほんのわずかに面倒くさげな物に変える。

先ほどまでかけていたサングラスはどこへ行ったのか、緑の髪を逆立たせた少年に完全に視線を固定する。

対して

（あと何分稼げばいいッ・・・いや、いま考える事じゃない！死柄木が考えを変えるまで注意を引き続ける、それだけを考えろ・・・！）

茶毘へ放った短刀と同様に、牽制のように隙あらば黒霧と死柄木へ短刀を撃ち込み続けている。

コンプレスとマグネの回収を行う黒霧は苛立たし気にしているが、死柄木は目を細め状況を見ている。

「死柄木弔！撤退すべきですッ、これ以上の戦力の消耗は——」

黒霧の言葉に死柄木は言葉を返さない。  
なぜ

（・・・もう撤退の命令を出してもおかしくないんだ。死柄木が加わればワープの人を牽制する暇は無くなって、撤退は少しずつだけ出来るはず）

緑谷は荼毘の拳を躲し——爆豪へと目を向ける。

（かつちゃん・・・！）

トガと呼ばれていた少女と交戦している少女へ、小さく頷く。

（・・・そっちは任せた。僕は、僕にできる事を——）

交わした視線から、意思が伝わった事を確信する。

強い想いを込めた少女の視線に安堵して——

「よそ見なんてされると、それはそれで嫌な気分だ」

頬へ迫るのは赤黒い炎の塊。

風通しの良くなった室内だからこそ、先ほどの遠慮などすでに無く人一人を消し去る出力で襲い掛かるそれに対し

紫電が奔る。

黒炎が一瞬で形作った黒いポークパイハット、それを頭の上で押さえながら右手をかざす。

荼毘の目測では、緑谷がとれる選択肢は得意の速度で避けるしか無かった。

そんなタイミング、それだけの熱量。

炎が確実に少年を飲み込む。

避ける暇もなかったかと、単純な方向に思考が向いたのは自身の個性への信頼か。



改めたはずの評価すら甘かったか。

どす黒い血液のような炎の塊、その中心を黒い炎が食い破る。

「ッ、誤算ばかりだ。死柄木、良いのかこれで・・・」

その後ろを銀の光が走る。

押されている。冷静であるからこそ茶毘は、自分が押され始めている事を認める。

未だ、押されているだけ、逆に傾く可能性はまだ高い。

だが、それだけのリスクを負う必要があるのか。

紫電をまき散らす少年の拳を、紙一重で避けるがそれだけで冗談のような音が耳元で鳴る。

死柄木は――

「ああ・・・撤退だ。付き合ってもらって悪かったよ、茶毘。・・・黒霧。気失ってる奴から飛ばせ」

ただ、見つめていた。

握りしめた拳、そこからは焦りや緊張がうかがい知れる。

だがその瞳は何かの答えを探すようにただ緑の髪の子を見つめていた。

更にその――

「神野編2. 5」

最初に会ったのは、あのU S J襲撃の時だ。

黒い炎を出すだけの個性の二重人格者、俺の計画を潰した気に食わないチート野郎。

次に見たのは、テレビの中だ。

オールマイトから声をかけられ、まるで自分が世界の中心に居るかのように有るその姿になんとも言えない苛立ちが湧いた。

だから、会いに行った。

あの日、あのチート野郎はオールマイトが原点だって言った時はやっぱり、って思った。

オールマイトが居るからコイツが出てきただけなんだ、やっぱりオールマイトが悪いから――今の俺があるんだって。

満足して、納得して、腹の中がぐちゃぐちゃになって。

そこで終われば、今の俺は違う俺としてだったかも知れない。

オールマイトが居たから浮き出てきただけの端役であるアイツは、目の前で銃で撃たれた。

それ自体はどうでも良い。

死のうがどうなろうが知るか。

重要なのは、飲み込めなかったのはあの銃弾を仕向けたのは先生だって事だ。

俺の知る限り、先生は常に姿を隠していた。

特別だから。オールマイト同様に特別で、世界の裏のさらに中心。

その先生が、あの端役のために証拠が残る手を使った。

それも、殺すためじゃない。まるで成長を助けるように打ったその

一手で、あのチート野郎はマスキュラーを潰すだけの力を手に入れた。

おかしいじゃないか。

オールマイトと先生に、世界の中心に手をかけられているアレはなんだ。

プロヒーローすら潰す俺のヴィラン連合に単身乗り込んできて半壊に追い込む？なんだそれ。

アイツはなんだ。

ゲームの主役か？チート野郎か？漫画の主人公か？

違う。そんなボケた捉え方じゃあ見られない。

アイツはなんだ。

緑谷出久とは誰だ。

緑谷エドモンとは誰だ。

ギジジジジツ!!!

複数のパイプを無理やり取りつけたような歪なマスクの男の手が、空間に爪を立てるように指先を滑らせる。

それだけで、男の五本の指先から飛び出した黒い刃がアスファルトを切り裂き、ビルの一部を削り取る。

少年たちの戦場から5 k m。工場とビルがそびえ立っていたこの場所はしかし、すでに瓦礫の山に変わりかけていた。

ラグドールのサーチにより彼女が遭遇した脳無の一体の居場所はすぐに割れた。

対して、浚われた少女の居場所はサーチでは絞れず何らかの妨害が成されていた。

当然、これは罠だと誰もが理解していたが数少ない手がかりを潰すという選択肢は無かった。

何より彼が、止まる訳もなかった――

「――DETROIT SMASH!!!」

音すら置き去りにして、巨大な拳が黒い刃へと突き進む。

アスファルトすら容易く切り裂くその刃はしかし、僅かに切り傷を残し砕け散っていく。

刃を突き抜け、折り砕き、つまりは最短ルートで拳はマスクの男――

――オール・フォー・ワンを捉える。

「少し急ぎ過ぎだよオールマイト。そんなに、さっきの連絡が気になるかい？」

『衝撃反転』

拳がその腹部を撃つ――その瞬間、ザワリと背中を襲った嫌な感覚にオールマイトは拳を止めようとする。

だが僅かに、勢いは殺しきれなかった。

成人男性程度であれば吹き飛ばすであろうその拳は、オール・フォー・ワンの腹へと突き刺さり——果たして、まるで壁に肉を叩きつけたような音と共ににはじき返されたのはオールマイトの拳の方だった。

「ッ!!・・・そうでもないさ。いや、もちろん彼らが無茶をしないかは心配さッ」

ビリビリと痺れる右腕を振りながら大きく距離をとったオールマイトは、まるで見当はずれの事を言われたとばかりに口元にいつもの笑顔を浮かべる。

（彼のサイドキック用の通信装置に連絡が入った時は驚いたけど、この状況を目の前にして彼があんなことを言うなんて・・・私が思い出していたのはそれだよ、オール・フォー・ワン）

「少し前の私なら、分からなかったのかもしれない。この場に来て、貴様を前にして溢れてやまない気持ちがある」

脳無を追い、工場に他のヒーロー達と共に乗り込んだ彼はすでにいつもと違っていた。

まるでこちらを敵視するようなギラギラと燃やしつくすようなあの視線ではなく、冷静にこちらを見定めるようなあの視線。

そして、彼が残した言葉。

『俺が追いつくまで無様な姿は見せるな。俺はお前に出来ない事をやりに行く』

彼が自分の背中を追いかけていた事は知っている。

ある時から、その顔から熱が消えうせ——彼が別の方向を向いてしまったことにも気づいてしまった。

隣を走っているつもりでも、トップヒーローを名乗っていた自分がそんなことを言ったところで意味がない事はわかっていた。

思い返せばあの体育祭からだ、彼は変わった。

顔を氷漬けにされたまま出勤したなんて話も聞いた。

あの仕事など休んだことも無い男が謎の弁当を食べ、胃洗浄をしたなんて話も聞いた。

氷漬けにされたままどこかの病院に引きずられていく姿を見た、なんて話も聞いた。

いつの間にか、退院された奥方とまた暮らし始めたと聞いた。

（見えないところで、変わっている。私も彼らから学んでいる。友達を救おうと、自分たちの事は二の次で、全力で今も動いている少年少女たちから学び——）

### 『臂力増強』

眼前のオール・フォー・ワンの腕が膨張する。

### 『きんこつバネか筋骨発条化』『増殖』

まるで力を溜めこみ、いまにも咲き誇ろうとする醜悪な花卉のように肩から蠢くように生えた6本の腕が絡まりオールマイトへと向けられる。

### 『瞬発力』×4『肥大化』

だが終わらない。彼の個性で得た他者の個性のストックは、並みの破壊を生み出すだけでは許されない。

花卉はより大きく肥大化し、歪な砲身へと姿を変える。

「ああ……とても不愉快だが、僕も君も同じことを考えているようだ。ここで終わることによって彼に巢立ちを教えようかと計画を練っていたんだが、最近の彼を見て少し気が変わった」

『空気を押し出す』

本来ならそれほどの威力も無い、それこそ実際の砲弾と比べてしまえばおもちゃのような威力の個性。

それが、オール・フォー・ワンの腕から撃ち出される。

まず、撃ち出した彼の眼前の地面が押しつぶされ、押しのけられ大きな穴へと変わっていく。

見えない砲弾は瓦礫を砕き、しかし一瞬でオールマイトへと迫る。

「私は――」

「僕は――」

その背後の瓦礫の山の中で、動く人たちが居る。

可能な限りの避難誘導を行いそれでも、オール・フォー・ワンの力量を見誤りこのテロに巻き込んでしまった者。

この異常な惨状を作り出した敵に背を向け、そして彼に背中を預け救助者を助けるために動くヒーロー。

その光景の重さにオールマイトは笑う。

その光景の軽さにオール・フォー・ワンは笑う。



「――彼ら『彼』の目指す先にまだ立っていたい」

風の砲弾とオールマイトの拳が重なり合う。

突き破ろうとする拳に対し、砲弾はその圧倒的な質量で押しつぶそうとする。

地を削り、押しのけられていく体。

（……押されッ……るが……それがどうしたッ）

オールマイトは――

「……どく……鋭く……重くッ!!」

押しつぶされないよう何とか、姿勢を深く腰を据える。

歯を食いしばり、腰を据えたからこそ得られた安定性から、足首、膝、腰を回転させていく。

見よう見まね。

トップヒーローらしからぬその動きは――確かに左腕へと力を伝えた。

「——激しく行くよッ!!」

下から、突き上げるように左拳が打ち上げられる。

正面からの一点突破を読んでいた砲撃はしかし、切り裂くように打ち上げられたアツパーに切り裂かれ、かき乱される。

霧散していく砲弾。

その軌跡をたどり、オール・フォー・ワンが迫る。

本来なら風の砲弾により姿勢を大きく崩した所を突き抜く、そのつもりで用意した左腕。

『エアウオーク』『臂力増強』『筋骨発条化』きんこつパネか『増殖』『瞬発力』×4『肥大化』『鋌』『槍骨』

槍。絡み合った無数の腕と、浮きだした鉋物のような何かがオール・フォー・ワンの体よりも巨大な拳であり、槍を形作っている。

（彼を完成させるために、彼が必要なんだよオールマイト。対等の存在が必要なんだ、彼はまだ学ぶ者だからね。——だから、君という火種はもういらない）

拳が、そこから生えた槍がオールマイトの心臓を捉える。  
確実に、一呼吸で貫く距離に迫る。

コマ送りの視界の中で、オール・フォー・ワンは眼前の男の右拳が再度握られていくのを久しく前に失った視力の代わりに『赤外線』で確認する。

間に合う。間に合ってしまう。

彼の拳は、オール・フォー・ワンの拳を突き破り槍を折り砕くだろう。

トップヒーローの拳が振るわれる――

## 『衝撃反転』

（間に合うさ。君はそういう男だ、知っている。良く知っている。だからこそ――）

自らの振るう拳で、オールマイトの腕が四散する。

その確定した未来をすでに存在しないまぶたの裏で幻視した彼は

前ではなく、真横にゆつくりと振るわれた拳その動きを、『赤外線』で感知しなかった。

オールマイトの腕がしなやかに巨大な拳へと添えられる。

衝撃を反転していたオール・フォー・ワンはその感触にすら気付かず、『彼』の動きをとつさに再現しただけのオールマイトは力任せに押しつけようとした結果。

グンツと腕ごと巨大な拳の真横へ体を押しつけられる。

（H A H A H A！手の平で払う受け流しは得意なんだよ!?でも・・・腕での受け流しは初めてだ）

左の拳を握る。

（はは・・・今度、教えてもらおう。動物や虫たちがどんなことを話しているのかとか、お菓子作りとかも・・・音楽も、スポーツも・・・色んなことを）

だから。

体内で、制限時間を告げるアラートが鳴り響いているがそれで止まれる状態じゃない。

止まりたくない、前に進みたい。

今も進み続ける彼らの目印となるために。

先へ――

「Plus Ultra  
!!!!」

拳が、仮面を砕いていく。

オール・フォー・ワンはここにきて自らの失策に気付く。  
だが、その頬へ確かに――拳がとどく。

音も、風圧も一瞬遅れそれよりも先にオール・フォー・ワンの体は  
地面へと叩きつけられる。

だが終わらない。

ドツ!!!と地面が一瞬で抉れ、彼の体は沈み込む。

拳圧により巻き起こる突風が漂った粉塵を一瞬で掻き消し、空へと  
噴き上げていく。

突風が穿った厚い雲の間から、日が差す。

その下で、いつものように彼は負ける事無く立ち続けていた。

## 混沌接続

### 「神野編3」

撤退。

死柄木が口にしたその言葉にいち早く対応したのは緑谷だった。顔を狙い突き出された茶毘の右腕を跳ねのけ、その胴体に爪先を突き刺すように蹴りを滑り込ませる。

「・・・やつとか。後で訳を話せよ、死柄木」

だが、同様に死柄木の言葉を聞いていた茶毘も同様に緑谷から距離を空けようとしていたのだろう。

「つ・・・少し、想定が甘かったか」

空を切る足に歯噛みしながら、右手に生み出すのは鈍く光を照らし返す黒い短弓。

（轟さんとあの人が来るまで、せめて時間をかせぎたかったけど・・・！）

それは望み過ぎだったかと眉を寄せる。

なら、甘かった方の想定通り動く必要がある。

トレース・オン  
「投影開始」

心臓から左腕へ、血潮が流れるような感覚が伝う。

脳裏に浮かぶのは無数の剣の姿。

見たことも無い、聞いたことも無いその構造それが分かってしまう。

ズツ、と重い感触が左手に触れた。

それが今、脳内で確認した短刀だと理解する前に弓へとつがえ、狙うのは死柄木の言葉を聞きすでに実行に移そうとしている黒霧。

「死柄木弔！あなたが最優先ですツ、早く中へ！」

（死柄木の指示と噛み合っていないツ。今なら——）

撤退する前に、黒霧を止められる。

左手を短刀から放す。銀の刃から捻じれるように伸びた黒い柄、歪な矢が空を切り裂きながら弓なりの矢から飛び出し——。

横から伸びた青白い手がその柄を掴み取る。

「聞こえなかったのか、黒霧。意識のない奴をとばせ……早くしろッ！」

瞬きする間に、矢は乾いた音を立てひび割れ、砕けていく。  
脆く散るそれを払うように振られた右腕。

瞬時に物体を崩壊させる左右の手が、緑谷の腕を狙い伸ばされる。

（ッ、死柄木が残るなんて……！）

まるでゲームのようにテロを起こす、幼い精神構造の人物だと思っていた。

手駒が減る事を恐れ、気絶している敵を優先して転送させているのだと。

この、自分の喉元に危険が迫った状況であればチャンスがあれば何を優先してでも自分を撤退させようとすると。

振るわれる腕は、目で追いきれる速度でしかない。

鋭く鋭敏になった今の動体視力では、体を屈めることで簡単に避ける。

「意外そうな顔だな。銃で撃たれてもほとんど顔を変えなかったくせに」

「……ああ。少し意外だね。君なら僅かでも撤退の機会があればそこらを選ぶと思っていたが」

再度、彼の言葉を口にして左手に生み出すのは黒の中華剣。

刃を潰したそれを無防備な死柄木の腹部へ横薙ぎに振るう。

「ッ！……ああ、そっちはダメだ。そんな方法じゃ負ける気がした」  
肉を叩く鈍い音、

後方へ退くように跳んだ死柄木だが、その腹部へ叩き付けられた黒剣によりその体は大きく揺れる。

追撃をかけるため前へ跳ぶ緑谷の眼前を、しかし遮る様に赤黒い炎が駆け、空間を焼く。

「死柄木、トガがやられた。お前も早く撤退しろ」

「なら早くトガも飛ばせ。それで、次にとぶのはお前だ茶毘」

死柄木らしくもないその姿に、茶毘は疑うようにその目を細める。茶毘の死柄木に対するイメージは緑谷と大差ない。

むしろその下に立ち、そして動いた結果より評価は落ちていた。だからこそ。

茶毘の横を通り過ぎ、緑谷へ向かうその姿に強い違和感を抱く。

「・・・最後がオレだ。茶毘、お前は先に飛ばした奴らを確認しろ」

炎の壁が陽炎のように揺れ、その中心を黒炎が貫く。

弾け散った茶毘の炎の中、紫電をまき散らしながら黒い影が迫る。

「ッ・・・！」

反射的に茶毘は強く右手を握りしめ——勢いよく開いたその手の平から、赤炎を放つ。

突き進む黒炎へ衝突したその炎は僅かに拮抗し、しかし次の瞬間にはその中心を貫かれる。

さきほど同様、辺りへ散る自らの炎に強く舌打ちし勢いを僅かに殺した黒炎を大きく横へ跳ぶことで避け切る。

背後から、黒炎が衝突したのだろう何かが弾け、爆散する音が響く。

（出力が上がっている・・・いや、安定しすぎている）

焦りに思考を削られてしまえば、精密な操作を要する茶毘のような個性は制御できるレベルまで出力を絞らざるをえない。

当然、戦力を確実に削つてきているあちらと、撤退に追い込まれているこちらでは焦りに差はでる。

だが、そこまで思考し茶毘は僅かな違和感に気付く。

（既にコンプレスとマグネは回収されている。その事に、ヒーローでもない学生が焦りを感じない・・・そんなことがあるか？）

茶毘の眼前に、黒い霧——ワープゲートが現れる。

視線を横へ向ければ、恐らくその他を転移し終えたのであろう黒霧が領き。



その霧へ体を滑り込ませる直前、茶毘は死柄木へ今一度視線を向ける。

緑谷へ接近し、紙一重でその攻撃を避けている。

黄金色に輝く右腕が振るわれ、空気が弾けるような音が辺りに響き渡っている。

その背後には、黒霧へ迫ろうとしたが間一髪で姿を隠され、地団太を踏んでいた少女も迫っている。

「・・・お前の言うところのゲームオーバーじゃないのか、死柄木？」  
逃げる事の出来た自分にとってこの状況は終わってしまったえば最善に近い。

だが、死柄木はこの状況で茶毘まで逃がしてしまえば打つ手はない。  
だが

（・・・先に飛ばした奴らを確認しろ、か。それがお前にとっての最善か死柄木？）

その真意が最後まで読めず、しかし最後の言葉くらいは聞いてやろう、そんなことを考えながらワープゲートへ踏み込んだ。

「ッ、終わりだクソ野郎!!」

かつちゃんが、黒炎の衝撃でひるんだ死柄木の後ろから殴りかかる。

BOOOOOM!!

確実に頭に当たる筈だったその拳は、だけど間に生まれた黒い空間に飲み込まれる。

反射的に腕を引きぬいたかつちゃんの前で、霧が掻き消えて。

「チッ、ワープ野郎がまだ居やがったかッ!!他の奴らも逃がされちまったみてえだし」

先にあの敵から先に倒しておくべきだったんじゃないか。

きつとそう考えているかつちゃんが、悔しそうに舌打ちしながら空中で右手から爆破を起こして黒霧と呼ばれていた敵に向かっていく。

「ああッ!だからこそ奴を逃す事は許されない。あのアヴェンジャーを捕縛することで、行先は見えるはずだ」

この状況は一番じゃないけど、予想通りに進んでいる。

でも、だからこそ予想していなかったことが一つ、気になる。

対峙する死柄木、彼の目が僕の目を真っ直ぐに見ている。

もう死柄木の戦力は無いはずなのに、あの目は――

「死柄木弔、次はあなたです!今度こそ撤退を!」

「ッ、させるかよ!」

かつちゃんが視界を遮る様に、黒霧の目の前で大きな爆発を起こす。

響く金属音は、きつとあの体に蹴りを当てたんだろう。

それでも、死柄木は

「いいや。次は黒霧、お前だ」

最後の味方である黒霧も撤退させようとしている。

そんな状況に、僕の中で嫌な予感が膨らむ。

その気持ちを抑え込む様に、一気に死柄木との距離を詰める。

「コイツは勝つつもりでここに来た。なら、いつ撤退してもオレの負けになる、そうなるように想定してここに来た筈だ」

赤い瞳。

それが、僕の目を見透かす。

僕もその目を見つめ返す。

「なら・・・」

そこに写っているのは

「なあ、<sup>ヒーロー</sup>緑谷オレが今もここに居るのは予想通りか？」

僕の姿。

僕の考えを死柄木が読み取ろうとしている。

その事実にはザワリと、背中が粟立つ。

死柄木弔という存在が、今目の前で変わっていく、そんな予感が――

過ぎった予感を振り払うように、緑谷は拳を握る。

雷を纏った拳が、死柄木を捉える。  
あの一息、踏み込むだけですべてが決まる。  
その刹那に――

「・・・やれッ」

死柄木が、全力で後方へ跳ぶ。  
その行為に、言葉に緑谷の動きが僅かに鈍る――その体へ、赤黒い爆炎が襲い掛かる。

緑谷が驚愕に視線を向ければ、そこに立っていたのは先ほどワープゲートへ入ったはずの荼毘の姿。  
困惑しながらも、力の噴出により後方へ飛び退こうと力を込め。

体の動きが止まる。

体の内から、次々と奇妙な感覚が突き上げてくる。

見下ろした先にある自らの手。

その形が次々に変わる。

真っ白な少女の手、次の瞬間には高齢の男性の手、しなやかで艶やかな女性の手。

深紅の、まるで西洋の騎士のような手甲に、肉球の付いた手袋。

そして今度こそ確実に、その体が火炎へと飲み込まれる。

鋼鉄の意思により耐久性を増した体は炎による致命的な熱傷は防ぐが、一気に失われた視界、酸素は思考を削る。

彼の体から、青い光が散った。

集中力が失われ、個性の制御が失われている。

その体へ、再度赤黒い爆炎が叩き付けられ、その体は大きく吹き飛ばされ――

「出久!? 待てッ、いま・・・!!」

その光景に、たった今押さえつけることに成功した黒霧から飛び退き、少女は駆け出す。

焦るその体を、しかし今度は真横から飛び出した足が蹴り飛ばす。

「完全に俺のこと忘れてたんじゃないか!? 憶えていてくれてありがとうよ!!」

瓦礫から姿を現したトゥワイスが、蹴り飛ばしたその体へと追撃をかける。

状況が、ヴィラン連合へ傾く。

トゥワイスが跳躍した体勢から、転がったその体を踏みつぶすために両足を真っ直ぐに伸ばし――

「おうッ!? またかよ!」

トゥワイスの真横の壁が砕け散る。

散弾のように飛び散ったその破片から体を守る様に体を丸めれば、次いで衝突した破片により体が吹き飛ばされる。

砕け散った壁から、大小二つの影が踊り込む。

もう一つの影に比べれば小さな影は、自らに生えた白い尾を地面に

叩きつけ、その反動を使い一気に駆け出す。

その手は、地面に転がった爆豪を一瞬で抱え込み一気に距離を離す。

対して、巨大な影は吹き飛んだトゥワイスへの追撃に移る。

破片による衝撃を何とか殺し切り、姿勢を立て直したトゥワイスの眼前に拳が迫る。

その拳を、躲すために体を傾け——その先にもう一本・・・三本の腕が迫っていることに気付く。

「ッ、んなバカな！当然だろ!？」

トゥワイスの頬、腹部に拳が埋まる。

くぐもった声と共に、その体が再び宙へと舞い。

「尾白とッ、障子か!？・・・ッ、俺よりも出久を助けてくれッ!」

驚きにより一瞬動きを止めた爆豪だが、先ほどの光景を思い出し尾白の腕の中でもがく様に叫び。

「・・・大丈夫だカツキ。来るのが遅くなってごめん」

いつの間にか、部屋の中が強い冷気に包まれていることに気付く。ゴトンッ、と音を立てて倒れる音に目を向ければ、まず視界に入るのは部屋の中心に立つ赤白の髪の少女。

その足元に倒れているのは、首から下が氷に包まれた幼馴染の姿。その体を撫でるように白い炎が這えば、氷はまるで幻であったかのように溶けていく。

だが、意識を失っているのかその目は閉じられており――

少女の背後へ、先ほど緑谷を襲った赤炎が襲い掛かる。

その体を燃やし尽くそうと、のたうつ蛇のように身をくねらせ襲い掛かった炎は――しかし、少女を避けるように別の方向から吹き出した赤い炎により食い潰される。

だが、それだけには止まらない。

生き物のように動きを変えた炎は、赤黒い炎を生み出した荼毘の姿を捉える。

再度炎を放とうとしたその体は一瞬で赤い炎に飲み込まれ、ボロボロとその形を崩す。

「勝手に先走るなど言った筈だ!!お前は どうしてそう考えなしに行動するッ……一体誰に似たんだ」

「トウワイスの作った模造品とはいえ一撃かよ。この場面で、No.2ヒーロー……エンデヴァー」

忌々し気に口にする死柄木の眼前で、一度彼に傾きかけた状況が再び覆る。

動けるのは死柄木と、黒霧。

対してヒーローの卵が地面に倒れているのを除き5人、プロヒーローが一人。

致命的なその状況。

差し込む光の中に立つオールマイトの足が何かに掴まれる。  
それはひどく弱々しい力だ。

僅かにでも足を振るえばオールマイトなら一瞬で振りほどける程度  
の、そんな力。  
だが

「・・・憎悪は・・・苦しみは・・・喉元を過ぎてしまえば常人は必ず目



を逸らし、蓋をする。・・・才能だよオールマイト、憎悪を抱き続けるのにも才能が必要なんだ」

オールマイトは足元から響くその声に足を止めざるを得ない。

掴まれた足から、彼の妄執が這いあがつてくるような、そんな錯覚すら抱かされる。

「・・・個性の強さだけじゃあ世界は変わらない、そんなことはすぐに分かった」

「ッ、貴様がそれを口にするか!!」

数多の個性を食い潰し、数多の人生を狂わせた悪の王がそれを口にするのか。

あまりに身勝手なその言葉に、オールマイトは足元に倒れ伏していたその体、胸倉を掴み上げる。

しかし、オール・フォー・ワンの言葉は止まらない。

ただ、見つけた答えを目の前の宿敵だったものへと口にする。

「・・・ああ。僕だからこそ口にする権利がある。そして・・・だからこそ次の世代に託そうじゃないか、僕も・・・君も」

乾いた破裂音が響く。

オール・フォー・ワンの体が、ゆっくりと地面に落ちる。

その体へ、降りかかる赤い液体。

地面に倒れた彼の目は既に遙か昔に光を失っているが、目の前で何が起こっているのかは手に取る様に分かる。

彼が、右手に持つ未だ煙をあげ続ける小さな武器を使い、自らの意思で行ったことなのだから。

本来なら、こんな武器では彼を傷つける事などできない。

いや、この武器だからこそ彼に傷をつけられたのだろうか。

いずれにせよ、

満身創痍の彼が、彼が自らの言葉にあそこまで激高し、そしてこんな武器を使う筈が無いと考えなければこの状況は生まれなかった。

状況を今さら把握したのだろう、オール・フォー・ワンの耳に耳障りな悲鳴とヒーロー達の足音が聞こえてくる。

もがき苦しむオールマイトの真実の姿に今さら驚き、叫ぶ声も聞こえる。  
トウルーフォーム

「・・・僕と君ではこの世界は動くだけだった。さて、彼らならどうだろうか・・・」

オール・フォー・ワンの意識もまた、ゆっくりと途切れていく。

この生温い世界、次に目が覚めるのは刑務所だろうが生きている限り彼の今後を見守ることは出来る。

だが、最後に――

ズルズルと、頼りなく右手が地面を這う。

途切れかけの意識で、彼もまた個性を一つ発動する。

水音のはじける。

断続的に彼の伏した地面の下、隠された地下室から音が響いてい

く。

バシヤツ。バシヤツ。

水音が、死柄木の眼前で唐突に鳴る。

「っ、なんだよ、これ」

「分かんが・・・良いものには見えないな」

尾白と障子の眼前、エンデヴァーと轟の眼前。

皆の視線の先、そして周囲で、空間から滲みだすように黒い液体が溢れ出していく。

「これは・・・先生のツ」

彼は知っている。

これが。オール・フォー・ワンの個性の一つ、転移であること。そして彼が自分に授けてくれた一手であること。

弾ける音は止まらない。

その液体から、ズルリと黒い影が姿を表す。

黒い肌、巨体の者も居れば小柄な物もいる。

自身よりも巨大な翼を生やした者に、鉤爪を生やした者。

それらの共通点はただ一つ、

脳が大きく露出しているその異形。

——室内を埋め尽くすほどの数が、死柄木を言葉を待つように動きを止め。

誰もが、エンデヴァーですら不用意にうごけない状況で——

倒れた少年のまぶたがゆっくりと開かれる。

赤、金、紫、青、白、次々とその瞳の色が変わっていく。

まるで何かが彼の体を奪い合うように、あるいは止めようとしているように。

「ッ、囲んでいる奴らはソイツを優先して潰せ。余った奴らは他の奴らを狙えばいいッ」

死柄木が指さすのは、エンデヴァーだ。

（物量で押しつぶして鎮火すればいいッ。学生を守るために意識を裂

けば、奴の力はさらに削げるッ！」

エンデヴァーの周囲に出現した数体が彼を抑え込むために動く。残りの脳無達も指示に従い動き始める。

状況は変わっていく。

「黒霧ッ、撤退だ！トウワイスを拾え！」

彼の視線の先で、倒れたままの少年の背中が見える。

彼を守る赤白髪少女も、数体の脳無を相手取り応戦してはいるが次第に押され始めていた。

そして、ついに一体の脳無がその隙間を抜ける。

肥大化した右腕が特徴の脳無。

その腕が大きく振り上げられる。

狙うのは少年の頭部であり——脳無に僅かなためらいなど有る筈もない。

少女の息を飲むような声と同時に拳が振り下ろされ

その拳へ、ゾブリと奇妙な音と共に白い腕が突き刺さる。

「——くははっ」

痛みに殆ど反応を示さないはずの脳無の体がビクリと跳ね、その白

腕から自らの腕を引き抜き距離をとる。

それは、命あるものとして当たり前の本能。

眼前の相手が、自分にとって、人に対しての捕食者であると本能が察していた。

対して、腕の持ち主はゆっくりとその上半身を起こす。

まるで写真のコマ送りのように、その姿が形を変えていく。

筋肉質だった体は細く、しなやかに。

少し日に焼けていた肌は、白く陶器のように。

体を這うように現れるのは赤い文様、その終着点である四肢もまた赤く塗りつぶされ先ほど脳無の腕を貫いたであろう爪がさらに鋭く伸びていく。

「勝った・・・つ、勝ったぞ酒呑!!何の争いかは知らぬが吾と手を組んだ酒呑に勝てるわけがあらへんよ・・・ん?」

緑のおかつぱ髪、その額にから黒い角が2本。

さらにその下から赤い角が2本ゆっくりと伸びていく。

「しゅ、酒呑?吾ひとりか?そもそもここは何処なん?・・・一人は嫌やわぁ」

その体へ、纏うように薄紅色の煙のようなものが集まっていく。

形作るのは紫の着物、しかし気崩すように着たそれにあまり意味など無いのかもしれないが。

肩を落とす、先ほどよりも小さくなったその姿に、脳無は首を傾ける。

その脳内でどのような思考があつたのかは知れない、だが彼は最終的に右腕を振り上げ――

「――おい。先ほどから何をじゃれついている？」

振り下ろされる前に、その腕は宙を舞っていた。

鈴が鳴るような声。だが、誰もが・・・脳無ですらその声に動きを止める。

ズンツ、と地面に突き刺さったのは彼が今しがた振るった巨大な刀。

巨大な骨を無理やり刀に打ち直したかのようなそれに手をかけながら、その赤い瞳で周囲を見据える。

「無粋やわあ。次に動いた人からすこおしずつ喰い殺してやりませい!!・・・んん?」

ふわり、と唐突に頭上に表れた白い布が彼の体へと覆いかぶさった。

## ニトクリスの鏡

### 「神野編4」

ひらりひらり、白い布が落ちていく。

その布が目の前存在の赤く染まった眼光を覆い隠したことで、その場にいた全員がようやく呼吸をすることを許される。

（あれは何だッ。なんでこの場面で、あんなヤツが出てくる・・・ッ）  
その存在がすでに緑谷出久ではない事を、死柄木は自身の感覚から理解していた。

あの存在からは正義の気配がしない。

だがしかし、アレはヴィランでもない。

一瞬でも視線を動かしてしまえば、あの白い塊にこの命を刈り取られてしまいそうなの。

そんな予感がした。

だからこそ、視線の端で黒い影が動いた瞬間自らの失態に彼はようやく気付く。

（ッ、脳無——！！）

この圧に耐えられた個体。

いや、鈍い個体なのだろう数体がエンデヴァーへ再び飛び掛かろうとしている。

それだけではない、他の脳無もまたゆつくりとその四肢を動かそうとしている。

あのエンデヴァーが表情を青ざめさせ、動きを止めている事しかできないこの状況で——。

しかし、考える脳を奪われた彼らは止まれない。

ヒト型に膨らんだ白い布。

恐らく顔に当たる部位がスウ、と赤い線が2本裂けた様に広がって



いく。

そこから覗くのは金色に光る鬼の瞳。

「動くなぁッ！脳無ッ!!」

シャンツ。

金属を擦り合わせたような音が一つ。いや、二つか三つ。  
一重にも、幾重にも聞こえたように錯覚させる音が響いた。

「ふふ、堪忍なあ。吾は先に忠告した、よもや戯言と受け取ったわけではあるまいな？」

死柄木にはその言葉が何を意味するのか、確認することは出来ない。

耳に入っただのは複数の重いモノが床に叩き付けられたような水音。  
視界を埋めるのは、四本角の美しい鬼の童顔。

果実を甘く、甘く、甘く溶かし溶けあわせたような匂いの吐息が香る距離で視線が交差する。

赤い文様に彩られた細い指先が死柄木の頬に触れ――

「勝手に動きはった口も斬り落とそうか悩んだが……」

「緑谷出久の中に居る……お前は……ヒーローじゃないのか？」

ようやく、口にできた言葉はそんな質問。

その言葉に、ソレは目をまん丸に変える。

そして、顔を見せるためにかぶっていた布を押し上げていた手とは逆の手で、ゆっくりと口元を隠せば。

目元を細め、次いで鈴を転がしたように笑い声を響かせる。

「吾がッ、このうちがひーろーだど……？」  
人類の味方

赤い、真っ赤なその手が下ろされる。

持ち上げていた布が下り、白い布によってその表情が再び隠れるがその表情が先ほどまでと同じ、ゾツとするような笑みを浮かべているのは布越しにもわかる。

「吾はな、かの大江山を――」

ええいッ！ほんに邪魔な布やわあ……」

白い布が、真っ二つに裂ける。

それだけで、僅かに抑えられていたその殺気が、闘気がその体から再び溢れ出す。

どういった意図であの布が被せられていたのかは知らない。

殺気を押さえ、対話を行うための状態であった可能性もあるが

(破り捨てたつてことは、もう対話をする気は無いらしい)

切り裂いた布を更に細かく千切り捨てるその姿に——死柄木の頬を一筋の汗が伝った。

(『メジエド様ああああああ!!?』)

(『煩いッさえずるな!そも、汝はなぜ吾のあたまの中に——』)

(『フアラオたる私を突き落としただけでは飽きたらず、メジエド様に対する狼藉・・・不敬・・・フケイです・・・』)

(『ちよつとおー!ねえ、もしかしてここ小鳥の中?いつのまにパーティ加入したのかしら私』)

(『みんな悪い子だわ。邪魔をしないって約束すればイズクも楽になれるのに』)

(『彼の者に不利益な事をしないよう目を光らせて大人しくしていよ

うかとも考えていましたが・・・気が変わりました!』

『ほう、この茨木童子と酒呑に挑むと?面白いッ、汝のような軟弱な肉体で何が出来るか:』『うちはいややわあ。頑張ってなあ茨木:大事なものにはしっかり弄ったから後はよろしゅうなあ』

『酒呑!?!ふふ、ふふ、任されたからにはやらねば鬼が廃ろうぞ!かかって来い南蛮の陰陽師ッ!!』

『不敬に罰を・・・悪逆に死を。神々を軽んじる者、フアラオを愚弄する者・・・天罰 覲面!!』

『ッ、な、なな・・・!?!しゅ、酒呑ッ、小僧の体から引きはがされ――』『本物の体なんてないんやし、力任せの押し合いになるわけないやろ。うちも少おし呪いは齧つとるけど・・・本職にはさすがにかなわんわあ』

『いつ、痛いわ!?!なんだかビリビリするんだけどっ!ど・・・毒状態よっ、いそいで毒消し草を買って来なさいよ緑のっ』

『嫌っすよ』

『繋ぐ者。似ているあなたのそばに居たい・・・そう私はもつともつと近くに居たいの・・・だから私はわるい子になるわ。・・・いあいあ』

『で、で・・・出ていきませい!!』

「メ・・・メジエド様・・・なんとおいたわしい」

デクの野郎の姿がまた変わりやがった。

それも今までとは全く違う、ヤバい人格だ。

さっきの一瞬で10ぐらいの脳無が地面に這いつくばってやがる。虫みてえに動いてるところを見ると生きちゃいるが、たぶん手足の腱が全部切られてやがる。

今は地面に散らばった白い布を這いつくばって集めようとしてはいるが、ときどき悪霊みてえな叫び声をあげているところを見ると精神もかなり不安定だ。

この前の悪魔ジジイも大概だったが、コイツは・・・

「爆豪君・・・彼の個性は何か、君は知っているか？」

「あ？・・・知って、ますが」

デクの目が逸れた隙にいつの間にか近付いてやがったエンデヴァーが声をかけてくる。

適当に返事をしようとして・・・その隣に轟がいるのが見えて、少し言葉遣いを考える。

「プロヒーローにも彼の個性についての情報は出回っているが、公にされている『人格に合わせ能力を変える個性』なんてモノを鵜呑みには出来なくてね」

「ううつ、ぐずつ・・・メ、メジエド様、帰りましょう。このままここに居たとしても彼の者に迷惑がかかるだけです（『ねえ！本当にそうかしら？』・・・え？」

「・・・アイツが言うには、過去の偉人の力を借りる個性らしい・・・ッ

ス。あの炎を出して飛び回るのが巖窟王とかいうので・・・雷のが坂田金時らしいツスけど」

アイツの中に居る奴らの事だから一応調べたが、創作かどうかもわからないような過去の偉人だ。

それに、個性も無い過去の時代の人間にあんなことが出来るのか。

だから、アイツは多重人格でその性格の切り替えに合わせて個性が変わる、そんなものって事にされてる。

が、

「・・・それは、確かに彼が創作した人格と考える方が自然か」

「だがよ、違うんだよ。言葉も姿も変わろうが、アイツはアイツのままだった筈だ。性格なんて変わっちゃいねえんだ・・・あの悪魔の時以外はッ」

「(『どう見ても周りの黒いのとかはエネミーね！脳ミソ丸出しながら敵よ敵！』し・・・しかし、今は完全に動きを止めていますし、あの手が沢山ついた少年もどこかへ消えたようだし・・・(『バックアタックよ。どこからか狙ってるに違いないわっ。このまま帰ったら小鳥が殺されちゃうかもしれないじゃない！』そ、それは困ります！)」

「アイツの個性は『別の世界の化け物を憑依させる個性』だ。アイツが言ってた座つてのは、たぶんこの世じゃねえ」

「イズクが前に言ってた。座の中には神様も居るって」

「神など居るわけが・・・ッ、冷気を出すな焦子！緑谷君を疑っている訳じゃない！」

「ファラオオジマンディアスも彼の者の映像をとてもしみにしているのです！『なら先手必勝よ！きつと大丈夫、まわりの変なのだけ倒せばいいんでしょ！私達にかかればこんなの朝ごはん前よっ』わ、分かりまし・・・私たち？」

「なににせよ、気絶させれば終わりだ。やるしかねえ」

うずくまりながら何かぶつぶつと喋ってやがったアイツが、体を起こす。

その姿が、また形を変える。

でこから伸びてた四本の角、それに加えて側頭部から左右2本紫の

捻じれた角が生える。

白かった筈の肌は徐々に褐色に変わって――

「ッ、伏せろ!!」

エンデヴァーの声に何とか体を前に倒す。

2体の脳無が、冗談のような速度で頭の上を通り過ぎていく。

それを成した黒い影が、目の前で揺れる。

「ファラオ勇者ッ、降臨!!この戦い、負けるわけにはいきません!」

黒く、長い尾だ。

アイツの後ろから生えたソレが、まるで竜みてえなそれが脳無を吹き飛ばしてボロきれみてえにしやがった。

速すぎる、が動かなきやどうにもならねえ。

「私が隙を作る。君達はすぐに避難するんだ」

「ッ、んなこと出来るかよッ。アイツを止めるなら俺たちもッ!」

「君達を庇えるほど余裕はない。彼の気配が高まっている、何かが――」

エンデヴァーの顔が、先ほどよりもさらに強張っていることに今更気付く。

それでも、ここに残る事を伝えようと口を開いて――

右足を、強い力でダレかに掴まれる。

後ろに居たのは障子か尾白だ、足を掴まれる理由なんてねえ。

足元に目を向ければ

白く濁った眼と視線が合う。

赤黒く、ところどころ黄色く変色した包帯を全身に巻いた何かが、

地面から生えるように俺の足を掴んでやがった。

人の皮膚にしては柔らかい感触が、足から伝わる。

ミイラ。

そうとしか呼べない存在が、少しずつ伝うみたいにわたしのからだをのぼってくる。

てが、こしまで・・・き、て。

「ひっ・・・」

だ、め。こわ、こわ・・・いず・・・

「いやああああああ!!?」

爆豪が崩れ落ちるように倒れると同時に、ホラー耐性の強い者たちは足元のミイラへの対処を始めていた。

「カツキを助けなきゃいけないんだから・・・仕方ないな」

「ッ、爆豪！くっ、こいつら数が増えていくぞ!?!」

轟が自身にしがみつくミイラを凍り付かせ、粉々に砕いた瞬間――  
―再び数体のミイラがその足を掴む。

尾の一撃によりミイラを吹き飛ばした尾白も同様に倒せば倒すほどその体の自由が奪われていく。



「かわいいマミーが・・・ざざーん、ざざーん・・・」

「ッ、娘の数少ない貫い手に怪我はさせたくなかったがッ」

足元のミイラを一瞬で灰に変えたエンデヴァーが、その炎を緑谷へ向ける。

不気味に何かを呟きながら体を起こす緑谷はしかし、その左手を眼前にかざす。

「ぬるい！ドラゴンブレスのうん十倍ぬるいわ！」

その手に現れた円形の盾が炎を完全に受けきる。

「マミーの拘束が解けないうちに・・・今こそ超必殺技を披露する時よ！（『拘束は終わりましたし、後は帰り・・・必殺技？』）そうよ！」

ふざけたような声音とは真逆。

空気が重く、しかし澄んでいく。

彼の眼前に巨大な鏡が何も無い空間から組み立てられる。

うねった触手、ねじきれそうな体をした生き物の装飾がされた冒瀆的な鏡だ。

そのなかから——ソレはゆっくりと、この世界に姿を現した。

先ほどまで何もなかった空間に、  
緑谷が立っていたその場所に巨大な二本の足が立っていた。  
その膝から上を覆うのは、光を照らし返すような白い布。  
それが

「っ、なんて……ッ」

エンデヴァーは、眼前のソレが理解できなかった。  
それが自身が見上げるような、突き破られた天井よりもさらに高い  
数十メートルの大きさだからでも、白い布に覆われた異形だからでも  
ない。

人が相対してはいけないものだ、見た瞬間に理解させられた。

先ほど、彼が布を被っていたのはこれを真似ていたのかと、この状  
況でそんなことを考えてしまうほどにNo. 2ヒーローである彼が  
思考を放棄していた。

黒い、二つの瞳がただジッとこちらを見下ろしている。

何も感情が受け取れない、まるで何かを超越したようなその姿が。

巨大な足の影から、褐色の存在が姿を現す。

まるで自分が成した事の重大さを理解していないような、無邪気な  
その表情。

「どうしてこの変なのが出て私のチェイテ城が出ないのよー!?……い  
つもならババーって出てくる筈なんだけど、おかしいわね……バグ  
かしら（『な……なんて事をしているのです貴女は!?メジエド様をお  
呼びするなど……』）へ？めじえ……これの事？ぷっ……こんな  
布かぶった生き物がどうしたっていうのよもー」

ベシッ、ベシッと彼がその足を平手で叩く。

こちらを見下ろしていた白い化け物の空虚な双眼が、ゆっくりと足元の彼へ視線を向ける。

『(死にますよ、ここに居る者全て)』……え?」

「に……逃げてー!!みんな、ちょ……このゾンビどうやったら居なくなるのよ! (『ゾゾ、ゾンビではなくマミーです! それよりも、メジエド様に今までの行いを懺悔し、許しを乞うのが先で——』)」

巨大なその存在の中で、力が高まっている事を周囲の者は肌から伝わるビリビリとした感覚で全て理解させられた。

あの存在が今から行う何かを許せば、塵一つ残らない。

今さら慌て出した彼が何かを話しているが、周囲の者は誰も身動きなど取れなかった。

マミーなど関係無い、ソレの存在が全員の足を縫い止めている。

エンデヴァーは、先ほど自身の娘が言った言葉の意味を理解し、その言葉が何一つ間違っていなかったことを悟る。  
アレは

「・・・神、か」

ならば、勝てる姿が全く浮かばないのも無理はないのだろうか。  
自身の背後で、倒れる音が聞こえる。  
彼の娘や級友がこの圧に耐え切れず、意識を失ったのだろう。  
ならば

「面白い。奴を越える前に、神を越える機会が来るとはな・・・ッ！」

勝てなかつたが、背後の存在を守ることが出来れば勝ちだろう。

「俺がヒーローである以上、俺は俺の土俵で戦わせてもらう」

自身をヒーローなどと口にしたのはいつぶりだろうか、自嘲するようにエンデヴァーは笑う。

娘と話し、何か変わったのかと聞かれれば、彼は何も変わっていないと答えるだろう。

越えるべき背中を追いかけてつづける焦りは未だに残り、手段を問わない気持ちも未だ変わらない。

ただ少し、次の世代に投げるには早いと思ったただけだ。

未熟な娘が育つまで、死なせるわけにはいかないだろう。

巨大な瞳が、光を放ち始める。

それだけで周囲の瓦礫がゆつくりと浮かび上がり、空間が歪んでいく。

ねじ切られたように砕けていく鉄骨やコンクリート片、それらが唐突にボトリと地面に落ちた瞬間。

閃光が奔る。

両目から白い光線が放たれた瞬間、背後を守る様にエンデヴァーは炎を生み出す。

膨大な熱量は暴風を巻き起こし、光線の余波を確かに削りきる。

（だが、あの光線自体は――）

「・・・・・・・・へ？」

白き神は視線を足元へ向ける。途中までエンデヴァーへ向けられていた光線もまた、湾曲し足元に居た存在へ向きを変える。

「な、なんでええええ!!」（『貴女が最も不敬だったという事でしよう。

メジエド様のおみ足を叩くなど恐らく世界で唯一あな——」

光が彼に接触した瞬間、周囲の音が消え去り——一拍の間を置き、弾けるように光が拡散する。

巻き起こるのは膨大な力の爆発。

一瞬で、エンデヴァーの張り巡らせた炎の壁へ衝撃波は到達する。

「ッ……」

わずか1秒で炎は掻き消え——しかし、すぐさま張り巡らされる。

歯を食いしばり、立ち続ける彼の体は衝撃波によりすでに殴打され、切り裂かれ、その姿は自身の炎に似た赤に染まっている。

だが、それでも

「お……オオオオオオオ!!」

彼は背を向けることは無く——

白い影の頭上に現れた黒い霧。

その中から飛び降りた影は、自身の右腕をその頭上へと叩きつける。

影、死柄木の手が触れた位置から、白い布がボロボロと崩れ落ちその中身を晒していく。

「ああ、良かった。まるでモブにでもなった気分だったんだ・・・神ぐらい殺さなきゃ帰るに帰れない」

その巨体からすればまるで小石が当たる程度の威力だろうその一撃に——初めて大きく巨体が後方へのけ反る様に揺れる。

動きに合わせ持ち上げられた視線は、空へ向く。

眼光から放たれ続けていた光線は宙に解放たれ、一定の距離を走った所でカーブを描き自身の頭上に立つ不敬な敵を打ち倒すために動きを変えた。

「十分だ・・・崩せるなら神だって殺せる。俺は、神を・・・いや、緑谷出久の力を殺せる。・・・跳ばせ、黒霧ッ！」

ズツ、と死柄木の体が霧に飲み込まれた瞬間、その体があつた空間を白色の光線が風いで行く。

苛立たし気に目を細めたその巨体がゆっくりとその姿を薄れさせていく。

その存在を権限させていた彼が足元で倒れ伏している為に、その巨体を維持する事ができなくなっていた。

彼（？）は天を仰ぐように見上げ、目を閉じる。

唐突に呼び出され、自身以上に良く分からない存在に足を叩かれ仕方なく、慈悲の心で指示通りに光線を放てば後頭部を崩壊させられる。

果たして何だったのだろうかと無い首を捻りながら、空気に溶けるようにその姿は消えていった。

「戻ったか、死柄杓。お前の忠告通りぶっ飛ばされた奴らを漁ったら・・・5、6か。発信器が出てきやがった」

「・・・だろうな。それが余裕の理由か、それともまだあるのかは分からないが今は分からないな。まあいい・・・トガは起きてるか」

「まだ起きてねえな。・・・で、その右手に持った注射器は何だ？トガに用があるなら血・・・にしちゃ、白すぎるな」



「神の血・・・は陳腐過ぎるか。・・・あー、良い名前かあ難しいな」  
「神？お前らしくもないな、ヒーローの次に嫌いそうじゃねえか」  
「だからこそ、違う名前が欲しい所だ・・・例えば」

「上位者の血とか、な」

## 繋がり と 暗がり

### 「神野編5」

「……………」

「……………ええと」

「……………なんだ？」

「せっかくお隣さんなんだから少し話でもどうかなあ、つて思っ……  
コワイコワイ！目が怖いよ！」

「貴様のようなヤツレ顔、俺は知らん。初対面なのだから自己紹介で  
もしたらどうだ、平和の象徴」

「ヒドイッ！」

「倒した敵に足元をすくわれたあげくに隠し通すべき姿まで晒した愚  
か者なら知っているぞ。オールマイトとかいう今世紀最大のペテン  
師だ」

「ホントにヒドイッ……けど」

「……………」

「……………うん、そうなんだ。この姿だけは絶対に隠さなきゃいけなかつ  
た、平和のためにもヒーローを目指す少年少女達のためにも」

「……………」

「退院許可が出たよ。遅すぎるくらいだけど……明日、正式に記者会  
見をすることにした」

「……………ッ貴様」

「あの弾は以前、緑谷少年を狙ったものと同じだった。個性を一時的  
にだが使用不能にする。今じゃ個性自体は元に戻ったけど、急な解除  
は体にはけっこう効いたみたいだ」

「だからどうしたッ！まさか、まさか貴様ッ——！！」

「……………」

「やめるなどッ、この俺の前で口にするつもりではあるまい  
な!?そんな事は許されんッ!!」

「うん。嘘をついていたことも、隠していた事も頭を下げてしつかり

謝って。もつと頭を下げてみんなにお願いするよ」

「貴様はッ!!」

「もう少し、みんなのヒーローでいさせてほしいって」

「・・・む」

「もちろんこんなヒョロヒョロじやみんな不安になる、当然さ。それでもみんなが許してくれるなら僕はまだ一人のヒーローとしていたいんだ」

「・・・」

「だから君に、これから隣を走って欲しいんだ轟君」

「・・・よくもそのような事を・・・」

「オールフォーワンは逮捕された。ヴィラン連合もスピナーが逮捕され戦力は削いだ。だが・・・私のこの姿が世間に公表された以上、すでに平和の象徴としての抑止力は弱まっている。私だけでは・・・護りたいものを護りきれ無いかもしれない、だから」

「それ以上弱音を口にしたらいかに貴様だろうと許さんッ」

「もとより貴様の横など走った記憶は無い。俺は俺の道を走ってきたつもりだ」

「・・・うん」

「たまたま道が重なる。今がその時かなど知らんが、弱音を吐いている暇があるならさっさと走れ。次の世代に追いつかれるにはまだ早い」

「・・・あと、貴様に君付けされる筋合いはない。気味が悪いから呼び捨てにしろ」

「と、轟君・・・」

緊張で気持ち悪くなってきた。

同室にあのオールマイトがいるよお母さん！エンデヴァーも居るし、この部屋にN.O. 1とN.O. 2ヒーローが居るんだ！

サインをつ、サインをもらいたい！

「イズク、リングがむけた」

「つ、あ、ありがとうとどろ・・・」

「焦子でいい。この部屋にはもう一人余計に轟がいるからややこしい」

「!?で・・・でも、それは」

女の子を呼び捨てにしたことなんて無い・・・無い、はず。

こういうときって、呼び捨てが正しいんだろうか。それともやつぱり『ちゃん』とつけたほうがいいのかな。

窓際のベッド二つに居た憧れのヒーロー2人の話に集中してたら、こんな難問が降ってくるなんて!!?

（『まあまあ、落ち着け。この選択肢、ちよーつと思春期には難しく見えるだろうが俺からすりゃあ海の上を歩くより簡単よお』）

・・・最近、頭のなかに声が聞こえてくるのに少し慣れてきた。

えっと・・・あなたは？

（『あー・・・んなことより目の前の問題に集中しろ！死んでも知らねえぞ』）

死ぬの!?

さ、さすがにそれは大げさなような

『選択肢つてのは馬鹿に出来ねえんだ。言葉一つで冥界に落とされたり、夜明けが流れ作業になったり頭を撃ち抜かれたり星座にされたりすんだよ！』

ぜんぜん理解できなかったけど、すごい危ないってことは分かった。

ところで、この人の声だけすごくノイズみたいなのが聞こえるのはどうしてだろう。

「イズク？・・・あの、もし呼ぶのが嫌だったら・・・」

轟さんがすぐ落ち込んでる!?

い、急がないといけないけど、でも呼び捨ては・・・っ。

『そのために俺が来たんだ！復唱しろ、いいな？』

わ、わか・・・痛っ、ノイズが凄いことになってる。

一瞬だけど頭が割れそうな痛みと・・・女の人の声が・・・。

『えー・・・コホン。ショウコ・・・君の剥いてくれたリングも良いが、俺が今食べたいのは真っ赤に熟れたリングよりも、甘酸っぱい君の体を——』

「焦子、君の——」

言えないよ！

なんだか続きも聞こえてきたけど、あんまり意味の分かってない僕でも言ったら凄い空気になるのは分かるっ。

なんて危ない・・・

「よ・・・呼んでもらえると思ってなかった。う、ううん・・・ちよっとは期待してたけど・・・」

さっきまで剥いていたリングよりも顔を赤くした轟さんの顔が目の前にあった。

普段は雪みたいに白い肌が赤くなつて、綺麗な目も少し潤んでるよ

うな……。

あれ、もしかして僕……っ。

「ち、違うんだ！轟さん、僕っ……」

そ、そんなに悲しそうな顔をさせたいわけじゃないのにつ。

きっと僕も今、顔が同じように真っ赤になってるんだろう、ものすごく熱い。

（『おっ、上手くいったな！それじゃあ報酬の話だけど、こんど体を少し貸してくれ！行きたいところがあるんだよ』）

（『ふーん、どこに行きたいの？』）

（『よく聞いてくれた！この世界にはよ、キャバクラとか言うお金を払うだけで女の子と話せるところがあるみたいじゃねえか！行くしかないだろコイツは！』）

（『へー……そんなに逝きたいんだ』）

（『久しぶりに張り切っちゃうな！いやあ、俺の体じゃないから誰にも咎められないし、ありがた——』）

（『ん？』）

（『ダーリン、浮気？』）

（『お……おおう。チガウヨー、キャバクラは女の子と少し話すだけだから……セーフ？』）

（『あの子を口説いたこと怒りに来たんだけど……きやばくら？もそういう所だったのね！』）

（『墓穴ほった!!なんで選択肢間違えたの俺!?!』）

（『やっぱりダーリンに広い世界はダメね。一緒に海の底にもぐろう……永遠に』）

（『嫌だあ!!お前ら女神の永遠って永遠より長いもんきつと!何言ってるか分かんないと思うけど俺だってわか——』）

「・・・焦子、さん。でも良いかな？」

「っ、いいよーうん、名前呼んでくれるだけですごく・・・うれしい」

「えつと・・・」

「・・・リンゴ、食べる？」

「あつ、ごめん！せっかく剥いてくれたのに・・・もちろん食べるよ！」  
いつの間にか頭の中の声は聞こえなくなってた。

だから、目の前に居る焦子さんの声が凄く近くに聞こえる。

白くて細い指がフォークでリンゴを刺す。

そのままこつちに差し出される手に、受け取ろうと僕も手を伸ばして。  
て。

すれ違う。

僕の手を避けて、焦子さんが差し出したリンゴが僕の口の前に近付いて。  
いて。

「あ・・・あーん・・・はダメ？」

少し冷えたリンゴの味を感じる余裕は今の僕にはなかった。

「・・・・・・・・」

「甘酸っぱいなあ！父親公認……って言うにはすこし複雑そうな表情だね！娘にボーイフレンドが出来そうでちよつと複雑な親ご——」

「そうではない！あの中途半端な娘をもらってくれるならありがたいぐらいだッ。彼ならむしろこちらから何度でも頼みに行くのもやぶさかではない」

「なら……」

「しかし、あの状況でもう一人女の子を抱き着かせているのは少しどうかと思っただけだ。彼はもう少し身持ちが固いと思ったが……」

「…………え？」

「あの少女。以前調べた彼の身辺情報には無かった筈だが……」

「と、轟君？この部屋には僕達と緑谷少年、君のお嬢さんの方の轟君しか居ないと思うんだけど……」

「居るじゃないか。さっきからこつちを見て笑ってる金髪の少女が……。額に変わった形の穴が開いているがあれは個性か？」

「な……」

「ナニソレ怖い!？」



「家庭訪問」

「・・・もう少し、重い空気になるかと思ってました。彼女のバックグラウンドを考えるとあんなに・・・」

「まさか轟君が家ではあんなに立場が弱くなってるなんてね。寮の話だって完全にお母さんの一声で決まったし」

黒塗りの車を運転する相澤の横で、オールマイトが感慨深そうに何度も頷く。

入院していた轟の母が退院して今は一緒に暮らしていることは二人とも知っていたが、入院の経緯も知っていただけにあそこまで力関係が逆転しているとは思ってもいなかった。

だが、悪い空気には感じられなかった。

エンデヴァーが少し行き過ぎた発言をして、奥さんがたしなめるが・・・エンデヴァーの考えに沿った答えから逸れることは無い。

上手くかみ合っているとも言うのだろうか。

とても穏やかな空気が流れていた気がする。

「轟は変わりました。最初はクラスメイトの名前も憶えてなかったみたいですが、今じゃクラスの相談役になってるみたいです」

「H A H A H A！彼女はすごく穏やかな空気を持つてるからね、聞き上手そうだし・・・お父さんに似て真面目だから真剣に向き合ってく

れそうだ」

今回の事件、そしてU S J 襲撃。

ヴィランの襲撃に対して雄英は生徒を護るため、全寮制の検討を進めている。

今回はただの家庭訪問ではなく、全寮制についての説明と説得も兼ねていた。

だからこそ、意外なほどに好意的な返事が得られていることは相澤としても少し意外だった。

「ただ、次は少し難しいかもしれませんね」

「・・・そうだね。一人娘を浚われて、命の危険に晒したんだ言い訳のしようもない。・・・だから、伝えようじゃないか。今度こそ僕達が責任をもって護りきることを――」

「どうぞどうぞ！全寮制なんて毎日出久君と一緒に居られるんですから、止めてもしっぽ振って行くと思いますよ」

「何言ってるんだクソババア!!ぶっ飛ばすぞッ!っつか放せ!」

「あの・・・本当によろしいんですか?」

「もちろんですよ!会見の時の言葉を聞いて、不器用なこの子の言葉の上っ面だけじゃなくてちゃんと中身も見えてくれるんだなって、私もダンナも嬉しかったんです」

「出久君にぞっこん過ぎて周りが何にも見えなくなって、家に居る時は他の事なんて全然喋らなかったこの子が最近はクラスメイトのこともたまに喋る様になりました。雄英さんに入って、この子も成長し

てます・・・だから、こちらこそこれからもうちの子をよろしく願います」

「——はい。責任を持って、お嬢さんをお預かりします」

「信じてもらえるというのは、本当にありがたい。だからこそ、今度こそ期待に応えなければいけないね」

「・・・はい」

「次は・・・彼のお宅か」

「はい。父親は・・・現在も行方不明で、今は母親と二人暮らしのとこですが」

「ああ・・・あの事件だね。私も驚いたよ、彼の父親があの人だったなんて」

「異端ヒーロー『フォーリナー』・・・彼が姿を消したのは、緑谷が生まれたその日だったようです」

「オ・・・オールマイト！よ、ようこそいらつしやいました！」

「お忙しい中、出久のために時間を割いてくださりありがとうございます。どうごまします。どうぞ、こちらへ」

ガチガチに緊張している緑谷に対して、その隣に立っていた女性は落ち着いた様子で二人へ頭を下げた。

ほっそりとしているが、やつれているという印象は無い。

優しい気な目元は緑谷に似ており、親しみやすい空気を感じる。

だからこそ、オールマイトは妙な違和感を感じていた。

「あ、ごめんなさい出久。お母さん、お茶の準備忘れてたわ。先生を待たせちゃダメだから、いれてきてもらっていいかしら？」

「え？あ・・・うん」

リビングへ案内され、椅子へ座った辺りでその違和感の正体に気付く。

落ち着き過ぎているのだ。

一人息子が大きな危険にさらされた危機感、怒り、他にも様々な感情を今日会った保護者の方々から感じていたが緑谷母からはそういった感情の波が全く感じられない。

相澤が全寮制に対して説明を改めてした時も、その柔らかな笑顔は変わらない。

「はい。出久がヒーローを目指す以上、危険を避けることは出来ませんから・・・先生方が守っていただけるならこれ以上安心できる場所はありません」

「そう言っていただけと・・・」

「ですが・・・もし、万が一・・・億が一。出久に何かが起きて・・・この子がこの世界から消えたとしたら。私は貴男方を・・・世界を許すつもりはありません」

静かな声。

決して大きくはないその声に、オールマイトの体に怖気がはしる。先ほどまで少年に似ていたと感じていたその目が、今は逆にひどく恐ろしいものに感じる。

「夫がこの世界から姿を消して私に残るのはこの子だけとなりました」

声が。

声が徐々に大きく反響していく。

「この子は消えさせません。消えることは許されません。世界が許さなくても」

「信じさせてくださいね 全てを」

呆然としていたのはどれほどの時間だったのか。

「お茶持つてきました!」

「あ・・・ああ、ありがとう緑谷少年!」

吞まれていた。

独特の、いや異質な雰囲気呑まれていた。

緑谷から湯呑を受け取ったオールマイトは、隣に座る相澤へチラリと目を向ける。

その頬を伝う汗から、先ほど感じた感覚は自分だけが感じたものではないと再認識する。

なんとか、ぎこちないながらも口元に笑顔を浮かべ一つの疑問を口にする。

彼の個性を知り、父親が誰であるか知った時に感じた疑問。

書類上で確認し答えを知り、すぐに頭の片隅からは消えたはずのそれがどうして今になり浮かんだのか。

なぜ、本人に聞こうと考えたのかオールマイト自身も分からないまま――

「・・・急でな質問で不躰ですが・・・お母様の個性はどのような物でしょうか？書類で拝見した限りでは『引きつける』個性とのことでした」

「ええ。その通りですよ、『質量』の大きなものは引き寄せられないとてもとても非力な・・・」

「ちよつとしたものを『引きつける』個性ですよ」